



# Interview Reports

2022.10.15-16

---

## Interview Theme

---

### あなたの専門で「○○な空間づくり」 一場の再定義による学ぶ、遊ぶ、働く、暮らす等一

---

学術研究の「実践」や「実装」という言葉は、  
学術を社会に還元して何かしら実質的に役立たせるようなイメージがあります。  
しかし、本来、学術と社会は地続き！

学術と社会、基礎と応用のような物的な二分法ではなく、もっと自然に、連続的に、  
まるで呼吸するように、大勢の人たちと学術研究とを呼応させることはできないでしょうか！

それは実践や実装というより、表現や交差といったものに近く、  
結果的には、スペース（場、空間、ひいてはコミュニティ）の新価値創造につながる！  
と考えています。

そして、今回のテーマは、あなたの専門で「○○な空間づくり」。  
この○○に、あなたなら何をいれますか？

都市空間における学ぶ、遊ぶ、働く、暮らすといった、  
我々の人生における多様なシーン（動詞）を想定し、  
あなたの研究との掛け算で  
スペース（場、空間、ひいてはコミュニティ）に新しい意味を与えましょう。

インタビュー：呉 玲奈、矢代真也

|    |   |       |
|----|---|-------|
| 1  | 未来を想像し創造する砂箱空間としての<br>「空想科学創造センター」                      | 森尾貴広  |
| 2  | 新しい価値を創造する空間作り<br>「未来価値創造THINKTANK（Oxford方式）」           | 北川知樹  |
| 3  | 書き留めた先に何があるのか<br>—自身と社会に向き合う空間づくり—                      | 井出和希  |
| 4  | 言語と非言語の論理トレーニング：<br>広がっていく情報のつたえかた                      | 村上祐子  |
| 5  | 公共空間という：「経験」「自治」のおままごと                                  | 杉谷和哉  |
| 6  | 子ども時代を存分に生きるために<br>—子どものための安心・平和な空間づくり—                 | 大庭三枝  |
| 7  | 化粧を上手く利用して、誰とでも以心伝心できる<br>世界を広げていこう                     | 平松隆円  |
| 8  | 電波が見える空間づくり   | 馬場基彰  |
| 9  | Institute of Academic Studies (iAS)<br>~無用の用を追求する「虚学塾」~ | 山中千尋  |
| 10 | 恒常性システムとしての社会の醸成、葛藤と快適                                  | 駒井章治  |
| 11 | メタバース異文化交流空間（Metaverse Cross-Cultural<br>Space:MVCS）の構築 | 岡田昭人  |
| 12 | 人文学×保育園で、<br>みんながつながる学びの空間づくり                           | 太田絵里奈 |
| 13 | Ocean of ideas in bottles                               | 中山俊秀  |
| 14 | 妊娠・出産から始まる心身の<br>リカバリーコミュニティ                            | 荒木智子  |
| 15 | 350年ぶりに命の意味を再発見する空間づくり                                  | 小宮健   |
| 16 | 唯識（ゆいしき）～仏教が生んだ心の哲学～                                    | 近藤伸介  |
| 17 | 記憶の対話を通じてインクルーシブな社会の実現へ                                 | 片岡真輝  |
| 18 | 日本を"みどり豊か"な空間に：<br>みどりの恩恵の可視化と"豊かなみどり"の探求               | 小宅由似  |
| 19 | 芸術資源循環センター<br>芸術資源で「多目的な空間づくり」                          | 山田毅   |
| 20 | 死者のデータログによる空間づくり<br>—都市空間にデータとして生の痕跡を残す                 | 大田省一  |
| 21 | この人の「生き様」から学びたい！：<br>うまくやる生き方を深く学べるナイトスポット              | 鈴木聡   |
| 22 | きづかい豊かな空間づくり  | 中安祐太  |
| 23 | ナマコの世界の探求による安全で豊かな世界創り                                  | 一橋和義  |
| 24 | スタジオリフレクション：<br>経営（学）者が同居する空間づくり                        | 伊藤智明  |
| 26 | Sexual Reproductive Health and Rightsが<br>根付いた社会        | 池田裕美枝 |
| 27 | ツーリストシップ<br>住む・働く・訪れるが交わる空間づくりを目指して                     | 前川佳一  |

# 01

## 未来を想像し創造する砂箱空間としての「空想科学創造センター」

森尾 貴広 Morio Takahiro

筑波大学国際局・教授

単細胞生物と多細胞生物の境界的存在である細胞性粘菌の分子遺伝学を出発点に、産学連携・研究評価、環境科学、高等教育・イノベーション政策、アフリカにおける日本企業の進出戦略と研究テーマを遍歴すると共に、京都、岡崎、つくば、ヒューストン、チュニジアと主戦場をさまよい、現在はマンガ・アニメなどのコンテンツ産業の国際比較研究と、SFのストーリーメイキングとマンガ創作手法を活用したアクティブラーニングの研究を進めている。現職は筑波大学国際局教授。大学の研究者・教員組織である系に所属しない数少ない教員として境界領域に生息している。現世の3次元のすがたに加え、メタバース上に2次元のすがたで出没している。

わたしは分子遺伝学を出発点に、産学連携の仕組み作り、環境科学、アフリカ研究を遍歴し、現在はマンガ・アニメなどコンテンツ産業の国際比較研究と、SFのストーリーメイキングとマンガ創作手法を活用したアクティブラーニングの研究をしています。こうした遍歴の中で得た必殺技は「鳥瞰的に物事を捉える」こと、「思わぬ組み合わせを作る」ことです。この必殺技を活かして、「空想科学創造センター」を作ります。

「空想科学創造センター」の使命は、大きなジオラマ風の砂箱を作り、そこで様々な智慧が集まり、ぶつかりながら未来を考え、想像し、創造することです。砂箱はひとつではなく、いくつもの未来をつくります。問いは「未来のひとつとどがどのように暮らしているのか？」です。現在の価値観であって欲しい未来だけでなく、あって欲しくない未来、アリエナイ未来も等しくイメージネーションを働かせて、つくっていきます。

ただし、全く自由に未来を想像すると際限なく発散してしまうので、つくられる未来にはひとつ条件を付けます。それは「その中でひとつとどが日常生活をしていること。」これ、結構難しいです。特に「ひと」ではなく、「ひとつとど」というところが。未来のひとつとはどんな街や家に住み、何を食べ、どうやって生活の糧を得ているのか？どんなメンタリティーなのか？家族構成は？そもそも家族というシステムが残っているのか？法律や制度、行政、教育、医療など社会インフラは？そこでひとつとどがどんなストーリーを紡ぐのか？未来で暮らすひとつとどのリアルなストーリーをつくるために、アニメの世界観やキャラクター、小道具設定のように、ディテールやロジックを、徹底的に考えてつくります。センターの研究員は大学、研究機関、企業、コミュニティ、行政の場で研究や日々の業務で得た成果や知見を持ち寄って、砂箱に書き込みます。研究員同士で見解が異なる場合は、どちらを取るかをあえて決めず、レイヤーとして分岐させ、並行世界をつくっていきます。出来上がった未来はメタバース上に構築し、キャラクターを動かしてストーリーを展開させることでその未来が「生きているか」を見てみます。あるいは映画のセットのように実際に作って俳優さんに未来人役を演じてもらっても良いでしょう。

「一緒に未来を創ること。」センターの研究員になるための資格はこれだけです。報酬は未来を創ることです。あなたも一緒にいかが？



呉氏 今回のテーマは、砂箱をリアルに作り、みんなで1つの未来設定を話すということですが、この雰囲気は、ハッカソンのイメージに近いのでしょうか。

森尾氏 はい。2019年のマンガミライハッカソンでは、研究者、漫画編集者、作家、漫画家など、異なる業種の人間が集まって漫画を作り、私、矢代さん、漫画家、研究者のチームが優勝しました。そこで、継続して漫画を作ることになり、SF手法など様々な手法を学びました。それが研究テーマの1つとなっています。この砂箱の発想は、分岐を分岐として残すということが重要です。議論のコンフリクトや意見の食い違いがあった場合は両方残し、残した上で付け足していくのです。そこで重要なのは、そのなかで個性ある人間が活着しているかどうかということです。未来図などに出てくるような、棒人間で描かれている人間は、血が通った、個性がある、内面をしっかりと持っているキャラクターとして、その未来都市

のなかで活着していると言えるのでしょうか。漫画のストーリー作りというのは、しっかりとキャラクターを作り、ビジュアルも小道具1つにまでこだわり、しっかりと描きます。そこで、ハッカソンのように専門知識を持つ人が、未来の交通機関や未来の家、それから未来の人のメンタリティーを作っていきます。漫画は、今の読者に読んでもらうために、今の人が共感できるようなメンタリティーが設定されているのです。

呉氏 もしかしたら、もう少し違うメンタリティーが環境によって作られるかもしれないということでしょうか。たとえば、生まれたときから自然がない環境で過ごせば、自然を愛する気持ちも理解しにくいかもしれませんよね。

森尾氏 はい。たとえば、武士と言っても、鎌倉時代の武士と江戸時代の武士では、メンタリティーが異なります。鎌倉時代の人は怒りやすく、すぐ殺し合いになるため、御成敗式目を作り、すぐに抜刀しな

いよう対策をしていました。江戸時代では、そのようなことは内面化されていきましたが、たとえば、鎌倉時代の武士が江戸時代にタイムスリップするような物語を作ると、とても面白いと思います。

呉氏 私は、背景が異なる人同士が話し合うことは、技術がいると思っています。リアルとバーチャルがどのくらい融合した場だと話しやすいのか、また話し合いが盛り上がるのはどのような場だと思うかについて、お聞かせください。

森尾氏 一つは、お互いに聞く耳を持つということです。無下に否定しない、相手の意見を受け止めるなど、そのレイヤーをそのまま残していくということでしょうか。もう一つは、ある程度、それぞれの分野の基礎的なことを勉強しておくということです。

呉氏 何について勉強したのが良かったと思われるのでしょうか。また、他の人がこれについて勉強していたから話しやすかったことなど、具体例を基に教えてください。

森尾氏 家で水漏れが起こり、家のなか水浸しになるという漫画がありましたが、そのときは建築について徹底的に研究しました。建築の雑誌や本を読み、専門家にヒアリングをして、建築物の未来像を伺い、インターフェースを新しく作りました。

呉氏 そのように勉強することで、よりリアリティがあるものができてくるということですね。先ほど、意見が分かれた場合、分岐することを重要視されていましたが、その理由を教えてください。

森尾氏 どちらが正しいのか、どちらが適切であるのかというのは、なかなか答えが出な

いと思っています。また、その答えは状況により変化します。コロナの蔓延や、さらに言えば、あした、宇宙人がやってきて全く異なる世界になるかもしれません。そのとき、正しくない、適切でないとされたものが消し去られていると、実はそこに答えやヒントがあったのに、なくなってしまう。ですから、そこはアーカイブのように形で残し、条件やパラメータが変化したときは、こちらで動かすことができるようにしておきたいのです。

呉氏 一緒に考えたプロセスと、みんなで想像し分岐した未来も含めた結果があると思いますが、プロセスと結果、どちらを重視したものなのでしょうか。

森尾氏 プロセスと結果は、このプロジェクトのなかで分けられないと思っています。このプロジェクトで考えたいのは、天気予報などで見られる、スライドを動かすと雲が動くような、そういうものが見たいのです。時々刻々と変わるものを、どのように作っていくかを考えたとき、人々が関わってくるプロセスも、出てきた結果も、同時に必要だと思っています。

呉氏 たとえば、人口がどこかの時点で減るとしたとき、極端に減る可能性もあれば、政策が変わることで徐々に減ることもあります。このように様々なパターンが考えられ、どのように変化していったかのプロセスこそが、もしかしたら結果かもしれないですね。

森尾氏 人が関わっていくプロセスもそうですし、社会科学で変数を1つ増やしたらどうなるのか、減らしたらどうなるのかというところにも似ています。専門家が介入することでも変化するでしょう。

呉氏 法律家が入ると、国際法の観点から「これはない」、まだ国というものが存在するのであれば」などというような話が出てくるということでしょうか。

森尾氏 そうです。たとえば非常にクリティカルな、ジェンダーの話があります。様々な未来を作るなかで、ジェンダーを作っている人がいないとなった場合、そこは片手落ちになります。また、今は思いもよらないものが、もしかするとパラメータとして無視できるのではないかという判断には専門性が絡んでくると思います。哲学であれば、かなり絡んでくるでしょうし、宗教もそうでしょう。

呉氏 前後何十年、もしくは5年ずつ、それとも2030年、と一度決めて未来を考え、さらに、ここに政策を絡めると、急に現実味を帯びた話になるのではないのでしょうか。

森尾氏 年代の設定はよく聞かれます。当然、100年後ともなると現実とのギャップを埋めるのはなかなか難しいため、想像しにくいでしょう。ですが、宇宙戦艦ヤマトのようなSF作品のなかでは、世界観で整合性をもたらしめているのです。ですから、何年先の未来という、現在からのギャップを取りあえず柵に上げておけば、何年先の未来でも想像は可能だと思っています。もちろん、それに至るまでの科学技術史や政策史、そういうものはもちろんあります。2200年にどこの党が政権を取っているか分かりませんが、それも現在から持っていくやり方と、未来の空想した姿から逆算するやり方、その両方で考えていき、それでタイムバーをずらすと、世の中が変わるようなものが作れるということになります。

呉氏 天気予報の雲の予想図は空想のものではないので、比較的、現実とのリンクがあると思います。ですが森尾さんは、むしろ荒唐無稽なお話に興味を持っていらっしゃるかと理解しました。そこまで空想することや、現実に存在しないものを想像することに興味を持つ理由を教えてください。

森尾氏 何年後の未来を考えてみましょうという授業では、学生から面白い答えが返ってきません。10年後の未来について考えるように、地続きになっているのです。さらに、社会のことばかり考えて、そこでどのように人が生きているかという視点がなく、そこが残念です。津波が起こる、感染症が起こる、というようなシナリオは、起こる確率が非常に低いため無視されてきましたが、インパクトは大きいのです。それらも考慮に入れて、不確実な未来を予想しようという態度を身に付けてほしいのです。それは、教育という意味もありますし、研究の上でもそうです。課題解決もですが、あるべき未来、あってほしい未来、あるいは、あり得ない未来、変な未来で、どのように生きていくのか、そういうものを想像してほしいのです。研究のなかでも、課題解決ではなく、研究者にとってあってほしい未来でもいいでしょう。

呉氏 未来が先に、ボールを投げるようなものでしょうか。

森尾氏 そこからバックパスした何かを、科学的なエビデンスも含めて、研究者から投げたいです。

呉氏 そう考えると、壮大な方法論の話ですね。不確定な時代に対応するための方法論としての空想科学創造センターという



のは、とても面白いと思いました。

森尾氏 バーチャルの世界では、既にセンターが作っています。まだ箱ですが、センターの主旨が書いてあり、セミナー室ではコンセプトのセミナーも開催しています。上階では実際に町並みを作り、組み立てて遊んでいるようなモックアップがあります。バーチャルで作るのはお金がかからないので、そこでイベントも開催しています。ビルのなかを拡大すると、その

なかで人間が生きていて、様々な小道具などに対して専門家がコメントを入れています。署名をすれば、町づくりにコントリビュートしたという証拠が残るため、分析につなげたいと思っています。それが、ある意味インセンティブのような、この町づくりにコントリビュートしたことを、クレジットするということになります。

# 02

## 新しい価値を創造する空間作り 「未来価値創造 THINKTANK」

---

**北川 知樹** Kitagawa Tomoki

神戸大学経済学研究科博士後期在学中（社会人大学院生）  
住友ゴム株式会社 製造企画部 Manager

神戸大学経済学研究科博士後期課程 D3(社会人大学院生)23年3月課程修了見込み 未来価値創造  
THINKTANK代表(神戸大学 V.School学生プロジェクト)学術上の専門領域：企業価値、国際収支と為替レート  
の関係、価値創造(V.School)、EMEA経済職務上の専門領域：企業価値、戦略企画、連結決算、開示IR、  
プロジェクト推進、ドイツ駐在趣味：土日朝テニス(シニアメンバーと一緒に、たまに小学生に教えたりしま  
す) 目標：社会にインパクトを与える新しい価値を創出する空間プラットフォームを構築する。

私は、社会人大学院生の立場で、大学から「新しい価値」を生み出す方法をいつも考えています。そのなかで着目しているのが「企業価値」です。「企業価値」には「楽しい」と感じることや「必要」なものがいっぱい詰まっています。昨今では、「デザイン思考」「アート思考」「エフェクチュエーション」など、現実とアカデミックの間で開発された価値創造の考え方も活用されています。また、日本の大学でも「TLO技術移転機関」という産学連携の仕組みなども多く設立されています。

一方、まだ、欧米の価値創造から学ぶ部分は多くあります。特に、環境先進地域である欧州の大学内技術移転から学ぶことに意義があると考えています。University of Oxfordの100%出資子会社である「Oxford University Innovation Ltd.(以下OUI)」が、その代表として挙げられます。特に、環境分野でのポートフォリオは充実しており、OUI Green Tech Portforioとして、エネルギー、モビリティ、農業、サーキュラーエコノミー、気候変動に関する多くのスピンアウト企業が輩出されています。私が「OUI」主催の約5ヵ月間のプログラム“Japanese Innovation Fellowship Programme 2021”を日本初のJapanese Innovation Fellowとして受講したことも活用しており、私たち「未来価値創造THINK TANK」は「価値創造の空間作り」を進めて参ります。

THINKTANK活動の概要は、以下の通りです。

(1)若い人の可能性とテクノロジーにより明るい日本と地球の未来を創造します。(2)学部生、大学院生、教授、社会人が力を合わせて新しい価値を創造する集団です。(3)活動を通じて、学生の価値創造知識、スキル向上に寄与します。

## Goal

(1)世界中の大学内技術を活用して新しい価値創造のプラットフォームとなる。(2)2023年中に国内外10大学、10企業、10金融機関と連携し、国内基盤を固める。(3)2030年までに海外展開を含めて投資先企業の時価総額1000億円を目指しています。

## チーム編成

大学院生2名(1名社会人院生)、(2) 神大既卒社会人2名、(3)社会人2名(公認会計士、新規事業開発)、(4)工学システム研究科准教授1名、(5)学部生3名



矢代氏 どういう経緯で社会大学院生になっているのでしょうか？

北川氏 1997年にアジア通貨危機が起きました。当時、私は大阪外国語大学の学部生で、留学生会館によく遊びに行っていました。そのとき留学生たちの親が、韓国やタイ、インドネシアで通貨危機に苦しんでいると聞いて、世の中の為替制度がいけない、変動相場制がすべての悪の根源だと思いました。それを解決しようと研究を始め、仕事をしながら修士、博士に進みました。

矢代氏 就職はどのタイミングだったのでしょうか？

北川氏 学部を出た段階で、普通に就職しました。

矢代氏 そのまま社会人で院に入って、修士、博士コースに進まれたのですね。ご専門は通貨まわりですか？

北川氏 学術的に、修士のときは通貨まわりを研究していました。博士になった時点で興味が変わって、企業価値や財務、国際財

務報告基準、IFRSの研究をしています。

矢代氏 「IFRSとは何でしょうか？」

北川氏 国際的に共通の会計基準で、実務でも携わっていました。研究は、少しずつそのあたりと企業価値に向かい、ビジネス寄りになっていきました。

矢代氏 ファイナンシャルな専門家としてのバックグラウンドがあるのですね。

北川氏 そうです。実務者としては、完全に財務会計です。

矢代氏 確かにそれは、あまり話せないような、コンプライアンスが強そうな感じですか。企業価値を作り出すためのシンクタンクというアイデアなのかもしれませんが、企業価値とは、わかるようでわからない言葉です。

北川氏 とても表面的に言うと、企業が発行する株式の価値が市場で上がって、企業価値が上がるという状態です。

矢代氏 企業価値には、楽しいと感じることや必要なものがいっぱい詰まっているというのわかりません。

北川氏 たたとえば、1000億円という企業価値があるというときは、企業が儲けるためだけに何かを作って価値が上がるのではなく、企業の生み出したものを人々が使ったり、消費したりして楽しむことで、結果的に企業価値がついてくるということをお願いしたかったのです。

矢代氏 それは、楽しいと感じることや必要なものによって企業価値が生まれているということですか？

北川氏 そうですね。たとえばパソコンがあればいろいろなことができます。楽しいこともできるし、仕事もできる。それを価値として提供するから、結果的にその会社の株価が上がって、企業価値が向上するわけです。

矢代氏 シンクタンク的に新しい価値を創造するときも、楽しいとか必要といった価値をどう作るか考えているのですか？

北川氏 おっしゃる通りです。

矢代氏 なるほど。シンクタンクについて詳しく書いていただいています。そもそもシンクタンクとは何でしょうか。シンクタンクとは何をするところですか？ 今取り組んでいることを教えてください。

北川氏 シンクタンクを立ち上げたのは2年前です。その時点では、流行のドローンやAIといったメガ資料となるような、その〇〇のマーケティングをしようと思っていました。たまたまオックスフォード大学と関係ができ、シンポジウムを開催したりしていくなかで、大学の技術移転を通じた価値創造へ活動がシフトしていききました。結果的に普通のマーケティングだけではなく、実質的な組織、ベンチャー企業を立ち上げたり、育てたりする仕組みにシフトしてきています。

矢代氏 法人として立ち上げるということですか？

北川氏 いいえ。ただの学生プロジェクトとしてです。

矢代氏 技術移転というのは、大学にある技術を企業に移して、楽しいとか必要といった価値を作るといいますか？

北川氏 おっしゃる通りです。

矢代氏 そのためのシンクタンクとはどのような空間でしょうか。Slackを使うとか、部室があるとか、具体的にどういう場所でどういう活動が行われているのですか？

北川氏 チームメンバーは10人ほどで、そのうちの4、5人が週1回集まっています。今はプラットフォームの立ち上げをしていますが、みんなでワイワイいいながら、仕組みを作っています。

矢代氏 大学に集まるのですか？

北川氏 私は平日昼は働いているので、水曜日の夜8時からZoomでやっています。

矢代氏 プラットフォームというのは、具体的に何のことですか？

北川氏 大学の技術と、さまざまな大きさの企業やベンチャーと、VCやCVCという機関を集めて、企業価値やベンチャーとしてアウトプットするものです。

矢代氏 ウェブサービスですか？

北川氏 ウェブサービスも含まれます。

矢代氏 インターフェイスがウェブサービスだということですか？

北川氏 インターフェイスがウェブサービスの部分もありますが、これを学生が主導するのが売りです。

矢代氏 何を主導するのですか？

北川氏 繋いでいく部分です。もちろん、いろんなVCや大学といった大人たちがマッチングさせる部分も多いですが、ポイント

は、これからの未来を作っていくべき若者たちが、自分たちでマッチングさせて、新しい価値を創造していくことです。

矢代氏 学生の価値観で、大学が持っている技術を会社に移して社会実装をドライブしていくわけですね。プラットフォームといっても参加企業が欲しいものを10億円です。買うという場所ではなく、学生が主体的に企業と大学の研究室をマッチングさせて、ここでやりなさいという場所ですか？

北川氏 そういうケースもあれば、企業主導で特定の研究につなぐこともあります。フレキシブルな空間にしたいと思っています。

宮野氏 まだ何者でもない学生が、プロデューサーとして自身の関心でアレンジするのは、できそうでできない経験です。やる気のある学生に限られるかもしれませんが、その環境で場に入れてみてどうでしょうか？

北川氏 私がオックスフォード大学で半年間プログラムを受けた経験から、日本の大学とオックスフォードの違いは何かという話をしたときに、オックスフォードでは学生たちもベンチャー企業に入っていることを話しました。おそらくアメリカの大学でも同じでしょう。日本は、昔より増えているかもしれないが、ドクターまで含めても、学生がベンチャー企業を立ち上げるという例がまだ少なく、それも仕組み主導ではなく大人主導なのです。

矢代氏 オックスフォードで、学生が主導したから成功した事例はありますか？学生がやってよかったという事例です。

北川氏 プログラムの中で、そういう事例は少し

聞いていました。

矢代氏 CO2が関係する環境プロジェクトで具体的な事例はありますか

北川氏 オックスフォード大学が100パーセント出資しているOUI、オックスフォード・ユニバーシティ・イノベーションという価値創造の団体があります。そのポートフォリオは環境関係に強く、近年は爆発的に増えてきているそうです。そこで学生たちも一緒やっていると聞いたときに、日本は昔より増えてきたとはいえ、温度差があると強く思いました。なぜかと考えてみると、企業側の目線で見ると、大学は非常に難しいところがあります。そこで、大学のことがわかっていて、これから未来を支えて行く学生たちがキーパーソンになる仕組みを作りたいと思いました。活動してみると、チャンスがあれば、学生もかなりよくできることがわかりました。オックスフォード大学とのシンポジウムでも、学生たちは司会もすべて英語で全部がんばったのです。直前1週間はみんな死にそうになりながら準備しましたが、結構できるのです。

矢代氏 それは学部生ですか？

北川氏 そのときは学部生と修士でした。無理だと言いながらやりきったのを見て、できないと思っただけで、この子たちはやればできると思いました。

矢代氏 研究室、企業、学生という3つのプレイヤーがいます。研究室には資金調達ができる、研究が社会に実装されるというメリットがあります。企業のメリットは、技術を得てビジネスがうまく転がることです。学生はどのようなメリットがあるのでしょうか。たとえばシンクタンクで働いて

ている人たちは手数料を得ます。学生は経済的なメリットがあるのでしょうか。モチベーションはどこにありますか？

北川氏 2段階で考えています。直接的には、ビジネスの創造に携わってスキルと経験を得ることです。究極的にはVC的に動いて企業価値を育て、最終的に一定の収益を還元できる仕組みにしていきたいですね。簡単ではありませんが。

矢代氏 すばらしい取り組みですが、大事なのは倫理性でしょう。大学の研究成果を企業が使うのは、単に促進すればいいものでもありません。軍事技術への転用などの問題があります。

北川氏 他にも守秘義務や契約などの問題もあります。チームには公認会計士、新規企業を立ち上げたり、ビジネス経験20年の社会人もいます。アドバイザーとして一つひとつきっちりリスクについて教育し、一緒に学びながら進めています。

矢代氏 大学が参加するプロジェクトには公共性が求められます。ビジネスは利益優先なのでカウンターパートナーとして方向性を示さないと、野放図に技術を食い荒らされるだけになりかねません。それを留める倫理についてはどうでしょう。やる、やらないの線引きや、ミッションを策定して守らないと、ただの技術ブローカーになってしまいます。

北川氏 既に大学側にはTOLという仕組みがあります。TOLにつなぐべきものはつないで、大学にも利益があり、特許も保全した形で進めていくようなマッチングの最初の空間にしたいですね。

宮野氏 その研究のよしあしなど、学術の公共的な議論は少ないです。全国的には、むしろ企業から資金提供を受けて共同研究が

進めばよいという考えです。

矢代氏 それは、研究代表者がいる程度ディレクションすべきです。

宮野氏 それが大学の社会実勢、社会包容として求められているので、技術ブローカーといわれてもどんどんやるべきでしょう。

矢代氏 それを学生の視点で発信していくのです。おもしろいですね。売ればよいという話です

北川氏 貴重なご指摘です。学生が大学の技術を使ってしまうことに対して、きちんと設定をしておかないといけません。

矢代氏 学生だからこそ自分が関わったプロジェクトで苦勞することが一生の財産になるかもしれません。もちろんお金は支払われるでしょうが、仕事、研究、プライベートが曖昧になりそうです。若者を使うのなら、そこまで考えておくべきです。

北川氏 学部生と大学院生と社会人がいるので、その違いはとてもわかります。学部の3年生ぐらいまではパワーがあって、新しい技術や環境になじんでいます。突き抜けているという難しさがあります。しかし、そういう若い人たちが頑張っているところに技術と人とお金が集まって、彼らのパワーを正しく活かせる空間にしたなら、大げさにいうと、日本がよくなっていくことにも繋がるでしょう。

矢代氏 これは被りますね。学部生、大学院生、教授、社会人の各プレイヤーの役割はどうなのでしょう。学部生がエネルギー、新しい価値観だとすれば、他はどういう感じでしょうか。

北川氏 学生と修士はワンセットです。博士は研究室にも詳しくなって、大学の成り立ちも理解し、大学とかなり近くなります。

社会人は、大学院を卒業して1、2年目ぐらいのメンバーです。元々チームにいた子が卒業して残っていたりします。その辺は社会とのつながりの入口の部分です。あとは会計士や経験のあるメンバーが、ビジネスの堅いところはフォローするという棲み分けになるでしょう。

男性A 学生運動家ではないのですが、似たような取り組みで、企業と大学側で言語が合わないということはないでしょうか。よさそうだとマッチングしても、そこから先、企業価値にまでにする部分はどのようにするのでしょうか。

北川氏 その部分で社会人が必要とされます。チームには学部生、修士、博士、修士あるいは博士の学位を持つ社会人、社会人として20年の経験がある人と階層があります。多様な人材がいるチームで多面的にフォローできればいいと思います。

矢代氏 大学が増えた場合はどのように運用するのでしょうか。各大学に同じようなチームを作るのでしょうか？

北川氏 今の時点ではそこまでは考えていません。核はあくまで我々のチームです。それぞれの大学というよりは、この活動に参画してくれるそれぞれで、参画連携本部本体でなくても周りで動くというところでやっていきます。

矢代氏 学生が主導するポイントは、院生、学生のほうが自分の大学のことを知っていることです。他大学が参画したときに、その大学のことを正しく理解できるのだろうかということが気になります。

北川氏 非常にいいアドバイスですね。確かにそうです。それぞれ連携が進んだときに、内部に関してはその学生と繋がる形のほうが盛り上がるかもしれません。

矢代氏 運営が大変になりますね。

北川氏 そうですね。でも、そのほうが活力が出そうな感じです。

矢代氏 逆に企業側に求めることはありますか。こういう姿勢でお付き合いしたいとか。

北川氏 企業には、気楽に声をかけてほしいです。

矢代氏 なるほど。どういうふうにお金をチームに払うのですか。ボランティアですか？

北川氏 最初はどうしてもそうなってしまうでしょう。しかし、どこかのタイミングで資本調達をするかもしれません。私はサラリーマンなので、そうなったときには抜けるかもしれません。

矢代氏 サークルらしさとVCらしさという極端な、全然違うものが同居している感じがあります。VCは、特に社長の信頼でやってるところもあります。その信頼性がどう担保されていくのかもポイントになってくるのではないのでしょうか？」

北川氏 ネクストステップとして、しっかりやります。

宮野氏 不毛な意見かもしれませんが、私は、学生のうちは適切な失敗をいっぱいさせたいと思っています。うまくいかないのもよいことです。もう一つは、学問というか、大学は食っていくことを教えるのではなく、食うとは何かを教えるところです。そうしないと、とにかくVPやお金を稼ぐほうに行ってしまいます。今そういうふうにおかしくなっているので、なんとか揺り戻しをしてデベロッパーはこういう企画をしたり、こういう哲学の企業が多くなればと思います。学生は、実際の娑婆の欲望を見ながら、悩みながら失敗してほしいですね。

矢代氏 失敗も評価される、成功だけが評価され



るわけではない取り組みになるとおもしろいですね。もちろん半分ぐらいは成功してもらわないと困るわけですが。

北川氏 おっしゃる通りです。失敗も経験になる

と思います。社会人になって10年後にする失敗よりは軽く済むと思うので、そういうのは非常にいいですね。

# 03

## 書き留めた先に何がある のか—自身と社会に向き 合う空間づくり—

---

**井出 和希** Ide Kazuki

大阪大学・特任准教授

大阪大学 感染症総合教育研究拠点 科学情報・公共政策部門 特任准教授 / ELSIセンター 実践研究部門 兼担。静岡県立大学大学院 博士後期課程 修了。博士（薬科学）、薬剤師。京都大学 学際融合教育研究推進センター（政策のための科学ユニットに所属（研究プロジェクトの推進に加え、政策立案人材育成に寄与；大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 薬剤疫学分野における教育・研究を担当）の後、同センターにて企画・運営に従事）、iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門を経て、2021年4月より現職。科学技術・学術政策研究所（NISTEP）客員研究官を兼務。時折創作にも取り組みながら、価値（観）についての関心をもとに活動を展開している。

私自身は、書き留める行為のうちで、学術論文とそれを取り巻く環境に関心を持っています。そして、出版動向の分析結果を対話の糸口として、研究に関わる人々と言葉を交わすことを繰り返しています。そして、この行為とその先に対するまなざしは、研究（者）に限ったものごとではないとも考え、空間の提案に繋げようと思に至りました。

その先にあるものごとの一つは、評価です。学術論文は、その量や権威がスコア化され、研究者の評価に用いられます。「出版せよ、さもなくば滅びよ」ともいわれる環境のなかで、本来一つ的手段であるはずの学術論文の出版が目的化しつつあります。目的化せねば生き残れないといっても過言ではありません。

ほんとうにこれでよいのでしょうか？

目的化を象徴する現象の一つは、現在でも一万誌以上存在する権威を偽装する怪しげな学術誌の登場です。また、量や権威の意味に対しては、研究成果と社会との接点の変容もまた疑問を投げかけているようです。最近では、専門家の審査を受ける前の結果が世の中に拡がり、人々の営みや政策に影響を及ぼしはじめています。よしあしはさておき、この混沌が、研究の内実に向き合わなくてはならないことを示唆しているように感じるのです。

専門分野におけるこれらの観察から、私は、固定化された価値観に対してくすぶっているものごとを表に出し、言葉を交わすことのできるたまり場を空間として提案します。意図の有無を問わず、私たちは、学歴や職歴・職位、収入、居住地域といった要素と結びついた（誰かの決めた）価値に絶え間なく晒されています。しかしながら、愚痴としてではなく、その意味に目を向け言葉を交わしながら内省する機会はまだ訪れません。そこで、場を通して手の届くところから価値（観）に向き合うことを試みたいです。

場の雰囲気はそこで言葉を交わす人々に安心感を与えるものであり、各々が社会生活における自分自身の役割を一步引いて眺めることのできる場の力が求められます。その場を実現する人もまた自身に向き合うことを厭わず、価値観を押し付けることなる対話を促すことができれば理想的です。社会が当たり前前に疑いの目を向けるようになることで、価値（観）の自分にとっての意味を改めて考えることができるようになるのではないのでしょうか。その時、研究者の営みもまた、ものごとの判断を支える杖の一つになることができると考えます。



矢代氏 そもそも井出さんの今回の研究は、基本的に学術論文に関する状況の話だと思います。井出さんは、もともと薬学や感染症などがご専門だと思うのですが、そこと論文に関するいろいろが、どのような経路でつながって今に至っているのですか。

井出氏 いわゆるコミュニティのもつ価値観として、論文というものにすごく重きを置いていたのです。

矢代氏 それは薬学部的なところですか。

井出氏 そうですし、もう少し幅広く生命医科学系と捉えてもよいかもしれません。もちろん研究者ごとに考え方は違うのですが、たとえば私自身が初めて研究室に所属したときに、その教室には、いわゆる論文の価値をすごく単純に表したとされるインパクトファクターという値のリストが貼ってあったのです。そこに、いろいろと線が引いてありました。一流の研究者なら1年に1本はほしい、5年に1本はほしいなど、基準がこのリストの中に書いてあるのです。。そういう

場面を目の当たりにしたり、その点数を足し合わせてその人の能力を完全に表しているかのように判断される場面に触れる機会が何度もあったのです。そういったところで、価値（観）に対する関心がどんどん強まっていきました。それは、別に研究者のコミュニティの中に閉じた話ではなくて、私たちも常にいろいろな価値（観）の中で、ある種測られている部分がありますよね。

矢代氏 そういう基準みたいなものが先鋭化されるというのは、薬学系の研究室がなりがちなことなのですか。

井出氏 薬学に限ったことではありません。特に、私自身の経験としては生命医科学系が中心ですが、結局隣が何をやっているかも分からないことが多いのです。どんどん高度化、細分化していく中で、何をどう評価したらいいのか段々分からなくなってきた、たとえば『Nature』に載った、『Science』に載った、『Cell』に載ったということは、指標として測れることで言い訳になりますし、お金を出す側もそこに理由を付けやすくなるので

す。

矢代氏 それは、たとえば研究室に新人が入ってきたりしても、何をやっているか分からないので、インパクトファクター的なことから、その人のことを認識せざるを得ないということですか。

井出氏 すごい人かどうかという観点では、そういった側面もありますね。ただ、もう少し言葉を交わしてもいいのではないかと同時に思います。確かに、たくさんの人が何らかのポストを得るために応募をしてくる、研究費をもらうために応募をしていくという状況で何らかの基準で判断しなければいけないということは分かります。ただ、そこでその人が何を目標しているのかとか、一步踏み込みたいですね。たとえばインパクトファクターというものについて話をするのであれば、それって非常にある種短期的な指標なのです。ひょっとしたら、その研究が10年、20年という時間を経て世の中に認められていくこともありますし、そのあたりの文脈をもう少し丁寧に、しかも自分たちのことなら猶更もう少し丁寧に扱ってみてもよいのではないのでしょうか。

矢代氏 今環境が変わっている中で、一方でやはりインパクトファクター的な価値観が固定化しているから、それをどう柔軟かくしていくかを考えないといけないということですか。

井出氏 そうです。ただ、研究者のコミュニティの中のことはあるのですが、もう少し社会に目を向けても、そういったある種の評価など山のようにあります。

矢代氏 それは、どういうものを想定していますか。

井出氏 普通に言えば、学歴や職歴、年収、あるいは住んでいるところでもいいですし、

持っている車でも、家でもいいです。そういったものは、やはり非常に価値付けがされやすいものですし、またそれをある種信じ込みやすい部分があると思うのです。その上に乗っかってしまえば、その中である種無思考に判断できますよね。

矢代氏 それぞれ持っているものを擦り合わせるような場所があると良いという話ですか。

井出氏 擦り合わせるのか、あるいは向き合った結果として、その人が何かとても先鋭化されたものを目指すということは、どちらも大事にすべきだと考えます。まず、向き合うということが大切なのではないかとということと、そもそも話す場があまりないということが、状況をより難しくしているのだと思います。たとえばこういう場が今日あるわけですけども、先ほどまでは8階にいて周りの人に話しかけたら、やはり取り組まれていることなども全然違って、そういう方を見ている世界というのも、1秒前には何にも知らなかったということ、当然のように目の当たりにできるのです。相手に対して敬意を持って話をするのできる空間は、当たり前のように見えて意外とありません。

矢代氏 研究者に限らず、普通の社会人でもありませんよね。

井出氏 ですよ。ある種の似たもの同士が集まりやすかったり、たとえばビジネスのネットワークを発展させる場があっても、自分の悩みを素直に言えたり、実は今やっている事業の価値を疑い始めていたりとか、なかなか言えないではないですか。誰が見ているか分かりませんし。

矢代氏 先ほどのインパクトファクターが貼ってあったという話で、お聞きしたいのです

が、論文を具体例として、その固定化された価値観と空間を考えたときに、そもそも論文を研究者が書き始めて、書き終わって出すまでに、そこにどういう空間が関わっているのでしょうか。たとえば、執筆する部屋がスタバなのか、文献を探しに図書館行かないといけないのか、教授がずらっと並んで審査会が行われる部屋があるのかなど、それぞれが影響して論文が生まれていると思うのですが、どのようなバリエーションがあるのでしょうか。

井出氏 書く空間で言えば、それこそスタバのようなカフェや喫茶店で書かれる方もいれば、研究室にこもってとにかく集中して書くという人もいれば、家で書くという人や、新幹線の中で書くという人もいます。私自身は、学会の会場で講演を聞きながら書くのが好きです。その場の空気によるものなのか、筆が進むんですね。一方で、先ほどの審査という話に近い部分では、いつまでに幾つ論文を書き上げなさいというような環境も存在します。

矢代氏 ノルマ的なものがあるということですか。

井出氏 場合によっては、そうですね。ゲーム的にうまく乗りこなしてしまえば出世できる一方で、それが非常にプレッシャーになってしまって、自分の取り組んでいることで何か気になることがあったり、もう少し深く掘りたいなど、たとえばコミュニティの中で今そこにある価値は認められないけれども、でもこれって少し調べておいたほうがいいのではないかとということに目をつぶらざるを得ないような状況も、ときにはありますよね。

矢代氏 コロナによるオンライン化などで状況は変わりましたか。

井出氏 私の場合はあまり変わらないのですが、人が集まるような場で研究されている方にとっては、変化もあったでしょう。

矢代氏 あまり研究室に行っていないタイプなのですか。

井出氏 研究室に行くことは多いのですが、遠隔でいろいろな方と仕事をする機会も増えていましたので。

矢代氏 逆に、研究室的な空間のいいところはどこかというところだと思いますか。

井出氏 人と関わりが必要な場面や、ちょっとしたニュアンスを伝えやすいという意味では、そこに人が何人もいることに意味があると思います。あと、テキストだと感情が抜け落ちてしまう部分があると言いますか、攻撃的な意図はなくても相手にそう見えてしまったり、その逆もあります。そういった感情の機微や、この人がこの先で何を言いたいのかというところに、やはりその場に人がいることの意味性の一つですね。

矢代氏 最初のほうに、細分化され過ぎていて隣の人が何をやっているか分からないという話がありましたが、その状況で他人とコミュニケーションを取る理由はなんですか。

井出氏 今お話ししていた周りの方というのは、どちらかと言うと、同じ研究室に所属している人同士のコミュニケーションを意識していたのです。そこから離れてしまうと、やはりなかなか機会がないですし、それがなんの価値になるのかというところがまず疑われてしまう部分はどうしてもあります。

矢代氏 井出さんは、コミュニティの外の人と絡むことに価値があると思っているのだと思うのですが、そうではない人と絡むことが難しいということですか。

井出氏 そうです。たとえば個人が、1つ1つ研

究室の扉をたたくなりメールを送るなりして誰々と話したいという形でアプローチしていけば、当然別かとは思いますが。そのぐらい意図的にならないと、なかなか交流が生まれられないような部分があります。

矢代氏 やはりある程度、相手のメリットを設計しないと話を聞いてもらえないような、みんな忙しいような雰囲気がある中で、全体的な話として、やはり異文化理解をしたほうが良いという前提が共有されているから、全然関係ない人が会って話せばいいということになっていると、僕は思います。その価値観自体が結構固定化されていて、少しファシズムのようだと思うことが多いのです。人と絡みたくないけれども面白い研究をしている人もいますが、そこもやはり壁を壊していったほうが良いと思いますか。

井出氏 壊さなくてもいい壁もあると思います。ただ、壁を壊されたくないのか、実は壊されたいのか。あるいは、少しだけ壁の外側をのぞいてみたいのか、飛び越えてみたいのか。そういったことすらも考える機会があまりないということ自体が、一番もったいないことだと思います。異文化交流をすることが絶対にいいかどうかは分かりませんので、当然出てこなくてもいいのです。

宮野氏 その壁のモチーフでいうのなら、他の壁の存在を否定するぐらいの人もいるわけですね。一般にひどいことを言ったり、ひどい目に遭わせるような出来事がたくさんある中で、井出さんはやはり、本当にそれでいいのかという疑問を持っているということでしょうか。

井出氏 そうですね。そこは常に悩んでいます。共有しながら話していくという過程は、必要だと思う反面、ただし、不用意に誰

かを傷つけるようなことをするのは、やはり違います。

矢代氏 それは、どのような傷つけ方ですか。あなたの研究はつまらない、というようなことですか。

井出氏 極端なこと言うと、そうですね。意味がない、社会における価値はなんなのか、など。

宮野氏 たとえば理系の方が、文系なんて必要ないのではないか、というようなことですか。書籍なんてピアレビューもないじゃないかと言ってみたい。

矢代氏 そういう人は、ただ単純に頭が悪いなとしか思いません

井出氏 同時に、リストの話とも繋がる部分ですが、その人の今のそういう考え方を作った背景に何があるのかっていうことが、やはりすごく気になるのです。その人がそう思い至るまでの経緯や歩みをアプローチできる範囲でみるということは、決して無駄ではないと思います。もちろん、つらい言葉を投げかけられたり、あるいはどんなにアプローチしても変わらないということもあり得ると思うのですが、やはり何がそこにあるのかというまなざしを捨ててしまわなくてもよいのではないのでしょうか。

矢代氏 だから基本的には学問みたいなものは多様性があったほうが強いというような指向性があるはずだと思います。そういう固定化した価値観みたいなもので、そこがそぎ落とされているのが、さらにオンラインみたいなもので加速しているということなのでしょうか。

井出氏 オンラインで加速しているかどうかということには、疑問に思う部分があります。ただ、多様性や学際、総合知といわれたときに、それらを形骸化させてしまうような捉え方には怖さを感じますね。

そこにも価値偏重、出口設定というものがあって、数年以内に何を成し遂げるかということが求められますし、研究者の側もそれに慣れて求めるようになってしまう部分があります。だんだんと本音と建前がくっついていってしまう印象すらあるのです。たとえば学際的な研究が好きだという方がいたときに、その学際が何を指しているのか人によって違います。手の届く範囲の学際といった場合には、すごく単純化すると、その人と組んだら、いわゆる学際的な論文が書けるといっただけだったりします。

矢代氏 歴史の人と医学の人が組んでやるようなことですか。

井出氏 一例としてはそうですね。いわゆる人文系をメインにやっている人が、データの分析ができる人と一緒にやって、研究としてまとめやすい範囲で取り組むとか。それはそれで、もちろん1つ手を伸ばしていることだとは思いますが、その外側にいたとき、そこに手を伸ばしたから何になるのかということが、どうしても先に来ってしまうなかで、目的化してしまっていないかと内省する時間は必要なのではないでしょうか。

矢代氏 内側に作った物事を吐き出すたまり場を結構いいなと思ったのは、みんな吐き出したいのだろうと思ったからです。学際のために集まろうと呼び掛けたり、そうしたほうが学問が良くなるから集まっているというようなことは、少しくさくさいと感ずます。

井出氏 なるほど。

矢代氏 寂しいから会う、愚痴を言いたいから会うというほうがリアリティーがあるという気はします。どういうことを吐き出したいですか。

井出氏 今お話したようなところが気になってい

ます。同時に、何かを吐き出すときは、そこに文脈を付けたり、その背景について互いに知ることができるようにしたいですね。

矢代氏 愚痴を吐き出して通じていなかったら、あまり吐き出した感がないですね。少なくとも、そうですね。僕も、そうですかと言って聞いてくれないと、それが起きないみたいなことですね。僕の最近の興味でみると、聞く技術みたいなものを、みんなもっと持ったほうがいいような気はします。そういうことは、研究者的には考える言葉はないのですか。社会学などでインタビューする人は、そういうことを考えているなと思うことが多いのですが。

井出氏 取り立てて、そこを磨こうとか、それを意識しようということは、個人の関心に頼っています。

矢代氏 それは、研究者でも議論することが得意な人と得意ではない人に分かれてしまう感じですか。

井出氏 そうですね。たとえば、研究そのものに必要な技術やプレゼンテーション、論文執筆のスキル・・・とやっていくとなかなか聞くことや議論をすることまで深める余裕がないという部分はありますね。

矢代氏 みんな発信系の能力ばかり良くなってしまいうような。

井出氏 そういふところは、あるのではないのでしょうか。

矢代氏 普通に考えると、若手の話を聞くことも大事な仕事であるはずですよ。

井出氏 そうなのです。やはり余裕がなかなかありません。たとえばいろいろな大学で、部局を超えて学生が集まって学ぶ場があったとしても、それはあなたのどういう業績になるの？とか、それをしている時間があつたら次の実験ができるよねなどという話に、時としてなってしまう



す。一度でもそういうことがあると、本当にそこに情熱を注いでいて、何があってもやるということであれば、それに対しても向かっていけるかもしれませんが、どうしてもそこに立場の差があったり、たとえば研究室に居づらくなってしまふようなことがあったときに、萎縮してしまう部分もあるのではないかと感じます。

矢代氏 それは研究者に限らない話で、仕事でも、この飲み会に意味がありますか？と行ったことで、どんどんカットされていった結果、みんながそうではない世界に来たみたいになってしまうのですが、みんなが立ち止まっている中でのこういうたまり場、たまり場とか止まり木みたいな話。だから、結局そういう欲望をどういうふうにクロスさせるかを考えないといけないということですね。

井出氏 そうですね。社会の肌触りを大切にしていきたいなど、実生活を通して強く思います。

矢代氏 そうというのは結構建物の仕事だと思います。建物においても固定化された価値観というのはありますか？

末吉氏 そうですね。たとえば、人流とか、賑わいとか、ありますね。

宮野氏 現在の二次元平面上での壁があって、もう1つ自分の壁に入っているなど、そういう違うことを意識する方法の一つとして、歴史みたいなところを紐解くと、今の俺って昔からしたら違うのかなとか、考えられると思います。

井出氏 それは、書き留めるという行為にも関連したことです。書き留められたものって、そのときは誰に見られるかなんて全然分かりません。それこそ50年先なのか100年先なのか。それだけでなく、誰かの感情に触れ、新しいものごとが生ま

れていくこともあるでしょう。書き留められたものを審査するという営みに目を向けてみてもそうですけど、自分の知らなかった国の知らないコミュニティのことを知るというきっかけにもなっていて、そこが本当に大きいと言いますか、自分はものごとのほとんどをまだ知らないなと思うのです。

矢代氏 原稿を書くというのは、きっとそういうプロセスですね。こうやって話を聞いて分かったふりをしているけれども、書くとき全然分かっていないというのが分かる。だから、今の自分と書いているときの自分が比較されているという良さがあるという感じですね。

# 04

## 言語と非言語の論理ト レーニング：広がってい く情報の伝え方

---

**村上 祐子** Murakami Yuko

立教大学大学院人工知能科学研究科・教授

目の前に出てきたものを自分なりに何とかしようとしているうちに、さらに一貫性がないものどもが目の前に置かれるようになって途方に暮れながら何とかしようとしている人。だいたいなんでもやるけど、やりたくないことはとことんやりたくない。やりたくないこととしては、ほかの人を食べ物にすること、ほかの人の広告塔になること、ほかの人の言いなりになること。いまやりたいこと（＝ここでやりたいこと）は、「人とモノ」のようなこれまで当たり前だと思われてきた区別に本当に意味があったのか考えること。

昭和の時代から「日本人は論理的ではない」といわれていたが、ついに令和時代に「日本人は論理的でなくていい」という書籍が出版されるに至った。日本的感覚と論理性は両立しないとの主張だけでなく、日本的感覚を持つことが優位につながるという主張とセットになると論理性の優先度は下がるのだ。そんな「日本すごい」を信じる日本的感覚の強い人々は、そのような日本的感覚を持たない人々とどのように付き合っていくつもりなのだろうか？

さて論理性は論理学を学べば身につくのだろうか？「論理的な人は感情に流されることなく、冷静に判断できるはずで、悩みや苦しみから解放される」という希望を持ってくる受講者に対して、大学での論理学の授業では、そんなことはない、と一コマ目に注意するのが定番だ。もしそういうニーズにこたえられないのであれば、論理学は無意味なのだろうか？少なくとも、三段論法や述語論理といったものは日常生活での論理性とは全く関係ないように見えるだろう。

しかし、論理学を伝統的には言語に着目してきたコミュニケーションの理論と考えてみよう。言語を使えば私たちは現実を離れられる。仮定や虚構の状況も記述できるし、現実の物理学や普通に使う数学がなりたたないような「あり得ない世界」も言語で組み立てていくことができる。その時の組み立てを破綻させないためには何が必要なのか、基礎的なトレーニングを行うのが伝統的な意味での論理学だった。だからこそ、神や仏のような直接手に触れられないような存在について語ることがある哲学の領域では、この論理トレーニングが必須のものとされたのだ。

論理学は20世紀に入ってからその記述言語として数学を採用し、情報学へと変貌した。現在隆盛の計算機の設計の背後には「数学の体系を破綻させないためには何ができるのか？」という論理学の基本的な問いが潜んでいる。現実の物理学や通常の数学の前提をあえて手放すことで、この問いに取り組もうとしてきたのだ。だからこの延長で、バーチャルリアリティやメタバースといった非言語の表象を組み立てた情報空間が破綻しない条件とは何か？

といった「非言語情報の論理学」が必要だ。言葉にならない部分の論理性を「感覚」と表現してきたのであっても、ここからは破綻するという線引きはしてきたはずだから。

このように情報一般に拡大した哲学思想を扱いたい。



村上氏 コミュニケーションには論理が重要なんだろうと思っていたのですが、当時、日本人は論理的か？みたいな論争のなかで、日本人は論理的ではないが、みんな共通の文脈を持っていて、ハイコンテクストというか、言わなくても通じ合うみたいなのところがあるので、言語的に論理的でなくても構わない、というような意見があり、それは違うだろうと思いました。

矢代氏 論理的でなくても構わないというところが違うのか、日本人は論理的ではないというところが違うのか、どちらの意味ですか？

村上氏 日本人と論理性を結び付けなくてもいいというのがひとつあります。また、言語で表さなくても共通の前提を言語化したり、何らかのルールのようなもので記述できることがあるんじゃないかと思いました。それで、数学みたいなもので書いたらいいだろうと思い、理系に移りたかったのですが、当時は、文系から理系

に行くことはできなかったもので、一番行けそうだった科哲に行きました。でも論理学の授業がなかったので、仕方なく数学と物理をやって、大学院に入ってからアメリカに留学し、そこで論理学と哲学をやりました。計算機科学、数学、言語学、哲学などを一緒にやっているロジックプログラムなど、当時から、人工知能の基礎理論であるいろいろなロジックをやっていました。

矢代氏 論理学というのは、いろいろな論理を研究されているということですか？

村上氏 ポイントとしては、前に言っていたことが正しければ、いろいろな操作をしてもその正しさが保存されるのが良い操作の仕方であるとき、どういう操作をしたら真理が保存されたまま残っていくのか。その操作のなかには、他の人に伝えるとか、物事を言い換えるとか、そういった操作があるが、その操作はどこまでがオッケーでどこから先が駄目なのかということ、操作するシステムごとにどれ

ぐらいの真理は保存されるか、このシステムでは丸ごと保存され、このシステムではこれぐらいしか保存されない、というようなことです。

矢代氏 真理というのはどういうものですか？

村上氏 わりと動きにくい真理だと、 $1+1=2$ がありますが、実は、これは数学の足すという操作の仕方を変えたら、数学のほうでいじれます。たとえば、AだったらA、This is A, so this is Aというように、繰り返して言う論理。トートロジーで、なんとか話法という論理がありますが、前と同じことを言ったのだから、今度も同じように真か偽かは決まっているという真理の保存の仕方。これを崩す論理はないので、これが論理的真理の一番ミニマムなところですよ。

矢代氏 村上さんは会話中、今、こういう論理で進んでいるな、みたいなことが頭のなかで把握できるのですか？

村上氏 いや全然です。というのも、表に出てきている言葉は一部であり、人は皆、その奥で、この人、これぐらいのことを知っているよなというものを想定していて、その想定をお互いに確かめながらコミュニケーションを進めている部分が大きいんですよね。それがずれたときに、今の何？と質問をするような、そういうやり方で共同作業として、コミュニケーションをしているので、相手の論理が全部分かることはありません。

矢代氏 つまり、会話しているだけでは、相手側の奥にある論理は分からないということですか？

村上氏 はい。ただ、相手が自分から見えて変なことを言い始めたときに、この人はなぜ、今、これを言い始めたんだろうと考え、

相手のなかでは筋が通っているのか、それとも相手のなかでも気が変わって、さっき言ったこととは別のことを、こういうふうに決めようかと言っているのだろうか、というように、また別の質問を投げて確かめるように作業しますね。

矢代氏 日本人が論理的ではないということは、どういう論理で動いているのかが分かりづらいという意味ですか？

村上氏 自分の思っていることを相手も思っているに決まっているという決めつけみたいなものが、あるのではないかなと思います。違ったら、お前、おかしいだろっていきなり怒り始める。それは論理的ではありませんが、日本人が論理的でないのではなく、そういう決めつけをする人が論理的じゃないだけです。

矢代氏 論理的であるものというのは、想像しやすいですが、論理的でないものは、想像しづらいですよね。何かを決めつけて、AはBであると言われても、AはAだと言いつ返し、みたいなことが論理的でない行動ということですか？

村上氏 それもありますし、どのくらいの推論を認めるかというシステムのずれもあります。たとえば、これをやったら矛盾する。だからそういうことはないという論法を背理法といいます。この背理法を使って、だからこれはない、と言って論破できるという考え方もあれば、これをやったら矛盾する。でも、その矛盾するケースが実際には起こり得ないなら、論破できていない、という考え方もあります。実際に証拠が必要だというのが計算機科学の論理の基礎であり、そこが背理法だけでオッケーという論理とは、少しずれているのです。このあたりがすごく

面白いなと思っています。なので、システムの強さで相手がどれくらいのことを期待しているのかが、ちょっと透けてきたりします。

矢代氏 ひろゆきのなものについては、どう見られていますか？

村上氏 あれは決めつけじゃないですか。あとは、誤謬（ごびゅう）論という伝統的な論理学の分野があり、典型的な揚げ足の取り方、ごまかし方ですね。こういうことをやり始めたら、相手が揚げ足を取りにくるから注意という、基本的な同意があるのですが、その良いサンプルですね。

矢代氏 格闘技っぽいですね。

村上氏 そうそう。本当にやると、逆に完膚なきまでにやっちゃうので、普段は、できたらこんなことは使わずに暮らしたら平和でいいなとは思っています。

矢代氏 この後半部分の内容は、非言語情報の論理学は、物理学や数学が通用しないメタバースみたいなものが生まれたことで、必要になってきたのではないか？というようなことですか？

村上氏 いや、非言語情報への着目は、30年ぐらい前からありましたから、逆に、そこから、情報空間みたいなもののなかで、現実の世界で起こり得ないようなルールが成り立つ世界をシミュレーションしてみようという発想が出てきたのではないかと思っています。そのなかで、メタバースでは、現実はどうやってつなげるかという話をしているわけです。すると、今まで自由にやってきたところで、いきなり現実合うような制約を入れることに、イラっとする人は必ず出てくるだろうと思います。メタバース倫理とい

うようなものを新しく作らなくてはいけないのか、それとも既存のやつをちょっとアレンジするのかというところには関心があります。

矢代氏 非言語情報の論理学が、たとえばリアルな建築物を作るとき、物理的に構造物として成立しているということと、建築家、設計家が作りたい見たいにするみたいところを両立する論理というか、計算があると思いますが、そのような非言語情報についての論理がたくさんありそうな領域はありますか？

村上氏 やはり、音楽やアートの世界には、言語に落とし込んだとき、アートの文法みたいなものがあって、私たちが普通に使っている言語とは違うタイプのコミュニケーションシステムを使っていると思います。言語というのは、どうしても一次的で、すごく制約がきついのので、人工言語よりは自然言語のほうが表現力は強いですが、やはり、記述することで漏れ落ちてしまうことのほうが大きいと思っています。だから、その漏れ落ちてしまうものを、非言語情報のところで、どうすくっていくのか。私たちは普段、声色や身振り手振りなど、のせ方を工夫してしゃべったり、相手の様子を見ながら、コミュニケーションを取ろうとしています。つまり、コミュニケーションというのは、一方的にしゃべるものではなく、共同作業なのです。その共同作業の論理というものが、今、1つ気になっていることです。今、私たちが言語を使って作っているシステムは、個体があって個人に責任などがくっついています。しかし、今ここにある会話は、矢代さんと2人でやっているようで、実は、スタジオ

にいる皆さんも含めてコミュニケーション空間を作っています。それは私たち皆の共同作業だ、と考えたとき、何かやばいことがあって責任を取らなきゃいけない場合、誰が取りますか？個人だったら、しゃべっている私ですが、空間となったら、その分配の仕方を、行為から主体を逆に組み立てられるのではないかと考えられます。そうすると、機械みたいなものも共同行為者のなかに入れてもいいかなとなって、だんだん、人工知能に入っていくということです。

矢代氏 なるほど、そういうことか。

村上氏 もともと、そういう物事の良し悪しを、論理学の範疇内で、数理的に記述できないかという仕事をやっていて、それは、あらかじめ人間か機械かは問わず、エージェントの個体を最初から想定して作っていました。でも、それではたぶん、共同行為というものをうまく書けないねという話をずっとしてきて。だったら逆に、個別の行為、個別でもなくて、今、ここで私が皆としゃべっているという共同行為と、私が次の原稿がやばいやばいと、頭のなかで思っている行為など、複数の行為が1人の人のなかでも重なっているとすれば、それが他の人ともオーバーラップしていった。1つにコミットしているわけではなくてみたいなものを、重なり合った行為から、個体をなかのモードみたいな形で主体構成するという様相を作ろうと思ってやっていたら、京大の出口さんも似たようなことを考えていることが、コロナ直前ぐらいに分かりました。今まで20年、30年ぐらい、ずっと一緒にビールを飲んだりしていた仲なのに、一度もそれに気が付かなかっ

たなんて、今まで何を話してきたんだろうねと思いました。

宮野氏 今、面白いと思ったのは、バーバルとノンバーバル、言語と非言語って分けて言っているけど『すべて』という言葉を使うとき『すべて』という手振りをする、これって、めっちゃ一緒だよ、みたいなこと。それと今おっしゃった、皆で作っている場の責任は誰に、というような関係性のなかに埋め込まれているっていうのがすごい文学的っていうか、決めつけないっていうか、複雑なんだけど。それを文章のなかでトレーニングと書いてあるけど、何か具体化して、今、話したことを実感できるような体験というのは何でしょうかね。

村上氏 しゃべることより、踊りとか、祭りとか、そういうリアルイベント、身体性を伴うようなものなどが、実は大きかったのかなと。失われてわかる重要性みたいな。あとは、重なって共有している行為者の部品というところで、電車などの社会システムみたいなもの。たとえば、きょうここに来るのに、私は地下鉄で来ましたが、私の能力として『ここに来る』という能力を考えると『地下鉄をうまく使う』という能力が含まれているじゃないですか。そうすると、私の能力を、地下鉄とか、電力とか、さらにいろいろなものが支えていますよね。そう考えると、私個人の能力は実はすごく限られていて、他の人や物にもものすごく負うところがあるという、それも共同行為っていうもののなかに、なんとかしてまとめられないかなと思っています。

矢代氏 いろいろなものに依存しているという。  
村上氏 はい。だから人間とか言語とか、そうい

うところで話を区切っちゃ駄目なんだろうなと思います。トレーニングというのは、皆で一緒に何かをするのが基本。1人で何かをしているっていうふうになっていること自体が、いや、それ本当にあなた1人でやっているの？と。

矢代氏 編集者の仕事にある、飲み会の場所を選ぶというのが、すごく嫌だったのですが、たとえば、どういう打ち合わせをしたいかに合わせて店を決めろ、みたいなことが、実は、結構それに近いですよ。空間によって、そこで起きる会話が違ってくるといいます。

村上氏 舞台の設定という感じですね。また、舞台に限らず、たとえば、きょう何を着ていくかなどの演出もそうですね。

矢代氏 どこの居酒屋で打ち合わせしようが一緒だ、と言う人もいるだろうけど、場所によって違うよなという気持ちが、個人的にはありますね。

村上氏 それで悩ましいのが、リサイクルという言葉を知ると、私たちは、歌ったりすることを思い浮かべますが、哲学の分野でリサイクルというと、古典的な学会発表のことであり、書いてきた論文を皆に配り、それを、集まった人の前で読み上げることです。声で演じるスタイルの発表であり、あちこちの会場で同じ内容の論文でリサイクルをします。現在のスタンダードな学術発表からすると、何回も同じ発表をすることは許されない話だし、読み上げるというやり方も、はい？という感じですよ。

呉氏 対話などもないのですか？

村上氏 途中でカデンツァのような即興がいきなり始まったり、また本編に戻ったりします。また、本編のあとに別の人が書いた

応答論文が読まれ、さらに、それに対する返歌を読み上げるというシステムティックなものもあります。初めから、そこまで準備してあるのです。その後に初めて対話が始まるという、大変まどろっこしいシステムです。つまり、下手すると、学会発表の2年ぐらい前に論文の締め切りがあり、その応答論文がさらに1年ぐらいかけて書かれているというような、今のスピードには絶対乗らない仕組みがありました。そして、その読み上げる際の声色や、カデンツァの部分については、あとで出版するときには、注として入ったりもします。

矢代氏 それの本になるんだ？

村上氏 はい。このスタイルは、皆の反応を見ながら朗読するというものですが、私は、ちょっと無理だなと思ってしまいます。配ったのにさらに読み上げる意味は？オンデマンドでいいじゃん、と思いますが、のんびりしていて良かった面もあるのだと思います。

矢代氏 そうじゃないと、生み出されないものがあるということでしょうか。メールのやり取りやZoomでは駄目で、横で読み上げながら、人が動くことで、ここでこういう動きをするのか、みたいなインプットがあるということでしょうか。

村上氏 即興的に応答したり、やり取りすることが、リサイクルに参加している人との共同行為だったんだろうなと思います。そういう学術の在り方って、今は消えてしまったなと思い、声色や動画で残るものは、論文で残るのとは全然違うものも伝わらと思うので、そういう非言語の部分が今、評価の対象になっていないとしたら、私たちは、いったい何を失ってし



まったんだろうと思うことがあります。一方、現在増えてきた、動画や、データやプログラムの添付など、文字タイプではないコンテンツについて、今後、学術的にきちんと残したり、評価したりしようという動きが出てきていることには望みを感じます。

矢代氏 そういう動きがあるのですか？

村上氏 はい。やはり、データベースがないと動かない部分はたくさんあるのですが、今までは、それが評価につながらなかったもので、作られませんでした。作れないし、作った人は、だいたい冷遇されました。

矢代氏 逆に冷遇されるんだ？

村上氏 そういのが大事だと言っている人は、大学でつらい目にあっています。その人たちが何とかできないかなと。

呉氏 この業界でしかできないことだったり、論理トレーニングをやったら、もっとこれ良くなるのに、みたいなことはありますか？

村上氏 非常につらいですが、そういうのをやりたがらない人たちに一番必要かなと思います。思い込みが強く、当たり前だと思ふことを他の人にも押し付けているような人たち。論理って結局、この世界じゃないような世界のことをどう考えるかというところがポイントにもなるので、その必要性を感じていない人にやってもらわなければいけないのですが、それをどう届けるのが問題です。

矢代氏 小学校などの学校教育とか？

村上氏 でも、学校って実は、これが正しいんだということ習って、自分もそう思うから、それを次の世代に伝えなくちゃという正義感を持っている人たちが教師に

なっているので、一番大変かもしれません。でも本当は、そういう人にやってもらわないと、結局、どんどん決めつけタイプの人再生産されてしまいますよね。学校教育も、今は、教師が伝えるというよりは、みんなが学ぶのを支援するというふうに変わろうとしていますから、それは結構、今の質問とすごく関係しているんじゃないかなと思います。

矢代氏 日本人が論理的じゃないという話は、日本語が論理的じゃないということにつながっていますか？

村上氏 いや、日本語の論理を真面目に考えてこなかっただけでしょうね。日本語の特性として、文法的に主語などの省略が可能なので難しいのかもしれませんが、分からないなら、今のは誰が主語？と聞けばいいだけの話で。

矢代氏 論理性が失われているわけではない？

村上氏 もう1回言ってと言えいいだけの話なのに、はっきりさせずに流してしまったり、記録をなかったことにしたり、異論は消しちゃえみたいな、そういう、記録をちゃんと取らないみたいなのが派生しているのかなと思います。

矢代氏 つまり、言語情報であっても、チャットとか、そういうものでも話法というか、ナラティブっぽいものは、そこに非言語情報が存在しているということですよ。おじさんとLINEをするときのあの感じ、みたいな。

村上氏 はい。この人とLINEするときは、このスタンプは使わないよね、みたいなものですね。そういったところも含めて。

矢代氏 情報というか、話法も含めて論理が展開されているということですね。ありがたいごさいました。

# 05

## 公共空間という「経験」 「自治」のおままごと

---

**杉谷 和哉** Sugitani Kazuya

岩手県立大学総合政策学部・講師

1990年大阪府生まれ。岩手県立大学総合政策学部講師。京都府立大学公共政策学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（人間・環境学）。京都文教大学非常勤講師、京都大学大学院文学研究科特定研究員などを経て現職。専門は公共政策学。著書に、『政策にエビデンスは必要なのか：EBPMと政治のあいだ』（ミネルヴァ書房）、共著に呉羽真・伊勢田哲治編『宇宙開発をみんなで議論しよう』（名古屋大学出版会）など。

公共政策を考える上で、実験による効果検証という手法の発展は、一大画期をなす出来事であった。主として理系の手法を導入することによって、科学的な根拠＝エビデンスを明らかにするアプローチは、瞬く間に世界を席卷した。本研究もまた、こうした「実験」的な手法を用いるが、その目的は全く違う。

近年、「コミュニティ・オーガナイズ」をはじめとした、人々の自治活動や組織化といったことに注目が集まりつつある。これはアメリカで生まれた概念であるが、日本においてもかつては、町内会や自治会、労働組合のように、人々の利害を調整し、何かを成し遂げる場というのが各所にあった。しかし、日本ではこれらの所謂「中間団体」が衰滅し、民主主義に悪影響を及ぼしているとされる。

中間団体は民主主義の要であるとともに、抑圧的な機能も果たしてきた。だからこそ、これらの共同体は解体されてきたのである。よって、これらの共同体をいま一度、かつてのように蘇生しようとするのは現実的ではない。必要とされているのは、日々の積み重ねだけでなく、公共空間で他者と過ごすという経験もそうであると言えないだろうか。

元来、公共空間を人為的に創り出すのは容易なことではない。しかし、今日ではVRのように、バーチャルな空間を創り出すことも不可能ではない。公共空間を「経験」し、「自治」を「おままごと」のように体験する機会を人々に広く提供することは、政治に対する考えを鍛え直す機会を提供するかもしれない。

あるいは、公共空間の実際の設計にあたって、VRを活用することも考えられる。たとえば、被災地で設計される仮設住宅や復興住宅には、人が集う場がなく、コミュニティが衰退するといった事態がよく起きる。また、都心の再開発など、公共空間の設計が重要な問題となることは稀ではない。

それらの公共空間の創設にあたって、どのようなデザインが人々の連帯を育むのであろうか？「自治」の経験を踏まえた人々の意見を汲んだ公共空間の再設計ができれば、これまで起きていたいくつかの問題のささやかな解決に繋がるかもしれない。



呉氏 自治をおままごとのように体験させたいということですが、目的は政治に対する考えを鍛え直したいという意識が強いのかなと思っていました。杉谷さんの思う理想的な自治のありようはどのような状態か、なぜ自治に興味を持つようになったのかを教えてください。

杉谷氏 今回、空間というお題をもらったときに、あまり私は空間を突き詰めて考えてこなかったかなということに気付いたのです。その中で、自己形成に関与してきた空間ということで、京都大学大学院に在籍していた頃に住んでいた、吉田寮というところを思い浮かべました。吉田寮は、築100年以上の古い木造建築の建物で、そこはいわゆる「自治寮」と呼ばれるところです。寮の運営を自分たちで全部やっていくという場所で、私の中で自治の経験は、そこから始まったのです。自分たちでいろいろな物事を決めていくときに、みんなで話し合っているいろいろな考えるわけです。その経験を経て、政治も

含めて、色々なものの見方が変わっていききました。それは研究とは別のところなのかもしれませんが、自分たちで自分たちのことを考えて決めるというのは厄介なことです。他人を説得するのは骨が折れますし、やらないで済むのであれば、やらない方が当然楽ですね。でも、本当はこういう経験はすごく大事な気がします。政治について議論し、民主主義について考える上で、お任せになってしまうためにも、自分たちで考えて、自分たちで決めたことを、自分たちでやるという、そういうことを経験するということがすごく大事なことなのではないかと思って、こういうテーマを考えてみました。

呉氏 それは自分が体験するのと研究するのは全然違う話だと思うのですが、その辺りを教えてください。

杉谷氏 私の研究テーマはEvidence-based Policy Makingです。エビデンスという言葉は皆さんも聞いたことがあると思う

のですが、要するに根拠に基づいて政策を決めていくということが、今、世界的な流行りになっていて、日本でもすごく流行っているのです。私はそのエビデンスというものが、政治や政策の作られるプロセスの中で、どういうふうに理解されて、どういう言葉遣いで政策はつくられているのかといったことを研究しています。

呉氏 エビデンスがどう決定に利用されているかということに興味があるということですね。

杉谷氏 池田先生がフェミニズムの話をされていましたが、そのときに実は重要な話なのです。なぜ大事かというと、フェミニズムは臨床ではない、医学ではないという指摘を受けたという話がありましたけれども、実はこれは政策にも似たような話があって、フェミニスト政策分析という立場をとってくれる人たちが海外の研究者にいます。大学で教えるときには、政策は問題解決の手法だと言うのですね。エビデンスに基づいて、たとえば少子高齢化、先ほどの移民の話でいうならば、移民をどうやって社会に包摂していくかということについて、ものすごくきちんとした科学的根拠があります。それを日本でもやりましょうという話に普通はなるのです。でも、フェミニスト政策分析や、別の立場をとる人たちというのは、その問題が問題となっている状況、問題化というもののプロセスに政治があるという主張をするのです。たとえば、少子高齢化の問題は、今でこそ女性の社会進出などと結びつけて議論されますけれども、少し前までは家庭の問題であって、政府はあまり支援する必要はな

いと思われていました。これは、やはり男性が1人で稼いで家庭を支えていくもので、女性は家事をやればいいと多くの人が思っていたから、そういう問題設定になったのです。あるいは、それ以外にも、私たちは経済成長していくにはどうすればいいかというような話をして、経済成長のための問題解決の方法を考えるわけですが、経済成長って本当に大事なのかという視点も同時にあり得るはずですね。ここに来ている人たちも経済成長のためにあくせく働いて、不動産の営業を頑張っているわけですよ。それは本当に正しいことなのかということですね。あるいはもっと日本の研究は頑張らないといけない、研究のインパクトファクターと呼ばれるもの、井出先生が評価の話をしていたと思うのですが、そういう研究というのは、どれだけいい論文に引用されたかや、どれだけたくさん出たかという話をするけれども、本当に正しいのか、本当にいい研究なのかということを問う契機はないですよ。何が言いたいかというと、いい社会とか、これが目標だ、あるいはこれが問題だということを問う姿勢、それを設定することそのものに、実は、もうすでに私たちの価値観が入っているわけですね。フェミニズムのような立場は、「いや、そもそもそういう価値観は果たして妥当なものなのだろうか」、「それは家父長的な、男性中心主義的な物差しでしかモノゴトを見ていないからじゃないのか」といった発想をします。そういったことを考えたときに、実はエビデンスだけでは決められない物事もあるし、エビデンスがかえって問題をややこしくして

いる、あるいは問題の解決を難しくしているというケースもあることに気づかされます。そういったことも合わせて気になるようになってきたのは、吉田寮のおかけなのかもしれません。今、寮は大学に出ていけと訴えられて大変なことになっています。大学の理屈としては、吉田寮は古い建物で、学生が危ないから出て行けと言っているわけなのですが、寮生としてはずっと、耐震補強をしてくれと大学に言っているんです。でも、大学のいわゆる当局側は、全然話を聞いてくれない。こういう状況では、エビデンスの有無とかだけではなくて、別の問題もあわせて考えないといけないわけですね。もちろん、合理的に物事を考えて政策を作っていくことも大事なのですが、それと同時に、どうしようもない権力の違いであるとか、あるいは、自分たちのものの見方を否定してしまっている価値観みたいなものを問い直すことも同時に、政策研究の重要な役割なのではないかと考えていくようになりました。エビデンスそのものの是非とかと同時に、それが政策過程にどう関わっているのかといったポイントにも関心が向くようになったのは、そういった影響も少なからずあったのではないかと考えています。

呉氏 なぜエビデンスを重視した問いにせざるに、エビデンスがどう関わったかということに、最初のもともとの設定があまりにも難しいというか、あまりにも難しいというとあれですかね、結構、フラットに決めるのが難しい問いだからという。

杉谷氏 そういうまとめで問題ないと思います。ただ、もちろん使われていないのも問題

です。実際、エビデンスを全く無視していたり、研究を曲解していたり、数字を改竄していたりと、マズいことをしているケースもたくさんありますから。それはそれで大事なのです。大事なのですが、同時に政策とかというものは合理的に全部を決めて情報を全部開示して、ビッグデータでみんなきれいにハッピーという話ではないわけです。そこのあいだが大変で、価値や目的、良い社会とは何かという話なのです。

呉氏 その辺りは、自治の経験をもとに、どういう社会がいい社会だと思っているのですか。

杉谷氏 自分たちのことを自分たちで決める、そして自分たちの面倒を自分たちでみていくということです。つまり、自分でどうにかしろという自己責任ではなくて、助け合いみたいなものも、実はすごく大事なのではないかと最近思います。自助、共助、公助ということを菅義偉さんが言ったときに、弱者を見捨てるのか、公助をもっと頑張れという話が出てきました。あるいは、岸田さんが地域で頑張っている子ども食堂を訪問した時も叩かれていましたね。「政府がやるべきことを地元のボランティアとかがやってるんだぞ」とね。確かに、岸田さんの責任を感じていないかのような態度に対しては、私も思うところはあるのですが、同時に思うのは、なんでもかんでも全部政府が助けてくれということも違うのではないかと、ということです。公助で全部どうにかしようとする、政府がものすごく大きくなって、政府に何もかも全部面倒を見てもらおうと考える人がすごく増えます。困った時に人を助けるのは政府の仕

事である、と多くの人は考えている。さっきの子ども食堂の事例も、これは本当は政府の仕事で、ボランティアがやることじゃないよねというわけです。これは正論ですし、私も実際にそう思います。でも、そういうふうになんかのあいだには、そこは助け合いというものがあるわけで、そういった心は、実は自治が育んでいくのではないか。私たちは今、ほとんど自治に触れる経験はありません。面倒なことは全部、民間に委託するか、他人に任せるか、あるいは自分は何もしなくてフリーライドで得しようと思っっている人があまりにも多いわけで、目の前で困っている人がいても、市役所にでも行けば生活保護で助けてくれるでしょと私たちは言うわけです。実際には、確かに政策で助けられる人はたくさんいますから、それは間違っただけではありません。けれど、本当にそれはいい社会なのかなと思うのです。いい社会とは何かの定義は難しいのですが、いい社会ではないという定義は、そういう社会だと思います。目の前で困っている人がいても、それは自分には関係ない。高い税金を払っているのだから、行政がやるべきこと、とシャッターを閉めてしまう。海外ドラマで、「自分には関係ないね」というニュアンスで「It's none of my business」と冷たく突き放す台詞をよく耳にしますが、そういう感じです。自分には全然関係のない話で、好きにすればと思う人がたくさんいる社会は、恐らくいい社会ではないだろうと思っています。

呉氏 杉谷さんは、ご自身が思ういい社会を実現したくて、この研究をしているのですか。

杉谷氏 そうですね、回り道ですが。

呉氏 共助のマインドが杉谷さんの理想だと思うのですが、どういう要素が足りていないから、みんな共助ができないのですか。

杉谷氏 それはハードでありソフトでもあると思います。まずハードでいうと、公共空間みたいなものがどんどんなくなっているということも大きいと思います。

呉氏 私の考えだと、今は昔のように、野放図に緑地をつぶしていく印象はなく、むしろ公共空間はあるという印象があったのですが、逆にないという印象を受けているということですか。あるけれども活用されてないのかなとも思っています。

杉谷氏 そのとおりです。たとえば、戦後間もないころだと公民館の活動などを非常に頑張っていたのです。今は皆さん、公民館などに行ったことはないと思うのです。そういうところで何をやっているのか、何ができるのかということ、私たちはほとんど知りません。そういう意味では、カードはあるけれども、それを使う私たちのマインドが全然備わっていないし、使い方もよく分からないし、使う意義も分からないという状況がすごく大きいと思います。公民館もたとえば維持できないとなると、今後民営化していくような流れも、ひょっとしたらあり得るかもしれない、そうなるとお金も払わないと使えなくなってくるわけです。お金はコミュニケーションツールという面もあるのです。お金を払ったら、もうそのぶん、お互い助け合うという思いは生まれなくなります。関係が契約になってしまうからです。お金を払えば、いろいろなことをやっても、相手に負い目

は感じなくていいわけです。それはお金のいいところです。だから店員に対して横柄に出してしまうような人がいるのは、そういう面も関係しているのかなという気がします。

呉氏 そうすると、お互い助け合う条件のために不足しているのは、公共空間もなくなって、それを育てるマインドもなくなっているということですか。

杉谷氏 はい。

矢代氏 今、公民館のお話がありましたけれども、自治を立ち上げていくときに、吉田寮の話だと、空間、建築があって、そこに住んでいる人のイメージは湧くのですが、自治といっても、恐らく規模がいろいろあるではないですか。どういふところから始めていくといいのでしょうか。

杉谷氏 難しいところだと思うのですが、私が思うのは、たとえば職場などだと思います。あるいは業界団体、組合でもいいです。労働組合はもともとそういう組織だったのです。だけれども、そういった組合も今どんどん力がなくなっているし、組合は組合で駄目なところがたくさんあります。実際には、そういったアクターの活動によって、大多数の消費者たちが、本来よりもコストをかけないといけないう状況に陥っています。このコストを、経済学や政治学では「レント」と呼び、この「レント」を稼ぐ手段のことを「レントシーキング」と言ったりします。まあこれは良くない活動なわけで、実際、これで不当な利益を得ている人たちも多い。だからこれを無くすには・・・みたいな話が普通なんですけど、私はもう少し違う見方をしています。つまり、本

当は私たち研究者も、ちゃんとこういう「レント」を稼がないといけないのではないかと、ということなんです。研究者たちは、組合を作って労働状況を改善するといったことや、集票組織を固めて、政治家に自分たちの考えを聞いてもらう、といった活動は苦手としています。結果として、政治的には省庁に好き放題やられ、お金がどんどん減らされて困っているわけですね。これは、研究者が政治的な活動をしつかりしてこなかったことへの当然の帰結と言えるかもしれない。SNS上で、あるアメリカ在住の研究者の方とやりとりしたのですが、その方によれば、アメリカは学会がかなり政治的な活動をして、自分たちに有利な仕組みや法案ができるように働きかけているそうです。日本でそれをやれるかは分かりませんが、究極的にはそういうロビイング活動（自分たちの利益が拡大するよう、集団で政治に働きかける活動）のようなものを、やっていかないといけないという話なのかもしれません。本当は研究者の側は、共助のお手本を見せないといけないうのです。いろいろな学問の未来の話が出て、これだけ私たちは頑張っているのに政府は分かってくれない、選択と集中はダメなんだ、といった、分かりきった繰り返しばかり言っている、もう仕方ないんじゃないかというのは何となく思っています。当然、政府の今の政策がダメだという批判は続けていくべきなのです。ですが、それを言い続けていても何も変わらない現状があるということは、批判している我々の側にも何か変えないといけないものがあるんじゃないかと思う。



矢代氏 共助と自助をはじめにありきということ  
はすごく分かりますし、いいなと思うの  
ですが、それを妨げているものは何なの  
でしょうか。

杉谷氏 研究者のプライドでしょう。自分たちは  
正しいことをしているのだから金をも  
らって当然だ、そんな浅ましいことをせ  
ずに金をもらって当然だと思っている人  
が多いのではないかと思っています。こ  
ういう居丈高な考えをもつ人は段々、  
減ってきていますが、時々お見掛けしま  
すね。今の時代には合わない発想だと思  
います。

杉谷氏 教育がよくないのです。自分たちが研究  
して論文をたくさん書けばそれだけで評  
価されるというマインドでできています  
し、実際に評価されるから、自分が得た  
ものは誰の助けも借りず自分の努力に  
よって得られたものだと思っている  
人がものすごく多い。人間たちが集ま  
ると、発注がどうしても「能力主義」的  
になります。つまり、色々言っても、一定  
の地位にある人が偉い、たくさん業績を  
あげて、能力を示している人は尊敬すべ  
き、という話になる。彼らや私が今この  
地にいるのも能力が一応評価されている  
からです。能力主義は助け合いを阻むの  
です。なぜかと言うと、俺は、これだけ  
努力して、たくさん論文書いたけれど  
も、おまえは書いていないよね、おまえ  
は努力が足りないから能力が足りないか  
らだろというふうに言って、助ける義理  
がなくなるのです。能力主義が全面化し  
た社会になると、能力があり、それにふ  
さわしい成果を出している人はそれだ  
け、優遇されて当然だ、となります。そ  
こから助け合いや相互扶助の精神は生ま

れません。

呉氏 研究だけではありませんよね。

杉谷氏 もちろん、民間もそうです。

呉氏 給料が少ないのはおまえが悪いという  
ところがあったり、すごく面白いなと思  
います。今お聞きしていると、杉谷さん  
のしたいことは研究というよりは、むしろ  
教育や、研究が実現に近づくのではない  
かと思っています。新たな吉田寮を作れ  
とは言わないですけども、新たなコミュ  
ニティをバーチャルでもリアルでも作る  
とか。

杉谷氏 それは私も実際考えていて、今、上で実  
はバーチャルの筑波の森尾先生とも話  
していたのですが、そういったことをどん  
どん始めていかないといけないのかな  
と思っています。ただ、ここまで偉そう  
なことを言ってきましたが、社会を変  
えるための具体的なアイデアはまだ全  
然ありません。

呉氏 バーチャルの先生とお会いして、組んで  
みたい相手はいますか。まだご自身で  
今、この人と組んだら、自分の研究が  
広がりそうというような。

杉谷氏 建築の人などに会ってみたいと思  
います。というのは、政治理論などの  
文脈ではあまり考えてこられなかつた  
のですが、公共空間などは、公共とは  
何かというような哲学的な話なのです。  
こういう空間や、ものの仕切りとかの  
在り方、特に今、ありとあらゆる  
ところにラミネート板が置かれて  
いますけれども、ああいったものが  
私たちのコミュニケーション、空間、  
公共的なものにどう影響を及ぼすか  
ということに実は最近関心が高ま  
ってきているのです。そういう意味で  
私の関心があるのは、そういう物質的な

なので、公共空間を実際に設計している人たちの話を聞いてみたいし、そういった人たちと何か一緒にできることはないかなと思っています。一昨年から岩手にいるのですが、岩手の被災地で家をなくした人たちのための住宅などを、東北で私も色々拝見する機会がありました。岩手ではない別の東北の地域なのですが、あるところでは、住宅地が全部、ものすごく高台に集まっていました。下にあるのは全て商業施設です。山の上には人が住めないようになっているんですね。これは一つの知恵ですが、この人たちが歳をとったとき、車を運転できなくなったらどうやって家に帰っていくのだろうという問題などが、今後絶対に出てきますし、あるいは画一的な設計にするがあまり、人々からコミュニケーションがなくなって、被災したあとに住宅が与えられたけれども、孤立で自ら命を絶ってしまったというケースも珍しくありません。そういうことを考えると、抽象的な話ではなく切実な問題です。そういったことを考えたときに、建築や工学や環境デザインみたいなことを、デザインの研究などを行っている人たちの知恵を借りて、もっとより良い人々とつながりを作れるような何か新しい、たとえば住宅の作り方などができるのかなと思っていますし、極めて大切な課題なのではないかと思っています。

呉氏 ビジョンは社会側つくるというところが建物系のハードに組み込まれましたけれども。

矢代氏 すごくわれわれの画一的な。

杉谷氏 実際には納期もありますし、それは仕方がないと思います。住むところがないた

め、とにかく早くというオーダーという、限られていた状況の中で、ああいったものができるのはやむを得ない面はありますし、それはそれですごく大事なことです。画一性が駄目だと言っている人たちもいますが、良かった面もたくさんあるわけです。今、自治の話が出て、なんでもかんでも人任せにしては駄目だということで、中間団体みたいなものが大事だという話をしましたが、中間団体のやばさもあるのです。たとえば、今世間を騒がしている某教会、宗教団体も中間団体です。中間団体ならではの抑圧もあります。そういった中で、中間団体に頼ることなく、個人が自立して生きられるというのは、これはこれですごく大事で、いくら強調しすぎてもしすぎることはありません。けれども、そのデメリットは当然あるわけです。話を戻すと、画一的な住居の良さというのは、新しく作れるし、ユニバーサルデザインなんて素晴らしいと思います。ただ、それを長く運用していくとなると、色々な問題が出てくる・・・といった話じゃないかなと思いますね。こういう視野・視点で政策も考えていかないといけない。

矢代氏 吉田寮以外でうまく回っている中間団体はありますか。

杉谷氏 パリコミュンは国家に潰されてしまいましたが、うまく回っていました。今でも続いているものでいうと、これも少し怪しいところがありますが、野菜を作っているコミュンみたいな団体もまだ続いていますね。持続しているということは、やはり何か秘訣はあるのだろうと思います。ただ当然、そのぶん色々な歪みはありますね。さっき私は、吉田寮はす

ごくいいところだと言いましたけれども、今住んでいる寮生でも、私がいたときの話をすると、キッチンがすごく汚れていて、夏はうじ虫が湧いていました。しかも誰も片付けません。面倒くさいから、フリーライダーが絶対に出てくるのです。フリーライダーというのは、人に仕事をさせて得だけをします。そういう意味では配属性がありません。お金を使っている人だけ来られるようにすれば、フリーライダーは出てきません。みんなお金を払っているから、誰でも入れて、誰でも使えて、掃除はしてもしなくてもいいとなると、誰も掃除しません。掃除をしている人だけが損をしているという状況です。しなくても済むなら、できるだけ面倒なことをしないという、私のようなダメな人間のことを「フリーライダー」と呼ぶんですね(笑)

宮野氏 していなかったのですか。

杉谷氏 していなかったです。だから、これほど偉そうなことを言っていますけれども、私はフリーライダーをしていました。掃除はしてなかったですが、そのほかの活動は頑張っていたところもあるので、とんとんかな、などと都合よく考えています(笑)。話を戻しますが、フリーライダーは絶対に出てくるのです。ということを見ると、自治は本当に面倒くさいし、実際にいいことばかりではありません。本当に嫌なこともたくさんありますし、実際にはうまくいかないことだらけなのです。

呉氏 今お聞きしていて、先ほど規模感という話がありましたけれども、たとえばシェアハウスなども。

杉谷氏 シェアハウスはいいと思います。

呉氏 そうということが1つの形なのかな。

矢代氏 一応、フリーライダーのままシェアハウスに住んでいますが、やはりここで貢献が見える仕組みみたいなものを考えていかなないと、フリーライドされた側の気持ちはどうフリーライダーは分かるか、みたいな。みんな結局変わりません。

杉谷氏 それはものすごく大事な問題です。結局最初の話に戻ってきて、これだけそういう自治とか公共空間みたいなものがなくなってきたというのは、みんな変わらないし、面倒くさいからやらないのです。そうなってくると、政治に対して関心が出てくるわけがないのです。民主主義などについても、関心が出てくるわけがないのです。だってみんな人任せだからです。これだけ税金を払っているのだから、政府がやるのが当たり前でしょう、自治体がやるのが当たり前でしょう、というのが一番気楽です。そういう発想からは、おそらくいい指導者も出てこないですし、政治も腐敗する。民主主義もどんどん形骸化していきます。今の日本もそうなりつつあります。

呉氏 最初はその根源的な思いつて、やっぱり研究者の方にお聞きしたくて。先ほどおっしゃったようにいい社会を作るために、今この研究があるという位置付けは、一貫性はあります。みんな、政治に対する考え方を鍛え直すという表現を使っていて、結構きつい言葉だなと思いましたが。具体的に何をもってどうなったならゴールなのかをぜひ聞かせてください。

杉谷氏 実際には政治や民主主義や良き社会というものにゴールはありません。ただ、良き社会をみんなで考えて議論する機会が

ある社会はいいと思います。皆が理想とする「善き社会」みたいなもの1つに定まって、そこにみんな向かっていけというのはファシズムですから、これは駄目です。でも良き社会というのを、そもそも問えないというのが、やはり一番よくないのです。

呉氏 あるのではないかと迷いながら、やっていく、みんなで話し合っていくプロセスに意義がある。それこそが政治に対する考え方を鍛え直していくということなのですか。

杉谷氏 そうですね、同時にそれは、つまり政治や政府に対して、こんな駄目だと文句を言う前に、自分にとっての善き社会は何なのかということを説明できるような言葉を鍛えているかどうかということなのです。だから、居酒屋でお上を批判してSNSで言って、いいねをかき集めているだけが政治ではない、それを説明できるかということを常に自分の中で問うということです。自分も甘いところがたくさんありますから、自戒を込めて言っています。全部自分に刺さってますね(笑)。まあ、人を批判するときは、誰でも自分を柵に上げて言いますから。

矢代氏 鍛えるという表現を聞くとシンプルに思うことは、日本も弱っているから、弱っていると同時に日本も頑張れと、鞭打っていように聞こえるなと思って、もう少し芽生えさせるようなことは？

杉谷氏 私が言ったのは肉体的な話ではなく思考の話ですから、そこはまだ恐らく大丈夫なのではないかと思います。もう1つ言っておくと、日本が衰退しているのは事実だと思うのですが、よく研究者が日本は衰退国家だと二の次に言いますよ

ね。私もそうだと思うのですが、あまり研究者がしたり顔で言うべき話じゃないという気がします。だって、衰退国家だったら、あなたの予算が減らされて当たり前だとしか思わないからです。「日本はもう先進国じゃない」と言いたがる人たちって要するに、「私は多くの愚民と違って、衰退国家の一員としての身のふるまい方を心得てますよ」、と他人に対してマウントをとりたいたいだけなんじゃないですか。ですから、衰退国家であることは事実なのですが、それを踏まえた上で、どうするのかということなのです。その一つの方途が、言葉をどう鍛え直していくか、みたいなことな気がしますね。

矢代氏 高圧的には絶対そうで、あなたは どう思っているのかということが大事だと思うのですが、どう思っているのかというトップの球だと受け取れない人もいるみたいな。1球目のキャッチボールをどう返すべきかみたいなところが、大事。

杉谷氏 そのとおりですね。

宮野氏 杉谷さんの経験で吉田寮が大きいように、それに対する考え方を鍛え直すということ、最初にいきなり強い球ではなくて、たとえば小さな経験からやる。ワンルームをみんなで金を3万ずつ出して、すごいものを作ってみようというときに、3万円でもまず絨毯はこれにしようなど、みんなで決めて、自腹で出したやつはみんなで自主的にやっていくとね。俺はクラウドファンディングをやった大分変わりました。今まで科研費等、国から金をもらうばかりでしたが、初めてクラウドファンディングをやってみて、これほど違うのかと思いました。金の使い

方から集め方から変わりましたから。自分でも金策とかやって、だんだん変わってきたから、学術に限るのであれば、そういうところからでもいいのかなと思います。

杉谷氏 それはものすごく大事な指摘と言いますか、本当にその通りだなと思いました。そういう小さなことから始めていくという経験で、その中でああでもない、こうでもないと言いながらやっていくのは、大事なのではないかと思います。シェアハウスのお話をされていましたが、必ずしも住む必要はないと思うのです。吉田寮は住んでいるところですので、そのぶん、厄介なところもたくさんあったのですが、共有で使うようなオフィスのようなところを少しずつ広めていくということ、シェアオフィスも使っていて便利だということだけではなくて、その経験をぜひもっと広く社会に考えるきっかけになるような何か新しい仕組みを、私も今後考えていきたいと思っています。

# 06

## 子ども時代を存分に生きる ために：子どもにとっ ての安心・平和な空間

---

**大庭 三枝** Ohba Mie

福山市立大学教育学部・准教授

広島県福山市出身。研究領域は、保育・幼児教育学（フランス語圏を中心に）、平和教育、地域を題材とした教材開発、保幼小連携。フランス在外教育施設教員（社会科・保健体育科・フランス語科）時代に平和教育の重要性を再認識、帰国後は福山市立女子短期大学保育科（当時）に赴任、現在福山市立大学教育学部准教授。OMEP（世界幼児教育・保育機構）日本委員会理事。OMEP ESD AWARD 2019 受賞。

日本で育つ子どもは今幸せだろうか？大人中心に社会が回り、子どもがその力を存分に伸ばしながら生きる環境として日本では子どもに不寛容といえるが、コロナ禍でよりその苛酷さは増し子どもを直撃しているといえる。

子ども時代を奪われることが、その後の人生にどのような影響を及ぼすのか。「ヒトラーが幸せな子ども時代を送っていたら、世界史は変わっていたかもしれない」（ホロコースト記念館大塚信前館長）と言われる。現在、戦争から逃れて、家族と離れ離れの生活を余儀なくされた子どもたちは、人格形成の土台を築く子ども時代に不安と恐怖の中にいる。これまで世界各地の紛争から難民として逃れた子どもたちも同様である。

日本に住むすべての子どもたちと戦争下の子どもたちを同等に扱うことはできないが、安心・安全な空間において、育つ権利、遊ぶ権利、休息する権利、保護や教育を受ける権利等の人権が侵害されている状況にある点では、子ども時代が危機にあるといってもよいのではないだろうか。

コロナ禍において、各国は幼児期の発達を保障するために、マスク着用の制限や屋外活動の推奨など迅速に実行している一方、日本は幼児期にこそ発達に必要な環境について社会的理解が浸透していないともいえる。（感染の波が来るたびに、子どもたちの外遊びに大人が不寛容である事例が報告されている。）

私たちは、未来からの訪問者である子どもたちに何を育むことができるのだろうか。乳幼児に対しては大人基準で考えることを止めよう。大人は大声で飲食しているのに、子どもには黙食を強いる。感覚器官が劇的に発達し社会性も獲得する乳幼児期にこそ、心身ともに温かいふれあいが不可欠であるのに、周囲はマスク人間ばかり。優しく心地よく、信頼できる人間関係をどのように構築できるのだろうか。

小さかった頃に楽しかったこと、嬉しかったこと、面白かったこと、ワクワクしたこと、ほっとしたこと等々（逆のことも含めて）、思い出してみたい。私たちは子ども時代に何を獲得してきたのだろうか、今の子どもが獲得できるものは何なのだろうか？ウクライナの地下シェルターに出現したプレイスペースやコロナ禍の諸外国の取り組み等も参考に、子ども時代の空間に必要な要素（物的・人的・社会的）とそのつながりをどのように確保していくのか、一緒に考え、実現に向け協働の可能性を模索したい。



呉氏 どういう問題意識で、児童教育についての活動をしていらっしゃるのですか？

大場氏 私は広島出身で、90年代にフランスの在外教育施設（日本人学校）で、中高の社会科教員をしておりました。ちょうど原爆投下50年の節目の年に、当時、現地のフランス人から、あなたのような若い世代は、被爆者と連帯してどのようなアクションを起こしていますか？という質問を突きつけられ、社会科の教員として、子どもたちに平和教育を伝えていきたいというような答えしかできずに、非常に情けない思いをしました。そのとき、日本に帰ったら広島県出身者として平和に関わろう、未来の平和を作り出すようなことに少しでも関わろう、という思いを抱きました。帰国後、最初に赴任したのは、広島県の福山市立女子短期大学（現在の福山市立大学の前身）の保育科でした。フランスにいたときから、幼児期が人間形成の土台だと感じていましたが、保育科に職を得て、直に触れるなかで、子ども時代に平和の芽、平和的な

感性を育てておくべきだという思いが強くなりました。さらに、広島では被爆者の方々との関わりが多いことから、幼いうちから平和について日常的に考え、感じられるような教材作りというものについて、学生たちと一緒に考え、活動してきました。

呉氏 安心平和な空間づくりという方向で活動されていますが、今の日本の現状は、大庭さんから見て、どのような状態ですか？理想は実現できていますか？

大庭氏 実現できていません。

呉氏 具体的に何が足りないと思われますか？

大庭氏 平和というと、戦争がない状態ということのを思い浮かべがちですが、戦争状態でも、いじめや社会的な格差、虐待などの問題があり、安心して生活できない子どもたちはたくさんいます。つまり、大きな意味での平和を、安心して生活できることと捉えたとき、今の日本は、平和な状況ではないと言えます。

呉氏 日本のなかで、ここは理想的な状況を実現できている、安心安全が確保できてい



るなという場所がありますか？

大庭氏 場所というより、そういう要素が実現できている場はあるかなと思います。

呉氏 いじめや虐待がある限り、永遠に全部が安全にはならないと思いますが、理想的な場があるとしたら、どういった場でしょうか？

大庭氏 たとえば、就学前教育（保育園や幼稚園など）の場から小学校に上がるときに、よく小1プロブレムと言いますね。その時期の子どもたちは、短い期間の間に就学前教育から小学校教育に適応しなくてはいけないという教育システム上の過酷さのなかにいます。なかなか慣れず、緊張や不安の多い状態で、子どもたちは悲鳴をあげています。しかし、大人たちはその状態を、子どもたちが落ち着かないと言い、それを問題と捉え、小1プロブレムと呼んでいます。

呉氏 システムがおかしいということですか？

大庭氏 プロブレムというのは、大人から見て、言うことを聞かなかったり、集団行動を取れない、逸脱した行動をする子に対しての言葉ですが、本来は、彼らがそういう行動を取らざるを得ないものは何だろうかということに注目し、保幼小連携を実現すべきなのです。それを実現しようとしている所もあり、私もそこで指導しております。

呉氏 小学校に上がるというだけで、トラブルのようなものに巻き込まれているとは思いませんでした。

大庭氏 子どもたちが緊張したり、不安を感じたりする状況というのは、日常生活のなかに、多々あると思います。

呉氏 安全で安心な場所は、思ったより簡単に奪われてしまうのですね。

宮野氏 だから、不安なほうが普通だよ。クリエイティブな幼稚園からいきなり軍隊のような小学校に行くのだから、普通の精神ではいられない。たとえば、小学校2年生の成績なんて、子どもの成績ではなく、先生の成績ですよ。この子が算数ができないという話ではなく、先生が、どれだけ興味を持たせることができたのか、できなかったのかということだと思います。

大庭氏 そのとおりだと思います。

宮野氏 そのとき先生は、子どもに、どう接したんだ？と思いますよね。

大庭氏 大人の尺度に乗せようとしているのです。大人の尺度に乗らない子を、指導に乗らない子と言いますが、私はその子たちのほうがちゃんと意思があってえらいと思っています。この尺度には乗りたくない、乗れないと思って、自分の意思でそういう行動を取っているの、見込みがある子たちだと思います。大人の尺度に子どもをはめ込むなということです。そこで子どもたちの現実や思いに寄り添って、不安や緊張、戸惑いをできるだけ軽減し、小学校教育に誘うというやり方をしている学校もあります。

呉氏 安心平和な空間というのは、子どもがそのままいられる場所であって、大人にとって都合のいいことをさせることは、安心安全ではない、平和ではないということですね。

大庭氏 はい。

呉氏 今回、空間に寄せて考えてみると、今、この渋谷のビルの一角で、その理想は実現できるでしょうか？

大庭氏 ちょっとこのコンクリで囲まれた空間だと、五感を刺激しないので、難しいとは

と思いますが、コンセプトとして私が考えたのは、子どもが先生、大人が生徒になったら、いろいろなことができそうということ。たとえば、宮野先生の息子さんに図工を指導してもらうことにして、大人はそれに従います。そうすると子どもが、何を楽しいと思っているのか、何を面白いと思ってくつろぐのか、どういうときに集中して、没頭して学ぶのかが見えてきます。大人のほうが学ぶということ。大人がこれはこうだぞと教え込むではありません。子どもに先生をやってもらおうと、喜んで教えようとしませう。虫が好きな子は虫のこと、絵が好きな子、料理が好きな子、何でもいいので、子どもが先生になって大人が教えていただくということをする、この子はこんなことを、よう知ってるなとか、こんなこと考えているのかということ、子どもの興味関心について、大人が学ぶことができると思います。

呉氏 すごく面白いですね。子どもが先生になるという取り組みは、どこでも実現できますね。

大庭氏 どこでもといても、子どもが安心して遊べる、安心して先生をできる場でなくてはなりません。保育所や小学校などが協力して場を提供していただければ、そこで親や先生が、生徒となって、子どもに教えてもらうことができると思います。子どもが集中して取り組むときの姿や、興味関心などについて、大人が学ばせてもらえる、そういう場が必要だと思います。

呉氏 大人側が、持っているものを一回捨てるという、アンラーニングの場にもなりそうですね。

大庭氏 大人はとにかく黙って従ってもらいます。いちいちそれはこうだよ、ああだよとか言わない。子どもが先生ですから、先生の言うことには黙って従う。そして従ってみたときに、なるほど、これも面白いな、と大人に気付いてほしいのです。大人が決めた尺度だけが絶対ではなく、子どものほうがクリエイティブに尺度を作り出せることもあります。それを体感してほしいですね。

呉氏 面白いですね。

大庭氏 たとえば、幼児を先生として、手づかみで食べてみるなども、五感を刺激して、いいですね。なるほど、手づかみで食べるってこういうことだった、豆腐って、こうやってみると気持ちいいね、など、私たちは忘れかけていますが、みんな、発達の過程で五感を駆使しながら成長していくのです。たとえば、1歳の子を先生にしたら、1歳の子の真似をしなくてははいけません。そのときに、赤ちゃんじゃないからできないとか、こうやって食べなさいとか言うのは、なしです。1歳の先生に食べたいように食べてもらい、それを真似てみるのです。

呉氏 面白いですね。それを社会実装したとしたら、今とは違うどんな未来があると思いますか？

大庭氏 現在の社会は、大人が子どもに教えてやらなくちゃ、育ててあげなくちゃいけない、と思っている節があると思います。しかし、子どもというのは、大人が思っているより能力が高く、クリエイティブな存在だと思うので、子どもは賢くクリエイティブで、優秀だという考えが社会にも広がると思います。それが理想です。もっともっと子どもの尺度を知り、

みんな、子ども時代は子どもの尺度で考えるようになるといいです。

呉氏 小学校や中学校では、これぐらいのことを勉強しようという、考えがありますが、それに対してはどうお考えですか？

大庭氏 基礎的な学力は必要です。学校は、基礎的な学力を培う場ではあるけれども、それだけではつまらなくなつて、行きたくなくなるでしょう。それよりも、子どもが尊重される、自分の個性や特性、アイデアが活かされる場であるということが保証されるべきだと思います。

呉氏 どのように変わるのが、大庭さんの考える未来ですか？

大庭氏 学校のなかで子どもが尊重されるのが、行きたくなる学校だと思います。学校をなくすことはできませんから、行きたくなる学校にしたいのです。また、社会のなかにも居場所があるといいと思います。大人がこれ教えてくれよと言ったら、子どもが教えてあげられるような場所があるといいですね。

呉氏 子どもが先生になれる場所。

大庭氏 はい。子どもが先生で、大人が学ぶ学校が社会教育のなかにもあれば、多少、学校がしんどいなと思つていても、居場所がある。そういう場所がここそこにあつたらいいなと思つています。

呉氏 子どもに接する機会がない独身の方なども多いので、そういう、大人と子どもの断絶みたいなものを防ぐ感じもありますね。

大庭氏 独身の方も、将来のために学びに来られたらいいですね。私たちは全員、かつては子どもでした。忘れてしまつたり、捨て去ってしまった感性や、クリエイティブティというようなものを思い出して、

もう一度、そこに価値を見出し、呼び戻すことで、子どもを理解できるようになり、もっともっと近づけるのではないかと思います。

呉氏 安心安全のためには、やはり、子どもがその価値観をそのまま尊重されることが大事ですね。

大庭氏 安心安全のなかにいるからこそ、協力し合う、助け合う、教えてあげるといふようなものが生まれるのだと思います。

呉氏 そこで初めて生まれ、成長するのですね。今の教育はちょっと教える感じが強いですね。

大庭氏 子どもたちが自ら学ぶ、そのなかに平和の芽があると思います。大人が教えると、教えてもらうことが子どもたちにとって至上になります。そうではなく、自分たちで考えて、協力したらこんないいものができる、始めは違う意見だったけれど、こうやったら最終的には合意に達したなど、そのなかで平和的な解決を学んでいくのではないのでしょうか。教えられて解決するものではなく、体得していくもの。その過程が遊びだったり、子ども時代をしっかりと過ごすことだと思います。それが将来、課題の解決を、暴力ではなく話し合いでやろうとするような姿勢につながると思います。壮大ですが、子ども時代にその根っこがあると思つています。

男性B しかし、ある程度、ルールなども教えなければいけませんよね。我儘と自由の境目みたいなことが、すごく難しいなと思つています。

大庭氏 境目がピツとあるわけではありませんから、ケースバイケースにはなりますが、できれば、大人が勝手に裁きに入らない

で、子どもたちのなかで納得する着地点を見い出せるような環境づくりが必要かなと思います。たとえば、叩いたら泣いたというとき、ごめんなさい、許してね、もうしないでね、というような片付け方ではなく、どうして手が出てしまったのか、原因をしっかりと聞き取り、解決しなければ、また手が出ます。問題行動にしても、どうしてそういう行動を取るのかを、きちんと深掘りして、子どもが納得しないと、変わりません。怒られるからやめようという理解では、怒る人がいないところではまたやります。つまり、こういうふうにできる子どもを育てたい、育てようではなく、子どもたちが自立的に、社会的な行動を学び、これはやっちゃいけないなと気付く、感じるような環境をつくらなくてははいけません。簡単には無理で、時間も手間もかかります。しかし、大人が勝手に裁かないというところが大事だと思います。

宮野氏 失敗しようが、それは違うだろうというものだろうが、大人が、とりあえずやってみな、と言える環境だよ。

大庭氏 体験から学んでいくので、これとこれは合わないとか、五感を駆使しながら、じゃあ次は何をやってみようというふうになればいいと思います。私は、これは科学の実験だと思います。もしかしたら絶妙の組み合わせが見つかるかもしれません。大人はつい止めてしまいますが、安全な状況のなかでなら、挑戦してもいいと思います。エジソンも、むちゃくちゃ危険なことをやりましたが、だからこそ、電気や電灯など、いろいろなものを発明することができました。安全が確保されていれば、何でもできます。子ど

もたちの行動には全て理由がありますから、それをひも解いていくと面白いと思います。なんでこんなことをするのか？やめなさい、ではなく、なるほど、そういうことか、と大人も一緒に楽しむことで、子どもたちは安心してトライして、試行錯誤でき、さらに伸びていくでしょう。なかなか難しいことですし、実は私も自分の子にはできていません。

呉氏 自分の子は難しいと思いますが、そういう目線が保育園や学校教育のなかにあると本当にいいですね。

大庭氏 そういう日が1日あるだけでもいいと思います。

宮野氏 ほんまやね、変わるよね。

大庭氏 その日は子どもが1日先生になるとしたら、たぶん、すごく張り切ると思います。子ども同士で協力もするだろうし、まさに生きた学校になるのではないのでしょうか。

宮野氏 それを実践している国はありますか？

大庭氏 北欧はわりと、森の幼稚園といいますか、園舎がなく森に放つような、要するに、自然のなかでさまざまな試行錯誤をしながら過ごすというやり方が、就学前後の教育で重視されています。特にコロナの影響もあって、屋外での教育というのは、ヨーロッパで非常に盛んになっていますね。

呉氏 そういう森の利用の仕方もいいですね。

宮野氏 アメリカの話ですが、好きなことを自由にやらせる学校で、あるお母さんが、自分の子は勉強がちっともできないじゃないかと学校に文句を言ったら、先生が、でもお子さんはこの学校で誰よりも魚のこと、釣りのことを一番よく知っていますよと言いつ返し、お母さんもハッと

納得して帰ったという話がありました。

そういう学校っていいなと思います。

大庭氏 子どもが没頭できるものに没頭できる、  
それが安心な空間ということですよ。

呉氏 戦争をしていないから、この国は平和  
だ、ということではなく、もっと、子ども  
が子どもらしく生きられるということ  
に問題意識を持ったほうがいいということ  
ですね。ありがとうございました。

# 07

化粧を上手く利用して、  
誰とでも以心伝心できる  
世界を広げていこう

---

平松 隆円

Hiramatsu Ryuen

NGUYEN TRAI UNIVERSITY・客員教授

国際日本文化研究センター・共同研究員

1980年、滋賀県生まれ。2008年、世界でも類をみない化粧研究で博士（教育学）の学位を取得。専門は、化粧心理学や化粧文化論など。

化粧というと、「化けて」「粧う」という言葉から、一般的には女性が男性に対して外見を偽る道具だと考えるひとは少なくありません。ですが、化粧は英語で「makeup」というように、本来は「補う」という意味の方が強いんです。それは、「足りない部分を繕う」という消極的なことではなく、外見に表れない内面をわかりやすく化粧で強調して外見で表現し、他者に自分を知ってもらおうという積極的なことです。

長年の友人でもない限り、私たちは他人のことをよく知っているということはないですよ。まして初めて会う人なら全く知らないわけです。ですが、そんな相手でも会った瞬間から人間関係（コミュニケーション）を築いていかないとダメだったりします。ですが、相手のことを全く知らないので、どう接していいかわかりません。相手が優しい人なのか、怖くて気をつけたいいけない人なのか……。相手のことをよく知らない場合、わたしたちは外見の情報を頼りに相手を判断し、コミュニケーションを決めていきます。「ひとを見た目で判断してはいけません」といわれるのは、それだけ私たちがひとを見た目で判断している証拠なんです。

化粧について学ぶ（研究する）のは、「どうすれば小顔になれるのか」「目を大きくみせるにはどうしたらいいか」というテクニックだけではないんです。「自分はこういう人間なんです」と表現したいときにはどんな化粧をすればいいのか、そしてどんな化粧をしているひとはどう思ってもらいたがっているかを誤らずに理解することにつながります。つまり、化粧を通じた印象管理・印象操作・対人コミュニケーションを学ぶことでもあるんです。

外からでは知る（見る）ことができない自分の性格や考えといった内面を、外見を通じて相手に伝えるにはどんな化粧をすればいいのか、そしてどういう化粧だったら何を意味しているのかがわかれば、へんな誤解をして人間関係をおかしくしちゃうことが減っていくでしょう。究極的には、綺麗になること以外にも効果がある化粧の可能性を上手く利用して、以心伝心の境地を化粧によって実現することだってできちゃうかも知れません。



呉氏 化粧の心理学の研究で最も興味深いのは、どのような部分でしょうか。

平松氏 初めに、質問紙調査など統計的な手法を使って心理学的に化粧について研究をはじめました。たとえば、男らしい（性役割として男性性が高い）男性と女らしい（性役割として女性性が高い）男性では、どちらがよく化粧をしているかなどです。この研究は大学院に入って一番最初におこなった20年ほど前（2003年）の話ですが、女らしい男性のほうが化粧をすると仮説を立てて研究しましたが、実際は男らしい男性のほうが化粧をしていることが分かりました。調査データを統計的に処理をし、心理学的な手法で結果はクリアにでたのですが、なぜその結果になったのかは統計処理だけでは分かりませんでした。「どうして、男らしい男性の方が化粧をよくするんですとしか？」と聞かれても、「理由は分からないけど、調査の結果層だということがわかったんです」としか答えられないんですよね。結局、女らしい男性より男らし

い男性の方が化粧をしている理由は、修士課程のあいだは分からずじまいだったんです。博士課程に入り、日本研究を国際的・学際的にこなう国の研究機関である国際日本文化研究センター（日文研）の井上章一先生の受け入れで研究員（特別共同利用機関研究員）となり、井上先生が主宰する「性欲の文化史」共同研究会で男性の化粧について発表することになりました。そこで、男性の化粧が注目され始めた2000年頃に発行されていた『Men's Egg』などの雑誌をネットオークションで購入し、すべて読みました。その雑誌のインタビュー記事に、女性と同じような化粧をする男性に「化粧をするのはなぜか」という問いがあり、「女の子と同じ格好をしたほうがもてるから」と書いてあったんです。ここでやっと、男性らしいモチベーション（つまりは「もてたい！」）が、男性に化粧をさせていることが分かり、男らしい男性ほど化粧をするという謎が解決しました。一般的に心理学の研究では結果はで



でも、どうしてその結果になったのかという理由が分かりにくいのですが、このように文献を調べてみると、その理由がわかることに気づいたんです。ようするに、心理と文化の両方から光を当てないと見えないこともあるということです。難しく言えば、心理という構造的な部分と文化という胴体的な部分の研究が同時に必要になってくるわけです。なので、ボクの研究分野が心理学なのかそれとも歴史学や文化史学なのかと問われると、なかなか悩みます。ちなみに、ドイツの歴史学者であるカール・ランプレヒトは、歴史学は社会心理学的学問であると言っているので、昔から心理学と歴史学や文化史学を隣接領域と考えるひとはいたのかもしれませんがね。

呉氏 お話を聞いていて、社会学のような領域にも踏み込んでいると思いました。

平松氏 そうですね。そもそも、ボクのもっている学位は教育学です。学問の世界では、化粧の研究は意味があるのかと言われることもあります。実際、ボクに化粧の研究なんかで教育学の学位をあげてもいいのかと、学位審査ではかなり大きな問題になって大変だったらしいです。製品開発なら化学研究として成立するのですが、ボクがおこなっている「なぜひとは化粧をするのか」とか「そもそも化粧とは何か」という化粧の研究は、どの領域なのか分かりにくいところもあります。そのため、科研費をどの分野で応募すればいいのか、ボク自身もいつも悩んでいます。

呉氏 ご自身の興味のあるところを、突き詰めていくところでしょうか。

平松氏 日本のアカデミズムでは、一つの学問分

野やテーマを伝統的に突き詰めていくことが多く、なかなかひとりで多様な研究ができません。そこで、京都大学人文科学研究所（人文研）の桑原武夫の流れを受けている日文研や国立民族学博物館（民博）では、共同研究会方式による研究を重視し、多様な学問分野の研究者が一つのテーマに対して、一緒に研究しています。化粧の研究にも、そんな視点が必要だと考えています。でも、化粧の研究がアカデミズムの仕事につながるのかというと難しく、若い研究者が手を出しにくい分野です。なので、共同研究が実施できるほどに研究者いないので、否応なしにもひとり学際研究になってしまったんです。また、化粧の定義も人により異なると思っています。ボクは、クレンジングやスキンケアといった肌の手入れ、アイメイクやリップメイクなど装飾的なメイクアップ、香水やデオドラントといったフレグランスが化粧と考えています。そうすると、眉毛を整えること、顔を洗うこと、歯を磨くことも化粧なんです。だとすると、古今東西、老若男女を問わず化粧をしているわけです。化粧は人が生きることと密接に関連しているにもかかわらず、研究の量は少なすぎるといってもいいかもしれませんね。

呉氏 つまり、化粧をすることは人から見られることにつながる、ということでしょうか。

平松氏 そうです。人から見られる印象管理だと思うんです。では、よく見せたい/見られたいとはどういうことなのか、センスがあるとはどういうことなのかについて考えてみましょう。ボクは、センスというのは、自分の理想を実現できる知識技

術を持っていて、さらに相手の立場でものを考えられるかどうかの、掛け算だと思っています。というのも、自分はセンスがいいと思う服も、恋人がそう思わなかったらセンスはないですし、その逆もあるでしょう。ですから、相手の立場で自分を客観的に見て、どのような化粧をして、どのような服を選べばよいかを考えられることが、センスがあるということだと思います。それは、人にどう見られたいか、その相手は同世代か年配の方なのかでも異なります。なので、相手にどのような印象を持ってもらいたいかで、その戦略としての服や化粧の仕方を考える必要があるということです。化粧をするということは、印象管理/印象操作なんですよ。

呉氏 化粧によって自分の印象をコントロールできるように、多くの人が行っている営みのようなものが最も興味深い部分なのでしょうか。

平松氏 そうですね。なぜ、人は化粧をするのかという研究も必要で、興味深いと思っています。ですが、そもそも化粧とは何かということが、学問として完結（体系化）されていないところにも研究をしていくなかで面白さと可能性を感じています。

呉氏 やはり興味の一番の根源は、多くの人化粧をしているけれど、そこを言語化して解き明かしている人がいないということでしょうか。

平松氏 そうです。多くの人興味を持っているのは、かわいく見える化粧や、若く見える化粧という先の話で、それも大切に面白いと思いますし、おそらく、そういうことが求められていると思います。です

が、研究というところで考えると、学問として完結（体系化）されていないわけで、そこを明らかにしていくことがまずは大事かなと。

呉氏 1つお聞きしたいのですが、究極の化粧と言えばアバターではないかと思っています。肉体そのものを持って生まれたものに化粧することに興味があるのか、あるいは、全く異なる、アバターのように遠いものに興味があるのかについて、お聞かせください。

平松氏 そこまで考えたことはありませんでした。コロナ禍で、化粧をしていた人がしなくなったという話もあれば、マスクで見えないけれども口紅を塗っている人もいます。そう考えると、化粧とは、相手に対しての部分（対他的）もあれば、自分が納得する、気持ちが上がるという部分（対自的）もあるので、アバターの話となると、また変わってくると思います。

呉氏 アバターは化粧の範疇にないということでしょうか。

平松氏 そうですね。フィルターぐらいであれば、化粧の範囲かもしれません。

呉氏 SNOWのようなものですね？

平松氏 そこまでだと、おそらくボクが考える化粧の範囲だと思います。

呉氏 やはり自分がベースにあり、自分をよりよく見せるためのものでないと範疇に入らないということでしょうか。

平松氏 そうですね。化粧も、ナチュラルにする自分の延長ですが、濃くなればなるほど、宝塚の舞台メイクのように違う自分（変身）になります。その究極なものが、能の仮面やマスクで、アバターはその話になるかなと。化粧について深く

考えるには、そこまで含めないとダメなのかもしれませんが、今はひとまず日常的な粧いとしての化粧について研究したいと考えています。

呉氏 自分とは全く別の物になってしまうということですね。どこからが境界線なのか、よく分かりました。私は今、男性のメイクに興味がありますが、最近、特に注目していらっしゃる化粧はあるのでしょうか。

平松氏 そもそも男性が化粧をし始めたのは、最近のことではないんです。化粧の範囲を広く捉えてもそうですし、装飾的な色のせるメイクでも、平安時代などでは化粧をしていたといえるでしょう。第二次世界大戦中に今から戦争だという陸軍の軍人さんが頬紅（チーク）を塗り忘れて上官から叱られたなんていう手記もあります。生活雑誌『暮らしの手帖』を創刊した花森安治は、化粧は花森が若い頃からあり、そこに男性や女性などの区別はなかったということを書き残しています。今の日本はマーケティング戦略として、化粧を男性用と女性用と区別している状況です。ボクはタイと日本との二拠点生活をしていますが、バンコクの化粧品コーナーでは、男性モデルが口紅を塗ったポップが、女性用の化粧品売り場でよくみられます。これは、男性用であるとか、男性も使用できるというニュアンスではなく、化粧をすることがタイではジェンダーフリーになっているのだと思います。

呉氏 それは、とても面白い動きですね。

平松氏 おそらく今後はそのようになっていくと思います。日本は、男性用と区別している時点で、遅れているのでしょうか。

呉氏 タイやベトナムなどのメイク事情を見るのは、日本のメイク事情だけでなく、国際的に日本のメイク状況を見ることができ、とても面白い研究ですね。

平松氏 そうですね。日本の平安時代の人（公家）は、白粉で顔が白かったわけですが、今の時代でも顔は白いほうが好まれています。色白は七難隠すって言ったりもしますし。じゃあ、なぜ肌は白いほうがいいのでしょうか。少し偏見的な言い方ですが、タイでは肌が日焼けしていると肉体労働者だというロークラスのイメージ、肌が白い人は、何も仕事をしていないかオフィスワークなので日焼けすることがないハイソなイメージが今でもあります。平安時代の公家も同様だったんです。もちろん白粉という舶来の化粧品が使えるという経済力を示しているのもあるでしょうけど。今の日本で、肌の色が白いことにハイソに見せたいからと考えているひとはいないでしょうが、肌色一つとってみても、心理や歴史など学際的に、そして日本だけのことなのかアジアで共通しているのかなど国際的に考えていかないと、分からないことはたくさんあるんじゃないでしょうか。ときどき、化粧品メーカーさんなどのタイで事業拡大するのにどうしたらいいかの相談にのるのですが、だいたいみなさん日本と同じ方法でマーケティングをして失敗しています。これも、学際的で国際的な視点を忘れてマーケティングしちゃっているせいなんですよ。

呉氏 過去も見られて、もしかしたら未来もまた見られるかもしれないという継続性がありますね。日本のトレンドはこうなっていくというような、マーケティングみ

たいな目線も含めて、面白いと思いました。

平松氏 その通りだと思います。こんなこというと怒られますが、心理学は今は見えても過去や未来は分かりません。そして歴史学は過去を見えています。やり方は異なりますが、見ているものは同じです。過去と今が分かれば、将来どうなるかが見えてきます。ですから、過去と現在の視点を持つことは大切だと思っています。

呉氏 タイなど東南アジアに比べると、日本のほうがそういう意味では遅れているということでしょうか。

平松氏 そうかもしれません。

呉氏 今回のテーマを聞いて思い付いたのですが、化粧で変身できるテーマパークがあれば、学術的には面白いのではないのでしょうか。どんな化粧をしてもよく、観覧者が、面白いメイクの人には投げ銭制でお金を払うような空間です。いきなり女装して渋谷に出掛けるのはハードルが高いですが、この特殊な、メイクを許される空間であれば面白いのではないかと思いました。学術的に、そのような場所があれば、こういうデータをとってみたいなどありますか？

平松氏 渋谷のハロウィンのようですね。濃くすればするほど自分から離れていき、違う自分になれるというのは、一言で言うと変身です。外見を変えることで、自分の内面を変える、それはそれで普段の自分とは離れていくと思います。まさにさきほどのアバターのはなしかなど。

呉氏 その離れ方と自分の行動の変化を調べたいと思われませんか？

平松氏 女性がスカートを履いているときとトラウザー（パンツ）を履いているときは、

やはり動きが違いますよね。それは単純に下着が見ないように気をつけているという話ではなく、服装といったよそおいのもつジェンダーなどの情報の影響を受け、そのため行動が変化しているからなんです。また、ランニングシャツとステテコ姿で家でゴロゴロして頼りなさそうなお父さんが、じつは警察官で制服に着替えたとたんにきびきび動いて頼りがいがでてくるとか。これもランニングシャツとステテコや警察官の制服がもつ情報を受けて行動に影響を与えています。ですから、外見を変えることで自分の行動や態度が変わるということは、実際にあるわけです。ボクたちは〇〇さんちの娘さんとか、〇〇大学の学生とか、〇〇君のガールフレンドとか、毎日の生活でいろいろな役を演じています。ファッションは、舞台の衣装と同じでその役を演じやすくさせる働きもあるんです。それは服だけではなく、化粧も同じような働きがあるんです。話がずれましたが、アイメイクやリップメイクでも、前髪でも、気に入ったときは気分がいいけれど、気に入らないと一日中不機嫌になったりしますよね。なので、外見を気にするということは、それだけ私たちが外見を大切にしている証拠なんです。変身ともいえるくらい違う自分になることは、自分のしらなかった可能性を知ることでもできるでしょうし、ストレス発散にもなるかもしれません。その意味では、とてもおもしろい研究テーマになると思います。

呉氏 心理的な効果は平常化してとりにくいため、そのような空間はとても面白いと思ったのですが。

男性A 面白いと思います。渋谷のハロウィンと

は異なり、池袋のハロウィンの本気でコスプレをする人が参加しています。普段できない格好で、様々な人と会話するというのは、とても楽しめました。テーマパークもまさにそういうことですよ。

呉氏 そうですね。非日常をつくってみると面白いのではないかと思いました。

平松氏 私たちは第一印象が大切だと言われると思います。1週間、1カ月、1年付き合い合っ、この人はこういう人だから、こういう付き合い方をしよう、仲良くしよう、やめておこう、と決められればいいのかもかもしれませんが、そういうわけにもいきません。ですから、私たちは相手がどのような人なのか、外見で判断し、その外見の読み取り方が正しければ、目の前にいる人と良好なコミュニケーションがとれます。しかし、それには往々にしてミスが出てきます。本当はおとなしいのに、外見で派手だと思われるというようなことです。また、その逆もあるでしょう。外見情報が文字化されていないため、ミスが起こっているのです。そこをなくせば、人間関係はもっとうまくいくと思っています。

呉氏 視覚障害者の友人は、爽やかに思われたいから今日はエメラルドグリーンを着てきたよ、と教えてくれます。彼は化粧などが分からないため、それを言語化し、こういう人に思われたいというのを明確にする、本人がそう思っているということの究極は、そういうことなのではないかと感じました。

平松氏 会話はそれですごく大切ですが、その前の視覚的な外見情報を、もう少し気を付けていくといいと思います。

呉氏 人は見た目が何割という話もあるので、

気を付けないといけないですね。

平松氏 はい。ボクは、見た目は100パーセントだと思っています。単純におしゃれをすることや、おしゃれなんてしないでいいのという話で終わらせてはいけないと思っています。「ひとは見た目判断してはいけません」と怒られるのは、それだけボクたちが人を見た目で判断している証拠でもあるので、みんなが上手に見た目を利用できるようになればいいですね

# 08

## 電波が見える空間づくり

---

**馬場 基彰** Bamba Motoaki

京都大学白眉センター・特定准教授

光と物質の相互作用で生じる未踏の現象の発見・解明に興味を持ち、理論物理学の手法で研究を進めています。光に関する研究は、産業や応用研究が盛んな分野ですが、現象の原理を追求する理論研究者は少ないのが現状です。しかし、新たな現象の発見は、物理学の新たな地平を切り拓く原動力になります。すぐに応用に結びつかないとしても、新しい現象を見つけ、解明することは、科学の裾野を広げ、イノベーションにつながると信じて、研究しています。2009年に博士号（理学）取得、パリで博士研究員として3年間過ごすなどした後、2019年から京都大学。3歳の娘にはホットケーキ作り、5ヶ月の息子には抱っこをせがまれます。

私は物理の研究をしています。特に光の物理が専門です。虹は綺麗に色が分かれています。プリズムを使っても光を様々な色に分けることができます。光というのは「波」であり、「波長」に応じて色が決まっています。虹やプリズムを通じて、様々な波長の光に分割されます。さて、光という波は「電磁波」と呼ばれる、電場と磁場が対となって振動しながら進んでいる波です。とある範囲の波長の電磁波が、様々な色に分類される光に対応します。が、電磁波の中には目には見えないものも存在しています。電波、赤外線、紫外線、エックス線、ガンマ線なども電磁波であり、波長に応じて名称が変わります。この本来は目には見えない電磁波が見えるようになったらどうでしょうか？赤外線カメラというのを聞いたことはあるでしょうか？暗がりでも人の動きを捉えることができます。それで電気ストーブを見てみましょう。目には赤くなっているだけに映りますが、赤外線カメラでは、強烈に光っている様子が見られるはずで

では、電波が見えるようになったらどうなるでしょうか？例えば、キーコムという企業が、電波を画像化する装置を開発しています。それで電子レンジを見てみましょう。スイッチをいれると、電子レンジから電波が漏れ出てくる様子が見られるはずで

実は、現代の私たちの生活の中では電波が飛び交っています。携帯電話、WiFi、テレビ、ラジオ、GPSなどで使われる電波です。幸か不幸か、私たちは電波をそのまま見ることはできないので、あまり気にせず普段の生活を過ごしています。電子機器から出ている電波が見えるようになったら、もしかしたら壁に綺麗な縞模様が浮かび上がるかもしれません。10 cmくらいの間隔の縞模様です。縞は動いたり、点滅しているかもしれません。これは干渉縞というもので、複数の電子機器から電波が出ると、多分できているんじゃないかと思います。でも、普段の生活では見えませんし、電子機器の専門家すら意識していないかもしれません。もし、VRのヘッドセットで電波の画像も映せるようにして、部屋の壁を見てみたら、その不思議な縞模様があることを実感できるかもしれません。複数人でヘッドセットを装着したら、その体験を共有できます。

世界中で常にできているのに、誰も気にとめない電波の縞模様。その存在を見られるようになったら、ロマンチックじゃないでしょうか？それとも不気味ですか？



矢代氏 光の物理が専門とのことですが、光の定義を教えてください。

馬場氏 電磁波というものがあります。電場と磁場の波です。人が見ることができる電磁波が光です。光が見えても電波は見えません。電磁波は音とは全く異なるものです。音は空気の振動です。空気がなくても電場と磁場は飛び交っています。宇宙空間でも光は飛び、音は飛びません。昔、エーテルというものがありました。光を伝播させている媒体ではないかといわれていましたが、実は電場と磁場が波になっているのです。

矢代氏 見えない粒子のようなものが飛んでいるのですか。

馬場氏 電磁波や光を波と考えることもできますし、その波が粒子の集合体であるとも考えられます。それは量子力学の核心で、あらゆるものは波と粒子のどちらでも捉えることができますが、だいたい波と考えていただければ結構です。

矢代氏 電磁波や電波が見えるようになったらど

うなるかというお話ですが、Wi-Fiや携帯電話が普及しているのは見えないからだと思いました。見えたり聞こえたりしたらとても煩わしいため、普及しないと思います。いろいろな波があるなかで、見えたら困るものはありますか。

馬場氏 見えたら良いものはたくさんあります。たとえばガンマ線が見えれば、これは放射線物質で危ないとわかります。原発の場合、見えないのが問題の一つです。見えたら困るものはわかりません。

矢代氏 基本的に、見えたほうが良いという考えですか。

馬場氏 基本的には見えないけれど、たとえば頭の中にスイッチがあって、見える、見えないが切り換えられればいいですね。

矢代氏 電波、電磁波の波が見える生きものはいますか。

馬場氏 ヘビは赤外線が見えるそうです。だから暗闇でも獲物を獲れるのです。

矢代氏 人間の場合は、特殊部隊が赤外線ゴーグルをつけるという方法がありますね。電



波、電磁波が見えるようになったら、今見えているもの、見せることができるもの、見せたいものがどう違うのかが気になりました。赤外線は見えるようにできるのですね。

馬場氏 現代の技術で、比較的簡単にできます。

矢代氏 VRセットで見せたいものの場合、どう  
いう技術的障壁がありますか。

馬場氏 電波のセンサーでしょうか。カメラの素子はたくさんあって、半導体としてきれいに並べられています。目に見える光のセンサーは、技術的にかなり発達しているのです。赤外線は、それに比べて波長が少し長いだけなので、延長線上で測れます。しかし、より波長の長いものは、別のセンサーを使わなくてはなりません。別の大きなセンサーが1画素だったら100個並べても10×10画素です。それを小型化しなくてはならないため、大きいと不便です。

矢代氏 波長が長いものほどセンサーが大きくなるのですか。

馬場氏 基本的にはそうです。それこそWi-FiやBluetoothの電波の波長は10センチぐらいなので、測るためには四角の一辺が10センチぐらいは必要でしょう。スマートフォンなども10センチぐらいの大きさが必要です。小さなイヤホンでももちろん電波を受信できますが、それでも1センチぐらいは必要です。

矢代氏 想定している用途はありますか。

馬場氏 この辺りから2.4ギガヘルツの電波が出ていても、私たちには見えません。その電波が飛び交って、もしかしたら壁に縞模様ができているでもいいのではないかと想像しました。電波は干渉します。複数の装置から出てきて干渉し合い、また、

壁にあたって跳ね返っても干渉します。目には見えませんが、実は世界中のあらゆる壁に2.4ギガヘルツの縞模様ができているかもしれない、ということを実感しました。そう思うと、面白いと思います。

矢代氏 その壁を、みんなはどうおもしろがればいいでしょうか。

馬場氏 まずはカメラで撮影して映像化しましょう。どのような模様かは撮ってみればわかります。適当な配置でも干渉は起こり得るので、あなたの部屋の壁でも起こっているかもしれない、と伝えられそうです。

宮野氏 Wi-Fiでも可視光でも、波が見えたら三次元的に見えるのではないのでしょうか。太陽が光っているように、同心円状に真ん中から泳いでくるように見えるのではないのでしょうか。

馬場氏 光は、光っているところだけが見えるのであって、四方八方に放射している様子は基本的には見えないはずで。あちらが光っているのはわかるけれど、明後日の方向に光が飛んでいるというのは、実はこちら側からは見えません。

矢代氏 Wi-Fiに議論を絞ると、便利で好きだと言う人がいる一方で、スマートフォンもパソコンも持っていない人にとっては、体に有害かもしれないから迷惑だと感じる人もいるでしょう。電波の公共性はかなり議論の余地があります。電波の波が見えるようになったら、大衆にも理解され、より正確に扱えるようになるのでしょうか。

馬場氏 必ずしも理解されなくても構わないと思います。ただ、この物質からはガンマ線が出ていますから避ければよいというよう

な、あらゆるものを怖がらなくてもいい  
ということはわかってもらいたいです。

矢代氏 音波系では、昔イスラエルで取材をして  
いたときに、窓の振動を読み取って、部  
屋のなかの会話を盗聴するスタートアッ  
プがありました。それは音がガラスを震  
わせるから感知できるという、音の特性  
が非常に現れた技術でした。同じように  
考えたときに、光にはどういう特性があ  
るでしょうか。

馬場氏 光の話ではありませんが、似たような話  
では、たとえば暗号通信があります。コ  
ンピューターで暗号化した情報をWi-Fi  
や光ファイバーで飛ばしていますので、  
一部だけ取っても内容はわかりません。  
しかし、コンピューターの電源の部分  
を盗聴すると、元の信号の情報がその電  
源のコンセントのところに入っているた  
め、そこから情報を読み取れるという研  
究をしている人もいます。物質は原子核  
と電子からできています。原子が並ん  
でいて、電子は粒としてぐるぐるまわ  
っていると考えられてきましたが、そう  
ではなく波として浮遊し、常に漂って  
いるのが量子力学の一つの考え方です。  
粒子としても捉えることができるし、  
波としても捉えることができます。

矢代氏 波の空間を3Dにするのは可能ですか。

馬場氏 すでにできています。フーリエ変換とい  
う単なる解析で、これは空間的にも展  
開することができます。物事を波で考  
えているのです。たとえば、ここに階  
段があったとしたら、上には周期的に  
階段が伸びていきます。それをフー  
リエ変換すると、なぜかこの辺りに  
階段の情報が凝縮されるようなこと  
が起こるのです。

矢代氏 それは、iPhoneのWiDARのような3Dス

キャナーアプリで形を取るのと同じ  
でしょうか。

馬場氏 その結果をフーリエ変換すれば、もち  
ろん3次元のデータになります。

呉氏 馬場さんのような研究者とコラボ  
して、うまく魅力を引き出してもら  
えばいいと思うのですが、光を使  
ったアートを作るとか、コラボし  
てみたいアーティストはいますか。

馬場氏 私は一人でやっていくタイプ  
なので、一人で完結してしまいがち  
なのですが、コラボはしたいです  
ね。

矢代氏 レーザーで果物の甘さを測  
る研究がありますが、どうですか。

馬場氏 その研究については、それを  
専門にしている人がいるので私の  
出番ではありません。私は今、50  
年後くらいに役に立つような研究  
を地道にしています。たとえば、  
冷やすことで自然と磁場が発生す  
ような現象を探しています。

矢代氏 見付きりそうですか。

馬場氏 50年前に予言されている  
現象で、まだ見つかっていません。

矢代氏 それはどういう現象で、  
なぜそれが要求されているので  
しょうか。

馬場氏 要求は誰もしていません。  
予測だけです。この物理法則で、  
このモデルに従うとこういうこと  
が起こるかもしれないといたった  
人がいたのです。起こるわけは  
ないとみんなに叩かれながら50  
年間生き続けている予言で、そ  
れはどうしたらできるのかとい  
う研究をしています。最近、似  
たような現象が他の物質で起  
こっているのを発見したのです  
が、本来予言されている現象は  
なかなか見つからないのです。

矢代氏 冷やすと電波、電磁波から  
磁力が発生す

るということは、元々磁力がないものを冷やすことで急に磁力を発生させられるから便利ということですか。

馬場氏 何かできるかもしれないということですよ。単にその物質の熱射だけでレーザー光線が出てきてもいいのではないかということはお考えますが、空間づくりということはピンと来ませんでした。そもそも磁石も、熱い状態のときは磁石ではありません。冷やせば磁石になるのです。光に限らず、物質は磁石ではないものが磁石になったりするのです。光の研究者は、あまり熱のことを考えません。私が研究している現象はなぜか熱とリンクしていて、熱の物理と光の物理がつながるというのがおもしろいところです。だから何かに要求されたわけではないのです。

宮野氏 エネルギーとは何なのでしょう。

馬場氏 熱のエネルギーで水蒸気を作り、タービンを回して機械のエネルギーにし、電気のエネルギーにして動いています。これがエネルギー変換です。つまり、別の回路が生まれる可能性があるということです。新しいエネルギーの作り方が確立されれば、何がしか使えたりするでしょう。とても小さい箱で電気を作ることだってできるかもしれませんし、冷却するときには電気が生まれることもあるかもしれません。

矢代氏 冬に作った電気を夏に使うなどもできるかもしれないということですか。

馬場氏 それはもう少し先の話です。まずは現象を見つけなければなりません。見つけたら、では温度をなんとかがんばって上げよう、となります。超電導が見つかったら、室温まで上げていきたいと思いますという

過程が必要です。ゆっくと50年ぐらい時間を掛けてやっていくものです。50年後であれば、科学技術も進歩や変化があるでしょうから、もう少しスマートになっているかもしれませんね。

矢代氏 ありがとうございます。

# 09

## Institute of Academic Studies : 無用の用を追 求する 「虚学塾」

山中 千尋 Yamanaka Chihiro

横浜国立大学・講師

研究領域は、科学の社会史、という文理融合。最近の関心は、日本近代における学術研究体制の形成、とくに科学とカネについて。いま現在の研究環境はどのようにつくられたのか。なぜ研究をするのか。学術研究を奨励するとは、何をどうすることなのか。史実を明らかにするだけでなく、現代への示唆を得ようとしている。2023年2月、面白い学術書を単著で刊行予定。

博士（学術）。2007年神戸大学大学院修了後、日本学術振興会、慶應義塾大学、一橋大学を経て、2019年から横浜国立大学。現在は、産学連携やダイバーシティ推進を担当。「変」であることを誇りに思う自由人。

科学史研究の知見に基づき、もっとも人類にとって重要であるにもかかわらず報われていない元祖学問の界隈にいる100人を救い、22世紀の学術研究を創る研究所兼学問所兼学術系財団です。つまり、学校と研究所と財団の融合型組織iASです。創立は2026年、解散は2125年。100年の期間限定です。主な活動は、研究および学術交流です。

対象は、歴史・数学・音楽・哲学・科学理論など「虚学」を研究する人。ただし学説史限定の研究は対象外とさせていただきます（それはただのレビューだと思っただけです）。運営本部は山奥の古民家または関西大都市の某団地に作り、バーチャルでの「溜まり場」を常設します。必要に応じて集会室を借りたり、河原や空き家など指定の場所に集ったりする対面キャラバンを展開します（大学の原型）。そのため構成員の住処や活動拠点は指定しません。募集人員は若干名、各年最大5枠です。在籍期間は最大10年間、その後は次のステージに旅立っていただきます。応募資格は、学術研究という存在の価値について語れる方であればよく、国籍・性別・年齢など属性は問いません。公用語は日本語およびグローバル英語です。身分は「研究員

(Fellow)」となり、全員フラットな組織です。義務は、(1)すぐに役に立たないことを追求し、何らかの方法で表現する、(2)成果発表や情報発信の際、本組織の構成員であることを明記する、(3)自己と他者を尊重する、の3つです。研究費は年10万円までを支給します。在籍費用はかかりません。滞在費は、自分で調達してもらいます。プロアマという概念を捨て去るためです。他方、評価や賞罰はとくにありません。そういうものはめざしません。

さて創立計画ですが、資金は1億円程度を想定します。世界の富豪100人から100万円ずつ投資してもらいます。運用は、運営者が資金調達および資産運用を行います。ですが、お金を稼ぐための装置とはしません。年間予算は、10万円×5人+運営費50万円=100万円です。運営は、

Founder&Directorの私（2083年ぐらいまで存命）と、互いに違う上下の世代あと3人で構成します。

本組織の社会的意義は、役に立たないとされるものを救うとともに、役に立たないものの重要性を啓蒙することにあります。短期的には、所属や居場所のない研究者に看板を与えることができます。ゼロから1は、創り出す人としては当たり前なので、マイナスから3ぐらいを生み出したい。ウィーン学団のような学術的にインパクトある徒党が組めるよう仕掛けていきます。つまり文化や不滅の価値を創っていきたいのです。



矢代氏 櫻井錠二の日本学術振興会のような、日本の科学者が立ち上げた研究財団について研究されているとお伺いしたのですが、その経緯をお聞かせいただけますか？

山中氏 まず、修士のときに当時の研究が行き詰まり、そのとき指導教員に、一度就職して世界を見てこいと言われました。気が進まなかったのですが、気分転換に、日本学術振興会という、研究者のなかではちょっと有名な機関を受けたところ、内定をもらったため、経験として働き始めました。すると、研究者を取り巻く世界の裏側というか、不条理がよく見えてきて、誰がこんな機関を作ったんだ？と本気で怒りが湧いたので、調べ始めました。そこから、櫻井錠二という人にたどりつき、なぜなのか？何を考えていたのか？と調べていくうちに、止まらなくなりました。

矢代氏 櫻井錠二は何を考えていましたか？

山中氏 一言で言うと、研究にお金をつけるということ、それだけです。もともと日本で

は、研究するというもののコンセプト自体がよくわかっておらず、大正時代ぐらいまでは、研究に対してお金がきちんと措置されていませんでした。そのため、西洋帰りの人たちが困り、お金をきちんとつけてください、というようなキャンペーンを起こしました。その中心にいたのが櫻井錠二だった、というのが私の見解です。

矢代氏 それは、始まりの段階から間違っていたのですか？それとも、最初はうまくいっていたけど、今はそうではないということですか？

山中氏 歴史的にみると、研究というのは西洋のカルチャーであり、日本にはないものでした。それを、基礎研究などをやって強い国家を作らなければ、と取り入れて動き出したのが、いわゆる第1世代の人たちです。その必要性や意義を訴えながら、何もないところからカルチャーを作り出そうとしたのです。しかし、ハッピーストーリーにはならず、たとえば第2次世界大戦で象徴されるように、研究

動員されて、巨額の資金が投入され、お金がガソリンとなって、エンジンが回り出すというような現象へとつながっていききました。

矢代氏 今回は、そういうものと対極にあるものをアイデアとして出しているのですか？

山中氏 対極ではありません。櫻井さんは、純粋に研究がしたかったけれど、できなかった人です。国家の基盤を作るために、制度や学校をつくったり、人を育てたりしなければならず、時間もエネルギーも足りなかった。だから、本当は何を成し遂げたかったんだろうと考えたとき、研究を通して学問の面白さや自然の真理に近づくことに感動し、それをもっとやりたかったんだろうなと思いました。そういう純粋な気持ち、イニシアチブを保護できるような場や機会があれば、それを世界に対して、存在として認めてあげられると思ったのです。

矢代氏 つまり、研究のスタートの純粋さを守り続けるという意味では、学術振興会の持っていた、最初の目的と近いということですか？

山中氏 そうですね。学術振興会は、工学など、目立つところで捉えられがちですが、最初は基礎研究を大事にしたいというところでもあり、人文、社会などの研究も、きちんと育てていこうという特徴を持った財団兼インスティテュートでした。そこをもう少しふるいにかけて残したのが、現在の姿です。

矢代氏 虚学というワーディングが、かなり強いと思ったのですが、この構想のなかで、実学・虚学の判断基準は、どのように想定されていますか？

山中氏 実は、サブタイトルに虚学とつけたの

は、あえてです。ジャーナリスティックに言わないと、食いついてもらえないかなと思いました。虚学とは、いわゆる〈役に立たない〉学問をやっている人たちが謙虚に言ったニュアンスの言葉だと思います。ただ、虚学と言うことによって、自分たちの、社会における扱われ方をうまく表現しているなとも思います。また、今、再評価され始めているリベラルアーツの領域にいる人たちに、自信を持って安心して研究、学問してもらいたいですし、自分もそうしたいという思いもあります。

矢代氏 虚学というのは、外から判断されるものではなく、自分から、自分のやっている学問は虚学ですと言う人たちを対象にする組織ということですか？

山中氏 それでもいいと思いますが、私がもし運営者だったら、一応の目安として、たとえば哲学、数学、音楽のようにラベル付けされる領域、役に立たないと言われて人たちを受け入れたいと思っています。なので、明確な判断基準はありませんが、自分が虚学をやっていると自信を持って言っている方は受け入れられると思います。

矢代氏 たとえば、山中さんご自身の研究は虚学ですか？

山中氏 分かりません。自分としてもアイデンティティの置きどころが分からないのです。アイデンティティを考えること自体に、意味があるかどうか分かりませんが、今のところ、歴史をやっているという面では、虚学に近いのだらうと思います。

矢代氏 歴史をやっているから虚学に近いというのは、どういう感覚ですか？

山中氏 もともと歴史というのは、もう存在しない、過去の終わってしまったことを扱うわけで、それをやって何になるの？というのが、よくある批判のスタンスです。ただ歴史家がやっていることは、人類が積み重ねてきた何かを再発見したいとか、そこから何か学びたいというような部分もありますので、実学に近いところもあり、どちらかだと言いきれません。ただ過去のものをここに持ってきたからといって、すぐに実用できるわけではありませんから、実学か虚学かの判断は難しいですね。

矢代氏 実学か虚学かは、時間軸によって変わる気がします。たとえば音楽も、宮廷音楽があった時代には、非常に実用的なものだったと思うので、虚学と言ってもいいのか。また、このアイデアで僕が一番面白いと思ったのは、100年限定ということです。時が流れると、虚実はどうなるのか。どういうふうに捉えていくと、こういうものが盛り上がっていくのかなみたいなの。

山中氏 やはり時間軸で捉えると、音楽というもののあり方も、その瞬間によって違うわけですね。なので、私が今考えているのは、たとえば2026年時点で虚学だと言われているもの、音楽、哲学、歴史、数学などについて、サークル的に囲み込みたい。ゆるやかに、ネットワーク的に、「いいよ」というようにしてあげたいということです。100年限定というのは、期間限定にしないとやる気がしないからです。サステナブルとか言われても、もう疲れているからできないわ、自分の寿命もあるし、などと考えたとき、とりあえず100年やってみようというの

が、1つの指標、道標になるかなと思っています。私が歴史家の端くれとして思うのは、やはり100年のスパンで見れば、大きな成果やいろいろな失敗も見えてくるだろうということです。だから100年やってみて、その成否を判断するというのをやってみたいです。これは私のアンチテーゼですが、最近、大学では中期計画を作らなければいけませんが、6年は中途半端だなと思います。6年で何ができるのだろうか？とも思うし、6年後の具現性を考えると、結構、世の中は変わる。だったら、もうちょっと大幅に時間をとって、とりあえず100年ぐらいやってみたら？というのが、期間限定の含意です。

矢代氏 応募資格にある、『学術研究という存在の価値について語れる方』とは、どういうことでしょうか。虚学なら価値は語れない？と思ったのですが。

山中氏 それは主観でよくて、自分や周りの人がやっている学術研究という営みには、どういう価値、意義があるかというようなこと。社会に対して、その存在そのものについて、あなたはどのように思っていますか？というようなことを、自分の言葉で説明できる方。誰でも彼でもいいわけではなく、自分の学問について一言ある人に来てほしいです。

矢代氏 自分の研究についての存在価値を語れる人ではなく、学術研究一般について語れる人、ということですね？

山中氏 研究ってなんだと思いますか？と言われて、ぱつと答えるか、いくつか選択肢を出してくれるような人がいいです。自分なりに咀嚼して、言葉にできればいい。役に立つとか立たないではなく、何のた



めに、そんなに一生懸命やっているの？  
どう思っているんですか？好きなんです  
か？何がしたいんですか？と、想いを聞  
きたいですね。

矢代氏 100年や、在籍10年の話も、長めのスパンで、ある種、研究者を育てる、研究者が育つ土壌を作るといことなのかなと思  
いました。たとえば、学問の世界が課題解決的なものにドリブンされているなかで、そうじゃないことを追求している人  
たちを奇人とすると、その奇人が、奇人であり続けることは、結構、難しいのではないかと思います。普通に課題解決  
をやったほうが儲かるだろうか、就職したほうがいいのかなど、心が折れそうになりますよね。そのようなことに耐え  
続けることが、10年、100年のスパンでいうと大事なのかなという気がします。そのためには、組織や空間など、ど  
のような要素があるといいでしょう？

山中氏 1つには、やはり自信というか、〈あなたはそれでいい〉という精神的な承認。また、称号などの社会的な認  
知、アクセプトだと思っています。だから、フェローという身分を与えて「IASのフェローです」というかたちで自信  
を持ってやってほしいなと思っています。あとは、今、流行っている評価とか、なんとか賞とかはやらす、あなたがそれ  
を一生懸命やってくれるなら、それでいいという場づくり、空間づくりです。それはバーチャルでもできますが、い  
ずれにせよそういうシステムを用意してあげたいし、いろいろ気にせずできるようにしたいです。

矢代氏 今、一般的な研究者の人たちは、どこで自信を得ているのでしょうか？

山中氏 1つには、大学院に行って博士をとる。もう1つは、ちょっと段階が進んで、アカデミアでの専任のポストを得るなど  
です。ただ、それって面白くないですよ。学問は、そういうところだけで発達してきたわけではないので。

矢代氏 ウィーン学団について少し書かれていますが、そこから何か学ぶところがありますか？

山中氏 ちょうど100年ぐらい前の話で、ロイヤルソサエティのような古い話でもなく、ユダヤ系の人たちが集ま  
ってきて、自分たちは弱いけれど、思うところを一緒に作っていかうみたいな雰囲気がいいなあと思  
いました。そこだけです。そのコンテキスト、エレメントがいいなと思ったのです。

矢代氏 そのコンテキストというのは、ユダヤ的な要素ですか？

山中氏 それもあると思いますが、学問を少数精鋭で作っていくところです。

宮野氏 研究者だったら誰も一度は、こういう組織を夢見るんじゃないかなと思います。特に、課題解決的な  
というか、近視眼的にお金が集まる場所というのは集中している傾向があります。やはり今は、自分に自信  
を持ってなくて、どんどん委縮していると思います。一番コアな部分は、きみはそれでいいよ、面白いね  
と言ってもらえることですよね。

矢代氏 でも、それを言った人は、どう責任を取るのですか？言われた人の人生は幸せになるのか、  
ならないのか、大きく変わるわけですよね。

山中氏 責任問題ではありません。幸せと思うかどうかは本人次第ですが、何それ？と言われるより、  
それ面白いねと言ってもら

えるほうがうれしい。ただそれだけです。どういう言葉を発せられるかによって、研究者の次のステップは変わります。言葉のプレゼントと言えるでしょう。先ほどの奇人でいえば、奇人が奇人でいられなくなるパターンのなかには、実は奇人じゃなかった、道が違っただけということもあります。その人たちは、幸せに生きられる道を探せばいいだけです。そうではなく、本当の奇人、もう收拾がつかなくなって落ちこぼれみたいになった人たちを掬い上げたいのです。

矢代氏 僕は文学部出身ですが、別に、大学が課題解決に縛られているという感覚はありませんでした。僕がついていた先生は、自分が面白いと思ったものを翻訳して、出版する活動をしており、別に何の課題も解決していなかったけれど、出版という行為を通じて社会と関わっていました。科学系や学問論系の方は、そういうところでつらい思いをしているのかということが、改めて伝わってきました。少なくとも僕としては文学は虚学ではありませんが、実は、文学も陰で、なんであいつら国の金でこんなことをやってるんだ？と言われていたのでしょうか？そのなかで、心の強い人だけが、翻訳して楽しんでいくということでしょうか？

山中氏 たぶん聞こえていないのでしょうかね。うらやましいです。

矢代氏 聞こえないし、文学は出版と密接に繋がっているから、その経路で、自信やアクセプトを持っているということですよ。しかし、こういう組織が、出版みたいなことをしたりすると、確かにその社会は閉じている組織のように見えます。そこが社会とどう繋がるのか。カルト化

していきそうな雰囲気もあります。

山中氏 あえて、ほぼクロズドな組織にしています。牙城とまではいきませんが、とりあえず100年間は、開発だとか、役に立つだとか、課題解決みたいなところから守ってあげたいなと思っています。

矢代氏 シェルター的なことですね。

宮野氏 本来は、国立大学がそういう役割を持っていました。いろいろな、草木の種を保管しておく場所のように。これは残しておこうかみたいなことは、結構あります。

山中氏 でも、その機能がなくなってきて、むしろ積極的にそういうことを削減していく流れがあります。

宮野氏 3年前に、人文系はいらないというような論が出て、盛り上がったことがありました。半年前には、経産省の未来教育会議で、OECDの基準に戻しましょうとなり、理系5割という話も出ました。反対運動は起きていませんが、それは暗に、文系を削減しようと言われているんですね。

山中氏 国家は国力を目指すので、そうするとやはり、文系は置いておいて科学技術、となってしまう。帝国大学も、もとは理工系の総合大学でしたから、それを考えると国立大学はしょうがないのかなとも思いますが、それにしても偏りすぎだろうと。

矢代氏 だから、もう少しアカデミックライティングとか、文系の実学みたいなものをうまく利用しながら闘っていく方向や、多様性は大事だねという議論を進めていく必要もありますね。東建さんなどがこういう奇人に発注するような動きをするのも、新しい取り組みに繋がる芽の1つに

なりそうです。国経由ではなく、企業単位で取り組んでいくことは、ありだと思います。ただ、企業や法人は利益を求める組織ですから、課題解決と結びつかないと意味がないという話になり、取り扱い注意かなという気がします。ありがとうございました。

# 10

## 恒常性システムとしての 社会の醸成、葛藤と快適

駒井 章治 Komai Shoji

東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科・教授

東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授。奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 博士後期課程 修了。博士(バイオサイエンス)。神戸大学医学部 第一生理学教室、独マックス・プランク医科学研究所での博士研究員を経て、奈良先端科学技術大学院大学で助教、准教授として教鞭を執った。ヒトの行動や脳活動に興味をもって研究、教育を行っている。日本学術会議若手アカデミー委員会 委員長、Global Young Academy Executive Committeeメンバー、JSTサイエンスアゴラ推進委員会 委員長などを歴任。JST CRDS特任フェロー、国際高等研究所 客員研究員などを務める。

心理学的視点で空間を考える時、あれもこれも気になることが思い浮かびます。広い場所、狭い場所？明るさは？人がいるのかどうか。その人は自分の知り合いか、知らない人か...きっと一番自分が落ち着くのは、こういったことをあれこれ考えなくて済む空間ではないでしょうか。一番満たされているときは満たされていることに関しては考えませんよね？お腹が満たされていて、健康に不安もなく、街は安全で襲撃に遭うこともない。ちょうどハードな交渉を終えたばかりで、プレッシャーから解放されたところ。自分もきっと秋の晴れた日に海の見える小高い別荘（想像上の場所ですよ）で、昼下がりのひと時、真っ青な空を仰ぎながらビールを飲んでいる...そんなところをとっても満たされていて、落ち着いた空間だと感じるように思います。日常社会もこういった空間であるといいですよ。生き物としてのヒトは恒常性を求めています。これを達成するための構造としての社会。しかしこの中で他者との葛藤の中で私たちは社会をどのように快適空間に落とし込むことができるのでしょうか。社会では他者が存在し、関連しながら上手く生活していくことで一人では成しえないゴールに向かって皆で一歩ずつ進んで行けるのだと思います。他者と比較してしまうことはある程度は仕方のないことかもしれませんが、少し長期的な視点をもって、自らの目的や方向性にしがたって少しずつ進んでいく。自然の中にも多く見られる「共生」の気持ちを持ち、お互いがお互いを許容し認め合う。一方で自らを他者のために高める感覚を持つことができれば満足感も得られて、向上し、社会も恒常的なシステムになり得るのではないのでしょうか。



矢代氏 今回のテーマは、心理学的な側面と、生き物としてどうあるかということが合わさったものではないかと思いながら拝見していました。

駒井氏 人について考えるとき、すぐに高等動物としてのイメージを持ってしまいますが、基本は動物です。まず動物であるということ考えたうえで、なぜ集団で生活するようになったのかを意識し、高等動物であることを考え、生活するのがいいのではないかと考えています。

矢代氏 恒常性というキーワードについて教えてください。それは、変わりたくないという話になるのでしょうか。

駒井氏 変わりたくないということではありません。生命とは、様々なたんぱく質の相互作用が安定的に起こってきたものだと考えています。生命活動とは、基本的にそれを維持することにエネルギーを使っており、単細胞から多細胞へと臓器ができることも、遺伝子をいかにキープしていくか、たんぱく質をいかに効率的に動かしていくかということだと考えていま

す。そして、人間が持っている社会というのも、そこを目指すのが、生命として正しいのではないかと考えています。そのことから、個人の欲求も大切ですが、他者との折り合いをつけることも大切ではないかという論旨です。

矢代氏 その恒常性というのは、個体として、1人の人間が恒常的に居続けることを求めているのではなく、集団としての人が恒常的に存在し続けることを求めているということでしょうか。

駒井氏 そうです。個体として、自分の生命をどうするかということに重きが置かれるのだと思いますが、それを獲得するために社会を持ったのだとすると、社会を生命と見る人もいますが、社会を維持すること自体も、内部分裂をこなさないという意味で、巡り巡って個体の維持につながるのではないかと思います。

矢代氏 最初に拝読したとき、恒常性と共生が両立しうるのかと思いました。恒常性と共生のキーワードで言うと、恒常性を求めると共生することになるという、そのよ

うなつながりのことを言うのでしょうか。

駒井氏 そうだと考えています。

矢代氏 自分が落ち着く場所というのはイメージしやすいですが、たとえばお互いを許容し認め合うことができる空間というと、そのような経験があまりないため想像しにくいと感じました。お互いを許容し認め合うことができる空間には、どのようなものがあるのでしょうか。

駒井氏 おそらく日常的に他者から享受していることはあまり意識することがないと思うのですが、今回のインタビューのようにZoomを使用しコミュニケーションできているのも、ZoomやPCを作製してくれた人がいることで成り立っており、自分1人では成り立ちません。もちろんインタビューしてくれる人がいて、聞いてくれる人がいることで成り立っています。それを日常的に強く意識するのは面倒くささを感じるとは思いますが、この部分を少しずつ意識するというのが大切だと思っています。

矢代氏 たとえば、野菜の袋に生産者が書いてあるというようなことでしょうか。

駒井氏 それもありますが、書かれていなくても、もちろん向こう側には必ず人がいて、生産者のみならずロジスティクス担当の人もいて、八百屋さんもいます。人として生きるということが、どれほどの人の恩恵を受けているのかということを考えなくてはなりません。そういうことを、幼いころから教育していくこと、今までできていなかった知識の積み重ねを、次世代、次々世代につないでいくことが必要ではないかと思っています。

矢代氏 自分が何に依存しているから今生きてい

られるのか、ということ意識することは大切だと思います。しかし昨今の世の中が、そこを意識させないような方向に向かっていると感じます。今コンピュータービジョンや、人間が介在していないように見える動きが増えている印象があるのですが、そのことについては、どのようにお考えでしょうか。

駒井氏 昨今、とても多くのテクノロジーがあり、様々なものが紹介され、多くの情報が入ってきます。見て、体験して、面白い、楽しいと思うアイコンニックなイメージというのは、持ち帰っても残ると思いますが、あとから思い出して、あれはどういうことだったのかと、しっかり考えることは、あまりできていないのではないかと思います。情報が過剰すぎて、できるだけ流してしまうということに慣れ過ぎているため、考えることができていないのだと思います。ですが、ゆっくり考える時間は、おそらくなくなっていき、やりたくてもできなくなってくるでしょう。そこで、どのようにすればよいのかと言うと、多くの人たちと、様々な話を、常からしていくのです。人のアンテナを使ってでも様々な情報を収集し、それらに影響を受けながら、少しずつでも考えるということを実践的にやっていかなければ、ただ情報を浪費し、流されてしまうのではないのでしょうか。

矢代氏 今回のテーマは、恒常性をどう高めるかを空間と紐付けて考えたときに、リアルで存在することとバーチャルで存在することの違いは理解している状態で、コントロールできる環境のほうが恒常性を高めやすいのか、それとも閉鎖されている

環境だからこそ、よりレジリエントではなくなっていくのかということだと思います。デジタル空間と、この恒常性システムとの関係はどのように捉えられているのでしょうか。

駒井氏 恒常性は生命としてのエネルギーの問題だと思っています。生き物は、食べたり、エネルギーをとらないと死んでしまいます。そのエネルギーをどのように恒常的に吸収できるのかが命題の1つだと思っています。そのドライブがないと、やってみよう、続けてみようと思わないと考えています。バーチャル空間だけで閉じてしまうと、誰がそのドライブを誘導するのかという話になり、お腹が空いていないとやろうと思わない、ということになります。

矢代氏 お金がなくなると働かない、というようなことでしょうか。

駒井氏 そうですね。生物学的に言うと、エネルギーが欲しいからみんなと仲良くしよう、何か作ろうという話になると思っています。ロボットや人工知能が私たちに近付ききれていないのは、自らお腹が空かないからではないかと感じています。

宮野氏 お腹が空いていないと気付いていないかもしれないですね。多くの情報があるために、本当に大切なことに気付かないこともあるのではないのでしょうか。

駒井氏 たとえば、ファスティングをすると、食べ物や飲み物のありがたみも感じ、いかに自分たちが食べ物に頼っていたのかに気付くと思います。一般的には時間が来たからと食事をし、必要がなくてもカロリーをとり、たとえ太ったとしても、恒常的に栄養が摂れているとも考えられます。そして、次の食べ物はどのように手

に入ればよいかなど、考える必要もない恵まれた状況に多くの人がいると思います。ですが、それは本当に大切なのかどうかを、ファスティングしている方の話を聞く、自分でやってみるなどしながら、気付いていくことが必要なのではないのでしょうか。自分のことのみならず、人との関係性のなかで成立していることなので、より高次なところで、集団としての維持方法を考え、情報のバトンパスを、世代を超えてつなげていけるといいのではないかと思います。

矢代氏 情報のバトンパスのイメージが湧かないのですが、どのようなことか教えてください。

駒井氏 たとえば子どもの育て方ですと、核家族化したこともあり、伝わっていかない部分も多くありますが、子育ての情報は、家族以外の人から伝えられることもあると思います。ですが、情報としてあるのではなく、ナラティブに伝えられるようにしておかないと同じことを繰り返してしまいます。ですから、歴史の大切さなどは、やはり学ぶ必要があると思っています。

矢代氏 歴史の軸と同時代のコミュニティの軸で、どのように情報の共有をしていくかということでしょうか。

駒井氏 そうです。基本的には、自分と他者がいて、両方が存在しようとするとは必ずコンペディティブになるため、そのコンペティションをいかに緩和していくか、どのようにすれば様々なものを共有できるかを意識することに尽きると思います。そのような意味で、恒常性という言葉を使いました。

矢代氏 最近、法人という概念に興味を持ってい



て、予算がついて、それをどうあげていくかを考えて駆動していくと、ほかを殺して戦わざるを得ないという結論が出てくることがあります。そうすると、何に自分が依存しているのかが希薄化してしまうと思いました。掃除している人を想像するよりも、掃除をいかに効率化し、安く済ませるかに関心がいつてしまうというようなことです。ですがファスティングのお話は面白く、一度絶つとありがたさが分かり、さらに心構え一つでできるというところがいいですね。

駒井氏 私は外化することは大切だと思っていて、人は多くのものを脳から外に出すことで発展してきたと考えています。記憶容量や意思決定も人工知能に任せたりしますが、目標なども外に出すほうがいいのではないかと考えています。なぜかという、できたかどうかの判断が外でされるので、自分で目標設定を簡単に変えられなくなるからです。その最たるものがマリア・テレジアなど、聖人的な人たちだと思いますが、なぜそこまでできるのかと考えると、ゴールが外にあるため自分で妥協できず、外からの評価で強化されたためではないかと思っています。外にゴールを設定することが、感謝につながるのではないのでしょうか。

矢代氏 外化はとてもよいキーワードですね。

# 11

## メタバース異文化交流空間 (Metaverse Cross- Cultural Space: MVCS) の構築

岡田 昭人 Okada Akito

東京外国語大学大学院総合国際学研究院・教授

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。オックスフォード大学教育学大学院博士課程修了(DPhil)。当大学院にて日本人で初の教育学博士号を取得。東京外国語大学で20年以上、日本人と留学生に異文化理解を教えている。大勢の学生が在籍するゼミでは「学びと遊びは表裏一体」を理念に学生主体のアクティブな授業実践で、学生たちのコミュニケーション力を高め続けている。留学生教育学会副会長、学習支援NPO法人理事。メディアに出演・協力多数。趣味はピアノ弾き語りや各種スポーツなど多芸多才エンターテイナー。著書に『世界を変える思考力を養うオックスフォードの教え方』（朝日新聞出版）などがある

グローバル化が進行する現代社会では、様々な国や地域にルーツを持つ人々と出会い、コミュニケーションする機会が増えています。自分とは異なる文化や習慣に対して寛容さや理解を示すことが大切であって異文化理解教育の重要性が年々増えています。

私が専門とする異文化理解教育は互いの文化や考え方を知ること、違いを理解し相手を尊重することで相互理解の態度を養う学問です。ですが、多様な背景を持つ人々との交流する上で悩みの種になるのが言語・宗教・生活習慣などの違いによる誤解やトラブルです。これは国の違いだけではなく年齢や性別、職業、生まれ育った環境など種々の交流「空間」に生じます。そこでこうした状況を克服するために必要とされる異文化理解の一つのスキルが「コミュニケーション力」です。

以上のように異文化理解やコミュニケーションの重要性が高まっているのですが、異文化理解の方法や交流機会が未だ十分ではありません。また時間や空間距離的な制約で交流機会は限られます。よって本プロジェクトでは「メタバース」を用いることで新しい異文化交流空間の構築を目指します。メタバースとは「仮想空間」のことです。インターネット上に構築される3次元の世界で、参加者はアバターと呼ばれる自分の分身になって24時間いつでもどこでも「メタバース異文化交流空間(MVCS) に入ることが可能です。

MVCSではマンツーマンでのランゲージエクステンションをはじめ、国際交流・理解といった、これまで対面や海外留学しないと得られなかった学びをオンラインライブで体験できます。また参加者同士が協力して個々の異文化体験を「ロールプレー（寸劇）」で披露する実践を想定しています。メタバースの専門家と協働することでより性能の高いMVCSが実現できるでしょう。MVCSは異文化を理解したいと思う全ての人々に開かれた空間です。よって国・性別・職業・年齢など、可能な限りすべての異文化間を超越しますので、基本的に参加者は中性的アバター（例：動物）を用いる、ファーストネームで呼び合う、ニュートラルな言葉で会話すること等の特徴とします。参加者全員が平等な立場であって一切の差別は認められません。

日本の社会で広く異文化理解教育を行うためには、研究者だけではなく家庭、学校、行政、地域社会の人々、また在日外国人がいつでもどこでもアクセスできるMVCSが今求められています。



呉氏 岡田さんは異文化理解教育が専門で、教育という学問の幅は広く、互いの異文化への理解、考え方をすることに根拠があるということで、今はメタバース異文化交流空間で構築を提案していると理解しています。1つ目の質問です。異文化が理解できた理想的な状態とはどのような状態なのでしょうか。

岡田氏 異文化が理解できた理想的な状態とは、理解できなくてもずっと継続して話し合える環境が築けることだと考えています。異文化を理解できないことを理解したというような状況です。異文化理解には理想形があって、そこに達すれば異文化を理解したと捉えるのは幻想で、それが理解できないということもある。でも続けていこうというところに達したときに、異文化理解の意味が分かるのではないのでしょうか。

呉氏 禅問答のように、なかなかたどり着けないけれども今ここをやり続けることに意義があるような感じですね。具体的に岡田さんの周辺で、異文化理解で結論はな

いにしても続けていくという状況で気を付けているところがありますか。

岡田氏 大学で留学生と日本人学生と一緒に教育するプログラムの担当をしています。西洋の学生には日本語の勉強が難しい。そういった学生でも日本に留学できるように授業を英語でやるのです。たとえば日本の社会や文化について英語で授業をして、学生たちは英語でディスカッションをするというプログラムです。日本語ができない西洋の学生もその空間の中に入ってきて、できる限り日本人の学生と一緒にディスカッションをする。最初はうまくいかないのですが、その空間と一緒にいるというだけで最初の異文化のバリアが取れるのです。20年以上この教育をやっているのですが、放っておくと日本人と留学生が分離して座ってしまいますので、座学で教員がずっとしゃべっているような授業だと学生が1つになるということはあまりありません。ですからディスカッションなどをさせながら学生たちが距離を近づけていけるようにし

ます。そこに異文化の理解があるのです。

呉氏 あえて日本語は使わないということですか。

岡田氏 もちろん使ってもいいのですが、日本語がまったく話せない留学生もいますので、基本は英語を使います。

呉氏 たとえば、ブラジル人のコミュニティーやインド人のコミュニティーなど、そういう場合、違う言語を使うのも正解ということですか。

岡田氏 東京外大では、30カ国の言語を共有しています。やはりみんながポルトガル語を話せるわけではありませんので、日本語か英語かにします。そもそもこのプログラムを作ったのは、西洋からの留学生が日本の大学で日本語で学ぶことができない人たちを対象にしていますので、英語を基本にしています。

呉氏 今後、外語大の方法論を社会実装するにあたっては、どういう言語がいいのでしょうか。

岡田氏 中国語が話せると、世界の人口のどれぐらいの人たちと話せると思いますか。英語よりも中国語を話している人のほうが多いのです。英語と中国語が話せるようになれば、世界中どこに行ってもほとんどの人と話せるでしょう。

呉氏 シチュエーションに合わせて、その場で多く使われている言語を使用するという考え方ですか。

岡田氏 そうです。本当なら日本語がいいのですが、日本語は日本でしか使われていません。

呉氏 意外にマイノリティーな言語であるということですか。

岡田氏 日本でしか使えませんので、超マイノリ

ティーです。その意味での日本語の国際化も起こるのだろうと思っています。今のところは英語が一番良いと考えています。非言語について話していいですか。

呉氏 もちろんです。

岡田氏 今、私は目を見て話していますが、まず目を見ますか？

呉氏 あまり見ません。

岡田氏 見られることをどう感じますか？

呉氏 やはり、少しどきどきしてしまうかもしれません。

岡田氏 西洋の留学生や中国からの留学生は目を見て話すのですが、日本人は目を見ないのです。会話中は下を見て話しています。いくらパーフェクトな英語を話しても、いくらパーフェクトな中国語を話しても、そういった非言語的な要素が欠けてしまうと、相手から信頼されない、理解されない。日本人は今、その非言語の場面をほとんど学ぶことがありません。

呉氏 異文化交流において、言語だけではなく非言語についても学べる場所がいいなと思います。

岡田氏 私の授業では、非言語のほうにも重点を置いています。アイコンタクトやパーソナルスペースなどです。台湾でしたら、仲のいい女性のお友達同士で手をつないだりしていますが、日本人はしますか？

呉氏 最近増えてきたという印象はあります。

岡田氏 あれは、手を離すと友達ではないというふうになってしまい、そういうところで知らなくて損をしている部分が多いのではないかと思います。

呉氏 ありがとうございます。では、どのような条件を満たす場が異文化理解を促進させるのでしょうか。たとえば、建物ある

いは箱という場所に落としていくと、ソフト面として話す内容や話題など、あるいは先ほどの議論をさせるというところを聞かせてください。もしかすると参加者の心構えもあるのでしょうか。あるいはハード面では、メタバースで実現できること、先ほど目を合わせるというお話が出ました。メタバースで目が合う感じがするのかわからないのですが、そのあたりや、机や座り方など工夫していることがあったら、普段の実例の中で教えてください。

岡田氏 恐らく皆さんもそうだと思うのですが、日本の大学の教室では先生が前にいて、学生たちが座って、こちらを見ています。この空間が既に、権力のある者と従う者というものを無意識のうちにみんなに教えているのです。教師が話しているあいだは、学生たちは静かに聞くという暗黙の了解の中で成り立っているのです。まずこれがいけません。私の授業では、可動のいすがあつてテーブルがないような部屋に移動して、みんなが話すときは対面でグループを作って話せるような工夫をしています。誰が生徒で先生かということが希薄になるような座席の配置を心掛けています。

呉氏 ほかに、話す順序や内容、最初にアイスブレイクなどがあつたりしますか。

岡田氏 アイスブレイクは非常に大切なことです。最初から議論させようとしても学生たちがどのような相手かわかりませんので、まず真ん中で自己紹介をします。

呉氏 どのような内容の自己紹介をするのですか。

岡田氏 ただ自己紹介するのは面白くありませんので、必ず最後に、実はということをつ

けて印象付けるということをお話しています。

呉氏 実は？

岡田氏 私は大阪で生まれて、実は、私は双子なのです。私は本当に双子なのですよ。こんなのが2人いるのです。お名前は？

セイ氏 セイと申します。

岡田氏 セイさん。私は、昭人です。昭和の昭に人とかいて、あきと。私の双子の弟の名前はわかります？

セイ氏 ハルトですか？

岡田氏 私は昭の昭に人と書いて、あきと。弟は和人っていうのです。そう言うと印象が残るのですよ。

呉氏 覚えられますね。

岡田氏 自分で、実は、ということをお話するように学生に教えます。実は私は事故物件に住んでいるなど、皆目わけの分からないことを言うと、それで印象に残るのです。

呉氏 それはいろいろな国の人でも通用しますか。

岡田氏 はい。

呉氏 ほかに参加者の心構えなどはありますか。

岡田氏 やはり日本人はどうしても、相手の意見を聞いて話すというルールのようなものがあります。しかし南米の人たちは、話しているあいだに会話をかぶせてくるのです。これは日本人からすると失礼だと思えますよね。でも向こうの人から見ると、相手が話しているうちにかぶせない、その会話に興味がないということなのです。上からかぶせてきて相手との会話を盛り上げていくということが、日本と西洋の全然違うところです。

呉氏 そういう話し方のこつがあるということ

ですね。ちなみに、ハード面についてお聞きしたいのですが、恐らく静かである、集中できるなど、いろいろな要素があるのではないかと思うのですが、建物的にハード面に興味があります。先ほど可動性のいすと机がない部屋という話が出ましたが、いすの背もたれのあるなしなど、もしそういうものがあれば教えてください。

岡田氏 私も留學生活が長かったので、アメリカやイギリスでいろいろな教室を見ていたのですが、まず机がないのです。いすが自由に動いて、空間を邪魔されずに移動できるなど、いす1つ取っても空間性というものを考えています。最近外大でも取り入れていることが、いすが机から三角のイカのようになっていて、ばらばらになっているのです。これを組み合わせると四角になったりするような備品のデザインも教育工学の中では進んできています。あとは照明の色です。日本の人たちは間接照明を結構使うのです。なぜかという、明るすぎるといふことがありますので、電気の調整ということもやっています。

呉氏 かなり建物の可能性も関わってくるのですね。

岡田氏 そうですね。日本だと白板を使います。白板に先生が書くのがオーソドックスですけども、アメリカでは壁が全部黒板なのです。そして、学生たちがすぐに書いて、あとで消せるというような、壁全ての空間を使って表現するというをやっています。

呉氏 そのあたりは特に気を付けているということですね。ちなみにメタバース異文化交流空間というタイトルですが、メタ

バースとは要するに仮想空間ですよね。そこでも異文化交流空間という形になるのですか。

岡田氏 理想的には。たとえばコロナで3年間ほとんど外国に出られない状況で、今後何が起るか。また同じような状態になったら、留學もできなくなります。このプロジェクトもそうかもしれませんが、メタバースという空間があれば、24時間いつでもどこでもみんなが交流できるような場が築けばいいなと考えています。

呉氏 ここのゴールは、先ほどおっしゃったように継続していくことですか。

岡田氏 もうそれだけです。

呉氏 分からないということを知ることですよね。

岡田氏 けんかしているのはまだいいのです。けんかというものは、まだ相手と仲が続いているという意味です。一番困るのが、相手と無関心で没交渉になったときです。こうなった場合、お互いに相手の考えていることが妄想などで膨らんできて、それが出会ったときにぱんと破裂する。

呉氏 メタバースは議題の振り方などが難しそうですね。

岡田氏 そうですね。これはまずどこかでコーディネーターをやる人、中でコーディネーターをする人や、空間を設計する人たち、みんなでデザインしていかなければいけません。

呉氏 そのあたり、どういうイメージがあるのか詳しく教えてください。

岡田氏 たとえばコロナになったとき、われわれはZoomなどを使い始めましたけれども、機能も限られています。Zoomを作った人たちの中の機能だけでしか、わ

れわれはコミュニケーションができません。メタバースは、その発想にいろいろな人が参加して、こういう機能があればいいとアイデアを出し合って、ジェネレーションを超えて機能を増やしていきたい、できるだけお互いのニュートラルな関係で交渉ができるようにします。そういった空間が理想だと思うのです。たとえば異文化は、国や文化の違いだけではなく、50代と10代20代の若者など世代間も異文化なのです。ですので、対面で会ったとき、日本の文化だと目上を敬え、教師には絶対従えなどがとかそういうのがあるのです。しかしメタバースでニュートラルなアバターを使って、男女も分からない、人間も分からないとしたら、みんな誰とでも話せるのではないかということなのです。

呉氏 面白いですね。所属を分かり合うために異文化交流があった気がするのですが、そこから離れたほうが言論が活発になるのでしょうか。

岡田氏 そうですね。話しているあいだに、この人は異文化だなと感じてくれるところに意義があるかと思います。

呉氏 たとえば日本と中国、日本と台湾など、そういう所属するものを取っ払った上で、話ができる可能性があるから、メタバース空間での異文化交流をやってみたいとお考えになっているということですか。

岡田氏 結構、韓国などでは進んでいるのですが、日本は遅れています。

呉氏 具体的にどのような話題があるのですか。

岡田氏 研究している韓国の学生が1人いるのですが、たとえば会議は、アバターたちが

会議場に入って会議をするのですが、目線がアバターの目線になっているわけです。こうやって座って、あそこにいるアバターと目を合わせながらしゃべることもできるというような形なのです。まだまだそれは初歩的な段階ですが、これからもっと開発されると、本当にそこへ行かなくてもその場にいる体験ができるかもしれません。そこまでいけたら理想です。

呉氏 立体的なものから離れるという。話す内容がどう変わるか、異文化を理解するということとは文化を理解することですから、たとえば背負っている何かを理解するのかなと思っていたのです。そうではなくて、異文化理解とは、違うと確認するということと、言論が違うかと確認するようなイメージで合っていますか。先生がお考えになっていることを教えてください。

岡田氏 言語というものがまず1つのネックですよ。ですので、たとえばアバターたちがその空間の中でどういう言語で話すかも問題なのです。これはもっと翻訳技術が上がらないと、通訳技術が上がらないと駄目なのですけれども、自分の言葉で言ったものが相手が分かる言語にすぐに翻訳されるようにしないと、やはり言葉の壁が出てきます。そういった言語面が、これからもっと技術が進まないと追い付きません。まずは非言語面からいいのではないのでしょうか。やはり男性でこの年でなると、まず見かけでみんな寄ってきません。こんな怖い関西のおじさんに寄ってこないです。ところで、気になる帽子かぶっているのですが、どこで買ったのですか。



男性A これは家のクローゼットにありまして。

岡田氏 何か意識してやってきたのかと思いました。

男性A これは、たとえば脱いでお礼などをすると、きちんとした人のように見えますので、普段かぶるようにしています。

岡田氏 ああいったちょっとしたことでも気付く人は気付いてしまうのです。その小さな気づきをバーチャル空間の中でもできるようにすればいいのではないかと思います。

呉氏 最後の質問です。岡田さんは、異文化理解教育によって、社会のどのような問題がどれくらい解決できると思っていますか。これをもっと多くの人が異文化理解をすることによって、どのような問題がどれくらい解決できるというイメージを持って研究の社会実装の糧にしているのですか。

岡田氏 このプロジェクトで、このあいだの講演会でもやっていただいたものを聞いていたんですけど。われわれは、たとえば学校の中でも完全に異文化です。分野が違っていると一生接することはありません。たとえば同じ教育学の中でも、道德教育と幼児教育、いろいろなものに分かれていて、出会うこともなければ話す機会もありません。まずは、そういう学問の壁などを取り除くという発想から、文化の理解をやっていけばいいと思います。私は異文化理解教育学の中でしか、外国や異世代の人たちの違いを説明できないのですが、たとえば物理や栄養学をやっている人がこういうやり方で異文化を理解ができるのではないか、食べ物を通して理解できるのではないかなど考えることができます。国と国ということはもちろ

ん大事なのですけれども、たとえばわれわれ研究者自体も、この壁を取り払って交流していけるような場が、日本にできればいいのではないかと思います。

呉氏 この狭い研究者の中でまず、ゴールはもしかしたら、違うことを確認することかもしれないけれども、つなげて続けていく場があることが大事ですね。

岡田氏 そうです。違う分野の人たちと顔を合わせられる、出会えることが大事だと思います。社会問題を解決するにしても、けんかをしながらでも続いていければ、大きな問題が起こる前に、もしかすると対話で、問題が起こる前に解決してしまうということができるとは思いません。

呉氏 そういう意味では、異文化理解教育に自分自身で焦点を当てられたのはなぜですか。

岡田氏 私は、関西の出身で、東京がなんのもんじゃという、そんな考えですよ。そこからあるとき、私は関西から早く出たいと思いました。ここの文化の中だけだと、私の考え方や発想が合わないのではないかと、どうしても外へ出たいと思って、いきなりアメリカに片道切符で行ったのです。そこでいろいろなものを見て、言葉も通じないですし、文化も違う。でも人というのは何しても生活していかなければいけません。どうやってできるのか。教育で小さいころからいろいろな異文化理解に対する知識をみんなが学んでいかないと、大人になってから理解しろと言っても難しい。だから異文化理解教育を学んで、もっと子供のころから実践できるようなものがあればなと思いました。

呉氏 関西から離れたいというところが問題意識として最初にあったのですか。

岡田氏 私も最初は大阪至上主義だったのですが、高校生のときに阪神タイガースが優勝したあたりから、なんかおかしいなと思いはじめたのです。だからアメリカに行ったときに、大学の法律協定なんかを結ぶプロジェクトで行くのですが、向こうの先生が嘆いているのは、たとえばテキサスで生まれて、テキサスの大学を出て企業に入ると、もうテキサスしか分からないのです。そしてその人たちが、アメリカが1番、テキサスが1番だということ信じすぎると、相手の国に何が起きているのか分からない。たとえば情報操作されて、テキサスが危ない、攻撃されるのだから、みんなナショナリズムで。

呉氏 今、その傾向は昔よりも強くなっている気がします。それはなぜですか。

岡田氏 グローバリゼーションって、国がない。

呉氏 理解が進むわけではないのですね。

岡田氏 だから経済面でも、そういう人たちに雇用が優先的に与えられると、そうではない人たちのあいだに不満がたまってきますよね。自国の中だけでは解決ができないということになると、外に目を向けて、恐らくあの国が悪いから俺たちはみんなわりをくっているのだと。

呉氏 分かりやすい答えを求めていますよね。人の流動が増えたらそれこそ異文化理解教育が増えそうなものだけでも、逆にそれによって解決としては全然進んでない、むしろ異文化理解が必要な状況になっているというような、摩擦が起きるかもしれません。

岡田氏 異文化理解っていう学問自体が新しい研

究で、コミュニケーションなども含めると、日本に出てきたのがここ3年ぐらいではないですか。だから日本で異文化理解というと、サモサといって服と食べ物と音楽のリズムだけ知っていれば異文化を理解したという。小学校や中学校の文化理解はそうです。それを超えるには、今は高校でも留学が盛んになってきたと思うのですけれども、やはりもっと小さいころから交流する必要があるのではないかと思います。台湾も日本もそうですけれども、われわれは島国です。もともと外から人が入ってきにくいような物理的な状況にいるから、その意味でもメタバースを使うとその距離が縮まっていくのです。われわれの年代はリアルしかありません。コンピューターがないのですから、SNSも、彼女に電話をかけることが最後の手段という世界で育ってきていますので、やはりリアルというのも大切です。恐らく今も、われわれの時代も一緒だと思うのですけれども、日本の学校はどうしても教師が中心で、学生が受け身になるということを18歳まで繰り返して、大学に入ってきてそれが続いてしまう。社会に出ていくと何も考えずに人に従っていくような、そういった授業、そんな人間になっていませんか。これをなくそうと、今、日々努力をしながら、授業の中で、ロールプレイングという技法を取り入れています。学生に言葉やワークポイントだけではなくて、自分たちで演じろと言うのです。たとえばいじめの問題を説明するときでも、異文化理解の説明するのも、字で読んだだけではなくて、自分たちでそこを表現する。アメリカなどでよくドラマで見る授

業なのですけども、それでその場面を演じさせて、自分たちがその気持ちを共感するというか。

呉氏 今のお話はどちらかというと、コンテンツですね。

岡田氏 ほかにも少し書いたのですけれども、メタバースの空間の中で、そういったロールプレイみたいなものを入れて、みんなが異文化の分かり合えないところを演じさせてみるのもいいかなと思います。対面のほうがいいですね。

男性B 僕は結構、対面至上主義です。

岡田氏 高校生の娘がいるのですが、高校3年間は全部コロナで、ほとんど通えなかったのです。マスクも外したくない、顔見られるのも嫌。人とこうやって話すことがあまりありませんでした。まずリハビリがいると思うのです。なぜかという、運動会や学芸会や遠足まで全部なくなりましたよね。非認知能力というのでしょうか、コミュニケーション力など、人の接し方もそういうところで学ぶはずなのです。その機会を逃していますので、まずやはり大学などそういったスペースの中に入っていったら、そこからトレーニングを進めないと、いきなりやれと言ってもできないと思います。今、学校に通わなくてもバーチャル空間の中で勉強ができる場が、結構増えてきています。われわれの受けてきた教育よりも次のバージョンというものが、メタバースを使ったそういった学校になるのではないかと思うのです。

# 12

## 人文学×保育園で、みんながつながる学びの空間づくり

---

**太田 絵里奈** Ota Erina

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・特任助教

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任助教。博士（史学）。科研費学術変革領域研究（A）「イスラーム信頼学」プロジェクトにおいて、中世アラブ都市の「つながりづくり」をテーマに、不確実性の高い時代、個人や集団が生き残るために構築した戦略を研究しています。週末、息子と動物園や博物館に出かけたり、図鑑を読んだりしているうちに「星」にはまり、気づけば「天文学」の東西伝播史をテーマにしたイベントを作ってしまった。自分の気持ちに正直で時にシビアなこどもたちを前に、教育的な話というよりも、自分が一番面白いと思うことを話すようにしています。

「それって、なんの役に立つの？」

人文学系の研究者であれば、一度は言われた経験があると思います。学校教育の基準となる文部科学省の「学習指導要領」が2020年度に改訂されました。それによって「探究型学習」が新設され、何をどう学ぶかというプロセスベースの思考が重視されるようになりました。また近年では、地域や企業とも連携して社会課題の解消に向き合う「シティズンシップ教育」が大きな注目を集めています。この流れは、「何の役に立つのかよく分からない」とみられがちな学問分野にとって、面目躍如の大チャンスではないでしょうか。私はこれからの研究成果の社会還元（アウトリーチ活動）を、一方的に情報を提示するのではなく、人文学を普遍的な英知の宝箱として捉え、「研究って、こんなに面白いんだ！」という思いをみんなと共有できる空間を作りたいと考えました。

そこで昨年11月、下北沢の再開発で誕生した保育園（世田谷代田仁慈保育園）において、園児とそのご家族、地域の方々を対象とした展示、ワークショップ（「動物がつなぐ世界」<https://connectivity.aa-ken.jp/activity/450/>）を開催しました。研究者もこどもも、問いを発することで世界を広げたいという共通する思いを持っています。本企画では、キュレーションに力点を置き、これから世界を知るこどもたちの「なんで？」をたくさん引き出すことで、親子で学びを広げる機会と位置づけました。500年前のエルサレム巡礼記に描かれる謎の生物の正体を解明したり、疫病の歴史を踏まえて「最強のアマビエ」を考案したりと、こどもと大人が力を合わせて「正解のない問い」に取り組むことで、自分自身が人文学の面白さを再認識すると同時に、寄せられる予想外の「なんで？」は、自分が専門性という枠組みに捕らわれ、これまでの学びがいかに近視眼的だったかを実感させられた体験でもありました。

今年秋にも保育園で「冒険と発見の旅」をテーマにしたイベント・ワークショップ（「空と海がつなぐ世界」）を企画しています。私自身は中世イスラム史を研究していますが、幼児にとって、国や宗教という分け方自体が意味を持たないことにこそ、学問の原点があると感じました（私が企画準備にあたり最も興味をひかれたのは、17世紀のオランダの画家・フェルメールの代表作『地理学者』でした。自分の専門とは一見離れたように見える事物が、学問の追求過程でつながってくる過程には、何とも言えない高揚感があります！）。グローバルな視座から、「なんで？」の追求にみんなと取り組む空間を作っていきたいと思います。



呉氏 まず太田先生のご専門についてお聞かせください。

太田氏 東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所で中世のイスラム史、特に15世紀頃のエジプトやシリアを中心とした東地中海の都市社会について研究しています。前近代という時代は、疫病や戦争、自然災害などの外的な要因によって簡単に生命が失われてしまう、不確実性の高い時代でした。厳しい時代背景のなかで、人がどのように生き残ろうとしてきたか。生き残るための戦略について勉強しています。特に興味があるのは、家系や職能集団における生存戦略としての、人と人との「つながりづくり」です。

呉氏 今回は『人文学×保育園』というテーマですが、どうして『×保育園』なのですか？

太田氏 保育園という場所に着目した最初の理由は、現代を生きる多くの子どもたちにとって、そこが初めての社会参画の場になっているからです。入園を機に、それ

まで無条件で認められ、愛情を受け取ってきた、絶対的な「安全基地」としての家庭を離れることになります。子どもたちはそこで初めて、世の中は自分中心で回っているのではない、不確実性と矛盾に満ちていることを知り、衝撃を受けるのです。ですが、泣いてばかりいたわが子が、いつしか笑顔で「行ってきます」と言うようになるのは、社会化の重要なプロセスです。これまで近隣社会や親族といった、家族の周辺にいる人たちが請け負っていた役割がだんだん希薄化してきて、他者との折り合いを学ぶ場は保育園になっているのではないかと考えたのです。そうであれば、現代社会における保育園は、単なる子供の預け場所ではなく、自分と異なる価値観やバックグラウンドを持つ他者とつながりを持つ場所であり、ひいては地域や社会を認識する場所として、とても重要な位置にあると思うのです。人文学の究極の目的は、自分とは何か、そして世界とは何かを知ることにあります。この、社会化の

プロセスを経験している時期の子どもたちに訴えることを通じて、人文学の根幹にも触れられるのではないかと思います。それからもう一つは、学問が勉強になる前の段階で、その面白さや奥深さを知ってほしいという思いがあります。昨年、下北沢の保育園を舞台に、子どもたちとその保護者の方々、また近隣地域や、周辺に遊びに来た方々にも気軽に足を運んでいただけるような、展示とワークショップを主体としたイベントを開催しました。イベントに参加して下さった保護者の方から「歴史って面白いんですね！」とお声がけいただいたのですが、私にとってそれはとても残念なことです。なぜなら、歴史学が受験を通じて暗記科目になってしまい、強いられて学ぶ対象になってしまっているからです。こんなに面白いから学ぶ価値があるんです。順序が逆ですよ。子どもたちには、「歴史って面白いんだよ！」から入ってほしい。

呉氏 具体的にどのようなことをしたのかお聞かせください。

太田氏 昨年の秋、動物の移動がもたらす世界の交流史をテーマに、「動物がつなぐ世界」というイベントを行ないました。子どもを含めて、幅広い世代に受け入れてもらいやすいテーマとして「動物」を選びましたが、自分の専門である中東や、イスラムに特化しなかったのは、日本と隔絶した世界として見せてはいけないという思いからでした。それぞれの国の歴史の寄せ集めとしての「世界史」ではなく、動物を通じた、世界の有機的なつながりを見せたい、そして全世界的な文脈のなかに自分自身を位置付けてほしいと

いう、グローバル・ヒストリー的な趣旨の企画でした。その一環として、子どもたちを対象としたワークショップの他に、保護者の方にも一緒に参加していただいて、私からお話をしたあとに、それを踏まえた上で、家族でその学びを形にするというワークショップを取り入れました。在園児向けのワークショップでは、15世紀にエルサレム巡礼に訪れたヨーロッパ人が記録した、アフリカに生息するという謎の生物を、史料記述、すなわち文字情報だけを頼りに、自由に創作するということをしました。保護者の方を交えた、「おはなし会」は二本行なったのですが、一つは動物園の歴史をテーマにしました。異国の珍しい動物を権力者が収集することから始まって、大航海時代、博物学の興隆を経て、今の教育的・研究施設としての動物園になっているということ、クイズ形式でお話した後に、自分ならどんな動物園を作りたいか、動物の生態も踏まえて、家族で相談しながら手を動かしてもらおうという内容です。もう一つは、コロナ禍なので、病と癒しを取り上げました。疫病とパンデミックの歴史的な展開や背景を踏まえて、人が病気に面したときに、どういった形で癒しを求めていくのか、いろいろなお守りの話や伝承の話などもしました。聞いてくださったお子さんとご家族に、あなたの考える、病気を治してくれるような存在とはどんなものか、現代的な枠組みでそれぞれのアマビエを作ってもらおうというイベントを行いました。

呉氏 こうしたイベントにしたのは、やはり論文や講演会というものに違和感があるかと思うのですが、現状の学術の状況に

対してどのようにお考えですか？

太田氏 これまで、人文学がやっている研究成果を社会に知っていただく活動というのは、もともとその分野に関心の高い方に向けたものが中心になっていたと思います。しかし人文学や歴史学の面白さというのは普遍的なもので、子どもが見ても子どもなりの面白さがあり、大人から見れば、それぞれの社会経験に即した面白さがあるので、こちら側でイベントの対象を絞ることはやめようと思いました。それで保育園という場を借りて、子どもにも楽しんでいただきつつ、パネルや解説文などは大人の方を意識したものにしました。あえてこちらから正解を出さないことで、「余白」といいますか、家庭での「伸びしろ」となる部分を残すことを心掛けました。学びが子どもを通じて大人へと広がっていく仕掛けを作ることですね。そのため、内容は完全に子どもが分かるものにせず、あえて難しい項目や、一見何の絵かよくわからないような、歴史資料からとったイラストも混ぜています。それによって、子どもの「なんで？」をたくさん引き出したのです。大人がそれに答えることで、学びが家庭でも広がる部分が出てきます。今までの自分では一つの研究分野に留まって、そこをひたすら掘り下げていくという作業を繰り返してきたのですが、子どもたちと一緒にいると、子どもの数だけ疑問が投げられてきます。しかも想定外、変化球の質問ばかりですが、それを想定外と感じてしまうこと自体、自分が専門分野にとらわれてしまっていることだと感じるのです。人間とは何か、を考え始めれば、そこに想定外というのは

ないはずなのです。私はイベントを行なう際には、必ず双方向性のある、対話形式で行いたいと思っています。なぜなら、子どもたちの質問に答えることは、学問とは何かを考えることにもつながってくるからです。

呉氏 研究がどのように広がっていったか、具体例を教えてください。

太田氏 今まで都市エリートに着目した研究をしておりましたが、イベントでは15世紀のシリアの都市ダマスカスを描いた絵画を子どもたちに見せました。絵画はヴェネツィアの外交使節がシリアの統治者に謁見する様子を描いたものだったので、イタリア的、中東的、地中海的…様々な文化圏の要素が混在しているんです。そして、「何が描いてあるかな？」「ここにいる人たちは何をしているのかな？」と問いかけてみたんです。すると、様々な意見が出てきて、手前にいる動物に注目する子もいれば、背景の植物に興味を示す子、描かれている人物の衣装について話す子もいました。衣装についていえば、なぜその衣装がその時代に流行っていたのかというところを紐解くと、交易や技術の進歩などがバックグラウンドにあって、無限に広がっていきます。子どもの疑問に触れるたびに、これまで全然見ていなかったような目線が広がって、それは本当にやってよかったと思います。

呉氏 他の学問にも通じるとは思いますか？

太田氏 そう思います。人間存在や社会を考える学問において、「想定外」はないですよ。人間自体が、矛盾にみちているのですから。

呉氏 例えばキツザニアのように人文学×親子



×学ぶというエンターテイメントを実現するような場についてはお考えですか？

太田氏 もちろん考えています。というのも、私の理想は「学びのタネ」が、あちこちに、当たり前前に転がっているランドスケープなんです。保育園はその一例で、ショッピングモールや公園など、人が集まる場所であればどこでもいいんです。小さいお子さんのいるご家庭にとって、大学のキャンパスに行くという行為自体、とてつもない労力を要することです。また、私たち研究者側も、「大学に来たら教えてあげよう」というような、受け身の姿勢ではいけないと思うのですね。研究者がどンドン街に出て、研究の面白さを訴えていかないと。そのため、「よし、今日は勉強しに行こう」と、気合を入れて大学に来ていただくのではなく、たまたまお散歩がてら足を運んだところに、なんだか面白い、世界を広げるヒントが落ちている。そういう偶然性や、肩ひじ張らない、リラックスした雰囲気大切にしたいんです。そこで、昨年の子どもたちや家族を対象としたイベントは、大学キャンパスではなく、街中で行ないました。4日間で1300人近くの方が足を運んでくださったんです。大学内のイベントでは、まずあり得ない人数ですよ。また、子どもたちとお話しする機会があれば、私は先生として「教えに来た」のではなく、あえていえば近所のお母さんという感じでしょうか。一緒にこの謎を解明してみない？というスタンス、同じ目線で臨んでいます。教えるのではなく、問いかけることで、学問の面白さを分かち合いたいんです。

呉氏 研究者であるご自身の研究を深めるため

の手法として、子どもたちに教えることを使っているというのは面白いですね。

太田氏 自分自身の専門研究の他にこういったイベントを行うには、自分にとっての大きな学びがそこにあるということが一番のモチベーションになっています。今は人文学の危機といわれていて、予算を獲得することも難しい時代です。しかし、2020年から順次施行されている新学習指導要領のなかでは、探求の時間というものがありました。これからの子どもたちは、たくさんの情報を整理して、自分で意味づけをしていく作業が求められるので、まさにそのキュレーションスキルを養うようなイベントをやりたいですね。そのなかでは、知識を一方的に伝えるのではなく、あくまで考えるためのヒント、道しるべを置くにとどめて、参加者自分で広げていくという形にしたいと思っています。そして出てきた意見や作品に対して、こちらからも随時フィードバックをする、双方向性のある企画を考えたいです。それによって私自身も学びの幅を広げたいんです。

呉氏 聞き手側にはどんな素養が必要ですか？

太田氏 人文学的な問いは、そのすべてに明確な答えがあるものではありません。ましてや、これから世界を知る、そして自分とは何かをゆっくりと認識していく過程に乗ったばかりの子どもたちです。子どもの数だけ答えがあってもいいと思うんです。先生の想定に近い解答を出した子どもほど評価されるというのは、成績の付く学校教育ではそうかもしれませんが、学問は違いますよね。先ほど「クイズ形式」と言いましたが、あくまでそれは子どもたちに発言してもらう仕掛けの一環

でしかなくて、私が出す質問は、実は全部の答えが正解になるクイズなんです。だから、大人のほうで必要なのは、絶対的な正解を導くための素養ではなく、問いを育む姿勢でしょうね。子どもが発する「なんで？」を受け止めて、「なんでだろうね」と一緒に考えてあげる姿勢が大切ではないでしょうか。



# 13

## Ocean of ideas in bottles

---

**中山 俊秀**

Nakayama Toshihide

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

言語の研究を専門としてきました。消滅の危機に瀕した少数言語（カナダの先住民や宮古島の言語）の文法分析や再活性化に向けた研究、コミュニケーションの中での意味が作り出され伝えられる仕組みの研究、人が話す中で言語の規則体系が動的に形成され変化していくメカニズムの研究などを行っています。おもしろい問いが大好きなのですが、本当に探究したい問いが専門に収まらず困っています。そこで、専門の違った研究者たちや、アカデミアの外の人たちと幅広い問いを心ゆくまで深掘りできる時間と空間を求め、専門研究を超えたより根源的な問いを探求する研究を増やすための場作りに取り組んでいます。

我々は常に誰かとコミュニケーションをとりながらつながり、生きています。生物としても、意識の上でも個別である我々一人ひとりをつないでいるのが言葉。私は、人間が言葉を使ってどのように意味を作りやりとりしているのかを専門に研究しています。今回は、私の専門的関心を広げた空間提案として、人と人が協働して意味作りに関わり、積み上げていく場を構想してみました。アイデアや思いはいつも作りかけ。特に、世界を変える大きなアイデアはひとりで作り上げるのは難しい。一人の中で行き詰まったアイデアは、ほかの人にとっては天からの啓示になるかもしれない。だから、自分にふと降りてきたアイデアをビンに詰めて、広い海に投げてみよう。流れに乗っていつかどこかの誰かが拾い上げて、自分のアイデアと掛け合わせて、また海に投げってくれるかもしれない。そうやって、出会いが重なっていく中で、アイデアのタネは大きな木に育つかも说不定。アイデアや思いを預かり、時空を超えて他の誰かの心に届ける海のような場所。そこでは…

- ・荒削りの思いつき、挑戦的な課題、妄想レベルのアイデアが「Idea in the bottle」として、みんなが手に取れる形で提示されている
- ・「Idea in the bottle」をインスピレーションとした議論や交流の中でアイデアが膨らんでいく
- ・多くの「Ideas in the bottles」の中で自分の問いを見つめ深める
- ・みんなと共有したい価値や意味、みんなと創りたい世界が、移り変わる出会いの中で作り上げられていく

今この場を作りたいと思う理由は、みんなのアイデアや思いが、時空、人、専門分野などの殻に閉じ込められずに人の交流の中で育つ場があってほしいから。個人の中で作り込まれたアイデアや思いもすばらしいが、個人の関心や専門領域の外に出すことを想定していないアイデアや思いは窒息してしまう。

専門的思考はとかく難解なロジックで構成されるものではあるけれど、解き明かしたい問い自体は、もっと単純で深く、人間の好奇心、探究心に直接揺さぶりをかけるもののはず。専門領域での「完成された」解釈と思考の枠にはめ込んでしまう前の不完全なアイデアの豊かな問いの姿・感覚を多くの人たちの間で共有し、イメージを膨らませられれば、従来とは異なる次元での研究融合を生み出す可能性があるのではないか？

そんな思いがこの構想の背景にあります。



矢代氏 これまでの研究についてお聞かせください。

中山氏 専門は言語学です。大学時代の専攻は英語でしたが、マイナーなものをやりたいと思い、カナダのバンクーバー島の西海岸で話されているNuuchahnulthという先住民の言語を長く研究しています。日本語ではヌートカ語と言われていますが、現在では流暢に話せる人は数十人もいない言語です。その言語が消滅の危機に瀕しているということもあって、言語が消滅してしまうメカニズムの解明や、どうしたら伝統的言語を維持できるのか、などの問題にも取り組んできました。最近では、人々の間のコミュニケーションの中で社会的知識体系である言語がどのように形成され、変化していくのか、というより大きな問題に関心を広げています。文法的におかしな表現が、どうやって使われ始め広く社会の中で定着していくことで言語が変化していくのか、という問題に特に関心を持って研究しています。

矢代氏 今回のアイデアについてお聞かせください。

中山氏 最近、自分の言語研究が専門分野としての言語学にうまく収まらなくなってきたなと強く思うようになってきたこともあって、専門分野を超えて複雑な問題を探究したり、アカデミアと社会をまたぐ共同研究に関心があるのですが、これが難しいんです。その大きな原因が、そういう協働の場がそれぞれの専門知識をただ寄せ集める場になってしまっていて相互作用が生まれていない、ということにあると思うんです。本当の意味での学際融合のようなものが生まれるためには、すでに出来上がったアイデアを持ち寄るより、まだ出来上がっていないアイデアをみんなで持ち寄る場が必要だと考えました。

矢代氏 ボトルへ入れるものは何ですか？

中山氏 無人島に一人ぼっちでいる時にある日沖からボトルが流れついた。そんな時に見つけてワクワクするようなメッセージ。それを見たら何か想像が広がるような

メッセージですね。一番面白いのは問いじゃないですかね。答えが書いていてそこで終わってしまうけれど、人は問われると考え始めてしまうので。問いかけや、なんとかしてほしいという働きかけ、呼びかけなんかがあると、本能的に反応しちゃいますよね。

矢代氏 問いというと中身がないような、受動的のようにも感じます。

中山氏 たしかに、答えが決まった問いに対してはグッときませんよね。でも、本来の問いとは、この宇宙の向こう側には何があるんだろう？といったように、それまでの自分の視点とは違う視点を気づかせるものだと思います。今まで考えもしなかった世界について、何かあるのかもしれないと、新しい可能性に気づき考える出発点を与えてくれるものですよね。

矢代氏 各分野の学者が自分の専門やアイデアを持ち寄ってくる場所のような機能ということでしょうか。

中山氏 専門性そのものというより、それぞれが得てきた経験やそこから生まれるアイデアを持ち寄るという感じですね。

矢代氏 そこで利権が発生するとどうですか？

中山氏 持ってきてほしいものは、むしろ、利権を主張できないような原初的なアイデアとか経験ですね。誰のものでもない、くらいの漠然としたアイデアのタネくらいのものがいい。そのタネは自分の「専門」の枠を超えたものでもどんどん投げ込めるようであってほしい。

宮野氏 自分の主たる研究を持ちつつ、それ以外でもアイデアを出していく、そちらのほうが面白いアイデア、いわゆるイノベーションが生まれるということですね。

矢代氏 どういった仕組みにしますか？

中山氏 その場に行くところかの誰かが書いたアイデアがボトルに入ってランダムに流れてくる。そのときの気分で手に取ってみて、また何か違うボトルも見てみると、それぞれ全く関係ないアイデアだけれど不思議と繋がって新しい考えが生まれるというようなイメージです。

矢代氏 ボトルの中身はどういう形にしたらよいでしょう？

中山氏 こういう形で残してくださいと決めると面白くなくなると思います。字数に制限があって、絵も入れられて自由度が高いTwitterぐらいの感じがいいかもしれません。

矢代氏 Twitterとはどう違うのですか？

中山氏 物理的な場所であることが大切だと思います。自身の思い込みが干渉する手前のところでアイデアを共有できる空間を作り、そこに行くと思ってもよらない問いが出てきたというような経験を持つ、それをよしとするような文化、心持ちをつくるような空間が必要だと思います。

矢代氏 投稿はインターネットからできて、見るのはリアル空間だけというようなことですね。人間が出力したもの、日記などをAIが解析してアイデアを抽出する方法もよいでしょうか？

中山氏 それでもいいかもしれません。この場合は、自分が思いついたタネを残すということ大事ですが、それ以上に、人がぶかぶかと流れ彷徨っているいろいろなタネに出会い、それに何か少し足したり、新しい思いつきを得てまた海に投げる、という出会いと反応の積み重ねを育むところであることに意味があるんですよね。あと、みんなが手に取って思ったことがそのタネに乗っかって旅を続ける仕掛け

もあるといいかな。このタネに出会って、こんなアイデアを思いついたよ、こんな気持ちになったよ、といった反応が付加されていって、アイデアのタネがその反応の歴史の中で育っていく。もともとアイデアをボトルに入れた人は、自分が入れたタネが他の人たちに引き起こした思いから、改めて自分の思いつきについて考えを深める。海を彷徨うボトルを介したそんな思いの相互作用が作れたら、おもしろいな、と。





# 14

## 妊娠・出産から始まる心 身のリカバリーコミュニ ティ

---

**荒木 智子** Araki Tomoko

大阪行岡医療大学医療学部・助教  
SRHR Japan・理事、WiTHs・代表

2002年理学療法士免許取得。2016年RYT-200、2017年医学博士、2022年公認心理師免許登録中。急性期総合病院、施設での臨床、スポーツクラブで市民ランナーのサポートなどを経て、現在は大学で理学療法士の養成、産後女性の心身回復の研究を行っている。臨床経験と自身のフルマラソン完走の経験から、適切かつ安全な運動方法を考え、研究に活用している。また心と体の連関（心身連関）にも関心をもち、心理社会的側面に配慮した回復プログラムについて考える毎日。プライベートでは2児の母。娘たちの世代には産後のリハビリテーションのためのトレーニングが当たり前になっていることを祈っている。

理学療法士をご存じでしょうか。私はこの仕事を初めてもう20年ほどになります。今は産前産後の腰痛や肩こり、尿もれのある方に運動や徒手療法を用いて、治療したり、体力測定や質問紙調査を用いて研究したりして、産後女性の回復を身体・心・社会の側面から目指しています。「リハビリテーション医学」の研究です。

現場感覚ですが、妊産婦の腰痛、肩こりはその多くは筋肉などの疲労蓄積から起きています。腰痛や肩こり、尿もれは仕方ないもの？ではありません。疲労や一時的な弱化であれば運動や簡単なセルフケアで改善できることがあります。だから、仕方なくないのです。対処が必要だし、時間をかければ、重症化や長期化を防ぐことができます。

これまで臨床などの現場で生後6か月から104歳の方々に出会いました。その中で感じるのは、体力があると回復もしやすいことです。また体と心の体力はリンクしていると思います。体力の重要性は3人に1人が運動不足といわれる我が国でも改めて再確認されるべきことと思います。「体力は財産」です。体力を作るのは、運動、栄養、休養です。

ここ3年間、私は仲間とともに産後女性の体力測定を行い、その8割がロコモティブシンドロームと呼ばれる、いわゆる足腰の弱った状態であることがわかりました。米国海軍の兵士が対象の研究では、産後半年後に産前の体力には戻っていなかったと報告しています。

大人は加齢とともに筋力が低下し、体力も低下します。何もしなければ。しかし、ベビーは1年で身長が1.5倍、体重は3倍になります。しかも動き出します。ベビーはとても未熟で、大人が守る必要があります。そう考えると、妊産婦の腰痛や肩こり、尿もれなどは産後には「解決すべき課題」で、体力回復は「必須条件」になるのです。

私は産後の回復を研究する中で、心身の健康に関心を持つこと、体力回復の重要性をもっと広く知らせたいと思います。もしできることならオフィスの1室を使って健康相談や体力測定、トレーニングできるような場を持ちたいと思います。それをきっかけに産後女性から、そのパートナーや祖父母、子どもたちも巻き込んで、みんな一緒にトレーニングしたり、対話を重ねられる場を作りたいです。その結果、いつかみんなでフルマラソン走るくらいの心身の体力を養えたら、とても未来は明るい！と思います。心と体を元気にする場、パワースポットにしたいです！



呉氏 荒木さんは、理学療法士であり、またリハビリテーション医学を実践しています。産後女性の体力回復の重要性にたどり着くまでの経緯というか、今何をしていて、どういう問題意識で動いているのか、教えてください。

荒木氏 私は理学療法士という仕事を20年ほどしています。理学療法士というと、病院で歩いたり、立ったりという生活の動作や生活そのもののリハビリのイメージが強いですが、私はスポーツ医学の研究をしていたので、元気であるためには運動が必要だという考えで研究、活動してきました。14年前に自分が出産して復職するときに、体力がないと仕事をするにも育児をするにも大変だということも身を以て実感しました。しかし産後の母親の体力の現状はわかりません。一方で2018年には、産後1年間の女性の死因の第1位が自殺だという、とても衝撃的なデータが発表されました。そのときには産後うつなどが議論に上がりましたが、体力の問題が医師から上がってこな

いことにとっても違和感がありました。日本は運動能力検査、いわゆるスポーツテストを各年代で行っている珍しい国です。結果は毎年10月のスポーツの日に発表されます。それを見ると30代の女性は体力も落ちているし、運動機会も少ないことが明らかです。それなら産後の人はもっと体力が落ちているのではないかと調べ始めたら、やはり低い水準であるとわかってきました。私は心と体はつながっていると考えているので、産後うつも関係があると思います。そこで体力の回復のプロモーションと取り組みを実際にやっていきたいと思ったことが今の活動につながっています。

呉氏 理学療法士は作業療法士と混同されることが多いですね。スポーツ医学の研究をしていたので、体力に注目したということがよくわかりました。体力はどのような要素で回復するのですか？文章のなかには運動、栄養、休養の3つがありましたが、今いわれたように心の問題もあります。一般的には走るよりも、耐性が強

い、ハードな状況に耐えられるから体力があるといわれることが多いようです。その体力回復のメカニズムをどのように捉えているか教えてください。

荒木氏 理学療法士は体に注目するので、筋力や持久力というフィジカルな面に着目しがちですが、厚生労働省が出している体力の定義には、体だけではなく防衛体力といって、心、メンタルの部分もあります。外からの刺激を防ぐ体力で、免疫力も含まれます。外からの刺激に耐えるとか、打ち勝つというのも体力です。あとは行動です。自分で動いて何かするのも、要素としては筋力や持久力もありますが、その部分も全般的に体力といわれます。今では、いわゆる人の持っている能力全般が含まれてくるのではないかと考えています。しかし、包括的にそこを見て、回復というところまで見ているものはあまり多くありません。

呉氏 運動、栄養、休養といわれても、とても違和感があります。自分で運動、栄養、休養を取っても体力がある気がしません。心や衣、食など考えなければいけないことが多いテーマに理学療法士の立場から取り組んでいるわけですね。厚生労働省では包括的な定義をしていますが、包括的な研究はまだ全然進んでいない、開拓中という状況ですね。

荒木氏 そうです。神経理学療法学会では脳卒中や神経筋疾患の研究が多いですが、それでも身体性や自分の体をどう捉えるか、どう行動するかというトピックスが上ってきています。体に起きるいろいろな問題、痛みや動きにくさ、先ほどの普通に生活しているが全然元気ではないと思うのはなぜだろうという研究が今まさ

に始まっています。脳卒中のあとの患者などいろいろな疾患に行われているものはあります。妊娠は病気ではないといわれますが、そこにはいろいろな誤解や意味合いがあります。妊娠、出産後はみな普通に元気で、育児をし、仕事もしていますから、回復についてあまり細かく見られていないということはとても実感しています。

呉氏 ご自身の経験から、産後女性はもっとケアされるべきという問題意識があって、特に産後女性の体力回復を研究しようとしているのですか？

荒木氏 はい。フィジカルが専門ですが、心や社会的な問題にとっても関心があります。たとえば最初からメンタルについて相談しようという当事者、産後女性はそれほど多くないでしょう。社会的な問題についても同様に、いきなりソーシャルワーカーに相談する方も少ないでしょう。体の問題は実感しやすいし、入りやすいと思います。自分の専門でもありますが、筋肉が、とか、関節が、などの体の問題なら、それほど気負わないで入っていいのではないのでしょうか。そこから入って行って、心や社会の問題につながっていったらいいと思います。

呉氏 体が入り口ということですね。体力から見るのはおもしろいと思いました。筋力など客観的に測ったり、新しい単位を作れるような気がします。私はドラゴンボールがとても好きですが、ドラゴンボールは強さがスカウターで出ます。今のところどのくらい回復したかは、本人の感覚値しかありません。ある程度研究が進んできて、そういう考え方があるのかとか、そもそも絶対に測れないなど、

ありますか？その辺りはどのように捉えていますか？

荒木氏 今のところ新しい指標を作るところまでは至っていません。妊産婦、産後女性のしんどさ、体力が低下していることを客観的に社会に知ってもらうために研究で使っているのは、ロコモティブシンドロームです。高齢者は移動力が低下しがちです。足腰が弱くなって移動ができなくなり、体力が落ちて、介護のリスクが高まるという概念がありますが、日本整形外科学会が作ったロコモ度テストという指標には、高齢者だけでなく、若い人にも使える標準値が出ています。たくさんの方を取ったデータもあるので比較対象も豊富です。実はロコモティブシンドローム予備軍だと判断されるのは、産後女性では80パーセントに上ります。それを学会などで伝えています。

呉氏 高齢者と同じ指標が使えるのですね。

荒木氏 先行研究では、同世代の40歳以下、私の調査では30代半ばの方が多のですが、そういう一般女性で産後ではない方は25パーセントぐらいです。産後の方では、多少の判断基準の変化はありますが、それを加味しても8割というのは看過できないのではないかと、他の方が作った指標を使ってようやく今知らせているところです。そこから関心を持つ方も増えています。さらに数が増えたら、もっと分かりやすい指標ができて、もっとよいネーミングにすることができるといいですね。こういう場合には気をつけようという目安がつけられたらいいですね。

呉氏 私も授乳などは大変だと思います。聖母マリア像のように思われがちですが、

抱っこしながら乳をつくるのは、乳生産器になることなのでかなり大変です。しかしじっとしていても全然大変そうに見えないし、むしろ休んでいると思われそうですが、乳を作るのはかなり疲れると思った経験があります。タンパク質も摂らなければならぬし、お腹も空きます。産後の大変さは可視化されにくいですね。とても共感します。質問ですが、健康相談、体力測定、トレーニングする場所があるといいと書いていましたが、それは既視感があります。今までのものと何が違うのでしょうか。たとえば産後女性しか来ない場はあまりおもしろくないでしょう。夢で構わないので、どういう場があるといいと思いますか。既存の場を超えて、価値ある場をつくるにはどんな条件があるのでしょうか。既存のものがベストとは限りません。それは無理だという、たとえば無重力空間が欲しいとか、突拍子もない妄想でもいいので、産後女性にとっていい場の条件を教えてください。

荒木氏 妄想でよければいくらかでもあげられます。研究している仲間と、やはり健康教育が大事だという話になります。今では学校の部活が減っているのでも、小学校、中学校のころから運動しなくなっているし、運動会も経済格差がとても影響しています。そこからの性教育に体力づくりを入れたほうがいいでしょう。私の目標の一つに、産後女性のイメージを変えることがあります。産後ケアやリハビリテーションなど、守られるべき存在というイメージが今は多いです。体力測定から、パートナーや祖父母にも伝播させて、体力の大切さをみんなに伝えたいと

思います。その具体的な取り組みとしては、産後女性はもう守られる存在ではないとポテンシャルを爆発させる場があればいいでしょう。母はパワフルです。母にならなかったとしても女性のパワーのポテンシャルは、実は男性より高いと考えています。それが母になって、体に傷を負ってでも命を守ろうと、自分の血液を母乳として吐出します。だから守られてケアされて大事にされる時期も必要ですが、ポテンシャルを発揮する場も必要です。私はフルマラソンに参加する市民ランナーのツアーのサポートをしていたことがあります。エリートアスリートでもない、むしろお金を払って走っているのに一生懸命な人を応援するのが大好きでした。だから産後女性を集めてホノルルマラソンツアーをやりたいですね。ゴールでパートナーと子どもが待っているような。お母さんはこれだけ体力があるし、元気だという、それくらいまで引きあげたい思いがあります。理学療法士のリハビリテーションは、マイナスからプラス、マイナスからゼロ、ゼロからプラスを目指しますが、そのゼロを乗り越えて、パワフルな誰も想像し得ないことを実現するには、マラソンがいいと思っています。自分もそうですが、特に体に問題がなく適切な取り組みをすれば、3ヶ月か半年でフルマラソンを走れるようになるでしょう。

呉氏 産後すぐのあいだ、授乳はどうするのでしょうか。

荒木氏 授乳期間にフルマラソンをするのは少し危険かもしれません。授乳をしていると骨代謝の問題があります。激しいトレーニングをしなければ大丈夫でしょう。別

にフルマラソンでなくても、世の中の人には、産後女性が走るとは思わないでしょう。

呉氏 そうですね。

荒木氏 私は産後2年でフルマラソンをしました。できない、守らなければいけないというところを突破していきたいのです。その一つがフルマラソンなので、それ以外でもいいでしょう。そういう妄想はあります。

呉氏 ご自身の実体験から、産後女性が守られるべきではなく、ポテンシャルがあるという象徴としてのフルマラソンを勧めているのですね。ポテンシャルの発揮の仕方はいろいろあってもいいでしょう。体力もありますが、気力も必要です。現にそのあと子育ては続いていきます。産後女性というのは、その時期の一部を切り取ったに過ぎません。子育て中の大変さはどういうふうに捉えていますか。肉体だけでなく、2歳児、3歳児のイヤイヤ期には体力が削られたという経験が私にはあります。保育園の送り迎えもあります。そういうところを抜きにして話が成立するでしょうか。

荒木氏 そこは含めないといけません。産後の検診は2ヶ月で、乳幼児検診は3歳で終わってしまいます。母親の体については、それ以降は何もありません。自分から動かない限り何もないので、やれる人やるけど、やれない人はやらない、気づかないまま過ぎてしまいます。おそらくこれから問題になるのは、産後と更年期が重なったり、さらに介護も重なったりすることです。問題はとても重層化していくでしょう。研究計画書を書いていたとき、産後女性の体力測定は、加齢の影

響も受けるだろうから期間を定めるように倫理審査でいわれたこともあります。しかし問題は続きますし、追跡調査をしている縦断研究はないので、ずっと追跡したほうがいいでしょう。出産や妊娠など、不妊治療がスタートかもしれませんが、そこからスタートして健康づくり、体力づくりにつながればいいでしょう。反抗期など、子どもが大きくなってからは心理的な体力が要求されます。そこをずっと追って、その人の生涯をサポートできるのが理想です。

呉氏 体力が削られていく要因はたくさんあります。人によって背負っているものも違います。たとえば親の助けを得られる人もいれば、得られない人もいます。荒木さんのお話を伺って、そういう状況は全然言語化されていないと気づきました。名もなき家事という言葉があります。ゴミ捨てという大きなことではなく、靴下を拾う、拾って洗濯かごに入れる、洗濯もののTシャツを裏返すことなど、家事を細分化していくと見つかることです。同様に産後の女性のつらさも、まずは細分化され認識されていくのが大事だと思います。子育て中のお父様方、ご意見はありますか。

男性A 子育てとは関係ありませんが、みんなが運動するポイントのところで、日本を明るく元気にしようかとまとめておられました。私は不動産業ですが、最近オフィスをつくる際のキーワードはウェルネスです。やはり体力を上げたら心も元気になって日本も明るくなるでしょう。がんばったら実現できそうなことで日本の明るい未来をつくれるというのはとてもいいと思いました。ありふれている、聞い

たことがあるような感じですが、本当にできたらいいし、がんばればできそうです。そこをなんとかするようにつなげていく取り組みをしたいと思います。

荒木氏 臨床で高齢者の方を見ても感じますが、体力が落ちるのはとても早いです。体力をつけるためにジムに行って運動しても、結果が見えるまで少し時間がかかります。私はだめな人間なので、1人ががんばってそこまで続けるのはなかなか難しい。だからレースの予定を入れたりします。私は普段からトレーニングしているわけではなく、フルマラソンで完走できないと格好悪いから練習して追い込みます。一緒にできる人がいたらいいと思います。特に産後の女性は、止める理由はいくらでも出てくるのです。だからお母さんがこうやってがんばっているのだから、お父さんも体力づくりをしてメタボ予防をしないと、というところに行けば、ヘルスプロモーションにもつながります。体力をつけるのに特効薬はありません。筋肉を動かすしかないのです。臨床では、患者さんにもいつもそういつています。元々運動していた方は、重篤になっても回復が早いというのも目にしています。体と心の余裕を持っておくというのは大きな財産だということを、新しい価値として伝えていけたらいいと普段から思っています。

呉氏 財産という言葉はいいですね。最近、貯筋という言葉があります。お金ではありません。貯筋という言葉が一般的になりましたが、それも近い考え方ですね。

男性A 現代社会では、わかっているにもかかわらず運動できない人がとても多いでしょう。レースを入れるぐらいの行動力があれば



いいですが、それができない人にやる気を起こさせなければなりません。

呉氏 もう階段しかないということでしょうか。すべてのエレベーターを止めるとか。

男性A やはり不便にするしかないのでしょうか。

呉氏 そうしなければ駅に入れないとか、それぐらいのほうがいいかもしれません。

宮野氏 あとスマートウォッチを使いましょう。私も使っています。

男性A 活動量計ですね。

宮野氏 そうです。見えるのは効果があります。1万歩いったとか、今日は8,000歩だったとか思うでしょう。ありがとうございました。

# 15

## 350年ぶりに命の意味を 再発見する空間づくり

---

**小宮 健** Komiya Ken

合同会社 I o M 研究所・研究員

科学をリベラルアーツとして、そしてアートとして楽しむために、教科書からこぼれ落ちる多彩な側面を伝える活動を合同会社 I o M 研究所で開始。平日は海に見える研究所で超先鋭研究開発に従事。専門はDNAコンピューティング、分子ロボティクス。これからの科学技術と人・社会との関係を探るプロジェクトを、日本科学未来館などで実施しています。科学者だって社会人。

生命科学は文学だと思っています。所属機関や研究分野とは一切関係ない個人の見解です。

私は分子ロボティクスという生命科学の先端分野で研究をしています。この研究は、DNAで材料に情報を与えることで、生物と同じ原理で動き、生命の機能を再現するロボットを創り出します。

このようなロボットは、スマートフォンを身体に接続するナノテクノロジーや、患者本人が病気と気づく前に早期治療する体内病院を実現する技術として期待されていますが、私は普段あまり語られない、“文学としての生命科学”の側面をお伝えしたいと思っています。

私たちはどこから来てどこへ行く存在なのか、そんな思索を巡らせることは、バイオテクノロジーが急速に発展する時代に自分を見失わず、日常を豊かに生きていくためには必要です。分子ロボティクスはそんな思考の補助線となる、事実裏づけられた生命観をもたらします。

私たちは何かを想うとき、気持ちの動きとともに分子の構造が変化し、エネルギーを消費する「物質」です。地球上には生きている物質と生きていない物質、いわゆる生物と無生物がいて、その間には乗り越えられない壁があるかのように語られてきました。

でも、それは本当でしょうか？

地球が誕生して生物が棲める環境になると、たった4億年で最初の生物が誕生しました。でも、最初の生物から多細胞生物が誕生するまでは10億年以上かかりました。本当は物質から生物が誕生するよりも、単細胞生物から多細胞生物が誕生する方が難しく、高い壁なのではないでしょうか。

バクテリアにも人間にもあらゆる生物に平等に、ただ一度だけ生と死は訪れると信じられてきましたが、それは勘違いです。「私」という意識を持つ人間や多くの多細胞動物にとっての、それが失われるという意味での死や、それと表裏一体の生は、単細胞のバクテリアには存在しません。

350年前に微生物学の父・レーウェンフックが顕微鏡を発明し、池の水を覗き込んだ時から始まる命の勘違いの呪縛を、分子ロボティクスは解き放ちます。そんな研究のエッセンスを抽出したテキストを、日常から切り取った場面を表現するパフォーマーの背後に投影し、様々な命の意味が表出する空間を創造します。

40億年にわたる生命の進化の先端で、動物としての生や死が存在しない培養肉が食卓に並び、亡くなった人の細胞が実験室で半永久的に生き続ける現代を生きる人間にとっての、命の意味と生きる喜びを再発見し、事実の裏づけのない観念から自由になる価値を提供します。



呉氏 小宮さんは、生命活動を再現する技術で350年ぶりに命の意味を再発見する、と書いています。分子ロボティクスは、生命の機能を再現するロボットということですが、そもそもどうしてこの考えに辿り着いたのか、教えてください。

小宮氏 はい。人とは何だろうか？というのが私の興味の原点です。子ども時代には、生きるとは何か？、人とは何か？、自分はどこから来てどこへ行くのか？、というテーマに真正面から答えているのは、文学だろうと思っていました。でも中学生、高校生の頃に、名作だったり売れている本を何度読もうとしてもすんなり読めなくて、なぜだろうと思いました。もちろん生き生きとした場面や、自分の人生を重ねて感動する場面はありましたが、感動が大事だということに違和感がありました。優れた文学作品を書く人は、運動競技にたとえばオリンピック選手級の跳躍力のある天才です。一方で、自然科学は一つひとつ地道にブロッ

クを積みあげていくようなもので、みんなで100年間積みあげれば、どんな天才よりも高いところに届きます。事実は何かを調べ、その上で考えたり感じたりしないと、人とは何だろうか？の答えに辿りつかないような気がしていました。そこで大学はバイオ系に進みました。人間とは何か？を探求する自然科学は生物学だろうと思ったからです。しかし授業では、命があるものとは何かを探求したり、命のあり・なしについての問いは出てこず、そこは学問になっていないことを知りました。もう一つのきっかけが、人とは何か？を考えたとき、自分の基準は笑えることでした。たとえば飼っている犬と楽しい、喜ぶという感覚は共有できます。しかし人は、絶望のどん底でも笑ってしまったり、受け入れられないようなことが起きても笑うときがあります。笑う処理のできる対象が、人の場合は幅広いことに気づきました。それを探求したくて、脚本を書いたり、舞台に

立ったりしました。とても楽しかったのですが、その瞬間みんなが笑っただけで思考としては深まらず、思い出が増えただけでした。それなら自分はブロックを積みあげる方をしたいと思って、研究に主眼を置くようになりました。当時は、バイオ系でも真正面から生命とは何か？を研究する分野がなく失望していたところに、DNAコンピューティングという分野が出てきました。生命の本質は複雑で精密です。生物をどれだけ調べても、自分が生きているあいだに解明し尽くすことはできないでしょう。それなら、とても単純でいいから何かを作ってみるのが大切だろうと思いました。DNAには我々が生きる上での設計図や生命の情報が書かれています、DNAでできることはいろいろあります。DNAの情報を少し単純化して、分子のシステムを動かしたり、作ったりすることができます。それがコア技術として応用されるようになり、分子ロボティクスという技術に発展してきたのが今です。一方で、生命の起源に関する研究も盛り上がってきていますが、どちらかという、どのようにして最初の生命が生まれたのかという歴史的な経緯を探る研究です。私は、生命とは何かの定義を探求していて、生命がゼロから生まれる瞬間があるとしたら、それは何なのかということにきちんと向き合いたいと思っています。

呉氏 なぜ分子ロボティクスを研究しようと思ったのかを最初にお聞きしたかったのですが、元々は、人とは何だろうという問いから始まったのですね。しかし生命を解明し尽くすのは無理だから、ゼロか

ら作ってみようと思ったのですね。

小宮氏 はい。もっと言うと、私は「生きている」という言葉がとても雑に扱われていると思っています。我々が日常の意味で、生きているという言葉を使うときは、思う、とかコミュニケーションがとれることを指していると思います。

呉氏 具体例で教えていただけますか？

小宮氏 人は、記憶やアイデンティティ、「私」という感覚があって、他者とコミュニケーションをしています、そのコミュニケーションが未来永劫できない状態に変わるのが、人間にとっての死だと思えます。それは生命活動とはまったく別の話です。生物学、分子生物学や細胞生物学のおかげで、新しいことがいろいろ見えてきて、学問的には大きな成功を収めています、細胞の生命活動と、人間が「生きている」という活動を混同させてしまいました。昔だったらあまり問題ではなかったでしょう。精神活動、意識が消失した死に瀕した人間は、肉体を構成する細胞もそのまま死に向かい、死とのタイムラグも僅かでした。死んだあと爪や髪が伸びる程度だったのです。しかし今はバイオテクノロジーがあります。培養肉やiPS細胞などがありますし、研究の現場ではがん細胞を培養しています。HeLa細胞と呼ばれるその細胞は多くの研究室に受け渡され、世界中で増えています。もちろん元の細胞を採取された方は亡くなっています。70年が経過しても、その方の細胞は生きていて、世界中の病院の研究所で使われ、毎日学生実習で培養され増やされています。生命活動としては絶対に生きているわけですね。

呉氏 細胞の生命活動として生きている。

小宮氏 そのことと、人が生きているということが、同じ「こと」を指すと思えません。「こと」を指す言葉があるかは、文化にその概念があるか、その出来事を大切に扱っているかを示しています。生きているという言葉の扱いが雑すぎる気がするのです、ちゃんと切り分けたいのです。まだ私には、人は何か？という問いには手が出せません。しかし、生きているとは何か？という問いには、以上のような研究アプローチで取り組めそうです。人は何か？の前に、生きているとは何か？を問う研究をして、世の中の人たちとしゃべって、コミュニケーションの主体が活動することを指す「生きている」という言葉は、生命活動の意味ではないということ整理したいのです。

呉氏 小宮さんにとって生きている、生きるというのは、分子生物学的な意味ですか、それとも人間の中で使われている一般的な方ですか。どちらが生きるだと思えますか？

小宮氏 研究者としての作業の中で扱うのは、細胞の生命活動という意味での「生きる」です。意味の整理を進めていくと、それがどういう風が変わっていくか。たとえば、山は生きているとか、地球は生きているという言い方には違和感がありません。でも、生物学のテストならそれは当然バツです。多くの人にとって、その区別はなんとなくついていきます。山は生きていると言うけれど、それは生物ではなく環境で、生き物が生きていくために大事な環境というリスペクトも含めてうまく整理ができています。同じ

アプローチで、もし生命活動をする細胞がゼロから作れる時代になったら、人間が「生きている」という意味とは異なる活動をするものとして、細胞も「環境」のような位置づけに変わるでしょう。生物と無生物のあいだ、生きているものとそうでないものとの違いが一番の境界だと、この数百年、私たちは考えていたわけです。バクテリアなどの単細胞生物も含めて生き物を、生きている自分の側に入れていきます。しかしゼロから細胞が作られるようになったら、おそらく境界線がずれて、バクテリアは生きている環境という認識に変わり、人間や動物は生きている上でさらに「何かを思う存在」というように線引きが変わるでしょう。その整理をしておかないと、世界観の分断が起こるかもしれません。日本人は命をいただくということ意識し、いただきますとって食事をしますが、食べるのが培養肉だったら、その意識は揺らぐでしょう。殺すこともなく、痛みも感じない、単に採取した細胞を増やして食べるのは、これまでとは別の次元の倫理の問題になります。牛などの意識のある動物、何かを思う存在を殺めて自分が生きていることに対して、いただきますというのはある種の美德でした。そういうことがない、バクテリアと同じように生命活動だけを推し進めて増やしたものを食べられるようになったら、それを食べることは、いただきますじゃなくなるのでしょうか。我々が技術を進めていった先に、何をどう食べるか選ぶにあたってどんな倫理を持ち込むのか。もう、何かを思う存在を殺すことを禁止する方が、世の中が豊かになり分断が少なくなるの

か、考えておかなければならないでしょう。今の時点ですら過激な活動があります。話し合いをするためには、対話の前提となる知識を共有しておく必要があります。

呉氏 分子ロボティクスについて、どのようにお考えですか？

小宮氏 私自身の特殊な考え方もかもしれませんが、「生きている」ことを整理するアプローチになる研究だと思っています。もちろんバイオテクノロジーとしての社会実装につながる面はまた別にあるのですが、それ以外に研究にあたって何を考えているのか、動機や意味づけを伝えるのも、サイエンスから世の中への価値提供になるでしょう。工学やテクノロジーが産業応用的な価値なら、サイエンス、理学は文学的というか、人が生きていく上で必須の、それがないと混乱して豊かに生きていけなくなってしまうものという価値はあるでしょう。

呉氏 要素がたくさん出てきました。培養肉の例えがありましたが、植物などはどういうふうに捉えればいいのでしょうか？

小宮氏 私の今の理解では、脳神経系がないものはものを思っていないでしょう。いろいろな反論があると思いますが、お互い全部の分野を知ることはできません。こういう問いかけが対話のきっかけになって、学会でも日常の対話でも「生きる」ことに触れていけると良いでしょう。人間と同じ意味で「生きている」と言えるのは、クラゲあたりが境目でしょうか。生命とは何か？の話によく登場する若返るクラゲ、ベニクラゲというのがいます。成熟したあとまた幼生に戻り、何度も生き直して寿命がないのです。

呉氏 そういうクラゲがいるのですね。

小宮氏 日本にもいる小さな種類です。記憶というのは抽象的なものではなく、特定の分子や細胞のネットワーク、あるいはネットワーク活動に刻まれていると思います。体を大人から子どもに戻すと記憶はなくなり、そんなことをしたら人間や大抵の動物は混乱するでしょうが、クラゲぐらいなら混乱せずに生存が可能なでしょう。クラゲは、若返るという戦略を取って生きられます。でも人間が若返りをすると個が喪失してしまいます。別にそれでもいいかもしれませんが。私は今は小宮ですが、若返ったあとはタカハシになって、タカハシの人生しか思い出せない。小宮だったときの人生は知らない、そんな生き続け方だと思います。その前に生きていた小宮はいなくなり、人としては死んだということと同じでしょう。

宮野氏 たとえばそういう問いを、答えはないけれど、みんなで聞きたい。

小宮氏 サイエンスのアウトリーチとかサイエンスコミュニケーションをしましょうと行って、今の科学者は科学のことを伝えようと思っ過ぎています。私は、科学者が社会のなかにある疑問をどれだけ聞かかが大事だと思って、そういうプロジェクトで活動しています。聞いた上で、世の中の人にとって必要な対話や答えをサイエンスの立場から返すことで、文学的な意味での価値を社会に還元できるはずなんです。

呉氏 なぜ350年ぶりと書いてあるのでしょうか？

小宮氏 微生物を発見したのは、「微生物学の父」と呼ばれるレーウエンフックです。

彼は生きた細胞を初めて観察しました。ナチュラルフィロソフィーについては、専門の先生にお聞きした方がいいかもしれませんが、ヨーロッパ的な価値観では、動物とそれ以外の線引きは明確でした。多細胞だと動かない戦略の植物と動物のちがいは明確ですが、単細胞レベルではけっこう動くものがあるので、顕微鏡で覗いたときに動物だと思ったかもしれません。やがて単細胞生物も動物も同じ生命という括りになりました。

呉氏 それは350年前ですか？

小宮氏 はい。1674年頃です。本来は、人間が生きている、死ぬというとても大事なイベントを指す言葉が、生物学でいう、細胞の生命活動としての生きていることと混同されてしまいました。そこをもう一度切り分けましょう、というのがタイトルに込めた気持ちです。

呉氏 いろいろな要素があって迷うところですが、関心があるのはやはり、生きることと、生きていないことの境目ですか？

小宮氏 自分の関心というよりは、とても大事なことが世の中にはたくさんあるけれど、これは誰も大事に扱っていないようだから、自分が始めようかという感覚です。少しおこがましい言い方かもしれませんが。

呉氏 小宮さんをご自身の研究の紹介を通じて、たくさんの人に何を考えてほしい、どういう視点を得てほしいとお考えですか？

小宮氏 私は自分で思いつくことしかできません。この世の中は、他の人がいるから面白いことが起きます。だから、みんなが

それぞれ自分のことに全力を發揮してほしいです。もし發揮できない状況にいる人に、たまたま私の研究から何かヒントになるものがあるなら、それを伝えたいと思います。とにかくみんなで面白がりたいですね。だから何を考えてほしいかといわれたら、私は自分の考えたいことを考えるので、みんなも勝手に考えてください。みんなそれぞれ勝手に考えるけれど、それをお互い楽しめるよう、全力でできる状況づくりを助け合いたいと思っています。

呉氏 初めて分子ロボティクスという言葉を見つけたとき、生命を作り出したいのかと思いました。しかし小宮さんは、在り様を理解するほうに関心があるのですね。

小宮氏 そうですね。論文を出すとか、テクノロジーがある方向に向かって進んだということに、絶対的な価値があるとは思えません。もちろん職業的な責任は果たしますが、それだけではたぶん歩みが止まってしまうタイプなので、活動の軸は複数ほしいと思っています。

呉氏 興味関心を広げて軸を複数持つのは、今は難しい雰囲気ですね。

男性A コミュニケーションできるのが生きている状態となると、コミュニケーションがとれなくなった老人はどうでしょう。高齢化によって、社会的にどういふ変化が起きるのか想像できますか？

小宮氏 人が自立して生きる存在であるというイメージが変わるのではないのでしょうか。赤ちゃんのときにはまだコミュニケーションができなくて、老人のどの時点で肉体的に死んで、その前のどれくらいの期間コミュニケーションが失われるかわ



かりませんが、私たちの体のシステムでは必ず起きることです。それが起きたときにどれだけ生きられるかは、社会システムをどう作っていくかの問題でしょう。それが起きるのをできるだけ避けた人もいるし、別にそれは自然の姿だからいいという価値観もあります。そのなかでなるべくコミュニケーションをとれる方が楽しいから、という方向でテクノロジーの研究もされるでしょうし、生きるという意味は大きく変わらないでしょう。先ほど、人間や動物は生きています。さらに何かを思う心や意識がある存在と言いましたが、電気回路的につながった細胞ネットワークの中だけで意識が生まれるとしたら、細胞である必要はなくて、電気回路で良いかもしれません。人工物のなかに人間と同じ心が生まれる可能性は、今の私の知識では否定できません。それができたときに、そんな存在は認めない、あるべきではないというのはナンセンスです。25年ほど前に、クローン羊のドリーが誕生したときのニュースに違和感がありました。クローンが生まれましたがこれは是か否か、というようなことを言っていました。ヒトラーを作ったわけではないし、一卵性双生児と同じで同一人物を作る技術でもありません。技術ができたということは、いつクローン人間が生まれていてもおかしくないわけです。技術の活用について是非を問い、規制することは必要ですが、クローン技術で生まれた人に向かって、クローンはあってはいけない存在だというような言い回しに違和感を感じました。それは大変な差別です。自分がクローンだったらどう感じるでしょ

う。それと同じ意味で、電気回路上に心が生まれたときにどう扱うか考えておくべきです。存在が是か否かを問うのは倫理的ではありません。

呉氏 SFのようです。

宮野氏 そういう制度に対する問いを、自分たちの日常生活のどこかに持つのは大事でしょう。そのために、強引に落とし込むきっかけがあればいいと思いました。何かあるでしょうか？

小宮氏 テキストをスライドで映すようなものを、舞台上で見るのが好きです。映画ではどうしても視覚情報だけになるので、人の息づかいや声の音圧なども感じられる舞台がいいですね。人が無言で日常を演じている場面に、サイエンスが提供する視点から持ってきた印象的な言葉を映して、観客の気持ちにフックが掛かって持ち帰ってもらえれば、鮮烈な対話になるのではないのでしょうか。詩集のように何かを受け取ってくれる人がいるかもしれません。そういう言葉が出版物の中で文字になっているのを見たことがなかったので、それを用意して、まず世の中に出してみたいです。

呉氏 おそらくみんなは、なかなかその思考に追いつけないでしょう。いろいろなことが小宮さんの中でつながっていますが、他の人には簡単に読み解けないでしょう。私も、30分お話を伺って入り口だけ触ったというのが正直なところです。

男性A 宗教がしてることとかなり近いことのような気がします。やはりお経。仏教は同じ見方ではありませんが、近い内容を伝えています。入れ物としてはお経。

宮野氏 お経、いいんだよいいんだよ、お経。

呉氏 すごいお話でした。ピンときている人もいますが、私はまだピンときていません。私は、このすばらしい知識の体系を空間に落とすとしたら、誰かといろんな地図にしてみたいですね。法律専門家とか、仏教など宗教の専門家と合わせてみるとか。小宮さんの脳内地図ではこことここがつながっているとか、ご自身のなかではしっかりしているのですが、しゃべってもおそらく十分伝わっていないのではないのでしょうか。いろいろな方法で脳内を開く作業をされるといいと思いました。それを見たいですね。



# 16

## 唯識（ゆいしき）～仏教 が生んだ心の哲学～

---

**近藤 伸介** Kondo Shinsuke

佛教大学総合研究所・特別研究員

佛教大学総合研究所の特別研究員の近藤伸介です。もともと大学院で西洋哲学を研究していたのですが、その後縁あって仏教に興味を持ち、30代半ばにして佛教大学大学院に入学し、仏教の研究を始めて現在に至ります。私の専門分野は、大乘仏教の哲学である唯識（ゆいしき）です。研究していくにつれ、この哲学の深さに驚かされ、西洋のどんな哲学にも劣らない内容と体系を備えていると確信するようになりました。しかし残念ながら、この哲学の知名度は日本においても世界においても西洋の著名な哲学に比べて低いままにとどまっています。この機会に少しでも多くの方に唯識について知っていただけたらと期待しております。

私の研究分野は、大乘仏教の唯心論哲学である唯識です。おそらく多くの人は哲学というとプラトンやアリストテレス、ニーチェやサルトルといった西洋の哲学者を思い浮かべるとと思います。そもそも仏教の中に哲学があることすら知らない人がほとんどではないでしょうか。しかし、大乘仏教には中観と唯識という二大哲学が存在します。しかも、中観は2、3世紀、唯識は3、4世紀ごろに始まったもので長い歴史があります。

そもそも仏教とは、紀元前の昔、開祖である釈尊が自分の心を深く観察し、悩みや苦しみの原因を究明したところから始まりました。よって、心の働きや構造に関しては、西洋のどんな思想にも劣らない、それどころか、現代の心理学をも凌ぐような深い分析を遥か昔から行っていたのです。唯識は、そうした仏教の知見を集大成し、体系化した思想であり、哲学であると同時に、仏教の心理学とも呼べるものです。しかも、その世界観は壮大で、物質も含めた現象世界のすべてを心の根底を成すアーラヤ識から生じる表象として説明します。アーラヤ識とは、生死を超えて存続する我々の存在基盤であり、現世だけでなく、遥か過去世以来、我々が心で思ったこと、感じたことの一切が潜勢力としてその内に蓄積されています。そして、それらが我々の人格、及び我々が認識する内的・外的世界の一切を形成していると言います。

唯識の強みは、西洋哲学では語られることのない、解脱における心の変化や輪廻転生を可能にする心の仕組みなどについても積極的に語っているという点です。また、唯識は哲学として厳密な論理構造を持っているため、西洋哲学と比較することが可能であり、実際私はこれまでベルクソン、ショーペンハウアー、ヒラリー・パトナム、ロバート・ノージックといった哲学者、さらにマズローといった心理学者と唯識の比較研究を行ってきました。私が提案したいのは、唯識という仏教哲学が、西洋哲学や心理学、さらには脳科学といった他の分野と自由に対話できる空間作りです。そのゴールは、様々な分野がそれぞれの専門知識を出し合い、互いに学ぶことで東西の思想的な壁を破壊し、真に世界的・普遍的な思想の構築を目指そうというものです。できれば寺の広い本堂で、仏像や枯山水の庭を眺めながら、リラックスした雰囲気ですくばらんに互いの分野について語り合えたらよいと思います。何気ない会話の中から互いに共有できる要素を見出すことで、学問領域を越えた新たな思想の可能性を探りたいと思います。



矢代氏 まず、唯識（ゆいしき）という言葉の意味について説明していただきたいのですが。

近藤氏 これは英訳したほうが分かり易いかも知れません。かつては唯識の識をmindと訳し、Theory of mind-onlyと英訳していましたが、近頃は識を表象を意味するrepresentationと解釈し、Theory of representation-onlyと英訳することもあり、このほうがより正確に唯識の意味を表していると思います。

矢代氏 表象とは、音楽なども含めて、ある対象が知覚を通じて頭のなかに浮かび上がることだと認識していますが、オンリーというのは何を意味しているのでしょうか。

近藤氏 われわれが認識している世界は、すべて表象に過ぎないということです。

宮野氏 では、物質によって作られている世界も実は心が生んだ表象ということでしょうか。

近藤氏 そうです。われわれが物質と呼んでいるもの、普通それは心とは異なるものだと考えますが、唯識はそのように考えません。われわれが物質と呼んでいるものも含め、すべてはわれわれの心が生み出した表象であると唯識は言います。唯識は徹底した唯心論なのです。

矢代氏 われわれが認識しているものは、すべて頭で生み出しているということでしょうか。

近藤氏 頭で、という誤解があります。唯識によれば、頭を含むわれわれの身体も心が生み出した表象です。よって、頭が心を生むのではなく、逆に心が頭を含む身体を生じさせているのです。唯識では、われわれの心の根底にはアーラヤ識と呼ばれる存在基盤があり、すべての表象はそこから生じると言います。われわれの身体もそれを取り巻く環境世界も、すべてはアーラヤ識から生じた表象なのです。ただし、これはとても重要なことなので注意してほしいのですが、唯識は独我論

(どくがろん)ではありません。つまり、実在するのは自分の心だけで、自分の心がなくなれば同時に世界も他者もすべて消滅する、といった思想ではありません。なぜなら、自分以外の他者にもそれぞれのアーヤ識があるからです。10人いたら10人のアーヤ識がそれぞれの表象世界を生み出しており、しかもわれわれを取り巻く環境世界は10人で共有されるのです。

矢代氏 どのように共有されるのでしょうか。

近藤氏 仏教では、われわれのあらゆる行い、身体的・精神的行為をカルマ、業(ごう)と言います。われわれのすべての行い、業は、心の根底をなすアーヤ識に潜勢力を残していきます。その潜勢力を唯識では植物に例えて種子(しゅうじ)と言います。つまり、われわれの日々の行いは、それがどんな些細なものであれ、その後必ず何らかの種子を残していくのです。例えば、何か悪いことを考えれば、それがアーヤ識に悪い種子として植え付けられ、縁があれば、未来のどこかで再び悪い心として現れることとなります。われわれを取り巻く環境世界もやはりアーヤ識の種子から生じる表象なのですが、他の表象と違うのは、それが誰か一人の種子から生じるのではなく、その世界を共有するすべての者の種子が共働して表象としての環境世界を生じさせるということです。唯識では、そのような環境世界を生じさせる種子を共相(ぐうそう)の種子と言います。それは共通の縁があれば、その世界の住人たちに共通の表象を生じさせる種子であるため、われわれは同じ一つの表象世界を他

者と共有することができます。唯識がわれわれの認識する世界をすべて表象であるとしつつも独我論に陥らないのは、この共相の種子があるためです。共相の種子をそれぞれが有することで、われわれは一つの環境世界を共有し、そのなかで他者と交流し、他者と共通の認識を持つことができるのです。

矢代氏 では、共相の種子から生じる表象としての環境世界は、そこに住む人々によって共有される共同幻想と言ってよいのでしょうか。

近藤氏 その通りです。それは映画『マトリックス』に描かれた幻想世界に似ています。あの映画の舞台は人間が人工知能に支配された未来世界で、人間たちはカプセルのなかで培養され、頭にプラグをつながれて、人工知能が作ったマトリックスという仮想空間を見せられています。人々はその同じ一つの仮想空間を共有し、それを現実世界だと信じ込んでいました。彼らは実際にはカプセルのなかに閉じ込められていながら、マトリックスという共同幻想のなかで互いに交流し、普通に生活していると思込んでいました。唯識の語る世界もこれに似ています。われわれは心が生み出した表象としての環境世界を共有し、その共同幻想のなかで互いに交流し、生活しています。ただ、映画と違うのは、その共同幻想が人工知能によって作られたものではないという点です。唯識における表象としての環境世界は、それを共有するすべての者たちの共相の種子が共働することで作られています。ところで仏教には、分別(ぶんべつ)と無分別(むぶんべつ)という言葉

があります。われわれは普通、何かを認識する際、「これは〇〇であり、あれはxxである」と対象を分類し、概念化した上で認識しています。これは分別知によって認識された世界です。しかし、仏教では、分別知によって構成された世界は本当の世界ではないとされます。真の世界は、分別知の対極にある無分別智によって初めて認識されると言います。世間一般では、分別があるのはよいことだとされますが、仏教では必ずしもそうではありません。

矢代氏 それはすべてを受け入れることで初めて真実を知る、ということでしょうか。

近藤氏 その「すべてを受け入れる」というのが、一切の煩惱（ぼんのう）を捨てるという意味であればその通りです。ただ、その境地に至るには相当の修行が必要ですし、その修行の過程で働くようになるのが無分別智です。それは対象を分類することも概念化することもなく、ただありのままに見るという智慧（ちえ）です。

矢代氏 近藤さんはその無分別智による世界を体験したことがあるのでしょうか。

近藤氏 残念ながら、悟りの世界のような、無分別智の世界の体験はありません。ただ、唯識という思想を作ったのは瑜伽行派（ゆがぎょうは）、サンスクリット語でヨーガーチャーラと呼ばれる人たちです。ヨーガはいわゆる修行のヨーガ、アーチャーラは実践という意味です。つまり唯識という哲学を作った人たちは、ヨーガという修行の実践者たちなのです。彼らは実際に瞑想修行のなかで体験したことを言語化することで、唯識とい

う哲学を作り上げました。

矢代氏 実際に体験したことを言葉にし、哲学として組み立てたということですね。

近藤氏 はい。単なる机上の思索ではなく、実体験の言語化によって作られた哲学というのが唯識の大きな特徴です。そこが普通の哲学や心理学などと異なるところでしょう。

矢代氏 では、西洋哲学や心理学にはない、唯識の思想的な特徴とは何でしょうか。

近藤氏 その思想が、仏教の開祖であるお釈迦様以来の仏教の教えの上に作られているということだと思います。お釈迦様はおおよそ2500年前、シャカ国の王子として生まれ、物質的には不自由のない生活をしていましたが、幸福を感じることができず、いつも死への不安や生きることへの疑問に取り付かれていました。そして29歳のとき、ついに王子の地位を捨てて出家し、6年間の修行を経て悩みや苦しみを克服し、解脱したと伝えられています。その過程で心の分析も徹底的に行いましたが、お釈迦様が弟子たちに語ったのは、その悟りの全体のほんの一部です。お釈迦様の死後、数百年経って大乘仏教が起こり、新たに多くの経典や論書が作られましたが、それらはお釈迦様が到達した境地を体験した人たちがその体験を言語化することで成立したものです。よって、唯識を含む大乘仏教の根底にはお釈迦様の悟りの体験があります。そして、特にお釈迦様による心の分析を体験し、論理的に体系化したものが唯識なのです。よって唯識には、諸行無常（しよぎょうむじょう）、諸法無我



(しよぎょうむが)、一切皆苦(いっさいかいく)、涅槃寂静(ねはんじやくじょう)、また輪廻転生(りんねてんしょう)といった仏教伝統の教えが含まれています。それは西洋哲学や心理学にはない唯識の特徴と言えます。

矢代氏 お釈迦様以来の教えを継承しながら、しかも論理的な体系を持っているというのが唯識の特徴なのです。

近藤氏 はい。論理的な体系を持っていることで、西洋哲学との比較も可能になります。実は、私は仏教を学び始める前、大学院で西洋哲学を学んでいたもので、その経験を活かし、現在は唯識と西洋哲学との比較思想研究に力を入れているところです。お釈迦様自身の言葉を伝えているとされるパーリ語の原始仏典は、日常的な言葉で書かれているので分かり易いのですが、論理的な体系がないので西洋哲学と直接比較することは難しいと言えます。

矢代氏 論理的な体系を備えた唯識の登場によって、仏教は西洋哲学と直接比較できるよう

になったということですね。ところで先ほど、われわれのあらゆる行いはアーラヤ識に種子を残していくという話がありましたが、仏教で言う因果応報という考え方について唯識ではどのように説明しているのでしょうか。

近藤氏 因果応報というのは、過去の自分の行いが現在の自分に返ってくるということです。仏教には輪廻転生という考え方があり、体が死んでも心は残り、その心の状態に従ってやがて再びどこかの世界に生まれ変わると言います。ですから、われ

われは無限とも言える過去から生まれ変わりをくり返して現世に生まれたということになります。よって、仏教の因果応報では、現世における過去だけでなく、はるか過去の行いが現世で返ってくることもあるということになります。唯識では、われわれの無限とも言える過去からのすべての行いが種子としてアーラヤ識に蓄積されていて、適切な縁があれば、今この瞬間にも表象として現れてくると言います。今現在、われわれが行っていることも未来のどこかで現れる種子としてアーラヤ識に蓄積されています。それは適切な縁を待って表象として現れるので、いつ現れるのかは分からず、現世かもしれませんし、来世かもしれませんし、来々世かもしれません。唯識では、このようにアーラヤ識に蓄えられた種子によって因果応報を説明します。たとえ身体が死んでも、心の根底をなすアーラヤ識はなくなりません。アーラヤ識は最終解脱に至るまで存続し、よってそこに蓄積された種子も存続します。ですから、われわれはあるいは100回前の過去の報いを今現世で受けているのかもしれない。それが種子というものです。

宮野氏 今われわれがこうして話していることも100年後に実を結ぶ種子になるかもしれない

ということですね。

近藤氏 そうです。仏教が語るこのような生まれ変わりも、アーラヤ識という存在基盤があれば矛盾なく説明することができます。唯物論のように体が心を作り出しているという考え方では、輪廻転生は語れ

ません。体が死ねば、心も消滅してしまうからです。一方、唯識は徹底した唯心論なので、心の根底をなすアーヤ識が表象としての身体と環境世界を作り出すと言います。よって、たとえ身体的に死んだとしても、アーヤ識が適切な縁を待って、表象としての新たな身体を生じさせることで輪廻転生は可能となります。その際、仏教では六道と言って、心の状態にしたがって天界から地獄まで6つある世界のどこかに生まれると言います。われわれは今生では人間として生まれましたが、来世では畜生として生まれるかもしれませんし、あるいは神として生まれるかもしれません。それを決めるのは、今の人生を通して自分がどんな心を形成していくかです。そして、6つの世界では、それぞれの住人たちの共相の種子によって共同幻想としての環境世界が作られ、共有されています。人間界には、人間たちの共相の種子によって形成された共同幻想としての環境世界があり、それをわれわれは生活の場として共有しています。そのため、われわれは共通の縁に会えば、互いに共通の表象、共通の認識を持つことができます。今私が語っている言葉も、ここにいる皆さんに同じ言葉として認識され、共有されています。そのように、われわれの共相の種子が共働して作り上げた共同幻想としての環境世界のなかで、われわれは交流し、互いに影響を与えあっているのです。

呉氏 では例えば、もし矢代さんが死んだとしたら、矢代さんのアーヤ識はどこに残るのでしょうか。

近藤氏 もしアーヤ識が身体や環境世界のどこか空間内に残っているなら、その発想を変えなければなりません。時空間というのは分別知の産物であり、その分別知も、あるいは表象としての身体も環境世界もすべてはアーヤ識から生じたものです。よって、時空間のなか、あるいは身体や環境世界のなかのどこかにアーヤ識があるのではなく、むしろそれらがすべてアーヤ識のなかにあると言ったほうが正しいのです。ですから、アーヤ識は時空間内のどこかではなく、ただわれわれの存在基盤としてあり続ける、としか言えないような気がします。いつかわれわれがお釈迦様のように最終解脱に至るときが来るまで、アーヤ識は表象を生み、分別知を生みながら存在し続けます。アーヤ識が消滅するのは最終解脱が成就したときです。仏教では諸法無我と言って不変的な実体を否定しているので、アーヤ識もやはり永遠に存続する実体ではなく、絶えず変化し、やがて消滅するべきものです。ですが、最終解脱に至るまではわれわれの存在基盤として存続していきます。いずれにせよ、脳が心を作り出すとか、アーヤ識が身体はどこにあるという考え方は唯物論的発想なので、その発想を変えないと徹底した唯心論である唯識は理解できないでしょう。

矢代氏 近藤さんは、そもそも唯識のどこに興味を持たれたのでしょうか。

近藤氏 私はもともと西洋哲学を学んでいたこともあって、論理的に語られていないと納得することが難しいのです。よって、仏教に興味を持ったときも、仏教の教えを

論理的に語ってくれる唯識に自然にたどり着きました。もともとインド的な輪廻転生の考え方が自分にはとても自然に思えたので、それを矛盾なく説明してくれたことや、過去世の報いが現世で生じるという因果応報の思想を論理的に説明してくれたことで唯識に惹かれ、本格的に学びたいと思いました。

西川氏 先生は他の分野の方とお話しされることはあるのでしょうか。

近藤氏 何年か前、比較思想学会で唯識とベルクソンの比較研究の発表をしたとき、特に西洋哲学の研究者の方々が興味を示してくださり、唯識や仏教の考え方について多くの質問をいただきました。ですから今後はまず、同じ哲学という土俵で西洋哲学の方ともっと対話ができたら面白いと思います。他にも、心理学や脳科学の研究者の方とは、瞑想の過程で生じる変性意識状態について語り合える余地があり、お互いに新たな発見があるのではないかと思います。また、キリスト教の方々には輪廻転生という考え方がないので、それを論理的に矛盾なく語ることで唯識に興味を持ってもらえるかもしれません。キリスト教と仏教の死生観の違いについても語り合えたら、お互いに大いに学ぶことができそうです。このように様々な分野の方々と、できればお寺など、ゆったりした場所でリラックスして自由に会話することができる空間を私は提案したいです。何気ない話のなかに、専門分野の壁を越えた総合的かつ普遍的な思想へとつながるヒントを見いだせるのではないかと期待しています。ともかく唯識は、西洋哲学に比べて知名度、認

知度が低いので、少しでも世の人々に興味を持ってもらえるような空間を作りたいと思っています。

# 17

## 記憶の対話を通じてインクルーシブな社会の実現へ

片岡 真輝

Kataoka Masaki

東京外国語大学・講師

片岡真輝。東京外国語大学講師。オーストラリア日本国大使館専門調査員、ジェトロ・アジア経済研究所勤務を経て2022年より現職。専門は国際関係、フィジー地域研究、集合的記憶。記憶学 (memory studies) の理論をベースにフィジーの民族問題やアイデンティティについて研究している。主な著作は、“Formation of Diaspora Network and Reconstruction of Collective Memory: The Case of Indo-Fijians.” (2021) in S. Ratuva. et al (eds.) Risks, Identity and Conflict: Theoretical Perspectives and Case Studies. Palgrave Macmillan Singaporeなど。

記憶学は、記憶の分析を通じて社会や人々の行動を研究する学問領域であり、社会問題の解決に応用する試みは多数ある。例えば紛争後の社会では、対立集団間での相互理解が促進されにくい。多くの場合、自分こそが被害者だと主張する一方、自自分の加害行為は正当化しようとする。その結果、対立集団間で紛争に関する異なる歴史認識が存在することになり、これが和解の阻害要因になる。そこで多くの紛争後社会では、真実委員会と呼ばれる歴史を共有化させ、他集団の紛争記憶に耳を傾ける機会を提供する取り組みが行われてきた。

インクルーシブな社会の実現には、記憶が多様であることを受け入れた上で、他者の歴史認識を尊重し、相互理解に努めることが必要になる。そのためには、寛容さの精神の下で歴史対話を実践できる空間が求められる。しかし、現代社会は自由に歴史を語ると「炎上」する時代だ。このような社会では容易に対立軸が生み出され、社会が分断される。したがって、他者の歴史を受け入れる場をつくることは難しい。特定のイデオロギーを持ち、異なる歴史を真っ向から否定し攻撃する傾向にある人ほど、歴史をめぐる議論に参加したがるからだ。ここで想定している記憶対話の場の目的は、議論して相手を打ち負かすことではなく、対話を通じて他者の記憶に耳を傾けることだ。つまり、議論ではなく対話ができる人が望ましい。

おそらく先入観なく他者の記憶に耳を傾けることができるのは若者だ。はじめは10代の学生を対象にした記憶対話の場を設けてはどうか。彼らは過去の紛争や戦争をテレビや親との会話、歴史の授業を通じてイメージするが、他の社会では同じ歴史イベントがどのように語られているのかわからないことが多い。若者なら、自分の知らない歴史の側面を純粋な新しい知識として吸収できるのではないか。例えば日本とアメリカの若者が原爆投下の意味について考えたり、日本とドイツの若者が敗戦について語り合ったりすることが考えられる。

排他的で分断を助長するポピュリズム政治が跋扈する今日において、寛容さを持ち、他者の記憶を「そういう人もいるのだ」と素直に受け入れ、相手の立場を想像することができる人が多ければ、インクルーシブな社会に近づくことができる。だからこそ、偏見の少ない若者に記憶対話の場を提供することは意味のあることだと考える。



呉氏 記憶の対話で相手の立場を想像できるようになるということですが、記憶学にたどり着くまでを教えてください。

片岡氏 もともと記憶を使った研究に興味があったのではなく、修士の学生として、民族関係や紛争など、国際関係学を専攻していました。移行期正義という学問分野で、紛争後どのように和解を達成するかという授業がありました。紛争後、新たに民主的な社会を築くには、それまで対立していた集団と和解を達成しなければなりません。しかし、対立集団によって紛争の認識や記憶は異なります。和解を達成するためには、同じ共通認識を持ち、過去を処理する必要があります。70年代、80年代から、そのための仕組み作りについて議論され作られたのが、真実委員会または真実和解委員会です。紛争をどのように社会で認識していくか、対立集団同士での対話などにより、公的な歴史を作るのです。このように、共通の過去を認識することが、和解を達成する

ための素地になります。こういったアプローチに興味を持ち、記憶とは相対的かつ社会的に構築されたものであるということを知りながら、記憶を研究するようになりました。

呉氏 国際紛争に興味を持ち、修士の研究テーマに据えられた理由を教えてください。

片岡氏 最初から国家間の対立や問題に興味がありました。法学部3年での専攻選択の際に国際法を選び、国家間の戦争だけでなく、国家間のリーガル紛争などを学びました。この学部で学んだことが、国際紛争に興味を持ったきっかけです。また、国際法だけでなく、国家間対立に興味を持ち、そのメカニズムや解決法に興味に移り、修士の卒論に至ります。

呉氏 そのとき具体的に研究されていたのは、どちらの国でどの時代でしょうか。

片岡氏 修士では、南アフリカのアパルトヘイト後です。今はフィールドが変わり、太平洋島しょ国のフィジーについて研究しています。

呉氏 記憶の対話を通じて相手の立場を想像できるようになることが大切である、ということですが、改めて記憶学とはどのようなものか教えてください。

片岡氏 英語ではメモリー・スタディーズと言われており、学際的な研究領域で、これ自体はディスプリンというわけではありません。社会学や心理学でも、記憶については長い間研究されてきました。社会学なら、記憶は集団のなかで社会にどのような影響を与えるのか、心理学では、記憶は個人の行動をどのように変化させるのか、といったことです。しかし、80年代、90年代には、それぞれの分野だけで研究していても発展性がないと考えられるようになりました。つまり、心理学でも社会的な記憶が個人に及ぼす影響を見る必要が出てきて、社会学でも個々の記憶の領域を見なければいけなくなったのです。さらに、グローバル化が進み、分野横断的に、記憶を用いて社会が研究されるようになり、メモリー・スタディーズと呼ばれる研究領域が発展しました。社会学と心理学が最も多いと思いますが、国際関係、政治学、文化人類学、歴史学、文学など、記憶や多様な分野の理論を使った研究が始まったのが90年代です。

呉氏 片岡氏が解き明かしたいものを教えてください。

片岡氏 研究中のフィジーは多民族国家で、先住民系のほかに、植民地時代に移民として入ってきたインド系民族がいます。人口の割合は、先住民系が60パーセント、インド系が35パーセント、ほかの島しょ国の人や、欧州系の白人もいます。先住民

系とインド系は、民族的に対立していた歴史があります。インド系は先住民系の強い政治的権力の歴史を語り、先住民系はインド系の経済力と比べて貧しかった歴史を語ります。しかし、最近では、先住民系の人達がインド系の人達の被害や犠牲の歴史についても共有するようになってきました。このような変化により、今は民族融和に進んでいます。このことは、紛争解決や民族対立をどのように解消するかという、いい事例です。相手の記憶や歴史を推し量って共有できるようになると、社会全体が融和へと進んでいくのだと思います。

呉氏 対立はなくなるのでしょうか。

片岡氏 対立はもちろんありますし、今その対立についても研究をしています。

呉氏 片岡氏は、対立を融和に持っていき、対立しなくなっていく、その方法が知りたくて記憶学を研究しているのでしょうか。

片岡氏 記憶学の理論で説明することをゴールにして始めたわけではありませんが、フィジーの研究に、修士で研究していた記憶学を使うと、フィジーの民族関係はどう説明できるのかと考え、視点を新たに付け加えていくうちに、深く研究することになりました。

呉氏 民族融和に役立つことより、記憶学そのものに強い興味を持ったのでしょうか。

片岡氏 そうです。それを使って、どのように事象が説明できるかいうところに面白さを感じます。

呉氏 記憶を共有するというプロセスが面白かったのでしょうか。また、記憶の対話が難しいのはなぜか、和解した事例はあるのか、シチュエーションにより記憶学

が作用しないのはどのようなときか、和解が進むなかで記憶学が対応しないことはあるのかについて、お聞かせください。

片岡氏 成功事例はないと思います。歴史の対話は、基本的に対立を生むものと言っていいでしょう。もともと歴史認識や記憶は、集団によって異なります。特に歴史はナショナルなもので、それぞれコンテキストがあるため、集団により異なるのが当然です。当然のことなので、それを受け入れればいいのですが、ナショナルなもの、もしくはエスニックなものになってくると受け入れにくい。歴史認識はアイデンティティのベースなので、あなたの歴史認識は間違っていると言うと、どうしてもアイデンティティの否定、ナショナルなプライドを傷つけられるといったことになります。ですから、歴史の対話をすると言っても、基本的には対立を生んでしまうのです。真実委員会も成功事例のほうが少ないです。社会環境が変われば、歴史認識も変わります。変わりゆくもので、異なって当然なのだということを、まず皆さんが知ること。対話はその先の話です。歴史や歴史認識そのものが重要なのではなく、なぜその歴史認識に至ったのかを見ると、相手が問題視していることに思い至るかもしれません。そこから相互理解が深まっていくので、寛容性が重要です。しかし、我々の歴史だ、という絶対的なものとして見てしまうので、どうしても難しいところでしょう。

呉氏 なぜその結論に至ったのかを知ることが大切だということですが、それにはファシリテーターの力量が問われると思いま

す。記憶の対話を進めるために必要な設え、ファシリテーターに求められる力量、進行の仕方について教えてください。

片岡氏 対話の場面でしてはいけないことは、否定です。まず、そういう人達を呼ばないということ。何が真実かを追及する場ではないということを、場のルールにしなければなりません。正否を問うのではなく、なぜその結論に至ったのかを引き出し、歴史認識を問題視せず、プロセスを共有できるようにすることが重要です。

宮野氏 戦争体験でも、一方的に被害者側の話だけをすることに疑問を持っています。ファシリテーターがプロセスを重視し、しっかりと評価を促すことは、とても大切だと思います。

呉氏 片岡氏は、ファシリテーター側に立つことはあるのでしょうか。

片岡氏 そのような場を設定した経験はありません。

呉氏 対立する人達が和解するための方法論として、この研究は有用だと思いますが、実際に和解に向けた対話を進めるのは難しいのではないのでしょうか。

片岡氏 原爆などの戦争体験を被害者として語ることも、戦争体験を広め、共有するという目的であればいいと思います。ですが対話の場合、戦争体験の共有ではなく、多様な意見を多くの人と共有する場を作ることが目的です。難しいとは思いますが、特定の目的、政治的な目的意識はあまり介在させないほうがいいでしょう。

呉氏 被爆者の方の事例が出ましたが、このような事例の場合、どのような設えで進めるといいのでしょうか。

片岡氏 原爆という言葉1つでも、日本人とアメ



リカ人の認識は異なります。同じ言葉を使っている意味が付与されているので、そこをまず共有し、なぜこの人は原爆という言葉にそういう意味を付与しているのかを知ることが必要です。

呉氏 この事例の場合、アメリカ人と被爆者の両者がいる状況で進めるのと、テキストで進めるのでは、どちらが適しているのでしょうか。

片岡氏 わだかまりが生まれるようであれば、同じ場にはないほうがいいのかもかもしれません。誰を参加者とするか、これはとても難しいです。先入観なく入れる人たちが求められるため、若者は適していると思います。

呉氏 研究や経験のなかで、若い人の可能性を感じているということでしょうか。

片岡氏 可能性も感じますし、インタビューをしても、若者は面白いと思います。

呉氏 面白いと感じる点を教えてください。

片岡氏 ほかの意見を聞くと、それを受け入れやすいところでしょうか。新しく入ってきた情報を排除せず受け入れ、それを踏まえて、もう1度事象を見つめ直すなど、そのような柔軟性は若者のほうがあると思います。

男性B 原爆の話がありましたが、対話に日本人として参加するならば、というような前提があるように感じました。また記憶の話では、東北の話も当てはまるのではないかと思います。津波で岸の上に流された船を、モニュメント化すべきかという問題です。このようなメディアの記憶は、住人の記憶では主体性が出てきますが、自分の記憶ではないことについて議論するのは、かなり慎重にならないと。

片岡氏 我々の歴史認識や記憶は、我々が直接経験していないことのほうが多いものです。まず社会的圧力があり、日本人ならこう答えるべきだという社会的な要請のようなものがあり、それが介在しています。それからモニュメントの話ですが、まさに記憶の場と呼ばれるところで、最近の最も興味深い例は、ブラック・ライブス・マターです。奴隷商人や植民地支配をしていた人物の銅像を、撤去するかしないかという騒動です。その銅像が建てられたころは、おそらく国を発展させた人物をたたえる意味があったのでしょう。そういった意味のある銅像が、時代を経て植民地主義の悪しき遺産となり、撤去派と非撤去派で異なる歴史認識を持つという状況を生み出したのです。

宮野氏 今回とても面白いと思ったのは、人間の記憶だけでなく、モニュメントなどの物に記憶を託している点です。そこにもやはり歴史、記憶があり、それらを生かして、場の力を利用できないだろうか、良き方向に社会が向くようにできないだろうかと考えながら聞いていました。

片岡氏 場が持っている歴史性というものに、社会が意味を与えるのです。ですから、どういう意味を与えるのかが、集合的記憶を作ることに繋がり、社会がどのような方向に向かいたいか、場が教えてくれると考えています。

宮野氏 記憶学で、物をツールとして使うのは有用だと思います。以前、興味深いドラマがありました。初めて会った2人が、大きな積み木でテーブルを作り、完成後にビールを飲み完成祝いをするというものです。2人は作業前に別々にインタ

ビューを受けており、1人は白人至上主義者、もう1人は白人至上主義を嫌う者だとわかる内容でした。そして完成祝いをしているとき、そのインタビューが流れ、互いに対立する思想を持つと知ります。しかし2人は、対話をし、打ち解けていったのです。このことは、共に行動し、完成させて祝杯を挙げるなど、同じ空間を共有することで、対話から和解できたいい事例で、これらを生かせないかと強く思いました。



# 18

## 日本を"みどり豊か"な空間 に: みどりの恩恵の可視化 と"豊かなみどり"の探求

小宅 由似 Oyake Yui

香川大学創造工学部・助教

香川大学創造工学部助教。近畿大学農学部卒業、京都大学農学研究科博士課程修了。博士(農学)。人間環境大学人間環境学部(当時)助教を経て、2020年4月より現職。専門は緑化学。主に樹林の成立を容認したり森林の創出を目指したりする緑化地を対象として、植生の移り変わりを研究している。市街地で触れられるみどりが「ガラス越しに眺める花壇」だけではもったいないと思い、自然観察や講演会を通して生態系サービスの啓蒙活動に取り組む。緑化地のほか、森林や農地なども調査フィールドとするが、一年を通して重度の花粉症。趣味はスキーとガジェット集めと食べること。最近では中四国地方ののゲレンデ食堂を開拓中。

日本の人口のほとんどが住んでいる市街地は国土の割には狭く、「コンクリートジャングル」、すなわちきわめて狭い範囲に人が住みやすいような人工物が密集して成立しています。一方で、中山間地域の里山のような場所では、過疎化や高齢化が原因で山に手を入れる人が減っており、山林が荒れ放題となってしまっています。これらの状態はいずれも「豊かなみどり」とは言いがたいと考えています。

ここでの「みどり豊かな空間」とは「植物を基盤とする生物的空間: 植物と、それを利用する動物やその他の生物が織りなす空間」と定義します。日本はほとんどの地域で温暖多雨な気候であり、草が生え、木が生え、やがて森林に遷移していきます。森林だけが「みどり豊かな空間」ではありません。

様々な草花が寄せ植えられ、チョウなどの小動物が集う花壇もひとつの「みどり豊かな空間」です。森林だけでも花壇だけでもない、多様な「みどり豊かな空間」がどこでも見られるようになってほしいと思っています。

市街地の「みどり豊かな空間」には、例えば並木道があります。街路樹は日差しを和らげる木陰を作ってくれるほか、車道と歩道の境界を示したり、車道からの風を和らげてくれます。植物は多様な恩恵をもたらしていますが、多様であるがゆえ、また特化しているわけではないため、その恩恵の全体像がわかりにくくなっています。これらの可視化のために「単位を共通化する」ことを試みており、現在最も普及している手法では貨幣価値「〇円相当」で表現しています。アメリカではWeb上の地図に樹木の位置・種類・生態系サービスの価値を掲載し、いつでも閲覧できるサービスがあります。日本でもQRコードの読み込みやARカメラにより樹木の恩恵を手軽に確認できるようになれば、人々が植物を見る目も変わるかもしれません。

郊外部の「みどり豊かな空間」の評価についてはまだ研究があまり進んでおらず、その価値を可視化する手法は確立されていません。一方で里山では過疎化が進み、耕作放棄地や放置林が増えてきており、これまで山奥で暮らしてきた動物が里山に降りてきて畑を荒らしたり、増えすぎた動物によって背の低い植物は食べつくされてしまったりしています。この状態は山間部にも多くの人々が住んでいた時代と比べるといびつな状態といえます。価値の可視化のほか、人にも動物にも「みどり豊かな空間」となるよう、管理や評価の手法の確立が課題です



矢代氏 里山生態学とは、里山をみどり豊かにしていく方法を探る学問なのでしょうか。

小宅氏 それは少し違います。生態学とは、生態系を科学する学問です。生態系というのは、生物とその周りを取り囲む環境の相互作用を含めたシステムを理解する学問です。そのなかでも里山にフォーカスを当てて研究していくものを、里山生態学と呼んでいます。

矢代氏 里山が、どのような仕組みで、どのような生き物がいることで成り立っているかを理解していくということでしょうか。

小宅氏 はい。

矢代氏 コンセプトを拝見し、コンクリートジャングルと豊かな緑や、荒れ放題の山林とみどり豊かな空間が対比されていると感じました。豊かな緑というのは、定義的にどういうもので、なぜそこを目指すのかを教えてください。

小宅氏 緑とは、見ていてきれいと感じるだけでなく、多くの恩恵を私たちにもたらしています。たとえば、二酸化炭素を吸収し

地球温暖化の緩和に役立つ、また洪水の緩和、大気汚染物質の吸着や沈降などです。このような恩恵は、植物や植物の集まりである群落の状態が良い状態であればあるほど発揮されると考えています。また、それは自然環境から見ても、いわゆる生態学の面から見ても、良好な環境を有する生態系であると思っています。この視点に立つと、都市の緑には多くの機能があるため排斥すべきではないと言え、都市から離れた自然環境は、いま残っている森をお手本として良いのかを考えなくてはなりません。私たちのライフスタイルは変化し、昨今では森に入らなくなりました。かつては、まきや食料を取るために森に頻繁に入り、森も人間活動に影響を受け、形や姿が現在とは異なっていました。その関わりがなくなり、森の姿も変わってきたのです。冬に葉を落とすような雑木林も、時間が経過するにつれ、うっそうとした、冬も葉っぱを落とさないような森になり、植生遷

移が進んでいます。そして植生遷移が進んでいる森も、明るい雑木林も、共に存在するべきであると考えるのが、景観生態学です。

矢代氏 1つは、森をつぶすことや、荒れさせるなど、なくすことを考える前に、果たしているかもしれない機能を考えるべきであるということと理解しました。もう1つはどのようなことでしょうか。

小宅氏 市街地や都市など人の生活の隣のエリアでは、あまりにも緑や自然を排斥し過ぎており、もう一方、人から離れたところでは、あまりにも放置し過ぎているということをお伝えしたいと思っています。

矢代氏 森の駄目な状態にも2種類あるということでしょうか。

小宅氏 そうです。

矢代氏 この中で語られているみどり豊かな空間というのは、ある程度人間とのインタラクションがある中で、みどり豊かなものをもっと探求していくべきだということでしょうか。

小宅氏 必ずしもそうではなく、1つのスタイルとして、そのようなスタイルの緑が存在することを願っています。人の隣にあるエリアでは、人と関わりがないと不要と判断されてしまうため、人とよく関わるような緑の形を望みますが、一方、外では人が関わらないような緑もあっていいのではないかと考えています。たとえば屋久島や白神山地などです。

矢代氏 保存されているということでしょうか。

小宅氏 はい。ですが、それだけでは駄目だと考えていて、ある程度人が関わっている、しば刈りをする雑木林のようなスタイルも残したいと考えています。

宮野氏 山を整えるためではなく、人々が日々の糧やエネルギーを取りに行くことで、結果的に整えられた山を残したいということでしょうか。

小宅氏 はい。ですが、現在ではそのスタイルで山を維持していくのは、おそらく無理でしょう。ですので、山を整えるというモーションでも構わないので、何かしら山に手を入れるという考えを持つようになってほしいと思っています。

宮野氏 山が計画的に整えられていたときは、獣害はあまりなかったのでしょうか。それとも、あまり人が山に入らなくなった結果として獣害が増えたのでしょうか。

小宅氏 その原因は、おそらく複数あると思います。かつては人が手を入れていたため、シカは山奥にいましたが、人が入らなくなったことで、かつて人が手を入れていた森に出てくるようになり、そこで食糧が不足したため、人の近くにきたという説もあります。

矢代氏 普通の人は、あまり山の違いは分からないと思います。それを分かりやすくすると、もっといい姿勢、いい態度で山に臨めるのではないかという考えが、ARカメラなどの話につながるのでしょうか。

小宅氏 人としてはそうです。私は森林生態学を学ぶまで、森を守るというのは手を付けないことだと思っていましたが、そうではないということをもっと広く知らせないといけないと思っています。

矢代氏 もっと自然とインタラクションしていくほうが、より多様な森になっていくというような考え方を、都市生活者はどのように実践し、都会がどのように貢献できるのか考えることは、とても大切だと感じました。では、都市生活者ができるこ

とには、どのようなことがあるのでしょうか。

小宅氏 現時点では、まず知ってもらうことだと思います。都市生活者に対して働き掛けられることとしては、公園や身近な緑の整理だと思います。そして、身近な緑が果たしている役割を分かるようにすることが、第一歩として必要だと考えています。ですが本来であれば、自然豊かな国に生まれ育っているのです、どのような恩恵を受けているのかなど説明せずとも、自然というのはかけがえのないものという認識を持ってほしいとも思います。

呉氏 山を読む人、山に詳しい人と一緒に行くと、異なるものが見えるのではないかと思います。

小宅氏 その視点は個人的になかったもので、とてもいいヒントをいただいたような気がします。山の読み方などは、セミナー開催などでは響かないと思いますので、どのようにするといいか、何かアイデアがありましたら教えてください。

矢代氏 山読みの力を高めるには、異なる山に数多く行くしかないのでしょうか。

小宅氏 生態学研究者は、基本的には現場主義が多いです。私自身も、ひたすら現場に行くように育てられてきたため、それ以外の方法を知りません。ですが、これからの世代を、ただ現場へ行けと放り出すのは良くないと思っています。

矢代氏 みどり豊かな空間で望ましいのは、緑のある空間と緑のない空間のどちらだと思うかと問われたら、多くの人が緑のある空間を選ぶと思いますが、実際に緑のある空間を維持するのはハードルが高いのではないかと感じています。たとえば個人の庭という狭い範囲でも、水やりや害

虫駆除などに始まり、緑のある空間に手を掛ける必要が出てくると思います。地域での合意をどのように形成していくかなど、実際の香川での活動で、保存がより良く進んでいる事例がありましたら教えてください。

小宅氏 現状では、その場所が有する恩恵の周知に尽きる、という状況です。現在、雑草が生い茂る大学キャンパスの一画を掘り起こし、新しく庭を造る取り組みを進めています。大学の許可を得る際、その一画が工学部のキャンパスのため、建築、土木系の先生方にご納得いただけないと協力は得られませんでした。そのため、その一画を庭として整えると、昨今の雨の降り方の変化に応じて、洪水を減らすための緑地を提案する際の実験庭として使用できるのではないのでしょうか、というようなご説明をして、ご納得いただき、無事着工予定となりました。ほかにも、森林保全への参加者を募る際、幼稚園や小学校に、自然教育の場としての可能性を説明するなど、里山の持っている力は、手を入れないと発揮されないのだということをアピールして、参加者を募ってきました。やはり、恩恵のアピールが大切なのではないかと考えています。

矢代氏 恩恵のアピールもあると思いますが、個人的には、貢献している人が可視化されていないことも問題ではないかと思いました。たとえば水やりカレンダーのようなものを作り、誰が水やりをしたか一目瞭然であれば、少しやる気が出るというような、貢献していることが評価されることも必要ではないかと思っています。そして、この貢献ですが、皆さん、きちんと



貢献するものなののでしょうか。

小宅氏 現在は、もともと興味を持っている方、モチベーションの高い人が関わってくださっているため、貢献してくれる方が多いと思います。ですが今後、大学の庭の管理などに学生の協力を得る際は、どのように頑張ったか評価されるという視点は重要だと思いました。少なくとも、私の庭で1回は実施したいと思います。

矢代氏 コミュニティーの運営でも、後片付けをするのがいつも同じ人で、その人がいなくなるとコミュニティーも崩壊するということは多々あることですが、森に手を入れることと、生活を営むことの複雑さなどは、つながっているような気がしました。

小宅氏 現在の保全活動の高齢化問題が、まさにそのようなことだと思います。

矢代氏 高齢化問題というのは、高齢の方が関わっているけれど評価されておらず、さらに、関わっていた人がいなくなると続かなくなるということでしょうか。

小宅氏 そうです。若い人は忙しくて関われないというのがありますが、それ以上に次の人が入ってこない状況です。貢献してきた人が体力の限界を迎え離脱すると、その場は放置されてしまいます。もともと関わってきた方が高齢となり、高齢化の一途をたどっていくという問題が、多くの保全団体やボランティア団体でも叫ばれています。この問題解決のため、新しい人をどのように入れるかを考えてきましたが、それ以前に、どのように貢献しているかを可視化するというアプローチもあるのだと、私自身勉強になりました。

矢代氏 ぜひ、可視化するアプローチを取り入れ

てほしいと思います。

宮野氏 可視化する方法として、お礼を付けるのもいいと思います。一定期間ある区画を担当するようになると、美意識が芽生えると私は思っています。そして、その担当区域をきれいに作った成果として、お礼を付けるのです。

矢代氏 その話で大切なのは、ある程度は善意で行い、最終的には必ず誰かが入るということで、森があることで直接的な利益を得る人が入るという、利益の構造ではないかと思いました。

呉氏 みどり豊かな空間というのも、みんなで育てる縁とすると、もしかしたらコミュニティーを育むきっかけになるかもしれません。

矢代氏 プライド的な愛着を、どのように形成していけばいいかという話は大切だと思います。

# 19

## 芸術資源循環センター 芸術資源で「多目的な空 間づくり」

---

**山田 毅**

Yamada Tsuyoshi

京都市立芸術大学芸術資源研究センター・客員研究員

美術家、只本屋 代表

1981年 東京生まれ。2022年 京都市立芸術大学大学院博士後期課程満期退学。同年より京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員。映像表現から始まり、舞台やインスタレーションといった空間表現に移行し、ナラティブ（物語）を空間言語化する方法を模索、脚本演出舞台制作などを通して研究・制作を行う。2015年より京都市東山区にてフリーペーパーの専門店「只本屋」を立ち上げ、京都市の伏見エリアや島根県浜田市などで活動を広げる。2017年に矢津吉隆とともに副産物産店のプロジェクトを開始。2019年春より京都市内の市営住宅にて「市営住宅第32棟美術室」を開設。現在、作品制作の傍ら様々な場作りに関わる。■只本屋 website : <http://tadahon-ya.com/>

芸術資源循環センターは、SDGs時代の芸術大学における、「不用物とされるもの」（資材・物品など）とそれらにまつわる記憶や技術について、循環経済（サーキュラー・エコノミー）の観点から共有・再活用することの意義とその方法について研究しています。循環経済は来るべき経済活動のあり方として注目されていますが、本研究はそれを芸術領域において実装する可能性について探求するものです。

具体的には、2023年の移転を予定している京都市立芸術大学において、排出される不用品や資材を「沓掛キャンパスの芸術資源」としてとらえ、それらに関連する記憶や技術とともに循環させるネットワークを「芸術資源循環センター」という名の活動として構築することを通じて、新キャンパスを「資源循環型の芸術大学」として稼働させるためのプロトタイプを設計・運用し、その将来的な実現可能性について検討しています。

本プロジェクトのプロジェクトリーダーとなる山田毅と矢津吉隆は、2017年から「副産物産店」というアート活動をおこなっており、アーティストのアトリエから制作の過程で生じる副産物を収集、それを加工して新たな価値を生み出し（あるいはそのままの状態）流通させるものであり、国内各地で活動をおこなってきました。

「芸術資源循環センター」は、2021年11月に京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでおこなった展覧会からその名称を用いている活動であり、移転後の大学における新たな機能として、不用品をふくむ芸術資源の循環を可能にする方法を探るものとして、教員や新キャンパス設計チーム、循環経済の研究者や、地域・社会・アートを結ぶ場所を運営するプロジェクトの実務家らと対話を重ねてきました。

現在は、大学と廃棄物回収業者の間に循環センターを挟むことで、循環の仕組み自体を構築し直す方法を模索しています。廃棄物回収業者選定の段階で、リサイクル業者を選定することや、学内の廃棄物置き場の在り方を変えていくなど、京都市立芸術大学における不用品の廃棄についてのルールや仕組みを精査したのち、学内のスペースを用いて「芸術資源循環センター」を設置。学内での不用品等を収集・流通させるための活動を行っていく予定です。

またこの芸術資源循環のモデルは、まずは全国の芸術大学に導入するだけでなく、さまざまなものづくりの現場に転用できることとなります。そこから地域や企業事業者へと繋がるものになるのではないのでしょうか。



矢代氏 最初に、どういう経緯で今のプロジェクトに携わられているかを教えてください。

山田氏 普段は、京都で美術を中心に活動しています。京都市立芸術大学移転プロジェクトの建築設計チームにおり、2023年の移転に向けて、活動してきました。そのプロジェクトのなかに、移転後の新しい芸術大学のなかにさまざまなコミュニティを作るという計画があり、そのなかの1つ、廃材などの資源を芸術資源として扱い、活用するような場所を作れないかという取り組みに参画しております。

矢代氏 移転のプロジェクトに参画されていることと、副産物産店という活動は、どのような時系列で起きたことですか？

山田氏 2017年に、京都市立芸術大学のキャンパス移転に伴う建築設計を僕の参加していた建築設計JVが受託を取りました。当時、われわれが提出していたプランの

なかに、すでに芸術資源循環センター的なものを載せてはいましたが、元々大学にない機能なので、建築設計のプロセスの中にはなかなか入ってこない要素でしたので、僕と同じチームに参加していた美術家の矢津吉隆の2名で独自にプロジェクトを始めました。京都でやっていたら、後々、大学ないしは京都市と一緒にできるのではないかと考えていました。そこで始めたのが、副産物産店というアートユニットであり、お店のようなかたちのプロジェクトです。

矢代氏 副産物産店の概要として、廃材や副産物を受け取ってから、それがお店に並ぶまでのプロセスを教えてください。

山田氏 そもそも、芸術大学のなかでの資源の流れは、一般の社会と少し違います。一般の社会では、廃棄されたごみを持って帰ることは、ある種犯罪なので成り立ちませんが、芸術大学のなかでは、今も昔も、ごみ捨て場はただのごみ捨て場ではありません。不用品を捨てる人もいれば、それを素材として拾ってきて、自分

の作品に転用する人もいるのです。そのアーティストだか、芸術大学だかが持っている気質みたいなものを形にできないだろうか、という思いが活動の発端でした。そのごみ捨て場には、不思議な物体、絵の具のかたまりや、陶器を焼く人たちの釉薬見本みたいなものなど、一般では手に入らないけれど、どこか魅力的なものが、たくさん落ちていて、それらを、主産物である作品からこぼれ落ちたもの、副産物と呼んでいます。京都には、アーティストの小さいスタジオなどもたくさんあり、副産物もたくさん出ますから、僕らは、そちらに出向いて行って、副産物を仕入れるということを始めました。お金を払って買い取る場合もありますし、譲渡していただく場合もあります。仕入れた副産物は、そのまま流通に乗せる場合もありますし、少し加工を加えて、違う形にして乗せる場合もあります。ポップアップショップを開いたり、展覧会を開いて紹介したりもします。つまり、仕入れたものに、僕らが少し価値を付け、それをパッケージしたものを世の中に出していくという流れです。

矢代氏 たたとえば、椅子に加工する場合、この椅子のこの部分は、あの人のところからもらってきたやつだ、みたいなことを思いながら加工するのですか？それとも、アノニマスの感覚でやられているのですか？

山田氏 そこは結構難しい話でもあります。たとえばこれは、ヤノベケンジさんという、わりとメジャーなアーティストからいただいた副産物で、3Dプリンターで失敗した型です。仮にこれを、アートの市場に持って行ったとしたら、市場の原理で

めっちゃめっちゃ高い価値がつくでしょう。ですから、その作家性みたいなものをそぎ落とし、ヤノベケンジさんというものが分からなくなるようにしつつ、逆に、ヤノベさんらしい魅力も残すみたいな作業が必要で、それはかなり難しいです。

矢代氏 絶妙な調整かつ複雑な、価値とは何なのかということに取り組むプロセスになるということですね。

呉氏 値段を高くしたくないのは、なぜですか？

山田氏 僕らの面白みというのは、前の人が持っていたものとしてではなく、新しい素材として、次の人が、どのような形でも使えるものとして提供するところにあるからです。それが循環センターだと考えています。そのまま手に入れたいという願望ももちろんあるとは思いますが、循環させるものとして捉えたときには、価格は高くないほうがいいのかと思っています。

宮野氏 その循環という言葉が、ちょっと引っかけられます。捨てられたものが売りものになるのは、いいことだと思いますが、どこにも戻ってなくない？みたいな。そこはどうなんでしょう？

山田氏 循環センターの思想で言うと、やはり、そういうものをまず、市立芸大や京都で根づかせるというところに意味があると考えています。アーティストが副産物を提供し、市民を巻き込みながら、魅力的なパーツセンターというか、新しい形のホームセンターのようなものができていき、ゆくゆくは、ぐるぐる回していく大きな仕組みを作るところが目的です。今はアーティストが、ごみとして捨てるはずだったものを、僕らがわずかな

お金で買い取るくらいで、大きな意味での循環にはたどりついていないのが現状ですから、僕らとしてもジレンマはあります。ただ、大きく循環していくようになれば、今度は、ごみを提供する側だったアーティストが、新しい資材を持ち帰るような動きにもつながり、面白くなるんじゃないかと思っています。

矢代氏 廃材を集める際に、これいいな、使えるなみたいな、副産物の良し悪しみたいなものはありますか？

山田氏 はい。たとえば、皆さんも、ヨーロッパの古い鍵を売っているアンティークショップとか、気になりませんか？同様に、廃材も何か魅力があれば、売れるということが、最近分かってきました。きらきらしたガラスなどは、みんな勝手に買っていきますし、さびた鉄がすきな方々もいらっしやいます。ただ、感覚的にですが、ぐずぐずになった板みたいなものは、やはり売れません。見たことのないものや、そこに美しさがあるもの、かわいらしいものなど、何か感覚を刺激するような素材や形に、人は反応します。そこに何か市場の原理があるのだろうなと思い、そういうものを仕入れるようにしています。

矢代氏 山田さんは、作ること以外に、バイイングというか、目利きっぽいところでも、価値を発揮されているんですね。また、廃材には価値があり、それを生み出すのがアトリエ、つまり、アトリエが産地だ、ということが、むちゃくちゃ面白いなと思いました。良い廃材がたくさん生まれる場所は、こういう場所だというようなものはありますか？

山田氏 アーティストは、全ての物を物質的に見

る目を持っていて、彼らには、町中のごみ捨て場にあるものすべてが、価値のあるものに見えているのではないかと思います。だから、今は芸術資源のみに絞っていますが、これから僕らの活動の幅が広がって、まちづくりや家を壊すときや建てるときに出る廃材なども資源として扱えるようになったら、さまざまところに仕入れ先があるだろうと思っています。

矢代氏 どういう人が買うのかというところも気になりますし、売るためだけにやっているプロジェクトではないと言いつつも、売れないと成立しないというバランスも、面白いなと思います。先ほどのガラスやさびた鉄のお話からすると、やはり、歴史を感じられるものが売れるのかなと思い、京都だからこそ、古いものの価値というような可能性も感じたのですが。

山田氏 そうですね。京都だけではないと思いますが、土を掘れば文化財が出るような場所がありますね。でも、実は文化財にもランクがあり、C級のぐずぐずの文化財がいっぱい出てきても、それらには、文化財としての価値がありません。しかし国の持ち物なので、一般の人たちは流通に乗せられません。京都市立芸術大学にも、大学が持っているものを外に出す流通の経路はありません。そういった枠組みや仕組みを変えていく必要があると思います。僕らのプロジェクトとして、そういうところに新しく入っていけるんじゃないかなと考えています。

呉氏 山田さんが、このプロジェクトで一番テンションが上がる瞬間は、どんなときですか？

山田氏 やはり、見たこともない素材や物質に出会えたときに面白いなと感じ、一般の市場に乗らないようなものたちに出会えるというところに魅力を感じています。

呉氏 巷に落ちているもの、もしかすると、建設現場なんかは、山田さんには宝の山に見えているのかもしれないね。

矢代氏 たとえば、先ほどの釉薬なんかは、焼きものの世界の人には見慣れている、当たり前のものですよね。それをどういうふうにしようと考えているのか、どう発想されるのかなというところが気になります。

山田氏 たとえば、作品として器を作るとき、同じような器を実験作品としてたくさん作りますよね。完成した作品には値段が付きますが、実験作品は、当然、捨ててしまいます。その、同じような形をして、同じような色、釉薬も塗ってあるけれども捨てられてしまうものというところに、何か面白さがあるんじゃないかなと思っています。

矢代氏 その実験作品を仕入れるとなったとき、アーティスト側から、こういう使い方はしないでくれみたいなものはあるのですか？

山田氏 あります。基本的には、権利的なものは譲渡してもらいます。僕らも、これはこの作家の作品です、ということを出さず、面白いものが手に入りましたよというやり取りをします。誰のものかという見方じゃない見方でものを見るというところに、面白さがあると思っています。

呉氏 山田さんのなかで、目利きの作業というのは、美を考える作業ですか？

山田氏 難しいですね。僕らが仕入れるときは、やはり、美しさも考えますが、買って

く人たちは、どう使えるかなと、用途のほうを重視していますから。

呉氏 ビジネス観点も、大事ですもんね。

山田氏 はい。器に使えるかとか、花を生けるのにいいかとか、そういった用途で人とつながるといえることが多いですね。木材だったら、今、DIYがすごく流行っているので、そういった場で使えるんじゃないかとか。そういったところも考える要素の1つかなと思います。

矢代氏 大学で、この循環についての活動をしていくなかで、大変だなと思うことはありますか？

山田氏 やはり、ルールが多いことです。世の中的には、もったいない精神やSDGsの取り組みが活発になり、みんなこういうことをやりたいと思っているのに、まちづくりや行政というような、大きな規模になると、どうしても前に進みにくい感じはあります。たとえば、京都の行政区画でも、担当の方が、その地区は自分の担当の区画ではないから担当できませんということがあったり、京都市立芸術大学も、本当は市民とつながる場にしていきたいけれど、やはりセキュリティを考えると、市民が関わっていくというところに対しての、リスクヘッジみたいなこともあります。僕らはアーティストの視点で、突飛なことを言ったりもしますが、それがなかなか前進しないなと思っています。

末吉氏 われわれは不動産会社で、古い建物を壊し、新しく建てるということをしてはいますが、実は、新しい建物の竣工式の際に、来た人に古い建物の具材で作った枡をお土産に渡したり、古い建物から出た

きれいな石があれば、それを新しい建物の一部に利用したりというようなこともしています。しかし、割合で言うと、1パーセントにも満たないレベルです。ですから、建物を壊したあとの宝の山から、何かを発掘できるような取り組みが一緒にできたら、面白いなと思いました。1つ疑問に思ったのは、全国のアトリエなどから、たくさんの廃材が出れば、そのなかにはアーティストの方の目から見て価値がある、面白そうなものがたくさんありますよね。しかし、山田さんが取り組まれるまで、世の中にこういう取り組みがあまりなかったはなぜでしょうか？

山田氏 その理由の1つに、アーティストたちにビジネスの感覚が乏しいというのがあると思います。やはり、作品を売ることが本望なので、副次的な産物を価値に変えるという視点は、ある種、邪道であるというか。あとは、実は小さなレベルでの取り組みは、たとえば、各大学の学生企画などで、自治でやっているケースは多くあります。卒業生が不要になった家電を、次の世代のために体育館などに集めて、後輩たちに安く売るといったような取り組みは、ちょこちょこ行われていますよね。しかし、それを大きくビジネスに変えようという動きにはつながらないし、それをやることに対して、日本人特有の感覚みたいなもので、ごみを売ってもうける人は悪い人だ、みたいなものもあるのかなという気がします。だから僕らも、お金のにおいがした途端に、何かすごく胡散臭いやつになるのかもしれないという気はしますね。

末吉氏 仕入れたものを、そのままだったり、少し加工したりして販売する際、たとえば、無償で引き取ったものを1万円で売る場合、あの人たち、あげたやつを1万円で売ってるわ、みたいな、ちょっと微妙な感じが生じたりはしませんか？

山田氏 世代によって、その感覚に違いがあるかもしれません。僕よりも上の世代では、やはり、虎の威を借る狐というか、アーティスト自身の権威の上に成り立つ仕組みだろうというような受け取り方が強いと思います。しかし、若い世代の子たちは、SDGsとか、もったいない精神がすごくあり、ごみを1万円で買ってくれる人がいるということ自体を、面白いと思ってくれています。なので、僕らの活動を見て、その人たちが、自分たちでやり始めるということもよくあります。

矢代氏 そういうふうに広がっていかないと、このプロジェクト自体は、本当の意味での循環とか、意識を変えるということを生まないですね。

山田氏 はい。なので、今のところは、京都市立芸大を中心に活動していますが、プロジェクトの取り組みとしては、京都芸術大学さんや、京都精華大学さんも巻き込みながら進めています。まずは京都の芸術大学を起点に大きく広げていき、今はまだ小売業みたいな感じですが、今後は、まちのなかでの大きな循環につなげて、ごみを捨てる企業や、リサイクル業者など、さまざまな企業と共に取り組む事業にしていくことが、このプロジェクトを回していくということかなと思っています。





# 20

## 死者のデータログによる空間づくり—都市空間にデータとして生の痕跡を残す

大田 省一 Ota Shoichii

京都工芸繊維大学未来デザイン・工学機構・准教授

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了、博士（工学）、一級建築士。

大学にて東洋史と建築学を専攻の後、両者の接点であるアジアの建築史・都市史の研究に携わっている。ベトナムなど旧仏領インドシナやミャンマーを中心とした東南アジアの町屋、旧市街、植民地建築・都市計画、伝統的集落などを対象として、多分野連携による地域研究的アプローチによる読解を試みている。2010年より現所属となり、都城としての京都の比較研究や、近代都市空間、農業空間や文化財保存の研究にも関わっている。「足で稼ぐ」スタイルでやっています。

「人生百年時代」などといわれるが、私たちはそれを素直に喜べるだろうか。百年生きたとして、その先はどうなるのだろうか。生老病死のうち、医学の発達により老・病への対策は随分進んだが、その分、死には向き合いづらくなっているのではないか。さらに、少子化が進んだ現代では、墓仕舞まで考えなくてはいけなくなってしまった。果たして我々は死後、どこへ向かえばよいのか？

一方で、現代社会では、死を多義的に捉えることも可能になった。肉体と精神という従来の二分法に加え、データとしての自我を想定することもできるだろう。この意味での死とは、いわゆる「忘れられる権利」の問題につながる。つまり、データは、そのままでは死なないのである。我々は、日々の生活の中で膨大なデータを生産し続けている。携帯端末からの通信記録、位置記録、監視カメラの通行記録、等々、これら日常の記録としてのデータ群を、PRATEUなどの都市空間3Dモデルの中にひもづけておく。すると、あなたの生きた証が、都市空間の中に残されることになる。これを、個人のデータログとして、子孫に残すことを考えてみたい。

別の角度からみれば、このような営みを集合することで、過去の都市空間のデータベースを構築することにもなる。ストリートビューの過去データなどを活用すれば、4Dモデルで過去の都市空間を復元することもできるだろうが、それは舞台装置にしか過ぎない。この上に、実際にその都市で生活した人々の記録が書き込まれることで、生きられた都市空間を復元することもできるだろう。

もちろん、ここではデータ自決権は尊重されなければならない。ドットデータを線で結べば、そこには人格が宿る。このようなデータの編集権を子孫に託しておけば、都市空間3Dモデルは、あなたを記憶しておく装置ともなる。位置データに合わせて自分のアバターを置けば、あなたと子孫がVRの街角で出逢うこともできる。

デジタルネイティブの世代では、もはや人生すべてをスキャンされているようなものである。これを個別ドットデータのままとするか、はたまた編集して人格を復元できるようにするのか。死後の扱いとしては、前者は海への散骨、後者は墓碑銘を立てた墓に、それぞれなぞらえることもできるだろう。データとしての生の取り扱いは、いまやもうひとつの墓問題ともなりうる。そうして、これは記憶喪失状態の我々の都市空間へのアンチテーゼともなるのである。



大田氏 ある場所で自殺した人がいたとして、その人の思いは、その場所にあり、それを霊媒師が聞いてあげることができれば、友人になることもあるかもしれません。ほかにも、ジョン・レノンに、この前、私の曲を途中で聞くのをやめただろうと怒られるかもしれません。私は、死者とのコミュニケーションがないということが、最大の問題だと考えています。

呉氏 たとえば、Twitterでつぶやいた個人の記録が、その場所に残ったとして、そこでジョン・レノンとの対話が起ころうというイメージがしにくいのですが、どのような状況かを詳しくお聞かせください。

大田氏 私が呉さんと対話したとき、本人かアバターかを判断できないほどのリアルなアバターが今後出てくると思っていて、本人でもディープラーニングしたアバターでも、レスポンスがあればいいと考えています。ですから、本当に亡くなった人がそこにいるのではなく、行動履歴など

をディープラーニングし、個人のデータログを残していくということです。たとえば、新しいお店が好きだった人ならば、おばあちゃんが喜んで新店に行ったらしいよ、という話になり、そのおばあちゃんが渋谷の新しい店に並んでいるかもしれない、ということが可能になるのではないかと考えています。

呉氏 それは、場所である必要はなく、私という人間のコピーかバーチャルであれば良いということでしょうか。

大田氏 今回のアイデアでお伝えしたいことは、都市空間の中で実際にそのアバターが動いていると、よりリアルになるのではないかとということです。私の目標はアバターを作ることではなく、残すということが、とても良い方法ではないかと思いつきました。

呉氏 思い入れがあるものは残るという、そこに目をつけられたのは、やはり本当は建物を残していきたいとお考えなのでしょうか。

大田氏 そうです。しかし究極的には、残らない

ものは仕方がないと思います。建物を残す方法としてVRという方法も使えるかもしれませんが、建築でしか残せないキメなどもあるかもしれません。

呉氏 バーチャルの話に戻りますが、建物に様々な人の記憶が残る面白さについて、もう少しお聞かせください。

大田氏 現在の呉さんの家が建つ前は、どなたかが住んでいたと思います。そういう記憶を楽しむことができるといいと思います。

呉氏 時系列で過去の記憶を楽しむ、それが建物を訪れることの新しい楽しみ方になるということでしょうか。

大田氏 そうです。たとえばウィーンに行くと、モーツァルトの歩いた散歩道が体験でき、エクサン・プロバンスにセザンヌのサーキットがあり、そこをたどるとセザンヌの散歩道に行くことができ、サントビクトワールが見えてきます。こういうことが日本ではできていないのが残念です。しかし日本では、建物が更新されても道は残ります。その点から、道を歩くことはできるのではないかと考えています。

呉氏 場所に記憶が残ることで、その場所の楽しみ方が倍増するということですね。私は、この話をお伺いしたとき、友人が購入した家を思い出しました。友人宅は背が低い家で、階段もくぐらないと入れませんでしたでしたが、友人は身長が低いので、不便を感じていないようでした。その京都の築50年ほどの家は、歴代の持ち主がすべて女性だったそうで、その人が家に選ばれたように思いました。そのような物理的な何かを介在して過去を感じるこ

とはあると思いましたが、プロバンスの例を聞き、町歩きや建物を訪問する楽しさが倍増するアイデアとして、今回のテーマを理解しました。

大田氏 ご友人の家の歴代の持ち主が、すべて女性だったのは偶然だと思います。オミヤサンは背の低い建物ですが、その街に行き、丈の低さを知り、持ち主が歴代女性だと知ると納得します。この、ストーリーを知ることが大切だと思います。

呉氏 都市空間に個人のデータが残り、お墓や芸術などに活用することは、とても面白いと思いました。また、お化け屋敷などネガティブな話題もありましたが、大虐殺が起こった場所など、教育の面でも活用できるのではないかと思います。

大田氏 その通りだと思います。たとえば、応仁の乱博物館を建てたとしてもしょう。応仁の乱は、その区画だけで争乱が起きたのではなく、様々な土地で起こっていました。都市空間とはそういうものなのです。また、記憶の話ですが、たとえば親族が亡くなると、本来はお寺でお話を聞くとおもいます。ですが昨今、お寺に行く機会も少なくなり、仏壇の前にしかそのような場を作れなくなっていると感じます。しかし、亡くなった人を思い出すのはどのような場所かというアンケートを見ると、仏壇の前と答えた人は少なく、町中でふっと思い出すというのが最も多いという結果でした。様々な反発意見があるのは承知していますが、本来はその箱の中に入れるべきことではないのです。都市に広げていくと、親族を失った悲しみも共有できるかもしれません。たとえば、亡くなった親族と一緒にいた場

所に行くと、隣に偶然いた人とも、親族の話で盛り上がるかもしれませんね。

呉氏 それは悼むことにつながりますね。

大田氏 お墓についても書きましたが、親の代でいい石を使いお墓を作ったけれど、私の次の世代で終わるので、墓じまいを考えなくてははいけません。樹木葬にしても、その樹木をどうするのかを考えると、切りがありません。しかしデータは残ります。データとしてのお墓は、とても可能性があると思っています。もちろん、データとしてのお墓もお寺が管理します。

呉氏 供養はきちんとされるんですね。

大田氏 ビルの中で番号を押すと遺骨が出てくる墓苑も現在はありますが、その1歩先のエア墓苑という考え方です。

呉氏 かつては音楽も媒体に入れていましたが、現在は形がなくなってきました。お墓も形がなくなっていくということでしょうか。

大田氏 お墓はすでに、その段階に来ている、もしくは、そうしなくてはいけない段階に来ていると思います。

呉氏 この技術で、ある場所が、時系列も含めて豊かに味わえるというのは、とても面白いアイデアだと思いました。

大田氏 このアイデアを多くの人に理解してもらうためには、まず芸術としてどう表現すべきかを、芸術家とアイデアを出し合う必要があると考えています。アバターをただ歩かせるのではなく、アバターが軌跡そのものになる表現の仕方も多種あるでしょう。世の中の意識を、芸術家の方に引っ張っていただきたいです。

呉氏 このアイデアを実現するには、亡く

なった方でなくてもいいのではないのでしょうか。芸能人が訪れた場所でも、実現できるのではないかと思います。

大田氏 それでもいいと思います。ただ、亡くなった方のデータというのは、忘れられないようにという目的があります。

呉氏 モチベーションとして、死との向き合い方というところが根本にあると理解しました。そうしますと、今回のアイデアの中で、お墓に関するところが重要なのでしょうか。

大田氏 広い意味でのお墓とっていただいても構いません。死者と向き合う場というよりは、向き合えるのはどこかを考え、その方法の1つとして、このアイデアがあってもいいのではないかと考えています。

男性A 私個人の理解では、丸太町は、丸太が横たわるように死体があったことから丸太町と言われるようになったと認識しています。空間のデータには、プラスのデータだけでなくマイナスのデータもあり、それを編集する必要も出てくると思いました。その、編集する権利は、誰が持っている、どのように実行されるべきなのか、土地の所有者が編集できるのか、行政が編集すべきなのか、一部の編集で終わらすべきなのかなど、データの扱い方というところも興味深いです。

大田氏 現在、個人としてのデータは個人のもですが、このように刺激してくれる人がいると、どこかのトレードオフのように考えられるようになるかもしれません。一律で駄目という世の中では、コレクターがいなくなるのではないのでしょうか。

男性A 私のマンションは元書店で、そういう人の操作が大事だと思います。

大田氏 説明する必要がある物件というのはあると思いますし、場所が呼ぶものもあると思っています。それを建築士の世界ではゲニウス・ロキと言います。文化的な人が来るところにはそういう人が来る場所だった、というのはあると思います。

呉氏 今回のテーマの根本には、やはり死者の悲しみを抱えていらっしゃって、何か出会う方法、何か残る方法を研究されていると理解しました。

大田氏 死んだらゼロになるだけだということですが、これからもっと広まっていくと、たとえば怨霊などという認識も、それらに対する恐れもなくなり、宗教の機能も失われていくと思っています。そのような社会をどのようにしていくかについて、考えなくてはいけなくなるでしょう。やはり、死には様々な角度から向き合わなくてはいけないという思いが、私のモチベーションです。

# 21

## この人の「生き様」から学びたい！：うまくやる生き方を深く学べるナイトスポット

鈴木 聡

Suzuki Satoshi

大阪経済法科大学 経営学部・准教授

2002年国際基督教大学教養学部理学科情報科学専攻卒業（教育学科心理学専攻との学科間専攻）。2007年東京工業大学大学院総合理工学研究科知能システム科学専攻博士課程修了。国立情報学研究所技術補佐員，青山学院大学ヒューマンイノベーション研究センター客員研究員，同助手，成蹊大学理工学部システムデザイン学科助教，大阪経済法科大学教養部助教，同准教授を経て現在大阪経済法科大学経営学部准教授。専門は認知科学，教育工学，ヒューマンコンピュータインタラクション。人の自然な学びのプロセスを反映した情報教育・教養教育，アカデミックライティング教育，協調学習，人とコンピュータの社会的・身体的相互作用に興味を持つ。



筆者はこれまで認知科学、教育工学を専門とし、アカデミックライティングやプログラミングにおいて他の学習者の視点を生かしながら学ぶ環境づくりについて研究してきた。これまでは大学生対象の教室の中の学びが研究テーマであったが、これらの研究の中で同世代の学習者が学校という場で学ぶ知に限界を感じてもいる。そこで、より幅広い学習者、より幅広い学びの場を対象とした上で、他者を通して「生き様」を学ぶことで社会にインパクトを与えられる場づくりがしたいと構想している。

学び直しやリスキリングなど、社会人の学びにも注目が集まっている。しかし、その学びとは正解のある表層的・断片的・教科書的な知識を読書、各種講座受講、資格取得などを通して身につけるという、いわば学校での学びに近いイメージだろう。このような学校知的な知識観は画一的で、他者との間の差異化・多様化が困難である。そのような学びを続けるうちに「自分の代わりはいくらでもいる」と感じ、疲弊して思考停止に陥る危険性がある。

そうではない「自分は自分」と実感できる学びの形は、他者の持つ知識を学ぶのではなく、他者がうまくやる方法から「学び方の学び」を行うことで得られるのではないか。特に真面目に知識の活用を試みるわけでもなく、かつただ勘だけに頼った判断をしているわけでもないのに目の前の状況にうまく対処できている人のある種の要領の中にうまくやる方法のヒントがあると考える。そこで、ある人の持つ知識だけ、そして勘だけに頼らず両者を結びつけてうまく対処する方法群をここでは「生き様」と呼ぶ。この「生き様」を学べる場づくりが目標である。

「生き様」を学べる学習形態には徒弟制や1on1のような少人数で深い相互作用のある学び方が必要であることは、認知科学などの分野の研究で明らかにされている。実践に際してバーや宿泊施設のように本音を語りやすい夜の時間帯が主体になる場で、物理的な場と時間を共有し濃密な相互作用を行えること、そしてグラフィックレコーディングなどによる学びの記録の蓄積ができることが重要となる。記録は学びの対象とする人や学べる内容の手がかりになるようにする。最初は既存の働き方や組織から大きく逸脱するような人から「生き様」を学ぶところからスタートし、「生き様」を学びたい人が学びたい相手を選び、招き、「生き様」の共有とアーカイブができる場をつくりたい。



呉氏 鈴木さんのこれまでの研究について教えてください。

鈴木氏 学部時代は人間とコンピューターの両方に関わる研究がやりたかったので、情報コンピューターと心理のことを学びました。人間とコンピューターの接点に関わるようなことをやりたかったのですが、専門の先生がいなかったので、コンピューターをメインに、そのときにやれることを全部やることにしました。大学院では、人工知能の研究室に所属し、コンピューターのCGのキャラクターと人との間で、言葉にならない部分のやりとりについて研究しました。博士課程が終わってからは教育のことをやらないかというお話がありました。大学でポストを得て、アカデミックライティングについて、どのように書くかという研究ではなく、その前の、アイデアをどうするかの研究をしました。文章を読んでレポートを書くときに、現在でいうFacebookのリアクション機能のような「いいね」「す

ごいね」「ひどいね」などのリアクションを、文章の一部に対してできるようにすると、安易に著者の意見に流されずに文章の問題点を発見することができるという研究です。次に移った大学では、心理学のなかで、視界には入っていないけれどそれほど意識をしていない情報も活かすことができるという話があり、それを利用して、キャラクターを対象の周辺に出しておく、それが人へどう影響するのかを研究しました。例えば課題に取り組む際に、キャラクターに見られていることで与えられる影響です。他者に見られながら苦手なことをしているとパフォーマンスが下がる、という知見が社会心理学ではあるのですが、見られる相手がキャラクター、かつそのキャラクターの存在にユーザーが気づかない場合でもそのような影響がみられたという結果が示されました。他にはプログラミングの授業を任された際に、学生がペアを組んで課題に取り組む形の実習を採り入れました。この実習ではペアの片方が課

題に取り組む最中にもう片方が課題のアドバイスをするという形をとっていて、このような実習による学習パフォーマンスの変化を分析していました。

呉氏 それが『この人の『生き様』から学びたい、うまくやる生き方を深く学べるナイトスポット』にどう結び付いていくのか教えてください。

鈴木氏 企業などに勤めている社会人たちに、どのような勉強をしているか聞いてみると、知識やスキルをどう身につけていくか、どのような資格を取るのかという話が多く、何か標準的な知識を詰め込んでいるだけのように感じられます。でも本当にそれを望んでいますか？と疑問に思うのです。学生たちに関しても、周りの大人の都合で「教科書通り、型通り、言われた通りに学ぶ」という学び方が普通だと思っていて、周りの大人を含めて他者を通して学ぶという観点が抜け落ちていっているように感じます。これまでの私のレポート作成やプログラミングの教育の研究でも、高いパフォーマンスを示した学生は他者を通して学ぶ傾向がみられました。このような他者を通して学ぶという視点を自発的に持てるようにすることが課題ではないかと考えたのです。生き様というのは1つのキーワードとして出したもので、自分自身に不器用な面があるので、要領良くこなしている人から学びたいという個人的な願望も入っています。また、教育を考えるうえでもヒントになると思います。

呉氏 深く語ることが大事ということですが、どのような形をお考えですか？

鈴木氏 構造として考えていることが2つありま

す。1つめは直接、対面で話をするということ。2つめは、その様子を外から見るとのことです。また、話の内容は何らかの形で記録に残す必要があると思います。ある程度生々しく残す、例えばグラフィックレコーディングの人が1人みっちり付いて残していくというやり方もあると思います。とにかく本人が口と手を動かして、残して、それをどう見るかという感じにしたいです。外から見ることについては匿名性があっても良いと思いますが、記録についてはウェブで全て見られるようにするのは面白くないと思います。せつかくのこういった場なので、この場に来ないと見られないようなものが良いと思います。

呉氏 その場に来た人、見た人は、どんな学びや満足感を持ち帰ればよいのでしょうか？

鈴木氏 そこは難しいところです。単なるコンテンツの消費で終わると面白くないので、この人の生き方は面白いなという人と呼んで、興味のあるもの同士の繋がり、人のネットワークが出来上がっていくと面白いと思います。

呉氏 どんな人と呼ぶか、何を聞くのかによってさまざまな設定ができそうですね。

鈴木氏 はい。個人的には規則正しい会社勤めのような働き方よりも、複数の仕事を持っていて、上手くバランスをとって働いている人の考えを聞いてみたいです。

呉氏 人からでないとならないことですね。

鈴木氏 それから今回は夜の時間帯が主体になる場で、という提案にしたのですが、特に時間帯に強いこだわりがあったわけではありません。要するに仕事や家庭のしが

らみのない場所という意味で、サードプレイスをどう作るかというお話だと思っていただければと思います。



# 22

## きづかい豊かな空間づくり

中安 祐太 Nakayasu Yuta

東北大学学際科学フロンティア研究所・助教  
株式会社 百・取締役

宮城県川崎町青根地域に暮らしている。ここは、温泉、森林、蔵王の伏流水など多様な資源自然が存在する中山間地域である。これらを己の暮らしの中で利用できる比率を大きくするため、伝統知、在来知、科学知を混ぜ合わせながら、真の豊かさとは何かを常に問い続けている。その中で、薪炭林や杉林に代表される里山の持続可能な利用にこそ、豊かさが潜んでいると感じてきた。過度な便利さによって生まれた時間を消費的に使うのではなく、便利さを程よく抑えて、食・エネルギー・ものづくりに手間をかけて生産する『不利益』を楽しめるライフスタイルこそ、己の「生きる」を味わえ、環境低負荷にもなる『ライフ』であることを伝えていきたい。

属性が違えば、趣向も各々の価値観も違う。お互いの関係性の中に、己があり、己の価値観の中に他者がある。循環しない仕組みの中では、物事が一方的的に流れ、上流の恵みや弱者からやさしさを搾取することによって下流の強者が潤い、上流は荒廃する。下流から上流に循環する健全な仕組みが構築される必要がある。

資源循環・人と人とのやり取りの循環は、持続可能性を担保するために必要不可欠なものである。持続可能性の語源は、300年前にドイツの林業の世界で生まれた。木の保続的(nachhaltende)な利用ができるように木材を保持し育成していくという文脈から、nachhaltigkeit（保続性）となり、イギリスに木材と共に輸出されることでSustainabilityへと変化した。日本では、里山が持続可能的に利用されてきたとは言いづらい。しかし、一部の薪炭林では萌芽更新を繰り返すことによって、薪や炭として保続的に使用されてきた。この持続可能な『木使い』にこそ、過去・現在の他者・未来を想うための『気遣い』を感じられるのである。

私の究極の問いは「誰もがあらゆるものを思い合って生きるには？」である。そのために、食・エネルギー・ものづくりの地産地消を、地域住民、法人、自然、野生動物、微生物、研究者、自治体と共に遂行している。地産地消にこだわる理由は、それは物理的・心理的な距離感の近さがもたらす、相手への気遣いにある。大前提として、自分と他者は違うという認識があれば、相手の違いを認める気遣いが必要になる。それは現在生きている人間同士だけでなく、先祖と子孫、新旧の技術、多層の自然と人工物、野生動物と人間等にもあてはまる。全てのものに対して気遣いながら生きる空間を構築できれば、『地球』として持続可能なライフを得られるだろうと感じる。気遣いは、多くの循環を生む。未来への財産として、土砂災害を起こさないために、土壌汚染を起こさないために、木を伐りすぎないでおく。他方、己の暮らしを豊かにするために、里山の一部の木を無駄なく使わせていただく。そしてその木を使って、家を作り、暖を取り、電池を創って電気も使わせていただく。そして、それらはまた土に還り、循環していく。

そのような気遣いながら木を使った技術と建物がある空間を仲間たちと繕っている。



呉氏 中安さんは、きづかいという言葉に『気を遣う』と『木を使う』の2つの意味を持たせて、豊かな空間づくりで語っておられるんですね。まず、なぜ、木に注目なさっているのかを教えてくださいませんか？

中安氏 私は1990年生まれなのですが、1997年に京都議定書がありました。当時、まだ小学生でしたが、地球温暖化など環境問題に関心があり、植物が好きで人工光合成に興味を持っていました。植物が酸素を作ることは知っていたので、じゃあそれを人工的に作ればいいなという小学生の安易な発想から始まって、工学系、化学系に進みました。大学は東北大でしたが、大学2年の終わりに震災があり、沿岸部でボランティアをしました。そのときに、いろいろな気づきがありました。その1つは、沿岸部には東北大の研究者があまりいないということでした。

呉氏 住んでいないということですか？

中安氏 いいえ。ボランティアもそうですが、地域の研究などに入っている人間が、ほかの私大や国立大に比べると明らかに少ないということです。また、原発の問題や温暖化による気候変動を考えたとき、このまま原発が使えなくなり、気候変動も進んだら、日本はエネルギー的に詰むだろうということにも気づきました。さらに、原発の問題を考えるうちに、技術だけで解決しようとしても、結局うまく解決できないだろうと直感的に思い、それなら、食とエネルギーは自分で作れるようになればいいんだと思いつきました。そのときに、新エネルギーとしてたどり着いたのが薪でした。

呉氏 どうして薪だったのでしょうか？

中安氏 震災のとき、電気が使えなくなりましたが、そんななか、みんなが暖を取れたのが薪だったからです。今、私が住んでいる川崎町でも、みんな家に薪を持っていたため、暖が取れたそうです。結局、最後はベーシックな方法が一番強いんだなと実感しました。



呉氏 お湯を沸かすこともでき、食べ物を作ることもでき、暖かいですね。

中安氏 はい。どんなときも里山はある程度、間伐して手入れする必要がありますから、適切に木を切れば山は多様性を増し、豊かになり、獣害も防げます。つまり、木を使うことは、すごく大事なのです。でも、使い過ぎは駄目というところが、結構面白いところだなと感じています。

呉氏 人工光合成は、取りあえず置いといてということですか？

中安氏 一応やってはいました。大学でも光触媒や、今も燃料電池などの研究はしていますから、人工光合成に近い研究は続けていますが、そういう暮らしもしているということですか。

呉氏 里山の活用は全国的にも、あらゆるかたちで行われていますが、中安さんが注目している、この里山の活用はいいな、ここはもうちょっとこうしたほうがいいな、などのご意見はありますか？ご自身の活動のいいところでも構いません。

中安氏 新しい使い方をすることが大事だと思っています。自給自足的な発想というのは、過去に戻る発想になりがちで、現代人からすると魅力的に見えません。昔からあるものを、現代の生活に合わせた新しい使い方を使う必要があると思います。そういう意味では、自分がやっている、木を電池に活用しているところは新しいと思っています。

呉氏 木を電池に活用するというのは、どういう意味ですか？

中安氏 一度炭素化して炭素材料にするということです。それによっていろいろな材料が作れます。そこから電池を作るのも、新しさがある動きだと自分のなかでは思っ

ています。また、使う側がちゃんと山を知ること大事だと思っています。結局、育てる側も使う側も、お互いのことをよく分かっていません。山から木を切る工程というのは、地域の変遷自体を変えてしまう行為なので、使い手が、その地域で使う木に責任を持って使わないと、それこそはげ山になってしまいます。ですから、ちゃんと地域にいて、考えて、その地域のなかで木を使っていくというプロセスが大事です。自分の電池の会社も、自分の手に届く、目に見える範囲でのバイオマス利用しか責任を持っていないという観点から、会社の規模を大きくし過ぎないことを目標にしています。もし大きくするなら、各地域の工場などで作れるレベルまで技術を落とし込み、各地域で運営していけるようなスタンスで広げていこうと考えています。

呉氏 研究者として、あるいは生きる人として、今、具体的にどんな活動をされているのか教えてください。

中安氏 まず、4つの立場に分けられると思います。1つ目は一住民としての立場です。毎朝温泉に行って、毎朝地域の人と顔を合わせ、隣人に回覧板を回したりもします。もう完全に山のなか、中山間地域の住民です。

呉氏 中山間地域の人口はどのくらいですか？

中安氏 川崎町の人口は8,000人で、私が住んでいる青根地区は、1,000人いないくらいで、かなり少ないです。2つ目は主たる収入源である大学教員としての立場です。学際科学フロンティア研究所で論文を書くほか、いろいろなことを考えている研究者たちと話して、プロジェクトの

立ち上げなどを行っています。この地域ではどういうプロジェクトをやっているかみたいな話をし、人文知、工学知、科学知が混ざり合い、ディスカッションしながら、いろいろなことを進めています。あとは、株式会社百の活動で『百のやど』という宿をやっています。

呉氏 宿について、少し詳しく教えてください。

中安氏 僕と会社の代表である拙は、5年前に川崎町に移住し、地産地消の暮らしを目指す活動を始めました。そこで、それを発信できるような象徴を作ろうという話から、宿を建てることにしました。地域の人から山を買って、2019年3月から、僕と拙と、もう1人役員の宮川の3人で杉を切り始めました。

呉氏 山をもらい受けて、杉を切るところから始めたのですか？

中安氏 はい。杉を切って、まず、葉枯らし乾燥という在来の方法で天然乾燥させました。そのあと、たまたま川崎町に伝統工法大工さんがいらして、自分で製材もされる方だったので、僕たちが切った木を製材所に運び、大工さんが製材し、その木材を使って、山のなかに宿を建てることを始めました。建築の地産地消です。そこに土壁も作りました。今の土壁というのは、名古屋かどこかから土や藁を仕入れるらしく、地産地消がまったくできていないので、僕たちは、地域で粘土を探し、左官屋さんにその粘土でいいかを確認し、藁も自分たちの田んぼや、町の牛舎など訪ねて集めてきて、自分たちで土壁の土を作るところからやりました。そして伝統工法の金具を使わない方法で

大工さんに宿を建ててもらい、そこに、再生可能エネルギーシステムを合わせました。科学知、在来知、伝統知を組み合わせ、いかにいいものを作るかというのが僕たちの課題であり、太陽電池、太陽熱温水器、冷温水輻射パネルなどを組み合わせることができる空間とは何か、というテーマで今の宿を作りました。この宿で出される食事も地産地消であり、お客さんには収穫からやってもらって、それを夕飯に出します。薪割りもしてもらっていますが、薪は乾かす必要がありますから、未来のお客さんのための作業です。それはつまり、自分たちが使う薪は、過去のお客さんが作ってくれたということであり、四次元の時間的な空間も共有できているということになります。暖房は、太陽熱と薪ボイラーのデュアルで温めたタンクから、各部屋の冷温水輻射パネルに供給しています。夏はお湯を止めて井戸水を流します。もちろん井戸も掘りました。井戸水の温度は年中15度ぐらいなので、冷房に使えます。

呉氏 冬はかなり寒いのですか？

中安氏 はい。マイナス10度ぐらいになるときもあります。夏は35度ぐらいまでいく日が数日あるぐらいです。

呉氏 どうしてそこまで徹底しようと思ったのですか？

中安氏 僕らは100年後の古民家を目指しているからです。今は古民家ブームですが、今の通常の新築の家のなかに、100年後に古民家になる家はほとんどないのではないのでしょうか。

呉氏 耐えられないということですか？

中安氏 はい。大工さんにも、100年後に古民家

として残せるものを建ててほしいとお願いし、強度を重視してもらいました。でも、お金はないので、いろいろなところから融資を受け、電気工事の配線など、自分たちでやれるところはなるべく自分たちで行いました。

呉氏 気遣いながら、木を使った技術と空間というテーマを掲げていらっしゃると思いますが、たとえば日本の建物のなかで、これはきづかいできている、できていないという基準はどこにありますか？

中安氏 建物という感覚では見ていなくて、自分自身もまだきづかいができていないとは思っていません。たとえば、木を切り過ぎると未来に残りません。つまり、木自体も生き物だということです。最近、僕もこの感覚をだいぶ持てるようになってきたのですが、最初は全然持てませんでした。でもこの自然乾燥のものは、匂いも残っているし、高温乾燥をかけていないため、死んでいないという感じがします。虫の穴もあるし、生きたままの状態に近いです。

呉氏 木材は通常、高温乾燥をかけるのですか？

中安氏 はい。ほとんどそうです。

呉氏 伸び縮みするとか、よく聞きます。それ以上に、生きていく感じがするのですか？

中安氏 はい。あとは人の手、大工さんの手が加わっているということ。今、技術は人の手を加えない方向に進んでいますよね。でも、本来は違うと思っています。人の手が加われば加わるほど、みんなそれが仕事だと思えると思います。だから、手が加わった上で効率化する方法を考えたほうがいい。どうして人の手を加えない

方向に進んでいるのかわかりません。それって仕事なんですか？と思います。

呉氏 具体的に言うと、どういうことですか？たとえば、食べ物でいうと、工場で作った食べ物より、レストランで作ったもののほうが、手が加わっている感じがするというような理解でいいですか？

中安氏 工場が悪いとは思わないのですが、自分が自然と対等であると考えのなら、自分と関わりがあるものを使うほうがいいということです。

呉氏 そこまでやっていながら、ご自身のきづかいは、まだ足りていないと感じるということは、日本全体では全然足りていないですね？

中安氏 人のことはどうでもよくて、自分自身がどう思っているかが大事だと思っています。僕がまだ足りていないと思うのには、大きな理由があります。最初、僕は、巻き枯らしという方法で木を乾燥させようと思いました。立っている杉の木は、皮の内側で水を吸い上げているのですが、皮を1周切ってしまうと水を吸わなくなり枯れてしまいます。最初、それを利用して、木を立ったまま効率よく乾かそうと思いました。しかし、80歳ぐらいの方に、そんなやり方は縁起が悪いから駄目だともものすごく怒られました。

呉氏 縁起が悪いという理由で駄目なのですか？

中安氏 はい。でもそれを言っているのは80歳以上ぐらいの人だけなので、自分たちも最初は論理的な理由が分かりませんでした。秋に風が強くなる地域なので、立ったまま枯らして、折れて倒れたら危険だという理由もあると思いますが、それよ

りも、木を生き物として見ていて、立っ  
たまま殺すつもりか、という感覚を持っ  
ている人たちなのだと思います。東北地  
方のほかの地域にも聞いてみたら、やは  
り、巻き枯らしはしないという地域が多  
かったです。

呉氏 巻き枯らし、という方法を初めて聞いた  
ので分からないのですが、地方によっ  
ても違いますか？

中安氏 西のほうのことは知りませんが、戦後  
に、効率よく木を乾かすために取られた  
方法のようです。

呉氏 つまり、生き物への気遣いの的にはNGと  
いうことですね。

中安氏 はい。今はそう思いますが、当時は、よ  
く分かりませんでした。

呉氏 その気遣いの感覚もここ数年で変わって  
きた、育ってきたということですか？

中安氏 はい。今コミュニティーで暮らしていま  
すが、コミュニティーって、自分の行い  
によって、コミュニティー自体が危うく  
なることもあります。たとえば、自分が  
迷惑を掛けることをすれば、コミュニ  
ティー全体で迷惑を負い、自分が何かい  
いことをすれば、コミュニティー全体が  
潤う。そういうことを通して、気遣いや  
責任感なども含めて成長してきたと思  
います。僕らは基本、薪を使う作業が多  
いのですが、自分の家の分だけでなく、コ  
ミュニティーメンバーの家も暖かくする  
ために、みんなの分も作って薪を運んで  
あげたりもします。

呉氏 気遣いが浸透した社会の未来は、今後、  
どうあってほしいと望んでおられます  
か？

中安氏 まず、自分たちは一次生態系の上に生き  
ているということを、きちんと実感して

ほしいと思います。東京にいとその実  
感はかなり少ないと思いますので。

呉氏 一次生態系の上にいるということ、も  
う少し分かりやすくお願いします。

中安氏 人間の経済系というのは、生態系の上  
に築かれています。たとえば都市部とい  
うのは、今はあまり循環もしていないと  
思いますが、循環できたとしても、人間  
の経済のなかでしか行われなと思うので  
す。それが田舎だと、縦の循環ができ  
るのです。たとえば、薪を燃やすとCO2に  
なって、それが光合成で酸素に戻ると  
か、微生物が生ごみを分解してとか、そ  
ういう循環が、人間と、もっとベースに  
いる動植物との間に生まれています。そ  
ういうことをもっと意識してほしいと思  
います。都会ではどうしても、その循環  
系を意識しづらくなっている気がしま  
す。大学で作られる新しい技術も、人間  
が出したものをまた人間が使うために、  
という循環系しか見えていない。たと  
えばCCUSなどのCO2利用がそうで、出  
したCO2を一度吸着して処分し、それを  
また燃料として使うというようなもの  
です。それもいいとは思いますが、結局、  
できたCO2を、エントロピーが高い状態  
のまま、また使うので、100%は戻ら  
ないわけです。

呉氏 エントロピーが高いとは、どういう意味  
ですか？

中安氏 熱の乱雑さが増す状態です。要は有機物  
からCO2になっていく状態を想像して  
もらえるといいのですが、それを一度、炭  
素固定という形で固定してあげる状態に  
戻すには、生態系のほうまで踏み込ま

ければいけないのです。だから、それを都市から生態系に戻すような循環をしっかり作ってあげる必要があります。

呉氏 確かに、都市のものが循環に戻っていくイメージはあまりないですね。

中安氏 だから、都市部では、せめて人間の間の横の循環系で回せばいいとは思いますが、それだと100%は戻らないので、それは結局、生態系から搾取していることになります。たとえば、リチウムも鉱山から掘り出していますから生態系からの恩恵です。今は炭素でCO2の問題があります。リチウムだって将来的には、何か問題が出てくるかもしれません。リチウムを掘り出すことの問題は、まだ誰にも分かりませんが、石油だって最初は掘り出しても問題ないと思っていたわけですから。結局、地下に埋まっている資源を掘り出して使うという行為自体は変わっていない。今、危険性が顕在化しているものについては、もう掘り出さないようにしようと言っていますが、結局また、違う資源を掘り出すのです。

呉氏 本質的には変わっていないということですね。地球の資源を掘り出して使うこと自体に疑問を感じるから、もっと循環させる仕組みを考えよう。それが根付けばまた違う未来があるんじゃないか、ということですね。

中安氏 結局、僕らは石油を食って生きているようなものです。石油も、元はただの地域資源でした。それを、これ掘ればいいんじゃないね？みたいなところから、おかしくなった。今、農業も、取れるエネルギーの3倍ぐらいのエネルギーを投入してい

ますから、僕らは石油を食べて、石油によって増えた人間だと思し、だから無機質な生き方をしているかもしれないよねと思ったりします。石油がなければ、人口も3分の1ぐらいだったわけです。そんな、エネルギーを大量に使う温室で増えた人間たちは、増えるはずのなかった人間です。

男性A 都市部にいても、何らかの形で少しでも、生態系のほうに5%でも10%でも、何か流していくことについて、こういうやり方があるんじゃないの？というお考えはありますか？

中安氏 僕はグラデーションだと思っています。都市部の横の循環を、徐々に角度を変えて斜めの循環にし、最後に自給自足の縦の循環にしていくといいと思います。都市部には人が集まりますが、多くの人にとって、人が多すぎることは心地良くないでしょう。都市部の速いスピードについていけない人は、そこで頑張ればいいですが、そうでない人まで巻き込むなよと思います。みんなを巻き込まないような、もっと斜めの循環系の場所をどんどん作って、各々に合う角度で、あるときは都市部に行ってもいいし、柔軟に、レジリエンスの高い、ちゃんとした空間を作ってあげるといいのかなといつも思っています。こうだと決めてしまうと良くないので。

呉氏 ありがとうございます。

# 23

## ナマコの世界の探求による安全で豊かな世界創り

一橋 和義

Ichihashi Kazuyoshi

東京大学医学部附属病院・助教

鳥取県米子市出身 神戸大学卒業 現在、東京大学医学部附属病院臨床研究ガバナンス部で臨床研究に関する支援業務を行いながら、自らの研究を行っています。ナマコの生理・生態の研究を学生の頃から続けてきており、特にナマコの音受容の研究に夢中です。微生物から魚、貝、ヒトを対象とした様々な研究（バイオマス、水産養殖、環境科学、音楽療法、実験心理学、サイエンスコミュニケーション、医療等）で自分のやりたい研究やイベント等を行ってきました。様々な分野の研究経験を背景に、ヒトのような高度な脳をもたないナマコの世界を探究し、ナマコとヒトの異なる視点から世界を眺め、様々な分野の問題解決や新たな価値の創造を目指しています。

ナマコはヒトのような高度な脳を持たないが、何億年も前から深い海底から浅い海岸まで幅広く世界中に分布し生存してきている。ヒトは脳を極度に発達させて生存してきた生物であるが、ナマコは脳を発達させないようにして生存してきた。ナマコの生理・生態・世界を探求することで、新たな視点を生み出し、ヒトの生き方の弊害や、行き詰まりの問題を解決しようとするのが私の研究の大まかな目的である。ヒトとは異なる時間、世界を生きているナマコのナマコな空間（ナマコモード）をヒトの世界に組み込んでゆきたい。また、ナマコとヒトの世界の狭間にある、対局の視点を持った価値観から世界を眺め、世界を探求することでより面白く深淵な世界観を示したい。ここで、ナマコの生理・生態を簡単な詩（ナマコモード）で紹介する。

詩1. お前は能無し！て怒鳴られた それでも私はにっこにこ だってナマコも脳ないもん

心臓肝臓目耳ないよ 筋肉ペラペラ省エネモード 硬さの変わる皮膚厚く砂を食べて生きてます 省エネ第一地球の未来 私の生き方ナマコモード  
※解説1.脳を鍛え、筋肉を鍛えいかに目的を効率的に達成するか！とは真逆、筋肉に比べエネルギー消費量の少ない硬さを変えられる皮膚（真皮）を持ち、足元にある砂や泥を食べてその中の栄養を摂取し省エネで生きている。

詩2. 無い無いづくしのナマコもね ストレスかかると胃腸にくるよ そんな時には大掃除

内臓みんなパツと捨て去る お腹はすっきりからっぽさ ストレス食欲消え失せた これが本当の無の境地 海の底で悟ったよ 無の生き方ナマコモード

※解説2.ストレスがかかるとヒトにとっては重要な臓器（消化管等）をあっさり捨て去り皮だけになり後で内臓を再生する。ストレスがかかったとき重要と思えるものを手放すこと、皮膚に着目することが健康維持に重要かも。

詩3. 切断されても大丈夫 2つの私になればいい お尻と頭はそれぞれ歩く びっくりたまげた復活再生能 平和にゆっくり焦ることなく 管足いっぱい地に足つけて 希望の波動未来へ向かう 究極ポジティブ しぶとい生き方ナマコモード

※解説3.分断破壊されても各々の部位が残された機能を最適化し、短時間で機能回復できる再生能には、中央制御型ではなく分散制御型システムの発達が重要である。非常時のローカルな部分の自律的最適化能とローカルな価値の多様性は安全なシステムや社会の構築に役立つのでは。



矢代氏 経歴を教えてください。

一橋氏 医療に興味があり、憧れである聖路加病院の元病院長、理事長、日野原重明さんの影響で音楽療法の基礎研究を志し、結果として音楽の研究とナマコの研究をするようになりました。

矢代氏 なぜ音楽とナマコの研究なのですか？

一橋氏 ナマコはストレスを感じると、食道以下の部分を切り離し、腸をお尻から噴き出すという生態があり、腸管の再生について研究をするためにナマコを飼っていました。同時に音楽の研究もしたかったため、ピアニストの足裏に電極を貼り、脳の自律神経の活動を測定する研究をしていました。あるとき、協力していただいているピアニストの先生から、ナマコを連れてきてもいいよという話をいただき、ピアノの横にナマコを置いて演奏を聴かせました。学生たちがいろいろな曲を演奏しているうちにシューマンのエチュード13番という曲の低音が響く箇所、いつもはじっとしているナマコがも

こもこと動いてお皿から出ようとしたのです。そこで低い音というのは海の音なのではないかと考え、実際に録音した海の音を周波数解析にかけたところ、割と低い音で満ちていることが分かりました。ナマコに耳はありませんが、自分がいたい環境の音を体全体で何となく感じて、そちらへ向かっていこうとするのではないかという仮説を立てたのです。レーザービームを用いてナマコの共鳴周波数の測定をしたところ100ヘルツ前後と低めであること、また石垣島の離島でナマコが住んでいるところの音を実際に測定したところ、ここでも低い音に満ちているということが分かりました。

矢代氏 なぜナマコなのですか？出会いを教えてください。

一橋氏 人生で初めて失恋をしたときに、心が海に沈んで、まるで海の底にいるナマコ以下になったような気分になりました。魚屋へ行って実際にナマコに触れてみたところ、硬くなったり軟らかくなったりと



非常に面白い生きものだと思います、そこからナマコの研究が始まりました。

矢代氏 ナマコについて現在どのような研究をしていますか？

一橋氏 脳や目や耳のないナマコがその抽象的な情報をどのように捉えて、自分の生態維持に役立っているのか、ナマコと音の関係を通して解き明かしたいと思っています。

矢代氏 研究をしていて、ナマコに一番人間味を感じる瞬間は何かありますか？

一橋氏 ナマコはストレスを感じたら胃腸を切り離す、つまり壊れる前に防御、防衛システムが働くということです。人間でも精神的ストレスから鬱になったり、落ち込んだりと普段使っている回路が途切れてしまうことがあります、そのあとで立ち直って戻れるというところですね。

矢代氏 VRなどでナマコになりきるとしたら、どの感覚を使ってエミュレートしますか？

一橋氏 触覚です。ナマコは体中がセンサーで、触覚で音を感じているので、振動、触覚をエミュレートしてナマコの世界を探求してみたいです。

宮野氏 ヒトとは全く異なるナマコの価値観は、実社会にどのように応用できますか？

一橋氏 ナマコはストレスがかかったときに、人間にとっては大事な臓器を捨ててしまうわけで、価値観が違います。もちろん体のつくりも違いますが、現代社会において、今まで価値があると思っていたことも、ストレスがかかって困ったときには、まず捨ててみて、それからまた考えるということも良いのではないかと思います。それから、ナマコには菅足というものがたくさんあり、それで貼りつくこ

とができますが、それが1つぐらい取れても、貼りついていられます。管足の1つ1つを価値観の数だと考えると、価値観がいっぱいある、多様性が高い方が生きるための足場に貼りついていられるということで、それを1つぐらい失っても耐えられ、生き残ってゆけるのではないかと思います。またナマコは体を2つに切って、それぞれの体を再構成して動くことができるわけですが、例えば経済システムなども何かあったときに、一部が壊れても残りの部分がまとまり、修復し、機能回復するような、安全弁のようなシステムがあれば良いかもしれません。

# 24

## スタジオリフレクシ ョン：経営(学)者が同居す る空間づくり

伊藤 智明 Ito Chiaki

京都大学経営管理大学院・特定講師

京都大学経営管理大学院・特定講師（みずほ証券寄附講座）。神戸大学大学院経営学研究科博士前期課程修了、同博士後期課程退学。京都大学経営管理大学院・特定助教を経て、2022年より現職。専門分野は「スタートアップの経営学」と「臨床経営学」で、特に、起業家の省察プロセスと組織が生まれるプロセスに関心を持つ。主要業績は「苦悩する連続起業家とパートナーシップ生成」（『経営行動科学』第33巻第3号）、「創業経営者による使用理論の省察と経営理念の制作」（『組織科学』第51巻第3号）、「同床異夢の成立プロセス」（共著・『Venture Review』第40号）。日本ベンチャー学会清成忠男賞論文部門（奨励賞）受賞。

私は、「ことばの交換」(Trading Language)と名づけた「カード」を媒介にした語りの共同生成によって、スタートアップの経営実践と経営学についてのもの語りを書くことと理論の生成を目指しています。私の専門は経営学で、特にスタートアップの経営学と臨床経営学を研究し、語りの共同生成としての経営(学)を提唱できればと考えています。

今回、私が提案したいのは、上記の「ことばの交換」でつくり上げてきた空間をより私的かつ公共的なものに拡張することです。この語り合いの空間を「スタジオリフレクション」と名づけて、このスタジオに集う人びとが、安心して、夢中になり、語り合えるようにします。メディアクリエイターの佐藤雅彦氏が紫綬褒章の受章インタビューで述べたように、‘study’の語源であるラテン語の‘studious’は「夢中になる」状態を意味します。すなわち、この名称は、人びとが夢中になって、省察できる空間をつくるという「こころざし」を提示するためのものになります。

スタジオリフレクションにおける経営者というのは、自己と他者が共存共栄できる道筋を模索し、そうした共存共栄を実現できる共同世界の制作者のことです。また、経営学者というのは、こうした経営者のパートナーになります。この意味において、スタジオリフレクションでは、誰もが経営者であり得るし（企業の経営者に限らない！）、経営者と経営学者の役割は交換され得るものになります。

スタジオリフレクションの空間に集うことで、人びとは安心して、夢中になって、語り合うことができます。誰しもが人に言えない悩みがあるものです。スタジオリフレクションでは、そうした悩みを無理に語る必要もありません。この空間には、経営(学)者が一人は必ず居ますので、経営(学)者と語り合うことで、ご自身の、また、ご自身が関わる組織のもの語りの意味を存分に味わいながら、自分たちにとって意味のあるもの語りへと編集してみてください。

本提案の理論的、方法論的な支柱である語りの共同生成は、心理学者のやまだようこ氏が提唱されたもので、人と人をつなぐ媒介項の設定が鍵になります。私自身は、語り合いの記録を作成し、蓄積することを通じて、この記録が語り合いの媒介項になるように空間をデザインしていきます。

叔父が営んでいた盆栽園の応接スペースが、スタジオリフレクションの空間イメージになります。叔父が営んでいた盆栽園の応接スペースのように、盆栽に相当する媒介物を見ながら、語り合えればと思っています。



呉氏 臨床経営学という言葉は、初めて聞きました。スタートアップの経営者と語り合うことばの交換という手法でもの語りを書く、理論の生成を目指すということをされていますが、1人が2人になることの葛藤など、いくつかわからない言葉がありました。伊藤さんは、京都大学の経営管理大学院の講師をされていますが、どのような研究をされて臨床経営学にたどりついたのでしょうか。

伊藤氏 臨床経営学は、学際融合教育研究推進センターのファンドで支援を受けているプロジェクトになります。それまでは仲間内で、自分たちのやっていることを「臨床経営学」と呼んで、研究を続けていました。

呉氏 仲間内とはどのような人々でしょうか。

伊藤氏 私は、神戸大学大学院経営学研究科で学びました。その時の指導教員は金井壽宏先生になります。金井先生のルーツが臨床経営学につながっています。金井先生は、京都大学教育学部で学部時代を過ご

し、河合隼雄先生に師事していたと伺っています。その後、先生の故郷に近い神戸大学大学院で経営学を研究するようになりました。経営学には働く人の心理の問題を取り上げる組織行動論という分野があります。この分野では、働く人たちのモチベーションやリーダーシップ、キャリアといった問題を扱うこととなります。組織行動論の分野で議論されている内容は、今となつては、研究者の世界でも、企業で働く人にとっても当たり前になっていますが、1978年に金井先生が大学院に入った頃は、そんな小さい問題をやっているのかと言われるような時代だったと聞いています。臨床経営学と一緒にやっている仲間というのは、この金井ゼミで同時期を過ごした方々や学会で交流させていただいている方々になります。

呉氏 金井先生から影響を受けたのですね。

伊藤氏 科学的な姿勢というのが、経営学でも当たり前になっています。科学的な姿勢が

重要なことは言うまでもありません。ですが、実際に目の前にいる経営者の苦悩、楽しみや喜びなど、生きる中で実際に感じていることを、主観的なものとして極力排除することになってしまいます。臨床経営学では、経営者が成功したり、結果が出たあとに分析したりするのではなく、一緒に並ぶというか、どうなるか分からない中で経営者が自らの人生の中で経営していることを、研究者も自分の人生の中でリアルタイムで観察できないか、それが自分の生きる道なのではないかと思いました。

呉氏 臨床には、観察者が永遠に観察者で、観察している対象に完全に影響を与えないということはある得ないという考え方がありますね。臨床経営学の、研究者が対象に併走していくという考え方は、心理学から来ているという考え方は腑に落ちました。心理学で臨床というと病を治すという目的がありますが、臨床経営学ではどういう目的になるのでしょうか。

伊藤氏 私は、臨床経営学の視点でスタートアップに併走しています。一般にスタートアップは千三つ（せんみつ）といわれます。千三つというのは、1,000社つくって、上場できるのは3社という意味です。要するに、成功者は限られているわけです。ですが、成功以外にも注目しないといけないこともあるでしょう。例えば、倒産や廃業があります。倒産や廃業は、法人としては死を意味するでしょう。乃村一政さんという経営者がいて、9年前に彼が廃業した時に私も悩みました。法人はなくなって、事業は継続できないわけです。でも、経営者の人生はそ

の後も続きます。そういった経営者の語りを聞き続けてきました。多くの経営学者は、こういった語りを聞き続けることを理論構築に必要なものだと認識していないかもしれません。

呉氏 成功したというキラキラした話だけではなく、失敗もしっかりと含めた経営を研究の対象にすべきではないかということですね。

伊藤氏 失敗もそうですね。10年間を過ごしても、実際のところ、ほとんど何も起こりません。もちろん、いいニュースもたまにはありますが。例えば、上場したとして、その上場を分析するときに何も起こらなかった10年間を見ることはほとんど不可能でしょう。しかし私は、その10年間の乃村さんを見ているわけです。彼は彼の日常を過ごし、私は私の日常を過ごし、1ヶ月に1度、話を聞くわけです。その10年間、基本的には何も起こらないのですが、乃村さんは経営者として、人間として、考え続けているわけです。私はもう51回、乃村さんの話を聞いていますが、その51回を重ねる中で、彼と語り合う時間は1回1時間と定まってきました。また、どのように話すのかもだいたい決まっています。前回からどんなことがあったかを、まずは彼が1人でひたすら40分間話してくれます。

呉氏 大きく分けて人事とか資金調達のことでしょうか。よくヒト、モノ、カネといわれますが。

伊藤氏 彼が話したいのは、自分の理論や、ものの見方です。学術的な用語では、行為の

理論やしろとうと理論といいます。研究者と同じように、経営者は自分の経験や勘から AをしたらBが起こる といった理論のようなものを持っています。ある出来事に対して、これでうまくいくと思ってやったけれど失敗したとか、行為の理論やしろとうと理論に相当する経験則が更新されたことを記録に残したいのでしょう。スポーツ選手、アスリートもそういう記録を取ったりするそうですね。こういうアプローチをしたらうまくいった、逆に、うまくいくと思ったがうまくいかなかったというのを、ひたすら精度を上げたいのでしょう。経営者としても、ものの見方、目を鍛えたいということだと思います。それらをひたすら内省しながら話してくれます。だからこの話をしようということは決めていません。

呉氏 傍から見ると雑談に近い、最近どうだったとか、この1年会わなかったけど、何があったという話をしているのですね。

伊藤氏 それをひたすら聞きます。40分目くらいに、逆に伊藤さんはどうだったと聞かれて、自分の話をします。

呉氏 そこがことばの交換ですね。

伊藤氏 そうですね。それで、スタートアップの経営者の苦悩には、自分の夢を理解してもらえないことも含まれるかもしれません。ソフトバンクの孫正義さんであれば、新事業を始めるときにみんなが協力してくれて、お金も出してもらいやすいかもしれません。ですが、スタートアップで実績のない人の大きな夢は、何も実現していないときに語られるので、理解されにくいはずです。私もスタートアップの経営者の夢を理解できているわけで

はありません。しかし言葉を重ねることはできるので、似たような話をするのです。私にも研究者としての妄想がありますから。乃村さんの妄想と現実が混ざっている言葉に対して重ねるコミュニケーションを取ります。重ねると、自分の話をきちんと聞いて理解してもらっているとお互いに思えるのです。私が研究で苦しいときに途中で止めないモチベーション、理由付けの1つです。一緒にやっている乃村さんが止めていないのに、自分の研究が苦しいから止めますとはいえないわけです。悪い意味でのプレッシャーではなく、乃村さんもきつと頑張っているから、自分も踏ん張れていると思っています。聞いたことはないですが、彼もたぶんそう思っている可能性があるのではないのでしょうか。それが私のいう臨床的な関わり合いの理解です。

呉氏 観察することが研究というイメージが強かったのですが、臨床の心理学から来ている、お互いに関わるという考え方なのですね。

伊藤氏 彼は自分の経営や企業、人生がうまくいくように何かをしたいわけです。私はもちろんそれを助けたいけれどお金持ちではないので、彼が必要とする1億円の資金は用意できません。それができない代わりにできること、記録を取ることにしています。これは臨床心理学やカウンセラー的な考えと一致すると思いますが、大丈夫だと伝えて、そして次もまた必ず会いに行きます。失敗しても、倒産しても、会い続けるのです。人間誰も反失敗バイアスがあります。失敗には価値がないと思うわ

けです。成功した孫正義さんの話はみんな喜んで聞きたいのです。孫さんだけではなく誰の例でもそうですね。スティーブ・ジョブズはうまくいって、アップルというすばらしい企業をつくった。iPhoneをつくった会社のオーナーで経営者である。だからみんな一生懸命話を聞こうと思うし、本も読みます。そういうバイアスを持っているのは経営学者だけではありません。でも私はそれとは違う基準で接しています。あなたがうまくいくか・いかないかでいうと、もちろんうまくいってほしいけれど、うまくいなくても、別にこれまでの何かがなくなるわけではない、ということです。

呉氏 現状の経営学ではなく、臨床経営学でないと解き明かせないものは何ですか。もちろん金井先生がされたことだというのはわかりましたが、それでもやらないという選択肢もあったのではないのでしょうか。

伊藤氏 一番近いのはエスノグラフィーという人類学の方法で、学術用語になっています。異文化に住み込んで他者を濃厚に記述をすることで、自分の常識とは違う生き方を理解していきます。人類学の人にはエスノグラフィーはこういうことではないといわれるかもしれませんが。

呉氏 人類学の場合は他者の中に濃厚に入るけれど、エンパワーという気持ちはありませんね。

伊藤氏 そうかもしれませんね。人類学的なアプローチと異なるかもしれないのは、関わり合いながら、「少し」はいい影響を与えようとしていることです。役立とうとまではいかないかもしれませんが、相手

に幸あれと思いながら、時に理論を伝えたりしています。

呉氏 コンサルティングに近い感覚がありますね。

伊藤氏 半分はコンサルティングです。ただコンサルティングにはいろいろアプローチがあります。私たちは、こうすれば絶対うまくいくとはいえません。研究者は性質的にそういうことは言いにくいかもしれませんが。臨床経営学でないと解き明かせないのは、日常的で些末な問題になるかもしれません。解き明かしているかどうかは別として、私は何気ないことを書きたいです。乃村さんという人が、あるとき、普通なら論文に書かないようなことを話していました。彼が経営者としてうまくいかず、2013年10月に大きな失敗をしたのですが、そこから立ち直るときに励まされる言葉がありました。堀主知ロバートさんというITスタートアップで有名な起業家が「商売やってると9割うまくいかんよね。9割もうまくいかない。それでもうまくいかすやつはおんねん」というのを忘れんといてほしい」と言ったそうです。それを私とのことばの交換のなかで話したのです。おそらくその言葉にとっても励まされ、希望の光のように覚えていたのでしょう。それは普通の経営学の学会等で報告すると、とても胡散臭い話として評価されてしまいます。

呉氏 数値化もされてないし、ただのエピソードに過ぎないというわけですね。

伊藤氏 おそらく、あのときの乃村さんはとても励まされたのではないのでしょうか。あの言葉がなかったら心が折れていたでしょう。

呉氏 一見とても些細なことで、今までの経営学会などでは全然評価されないけれど、伊藤さんは、実はこれが経営者にとって大事な要素ではないかと思ったのですね。

伊藤氏 別に論文に書いているわけではないですが、私もそういう経験があるからわかると思うわけです。

呉氏 小さい言葉に励まされる経験は、私にもあります。

伊藤氏 臨床でやりたいのは、まさにそういうことです。私は演劇やドラマ制作が好きでテレビドラマの助監督をやっていたのですが、辞めてしまいました。今から考えると若気の至りですが、無能感に苛まれて辞めてしまって、人生はどうしようもないと思っていたときに、大学の先輩が「お前のようないいやつが辞めるなんてテレビ業界も終わっているな」と言ってくれました。これで意味が変わるのです。駄目な自分というものの語りが、いわれたことによって駄目ではないというふうに。それこそその語りを生きているわけです。

呉氏 テレビ局が駄目だったというものの語りですね。

伊藤氏 それは一朝一夕で思い込めるわけではありません。しかし、そういう見方をする人もいるのだとか、自分もそう見てもいいのだと思ったりするわけです。今となっては経営学的にも説明できます。そんな雇用では若者は続けられないのが当たり前だとか、根性で乗り切れるものではないとか。こんなにテレビドラマが大好きな自分を続けさせられなかった業界は本当に終わっているとか。生きているなかでこういうことはあります。臨床経

営学ではそういうことをしたいのです。

呉氏 臨床ということで、今までの経営学と違い、悩みを解決するという目線があります。観察だけでデータを分析して何々論を出すということではないというのはよくわかりました。だからもの語りを書くということですね。普通、物語は漢字で表記しますが、伊藤さんの書かれていたのは、ものがひらがなで、語りが漢字ですね。漢字にすると、やはりストーリーになってしまうからでしょうか。

伊藤氏 それは、私が考えた表記ではありません。学際センターの宮野先生や、京都大学名誉教授で心理学者のやまだようこ先生がナラティブをどう訳すかということの問題にしています。ナラティブという言葉は、企業でも使われ始めているのでしょうか。ウェルビーイングやSDGsなどもそうですが、新しい言葉がひたすら増えていますね。ナラティブは大事な用語ですが、カタカナ語の氾濫はやはりよくない、なんとか日本語にしたいとやまだようこ先生がいつています。しかし、漢字で物語とするとフィクションや昔話などの限定的な意味になってしまいます。そこで、もの語りとしたということです。やまだようこ先生は、日本語のものという言葉は深いといっています。もの語り、ナラティブは何かと何かをつなぐことです。先ほどの視点の変更がまさにそうですね。テレビ業界が終わっているというのは、別の点をつないで編集し、もの語りを書き換えたのです。

呉氏 自分が苦しいというものを、テレビ業界は終わっていると書き換えたわけで



すね。こんなに好きな自分が続けられないのは、世の中がおかしい。

伊藤氏 私がというよりは、やまだようこ先生やナラティヴ・アプローチの人がいっていることです。

呉氏 語り合いは、取材や話し合いとはどう違うのでしょうか。

伊藤氏 見ようによっては、今日も語りの共同生成をしていることになります。私の正解は、呉さんの正解とは異なるかもしれませんが。そうしたズレを認識するために、語りの共同生成をしているとも言えるでしょう。そこにたどり着くための作業として、語りの共同生成が起こります。私はそこで、呉さんから見たらこう見えるのかと思って、語りをまた紡いでいくのです。今日、話をしたことによって、臨床経営学についてまた何かしらが加わります。そして呉さんに分かってもらうことによって、それがまた私に影響を、基本的にはいい影響をもたらすのです。

呉氏 取材をしても相互に影響を及ぼして、私の認識も、伊藤さんの認識も変わっていく、語りの共同生成という要素があるわけですね。話し合いでは、何か目的に達してしまう感じがします。

伊藤氏 やまだようこ先生の受け売りですが、語りの共同先生とは、二人の間に何かあるというより、二人の間で一緒に何かをつくっていくことです。

乃村さんという経営者が語っているとき、私は一緒に味わっているわけです。そこに私のもの語りを少しブレンドすると、それで乃村さんのもの語り、乃村さんがつくっている企業のもの語りが、ほんの少し良くなります。それ自体が良くなるなくても、あとで彼がチェックした

ときに良くなったと思えるはずです。私も乃村さんと語ることによって自分の経営学を忘れずにいて、あるべき姿にしておけるのだと思います。

呉氏 経営実践と経営学が同居する場合は専門的で、話し合いによって理論を抽出しようとしています。もの語りによって、今まで経営学で重視されなかった、このときにこういう言葉があれば元気が出るというように、話しあえれば建設的な方向に持っていけます。他の方と話し合うには、どういう条件が満たされる空間がよいのでしょうか。

伊藤氏 2年前に亡くなった叔父は盆栽職人で、土間を応接スペースとして使っていました。土間で語り合うときには、盆栽や骨とう品などが媒介物になったのだと思っています。

呉氏 媒介物があるとは、一緒に眺めるものがあるということですか。

伊藤氏 まさにそうです。やまだようこ先生が、並ぶ関係とおっしゃっています。ここ（VEIL SHIBUYAの地下）も秘密基地のようで良いですが、ディテールはいろいろとこだわるのが良いと思います。ですので、私のイメージは盆栽園の応接スペースになります。盆栽のような媒介物がある土間にみんなで集まれたらと思います。その場所では、経営者は別に企業の経営者というだけではなく、ただ生きて働いている人です。それで、生きることと働くことを一緒に考えることができる空間にできればと思います。そういえば、叔父は盆栽がどうやって伸びたいかを分かる人だと言われていました。私の中での経営学者のイメージは、まさにそ

れです。この人がどうなりたいか、このものの語りがどう語られたいか、この会社がどう伸びたいかがわかる人になりたいと思ってやっています。

呉氏 それで場を作るとなると、もう一つのほうですか。

伊藤氏 土間があって、土があって、何か味わえるものがあればいいですね。それは我々の言葉自体でもいいでしょう。

呉氏 盆栽に限らず、2人で同じものを眺めながら話をしているということですか。

伊藤氏 そうです。そして正解がないほうがいいですね。たとえば、この盆栽は絶対にこうやって見るのがいいということになると、おそらく語りの共同生成が起きにくくなります。こうやって見えますよね、というふうに味わえばいいのです。

呉氏 こういう見方もあるという話をしながら、関係性が深まっていく場でしょうか。

伊藤氏 関係も深まるし、本人が自分の居場所に戻ったときに、おそらく何かが悪くなっているはずですよ。

呉氏 経営学は分析的な目線が大きい印象がありました。臨床が入ることで、その方に関わって良くしていきたい、エンパワーしたいという気持ちが伝わってきました。

男性A 今のお話ですと、オンラインでは難しいですね。語りの共同生成にはリアルな空間、たとえば土間があるからこそ共有できるものがあるという感じですね。

伊藤氏 まさにその通りです。だから浜松の天竜川の近くの盆栽園でやりたいと思っています。そこに集まるといいというものを語りと一緒につくっていけば、来てくれる

のではないかと思います。

宮野氏 人類学では、いろいろなフィールドに行って他者として観察をします。でも伊藤さんには、もう少し会社を良くしたいという視点があります。少しのようですが、とても大きい違いです。その関わり方は発問や質問とはだいぶ違うのでしょうか。それから、その場づくりに強引に引き寄せて、ここなら何かできるという場所なのではないでしょうか。

伊藤氏 力をもらえる場所でしょうか。

呉氏 コンサルティングとは違う形でエンパワーするという発想がおもしろいと思います。CHIE-NO-WAのツーリストシップの話もありましたが、もう少し主体的に関わっていくというのが、経営学のもう一つのありようだとわかりました。また理論が生成されるのを楽しみにしています。



# 26

## Sexual Reproductive Health and Rightsが 根付いた社会

---

**池田 裕美枝** Ikeda Yumie

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系健康情報学分野・博士  
課程

京都大学医学部卒業。市立舞鶴市民病院、洛和会音羽病院にて総合内科研修後、産婦人科に転向。現在、二宮レディースクリニックでの産婦人科外来、神戸市立医療センター中央市民病院の女性外来、京都大学医学部附属病院の女性ヘルスケア外来を担当しつつ、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系健康情報学博士課程にて、女性の社会的孤立や月経前症候群による社会的インパクトなどを研究している。

2011年英国リバプール熱帯医学校にてリプロダクティブ・ヘルスディプロマ修了。

2013年米国内科学会プログラムにてメイヨークリニックで女性内科研修。

一般社団法人SRHR Japan代表

Sexual Reproductive Health and Rights (SRHR : 性と生殖に関する健康と権利)とは、誰と結婚し、子どもを持つか持たないか、いつ何人持つか、は、社会や文化に強制されるのではなく、個人がそれぞれに決めて良いという概念である。Bodily Autonomy (からだの自己決定権) の尊重がSRHRの根幹で、自己決定のために必要な知識や医療サービスなどのインフラをすべての人に提供できる社会を構築しよう、というものである。

1970年代の第二次フェミニズムで生まれたSRHRの理念は、1994年に世界人口開発会議で日本を含む179カ国が採択した行動目標に明記されて以降、国際保険の基軸になった。先進国でも途上国でも、医療政策としてSRHRを掲げ、成人の健康が次世代の健康に益するSRHRサービスを普及させている。SDGsでは3.7ならびに5.6にSRHRの普遍的普及が掲げられ、達成目標が定められている。

一方、日本においてはSRHRが根付いていない。

例えば日本の産婦人科学の進歩は世界屈指の成績を誇る一方、SRHRがほぼ語られない。急速な生殖医療や遺伝子治療の進歩に伴い、Bodily Autonomyをいかに支えるかが重要であるものの、他国と比しても本分野の議論がかなり乏しく、法律も無いに等しい。市民の生殖や避妊の知識は乏しく、有効な避妊の普及やがん検診、性感染症予防などは他国と比べても立ち遅れている。ジェンダー暴力や虐待の被害者支援や予防についても包括的議論が圧倒的に不足している。

我々の考える空間提案は、SRHRが私たちの地域社会に程よく消化された社会である。これを表現するために、VR空間での価値観カードならびに人生スゴロクワークを行う。1つ目のアバターは「当たりの属性をもつ自分」2つ目のアバターは「はすれの属性をもつ自分」。属性は、性別や人種、親の収入や障害の有無など自分の努力では決められないものを設定する。もし自分の属性が現実のものと違うとき、自分の価値観は変わるのか。それぞれの場合、子を持ちたいか。どんな子育てをしたいと思うか。参加者にはこれをもとに、SRHRが社会によって形作られることを体感してもらおう。

今を生きる私たちの価値は、子を持つとうが持つまいが、次世代に影響する。いまこそ大いに議論し、より健康な社会を次世代にバトンしたい。



矢代氏 今、池田さんがどういう研究をしていて、どういうふうに臨床でも活動しているかを教えてください。

池田氏 私の主なライフワークがSexual Reproductive Health and Rightsという、自分が自分の価値に沿った生き方ができるように健康面で社会がサポートしていくことが、社会側の役目だという考え方で、社会側の役目だという考え方で、私は産婦人科医で臨床もしていますが、今はヘルスケア外来や女性内科外来で、生き死にに関係ない病態ではあるけれども体の問題のせいで生きづらさを抱えている、もしくは心の問題のせいで生きづらさを抱えている人たちの治療をしています。具体的には、多いのはPMSや更年期などですが、性暴力被害の患者さんや、虐待を受けて育った患者さんのケアをしたりしています。

矢代氏 SRHRに関心を持つようになったのは、臨床での経験からスタートしたところが大きいのでしょうか。

池田氏 そうです。私はもともと内科医師で、女性の専門家になりたくて少し産婦人科を学ぼうと思って途中で転向しました。そのときはすぐに産婦人科から内科に戻るつもりでしたが、患者さんたちのお話を伺っていると、内科外来では見たことも聞いたこともないようなことを語る患者さんが多くて、これは放っておけないと思って産婦人科にずっといるという経緯があります。

矢代氏 見たことも聞いたこともないこととは、たとえばどういうことですか。

池田氏 たとえば今妊娠している子どもが夫の子どもではないのだけれども、自分はこれからどう生きていけばいいのだろうか、本当によくある話では、性感染症の自分がうつしたのか彼からもらったのか。それから、意図しなかった妊娠で中絶を選択できない人がいるということも結構衝撃でした。言語化に時間がかかるのですが分かりやすく言えば、自分で中絶を選ぶことができるほど自分を大事にできない人や、よく分からない主訴で来

る人。たとえば何度も熱を繰り返したり、何度もいろいろな病気で来る方など、病歴が全部うそで塗り固められていて、うそをつく必要のないところでうそをつくのです。そういったたくさんの患者さんとの出会いがありました。

矢代氏 医療的な医学的なアカデミズムが言語化していなかったようなことが、現場にはあったということですか。

池田氏 枠組みとしては、患者さんの孤立孤独を支えるといった地域包括ケアの枠組みという言葉で言語化されていたのだと思います。ただ、内科外来は、それは圧倒的に独居の高齢者の話であって、独居の高齢者の方々は援助希求をしないので、それをいかに地域で支えるかといった話が既に20年ほど前からなされていたと思います。地域包括ケアの枠組みの話がされ始めて、あちこちでいろいろな取り組みがあって失敗してという試行錯誤を重ねていたような時期に、私が産婦人科に転向して、女性と子どもの分野は、同じ課題なのにそういった枠組みがまだないのだなと思いました。

矢代氏 先ほどの自分で中絶を選択できないようなお話が、今回のSRHRの話とつながってくるのではないかと思ったのですが、先に、話題を変えたいとおっしゃっていた部分を教えてください。

池田氏 空間の提案という部分で、私が直感的にVR空間の話を書いたと思うのですが、私自身の強みがあってできる場所は、やはり学校で体トークルームを開催することだと思い直しました。何度かこういう街角保健室みたいな形で若者の居場所づくりをしている方のところで健康相談

会みたいなことをさせてもらうのですが、自分の体のことを語るときというのは会話が深掘りしやすいのです。それこそ生理の量はどれぐらいが普通なのか、というようなところからでも、自分が今普通だと思っていることは本当に普通なのかと考え出す子がいたり、わざわざセックスや中絶という話ではなくても、自分の体のことを誰か、自分より少し詳しいお姉さんみたいな人と話し合うのです。私が開催した場では女子ばかりでしたが、できるだけ4、5人のグループで自分のお姉さん、お兄さんのような人や、または、だいぶおじさんお婆さんから、私はこうだったという体験談を聞いたりすると、そこにやはりいろいろなバイアスの話が出てきます。本当に困って病院に行ったのに、このような扱いを受けてしまった、こんなに大変だったのに先生からこのように言われてしまったなど、そういうときに、それって嫌だと思っていいのだと気付いてくれるといった体感がありましたので、体トークルームをあちらこちらで開催することが、自分が今やりたいことだと思って提案をし直そうと思いました。

古谷氏 内科医から産婦人科医に転向されて、やはり女性の生きづらさというのは、特化して産婦人科医になったほうが対応できる、治せるといったという理解で合っていますか。男性も生きづらさも抱えたりすると思うのですが、女性の産婦人科医という立場を選ばれたことをお聞きしたいです。

池田氏 正直に言うと内科で診ている患者さんは、しゃべれない高齢者がほとんどです。病歴が大事という教育をすごく受け

るのですが、やはり、すぐ近くで見ている介護職の方や介護している方々、娘さんや義理の娘さんから病歴を取って一生懸命ピースをつなぎ合わせて何が起きているのかを解明していくことが多かった。一方、産婦人科の患者さんはしゃべれる。自分ひとりで病院に来れる。自分からは自分の内情を語ろうとしますが、聞けば、いろんなことを教えてくれるのです。それがすごく新鮮で、反対に言うと内科外来にはそういった少し調子が悪いけれどもお医者さんに相談するまでではないかなという人と、なかなか当時は出会うすべがありませんでした。今、産婦人科医として働いていて逆に感じているのが、産婦人科という科の持つ障壁で、内診されるかもしれないという恐怖があるから、やはり皆さん通いにくい。女性内科外来も担当しているのですが、そこでは内科だから内診されないだろうと思って来ましたなど、それこそ本当に自分がオーガズムを感じてしまうことの罪悪感を誰にも言えずに50年抱えていましたみたいな人も女性内科外来には来てくださったりするのです。しかし、女性内科はそれほどメジャーではありませんし、そのような科があることを誰も知らないし行こうと思わないではないですか。ですから本当は、普通のかかりつけの内科の先生たちが、それこそ私が出会っていた介護する側だった方々、同居していた娘さんなどに話を振るようなことができれば本当はもっといいのだろうと思って、今、内科の先生たちに内診台がなくてもできる女性診療という形で、いろいろなレクチャーシリーズを持ったりしています。

古谷氏 産婦人科医の壁が高いというのは非常に分かります。きょう初めて女性内科外来という言葉を知りましたが、話すだけである程度診察されるというのは確かにハードルが低いですね。

矢代氏 それは婦人科とはまた少し違うのですか。

池田氏 内科ですので違います。産婦人科には、これは産婦人科だなと思って行くではないですか。不調だけれども、どの科に行ったらいいんだろうときに産婦人科には行きません。

矢代氏 レディースクリニックもありますよね。

池田氏 レディースクリニックは産婦人科です。産科をやっていない婦人科だけのところもレディースクリニックとおっしゃったりします。

古谷氏 産婦人科は産むために来ている人が多いですので、ハッピーな人の中にアンハッピーな話題を持っていく抵抗感がすごくあるのですよね。産婦人科で妊娠でおなかの大きい人が多いと、自分が不調を原因に行くというのは、いたたまれないような気持ちになるときもあります。そういう意味では、産婦人科と掲げてしまうことによってコミュニケーションができない状態より、街角保健室や女性内科外来で、いろいろな人と交流がいいのかもしれないですね。

池田氏 病院の中で待っていても駄目だ、地域に出ないといけないとすごく思っていて、地元の中学校にもう15年ぐらい性教育に通っています。年に1回の性教育講義では、やはり何も伝えられません。私はこのような仕事をしていますという価値は恐らく私の話にはあると思うのです。



が、それこそ自分の体のことを自分が決めていい、自分が嫌なことを嫌だと思っ  
ていい、自分が好きなことを好きだと思  
っていいなど、そういうことは出前授  
業では何も伝わりません。ご自身に語っ  
ていただかないと、ということがあつ  
て、体トークルームをあっちこっちで  
きたらいいなと思います。

矢代氏 SRHRが日本に根付いていないことを感  
じます。具体的に法律がないに等しいと  
いうことも書いていたのですが、根付い  
ていない原因はどこにあるのでしょうか。

池田氏 今の私の考えでは、ボディリーオートノ  
ミーという言葉の日本語訳がうまく作れ  
なかったときに、ここかもしれないと思  
いました。私たちは身を削って社会に奉  
仕することが良いことだという感覚がす  
ごくあつて、若い子もみんな空気を読み  
ますし、自分が引かれたらどうしよう  
というような、自分のことを大事にする  
というそもそもの教育があまりありませ  
ん。倫理の教育や人権教育というとき  
に、相手を思いやりましょう、相手の立  
場に立って考えましょうということはず  
ごく言いますが、あなた自身を大事にし  
なさいということはあまり言わないでは  
ないですか。

古谷氏 小学校の道徳の授業参観に行ったとき、  
まず相手を考えるという話になって、気  
持ち悪いと感じました。今、入り口とし  
ては、私も女性という理屈で入ってくだ  
さっていますが、自分の価値に沿った生  
き方ができるというのは別に女性外来だ  
けに必要な話でもなくて、街角保健室み  
たいなものに男性も入れるといいなと思  
います。性的虐待などの話も含めると、

やはり女性だけで虐待が起こるわけでは  
なく、男性でも虐待が起こります。産婦  
人科医は恐らく男性になかなか会わない  
と思いますので、ぜひ男性とも会う空間  
だととてもすてきだなという気がしまし  
た。

池田氏 本当ですね。支配被支配の縦の関係性  
は、男性のほうが恐らく多いですね。  
ボディリーオートノミーを主軸にした、  
私というのはどういう人なのか、なりた  
い私にどうやったらなれるのかという話  
は、縦の関係性ではなくて横の関係性を  
いかに構築できるかという話だと思いま  
すし、これからすごく人口減少社会にな  
りますので、いわゆる組織の持つ強みの  
ような力というのは様変わりしていくも  
のなのだろうと思います。自分が一番楽  
な形で自分をプレゼンテーションするこ  
とが恐らくパフォーマンスもいいと思  
いますので、はやりの歌も全部そうなつ  
ているように、自分の個性が輝くような自  
分を作っていこうという流れのある中  
で、男性も女性も自分の体が楽なよう  
に、自分の心が楽なように生きることが  
できたらいいなと思います。その上で、  
リプロダクティブと言いますか、自分が  
どのように子育てをするのか、子どもが  
自分とは違った人間としてどのように  
育っていくのかなど、そういう議論が前  
向きにできたらいいなと思います。人口  
減少が悪いのではなく、人口減少をど  
のようにプロデュースしていくのかが  
SRHRのこれからの課題だと思っていま  
す。

矢代氏 SRHRの啓蒙のようなことで、体トーク  
ルームのお話があったのかなと思いまし

た。これは、どのくらいの年齢でやるといいということがありますか。

池田氏 女子は中学生、男子は高校生と、私はなんとなく思っています。

古谷氏 意外に明確でその理由が知りたいと思いました。女子はやはり初潮の時期ですか。

池田氏 女子はやはりそうです。私は中学校にずっと性教育に行っているのですが、私が産婦人科医だからということもありますが、女子はすごく食いつきがいいです。中学生ぐらいの初潮前後に反抗期がくるのですが、そのような感じです。男子は本当にシャットダウンが多くて、すごく興味があって冷やかしてくる子もいれば、体格も小さくて未だ少年という感じで恥ずかしいという子もたくさんいます。男子は精通が中学生から高校生に向けてで、女子のほうが初潮が早いということもあるかもしれません。なんとなく男子は高校生のほうが自分のことをより客観的に見られて、言葉を持って語れるのだらうと思います。

古谷氏 池田先生がやっていることは、青年男性に対してもやらなければいけない話だと思うのですが、コミュニケーションをする上で何に障害を感じていますか。人に伝えるときに何が難しいですか。

池田氏 まず一つは、フェミニズムとかジェンダーとかって言葉に対するアレルギー、性教育って言葉に対するアレルギーです。私はセックスはすごく体にいいものだと思っているのですが、安全で満ち足りたセックスというのはすごく心と体の健康にいいもので、西洋の国際学会では産婦人科学会の中で大きなワンセクションを持って語られますが、日本

では全くありません。学会でセックスが語られる、性機能学会という小さい学会はあるのですが、いわゆるメジャーな産婦人科学会でセックスについて語ることがまずない。外国の国際産婦人科学会には、男性も女性もフェミニスト的な発言をする人がたくさんいます。でも日本の産婦人科学会にフェミニストはほぼいないのです。もっとフェミニズムが産婦人科学会にはびこればいいのにとすごく思うのですが、恐らくそういうことはすごく引かれると思います。

古谷氏 フェミニストは学術ではないということ産婦人科学会ではどうあつまっているのか。

池田氏 医学ではありません。でも臨床医学ですから、やはりコミュニケーションで語らないといけません。

古谷氏 私は産婦人科学会に行ったことがありませんが、言われてみれば、その目線があつたほうが産婦人科学会は、女性にとってはすごく豊かになるなという気がします。セックスについても話してほしいという気はします。

矢代氏 ですが、自民党で日本医師会でいったようなことを考えると、絶対にそのようなことは起きなさそうだと非常に辛い気持ちになります。ある種ポリテクスみたいなものが日本では医師会みたいなところに大きな影響を持っているということが、新しいことが起きないみたいな話の根幹なのか、もっといろいろ問題があるのかというようなことはどうですか。現状がどうだからというよりも何をやるかということのほうが大事という気はするのですけれども。

池田氏 私の観察によると、今の60代の先生方

で、現役で働いている女性医師は非常に少ないのです。今、産婦人科医が1万人いて、20代の先生の7割は女性医師なのですが、70代になると100人ほどしか女性医師がいなくなります。なぜかという、出産するとみんな辞めさせられていたのです。もともと入局の時点で女が来るところではないとあからさまに言われていた先生も多いですし、それでも絶対に入ると言って産婦人科に入っても、子どもを妊娠したら、働けないやつはいらないと病院を辞めさせられる。病院を辞めさせられると皆さん開業しますので、開業医の地位は学会の中では低いのです。学会の理事は全員大学の教授ですので、そのようなところに女性医師が残れませんでした。そのような中にスーパーウーマンみたいな人たちがいて、今、何人かの女性の先生方がフェミニストの心を持って理事の中に殴りかかっているのです。福島大野事件という産科医師不足で1人で執刀しないといけなかった先生が、患者さんが出血過多で亡くなったときに刑事事件で告訴されたということがあったのですが、なぜ産婦人科医はこれほど少ないのかというときに、おばちゃん辞めているからだとなりました。私が医者になった20年前は、1人目を産んだ67%が辞めさせられていたのですが、頑張って歯を食いしばって残った先生が、産婦人科学会の中であの手この手を尽くして、10年前にイクボス宣言をやったのです。産婦人科医は女性医師が妊娠したらおめでとうと言わないといけないとトップダウンで決まったのです。どれ

だけ人が少なくてもおめでとうと言って産休を取らさなければいけないと決まって、それで今は女性医師がすごく増えているのです。学会に行くと託児室に200人ぐらい赤ちゃんがいるという状況です。今、上の先生方がひびを入れてくださっているのです。ですから学会のことに關しては、私たちの世代で同胞の産婦人科医等にSRHRを広げなければとすごく思いますし、また、それに共感する女性医師が今増えていますので、頑張ってやっていこうと思います。ただ、そうは言っても待たなしの状況に子どもたちがいますし、更年期外来なんてひどくて、発達障害の子どもの世話を認知症の親の介護にけがをした実母の介護にみたいなことで首が回らない中で、体調が悪いのをなんとかしてくださいというような、体調が悪くなるのも当然という人もいます。社会的なことで元気がない人すごく多いので、なんとかしなければという思いも同時にあります。職業団体のことは必ずやっていこうと思っています。

矢代氏 人口減少時代にSRHRがどのように関わってデザインしていくのかというお話があったと思うのですが、どういうロジックでSRHRが社会に対して働きかけていくのかを最後に教えてください。

池田氏 これはまだあまり練れていない考えなのですが、かつて子どもが多いほうが良かった時代というのが、自分が老いたときの世話を子どもに託すためには、たくさん産まなければいけなかった時代です。今もその考えは続いているのだと思います。高齢者がやばいというときに、自分たちが老いたときに誰が助けてくれ

るのだという。だけど今の子どもたちは親の面倒を見たくないです。たくさん産んだからって、たくさんの人たちが自分の面倒を見てくれません。ですから構造的に違うのだと思います。子どもはたくさんいたほうが良いと思っている人たちと、このSRHRでその次の世代の、その人がその人らしく生きられるように社会を作っていこうというのは、日本は極端な人口減少社会を迎えるので、必ずほかの国の人たちと仲良くしていかないとはいけません。日本国内だけでは、どうしても高齢者の私たちが年老いたときの社会が機能しません。そもそも今の国債の状況だって福祉制度、医療と年金と福祉とがまるまる全部国債です。全部未来の借金にして今の高齢者のお世話をすることが、私たちがこれから生まれ来る子どもたちを大事にしていけない証拠のように思えてしまいます。そのような中で産みたいと思う人も当然少ないでしょう。だけど子どもを得る、子どもと共に生きるということは本当に素晴らしいことですし、この社会を託すということ、今の負の遺産を託すということ、これを考えて考えれば、多くの人に楽しんでいただきたい価値だと思いますので、そうすると私たちの医療介護保険制度を抜本的に見直していかないといけない話になるのだらうとも思います。どうしても移民政策と隣り合わせの話になるのだと思いますけれども、日本の移民政策は本当にお粗末ですし、労働力の人権をあまり考えていないように見えてしまいますし、移民の人たちがほかの先進国にも行ける中で、日本を選んでくださるのか。いろいろな国の人々がどこかほかの国に行つて

働こうというときに日本を選んでくださるのかという話に、密にリンクしているのだらうと思います。



# 27

## ツーリストシップ 住 む・働く・訪れるが交わ る空間づくりを目指して

---

前川 佳一 Maegawa Yoshikazu

京都大学経営管理大学院・特定教授

大学卒業後、三洋電機でエンジニアとして26年間勤務。在職中にボストン大にてMBA、神戸大にて経営学博士号取得。2008年から京都大学経営管理大学院へ。専門はイノベーションで、その範囲はものづくりからサービス、さらに近年は老舗や観光分野まで含む。田中（当時は福田）千恵子さんが経済学部在学中に出会い、それ以来彼女の活動を陰ながら応援。今回の研究ネタは、彼女（一般社団法人ツーリストシップ）が提唱する「ツーリストシップ」が、どのように発展・拡散していくのか、そのプロセスをサポートしつつ、「〇〇シップ」という精神性が、「やせ我慢」からいつどのように「プライド」に変容していくかを、経営学的に分析すること。

コロナ禍で忘れられがちだが、国際観光客数は1960年の1600万人が2019年では14億人と、半世紀で90倍となった。旅行者は生活空間に入り込み、良き文化の支援者となる一方、渋滞や混雑、マナー違反等、様々な問題を引き起こした。「住む」と「訪れる」が両立する街づくりを、世界中の都市が模索している。ヨーロッパを中心に観光事業者や旅行者には地域を守る責任があるとする「レスポンシブルツーリズム」、住民意識からの取り組みとして「シビックプライド」などが提唱されている。

一般社団法人ツーリストシップが提唱する「ツーリストシップ」は、旅行者目線での心構えであり、より豊かで心地よい観光・旅行・旅を築いていこうとする精神を指す。対立項として扱われてきた生活者や従事者の視点を旅行者側に取り込み、持続可能な観光を目指す概念である。旅行者は【自分が旅をするとき】は地域を大切にすることを意識し、事前調べや旅先へのリスペクトを心がける。それは翻って【自分の街が旅人を受け入れるとき】には積極的にその旅人を大切にすること。住む人、働く人、訪れる人が立場を超えてツーリストシップを意識することで、住む・働く・訪れるが交わり、皆にとって心地よい空間を築く意識となる。

一方で「ツーリストシップ」は「自分に厳しいストイックなイメージ」を想起させるという見方もある。これは他の〇〇シップ（スポーツマンシップ、シチズンシップ、リーダーシップなど）も同じ。つまり最初の段階では「規律」があり、「意識」の高い人だけが向き合えるもののように見える。しかしその段階を乗り越えると、当人の中では「当たり前」のものとなり、さらにはむしろ「誇り」となるのではないだろうか。

ツーリストシップの発端となったのは、コロナ前、インバウンド全盛期の京都の「残念な」観光の実体を目の当たりにしたからだと言う。しかし、ことツーリストシップを広める単位としては、京都は大きすぎる可能性がある。それは単に広さや多さという意味だけではない。ストイックに「やせ我慢」できるとしたら、それは身の回りの対象と密に、コンパクトに関わっていてこそではないか。だとすれば、どのようなコミュニティからはじめれば、ツーリストシップが根付くプロセス、それはおそらく「やせ我慢」が「プライド」に変容する過程、を「実験」「観察」できるのかを思考したい。



呉氏 今回は、代表者は前川さんですが、実働されている田中さんもご一緒に参加頂いています。最初に、田中さんと前川さんのご関係について教えてください。

前川氏 田中さんが経済学部3年生のときに、履修登録もしていないのに、僕の授業に突然潜り込んできて、バシバシ発言して帰ったのが始まりです。京都の観光をなんとかしたいと手探りするなか、観光MBAの教員である僕を見つけて、近付いてきてくれたそうです。それ以来、僕は、細々とできる範囲で、彼女が成長して大きくなっていくのを、見守らせてもらっているという感じです。

田中氏 そうですね。まずは、前川先生に認識してもらいたいと思い、突然、授業に出て発言し、その後、研究室にお伺いさせていただくようになりました。それ以来4年間ほど、お世話になっております。

呉氏 なかなか熱烈な始まり方ですが、田中さんは最初、前川さんのこういったところがいいなとお感じになったのですか？

田中氏 前川先生は、全国的に有名で、MBAの先輩方の間でも、面白い先生として常にお名前が挙がっており、ぜひ、お近付きになりたいと思っていました。当時、双方向の形の授業をされていて、学生と先生のやり取りや、学生の発表に対して、先生が、言葉巧みに意見を引き出し、それをさらに深めていくというような授業がすごく面白いと聞いていました。

呉氏 ここに、ツーリストシップとは、旅行者がより豊かで心地よい観光、旅行、旅をしようとする精神とありますが、前川さんの主眼はツーリストシップの定着であり、研究はそのための方法ということですか？

前川氏 僕のスタンスは、定着させたいと一生懸命やっている田中さんを、横で見て面白がっているということです。うまくいけば経営学者として、あるいは社会学的に、その動きやプロセスを記述できたりするのではないかと狙っている。そういう小ずるいオヤジということをお願いし



ます。

呉氏 なぜ、ツーリストシップを、そんなに面白がっておられるのですか？

前川氏 1つは、田中千恵子という人の面白さです。学部時代から、金にもならないのに、1人で京都の観光をなんとかしたいと動くなんで、普通の大学生、京大のなかでもあまりいない存在ですよ。ガツガツと授業に潜りこんで、食い込んでくるけど、ウザさはなく、応援したくなる。それはもう、彼女の人柄であり、僕以外にも彼女をガッツリ応援している大人が何十人もいます。彼女は今、その活動で、ダイドードリンコさんとプロ契約を結んでいます。スポーツ選手と同じように、ツーリストシップを広めるということだけで、プロとして認定されている。こんな存在は、日本のなかにもあまりいないでしょう。それが一番面白いです。もう1つは、経営学的、あるいは社会学的にそういう概念、お金とは直接関わらない、むしろ経済原理に反するようなこと。それが本当に根付くのかというところが、経営学者として興味津々です。鶴の目鷹の目。高みの見物。成功すれば面白いけど、普通の市場原理では、なかなかしんどいところを、彼女がどう切り抜けるのかを知りたいという好奇心です。ツーリストシップという言葉がなかったころは、非常に難しい試みだと思っていましたが、みんなで考えて思いついて、その言葉ができ、その概念ができ、みんなの心のなかに少しずつ広がっていく、その過程。それも経営学的に面白いなと思って着目しています。

呉氏 田中さんから補足はありますか？

田中氏 言葉のある、なしという部分は、私もすごく面白いと思っています。うちの法人は3年目ですが、ツーリストシップという言葉を使い始めたのは1年半前からです。それまでは、観光客も住民も互いに寄り添っていけば、もっといい旅行、観光、旅が築けるんじゃないかと言っていました。ところが、同じことを言っているつもりで、ツーリストシップという言葉を使い始めてみると、この1年半の間にメディアの数や、いただける案件がすごく増え、言葉の力を実感しています。このような発見を前川先生と共有し、前川先生に分析してもらえたらうれしいなと思っています。

前川氏 言葉があてはめられる前の概念は、抽象的でピンと来ないけど、言葉ができたときにパワーが出る。たとえば、加齢臭とか女子力とかいうような言葉ができることで、みんながそれを認知して、関連した商品やサービスが生まれるという現象がありますよね。この、言葉が先行して、そこからコンセプトが生まれるというプロセスも非常に面白いと思っています。

呉氏 ツーリストシップの定着というのは善でしょうか？観光する人と、そこで働く人の中で、相互理解が促進されていくというような良い面について異論はないのですが、ツーリストシップの定着により、何かが失われるというような悪い面については、どうお考えですか？

田中氏 ツーリストシップという言葉の定着によって求めているものは、今まであまりスポットライトが当たってこなかった、観光におけるかつこいい振る舞いという

ものに、光が当たることです。そのような振る舞いが意識されることによって、旅行リテラシーも上がるだろうと期待して、普及をしています。しかし、意識せずとも、もともとできていた人もいますので、そういった人たちにおける価値が変容してしまうかもしれないというのが、考え得るデメリットというか、悪影響かなと思います。

呉氏 もうできている人が、ツーリストシップという言葉を書くことによって。

田中氏 はい。ツーリストシップというのは、たとえば、10回ポイ捨てしている人が9回になったらいいぐらいのことであり、既にマイボトルを持ち歩いている意識の高い人に向けたものではありません。底上げに力を入れているのです。しかし、逆に、意識の高い、既にいろいろなことを実践されている方からすると、今さらそんなこと、という部分はあるかもしれません。

前川氏 確かにそういう点はあると思います。一方で、外から冷ややかな目で見ている第三者のオヤジという観点で言うと、たとえば、スポーツマンシップを守っていて悪いことはないと思いがちですが、でも、そんなこと抜きで、勝負至上主義だという人も一部にはいて、ウザいこと言うな、偽善者ぶるな、みたいなことを言う人もいます。市場原理とか経済優先とか言ってもわかりにくく、とにかくお金がもうかるほうがいいとなれば、基準がはっきりしますが、観念的、倫理的なものを持ち込むと、どっちが優先か分からなくなるような世界に立ち入らないといけなくなります。ちょっと飛躍して、トランプ大統領が勝って、ヒラリー・クリ

ントンが負けたのはなぜかと考えてみましょう。トランプを支持していたのは、民主党のエッセイテリたちの言っているウザい言葉に、もう我慢できん、俺らは本音でいきたいんじゃない、俺らの利益が優先なんじゃないという人たちだとすると、そのときツーリストシップは、ヒラリー・クリントン側、人として正しいことをしましよという側です。しかし、正しいことをしましよというだけでは通用しない、割り切れない人たちの存在が分断を促したと考えられます。そういう意味で言うと、ツーリストシップという言葉は、お金もうけしたかっただけ、ウザいこと言うな、という人たちに、一石を投じることになるだろうな、という面で、経営学的にも非常に面白いと思っています。

田中氏 おっしゃるとおりだと思います。私も日々活動するなかで、ツーリストシップというのは、1つの価値観を植えつける、こういう旅行がいいですよという価値観を渡すことだと考えています。すると、たとえば、どんちゃん騒ぎが大好きな人、飲んだくれて暴れるのが大好きな人からすると、俺の旅行を否定するのか、となってしまうところはあるのかなと思います。

呉氏 分断を生み得るということですね。ツーリストシップ外のことは悪かという意味で、今のどんちゃん騒ぎはいい事例ですね。こういう概念が生まれたことによって、これは善で、これは悪と色分けされ、ツーリストシップ的に、これはオーケーだ、これは悪だという概念が生み出される。そのことが、悪いことなのかもしれないという考え方ですね。

宮野氏 新しい言葉を作るということは、いつでもそういうことだよ。いつでも危険をはらんでいる。やっている本人たちも、ついつい勘違いして、そのリスクリングを広めなきゃ、と考えたりもする。でも実際は、リスクリングを広めたいのでも、ツーリストシップを広めたいのでもなく、その内容を広めたいということなので、そこを、勘違いすると金もうけのための金もうけになると思います。

前川氏 それでいうと、いつかは田中千恵子さんの活動を利用する、二次的に乗っかろうとするオヤジが出て来かねないですね。その危険性については感じていますか？

田中氏 最近、少しずつ注目していただけるようになったからこそ、今までとは目的が違うな、という方が来られることはあります。そのようなときは、貴重な機会をありがとうございますと言って終わりにする人が多いです。

呉氏 ツーリストシップは、今は、イコール、田中さんの活動になっていますが、もし複数の人がやり始めたときに、いやいや、このツーリストシップでもいいじゃないかと、違う動きをし始める可能性もありますよね。今はブランディングの統一ができていますが。

田中氏 はい。今は当法人がツーリストシップの商標を取って扱っており、いろいろな旅行代理店さん、ホテルさん、旅館さんなどにも使ってくださいとお願いして使っていただいています。私としては、ツーリストシップの意味が重要なのではなく、概念、言葉で枠組みを作るということが、一番重要なことだと思っています。

前川氏 Wikipediaにも、既に載っていて、でも、それが田中さんの知らないところで誰か

が書いていて、自分の思っていないことも書いてあると。でも、それを面白がっていますよね？

田中氏 はい。言葉ってどんどん、あちこちで再生産されていかないと残らないので。こちらが一方的に言って、それを受け取るというのではなく、いろいろな人が噛み砕いて、噛みしめて、あ、こういう言葉なのかな、と幅を持たせることが重要だと思っています。たとえば、オーバーツーリズムや観光公害という言葉の定義は？というとき、オーバーツーリズムはTwitterのスラングで、観光公害は梅棹さんの本から出ていますが、明確な定義は後付けのものはあったとしても、生まれた当初の部分ではなかったりします。いろいろな人が、こんな意味だよなと思って使っていくことで広まったのだと思います。

呉氏 何とかシップというものを、どう根付かせていくか、場や空間をどう絡めていくか、というお話のなかで、旅行者のカフェミみたいなアイデアがありましたが、正直、そこでの新しさってなんだろうなと思いました。このツーリストシップと空間というコラボレーションのイメージが難しいです。たとえば、マラソン中に選手が転び、他の選手が、転んだ選手を助けたというようなときに、初めてスポーツマンシップが、と言われたりしますよね。そういう危機的な状況のときに露わになる言葉だ、と考えたとき、どのように空間と絡めていくのでしょうか。田中さんの実践的な活動は、いろいろな空間とやっていらっしやるのは分かるのですが、ツーリストシップを、たとえば表彰するとか、その理想的なツーリスト

シップを、いつ、どう見える化するのかが気になります。

前川氏 実践については、田中さんが今までやってこられた、腕輪から始まって、1軒1軒、小学校を回って啓蒙するような活動とか、そういうところに、お話を聞くほうがいいとは思いますが。この問題は、彼女が京都の観光を何とかしたいと思ったことが発端ですが、京都全体にツーリストシップをと呼びかけても、おそらく、大海に小石を投げるようなものになりかねないですね。だとすると、小さいコミュニティで何か成功例を作るということはできへんかな？と、僕の頭のなかだけですが、今、考えています。勝手に名前を出して失礼なのですが、京都の郊外に美山という、人口3,000人くらいの村があります。そこと今、ちょっと提携させていただいているのですが、先日、UNWTO（国連世界観光機関）の「ベスト・ツーリズム・ビレッジ」の認証を受けました。そこは、観光客が来てほしいような、住民からすると来てほしくないようなところですが、その単位だったら、ツーリストシップを広めて、成功例の1つにできる可能性があると思います。これ本当、全く先方の了解も何も取っていませんけど、そういう規模から広めていくとジワジワと広がっていくのではないかというのが、今、の思いつきでのお答えです。

呉氏 適正な規模があるということですか？

前川氏 勝手な想像で言えば、人口3,000人で観光客が年間何十万人というような所なら、おそらく一人一人の顔を見ながらできる規模かなと思います。田中さんは規

模感とか感触、実際に触れていると思いますが、いかがですか？

田中氏 そうですね。2つあるかなと思っていて、1つがその規模感です。具体的にリアルな場、空間を作っていくということで、今、いくつかの商店街とコラボして、モデル地区を作ろうという動きがあります。ところがやはり、商店街というのは個々の店主の集まりで、価値観もバラバラなので、そのなかでモデル地区を作ろうとすると、なかなか難しく、肌感としては最低3年必要。だいたい10年ぐらいたないと入り込まないだろうという印象です。ほかにもっと早く普及させるやり方があるのではないかと考えています。もう1つは、どんな作り方ができるかということなんです。ツーリストシップのツーリストとは、旅行者のことなので、つまり、旅行者として旅先でおもてなしを受けたから、自分も住民側としておもてなしをしようと思い始める。互いが寄り添うための最初の一步は、旅行者スタートじゃないかなと思うのです。まちづくり側、住民側としてより、旅行者としてツーリストシップを発揮するほうが早いかもしれません。昨日も奈良で、修学旅行生の事前学習をやってきましたが、うちの事前学習でツーリストシップを学ぶと、子どもたちが旅先で自分から話しかけに行くとか、どうしたら、モテる旅行者、かっこいい旅行者になれるかと考え、意識して行動するようになります。すると、帰ってきた子どもたちの様子が、行く前とかなり変わると言っていると思います。そういったケースを、行動変容が起きた事例としてまとめ

ていけば、1つの事例になるのではないかと考えています。

呉氏 卵が先かニワトリが先かじゃないですが、迎える側としてのモデル地区は時間がかかるけれど、旅行者が先という考え方でいくと、旅行者側には全員なり得るわけですね。そういうことを学べる場を作るために、たとえば、学校に出向いてやれたらいいなというようなお考えですか？

田中氏 そうですね。やはり、修学旅行という旅を体系的に学ぶタイミングが、小中高とあるので、そこに入れていただけのいいかなと思いつつ、大人の方向けにも、知ってもらえるような機会を、頑張っている最中です。

前川氏 小中高では、ツーリストシップというちょっと難しい言葉が、カッコいい旅行者になろう、に翻訳されているということですね？

田中氏 はい。大事なのは言葉ではなく、背景なので。でも、言葉として、カッコいい旅行者というよりは、ツーリストシップと言ったほうが、先生方にはオッケーしてもらいやすいところはあります。

呉氏 ありがとうございます。

# 28

## 自分を飾らずに話し、学 び、ケアになる：踊り場 のある人生階段

宮野 公樹

Miyano Naoki

京都大学学際融合教育研究推進センター・准教授

学問論、大学論、（かつては金属組織学、ナノテクノロジー）。総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験も。国際高等研究所客員研究員も兼任する他、2021年5月一般社団法人STEAM Associationを設立し代表理事に。日本イノベーション学会理事。2008年日本金属学会論文賞等の学術系の他、2019年内閣府主催第一回日本イノベーション大賞の受賞も。前著「学問からの手紙—時代に流されない思考—」（小学館）は2019年京大生協にて一般書売上第一位。2021年2月発刊の近著「問いの立て方」（ちくま新書）。

私は、学問とは何か、専門とは何かについて日々考えを巡らせている学者です。改めて学問とは何か？と質問されると、不思議なことにさらっとすぐに答えられないものです。その理由について、そして学問そのものについて、紀元前からずっと続くその精神と歴史を語ることはこの場では避けますが、一つの核心的な返答をするなら、それは、自分を見つめるもう一つの目、それを自分の内に持つ、ということです。

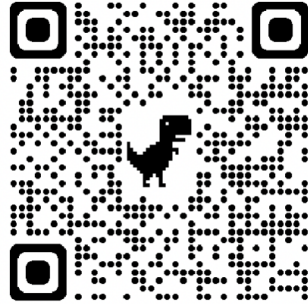
この学問（精神）は、決して大学の専売特許ではないし、研究者に限るものではありません。なぜなら、何かを探究するとか、何かの専門を持つということではなく、自分とは何かと自分を問うことなのですから。学問をやることはよく生きることと一致しているのです。

しかしながら、現代においてどうもこの学問精神が横置きされているように思えて仕方ない。その詳細や歴史的な理由もまたここでは省きますが、社会全体が学問精神を自覚するには、今日世間で騒がれている大学改革という手法はあまりに限定的です。理由は先に書いた通り本来学問は万民のものなのであり、人（人間）によって自覚されるものだからです。何とかこの学問精神を誰でも感受する機会や空間はないものか・・・そこで考えたのが今回の「踊り場のある人生階段」となります。

これは文字通り、階段の踊り場。仕事場でもない家庭でもない、そこは、誰もが素の自分でいられる工夫でいっぱいのおじんまりした隙間空間です。そこに立ち寄るとまずお着替えです笑。衣装部屋に入って好きに選んでください。あ、ウィッグも伊達メガネもありますよ。そして、美味しい飲み物とたっぷりのお菓子と一緒に、会話しましょう、もちろん偽名やあだ名で呼び合ってもOK。ただし、スマホはロッカーに！

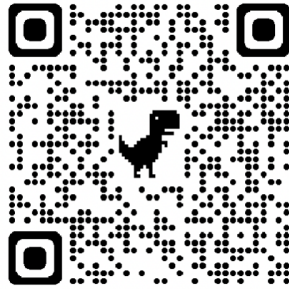
ここではあなたを評価する人は一人もいません。何を言ってもいい、意見を変えてもいい、大事なのは自分の中の正直に従うこと。一度、自分の社会的側面、立場という鎧を脱ぎ、一つの存在として話しましょう。本音で話すと荒れる？ いやいや、それは人間精神を馬鹿にしすぎてはいませんか。哲学カフェのよう？ いやいや、こちらは哲学なんて野暮ったい言葉は使わずに集まったコミュニティですよ。新しい宗教みたい？ いやいや、あなた宗教についてどこまで考えたことがあります？ そもそも始源においては、学問も宗教も、そして歌も詩も同じ。ここではその域での話をしたいのです。これがどうケアになる？ いやいや、自分が自分で在ることを実感する以外に、無意味の意味を感受する方法などありませんよ。

## 企画詳細



30 Interviews

## メディア掲載



研究者の頭の中を具現化する！？社会表現型イベント『30 Interviews』とは何か

(WEBメディア「ほとんど0円大学」2022.11.15)





### 主 催

一般社団法人STEAM Association

### 共 催

COMMONZ合同会社、東京建物株式会社、

任意団体University of University（互いに助け合う学術空間の運営）

### 後 援

academist（アカデミスト）、科学技術振興機構サイエンスアゴラ連携企画、

国際高等研究所、サントリー文化財団、日本の研究.com

